
魔女が R e :

北野 鉄露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女がRe：

【Nコード】

N9014N

【作者名】

北野 鉄露

【あらすじ】

ケンカと家事一般が得意な高校生・風間孝四郎はある日、キャナと名乗る美しい魔女に遭遇、瀕死の彼女に自らの魂を半分くれてやってしまう。それ以来、二人に次々襲い掛かる怪しげな魔法使い&近隣校の不良ども。奴らが行く手を阻む時、孝四郎の一撃必殺神速鉄拳、キャナの破壊力超ド級な魔法が問答無用で炸裂する。が、快進撃な孝四郎&キャナの前に恐るべき敵が立ちはだかる。魔界の動乱に飲み込まれていく二人の恋と運命は。エロくてグロくて義理人情なこの物語、R15発動。【2010・11・21完結済み】

その1 居候女の秘密

出かける前には必ず確認！

「……火の元、よし！ ガスの元栓、よし！ テレビの電源、よし！ ついでに……俺の身だしなみ、これは特によし！」

家中一通り＋自分の服装チェックを終えた俺は、カバンを手にして玄関で靴を履こうとした。
すると

「……こーちゃん！ どこ行くのぉー？」

背後から寝ぼけた女の声が。

いけねえ、忘れてた。

「ガッコー行ってくるからな！ 朝メシはテーブルの上、昼メシは冷蔵庫ン中に入れてあるから、レンジでチンして食ってくれ。今日は何にもないから早く帰れると思う。……多分」

メシの説明をしつつ靴を履き終えてドアを開けようとすると

「えー、どうして起こしてくれなかったのぉ？ あたし、こーちゃんと一緒にごはん食べようと思ってたのに……」

鼻にかかったような甘えた声と共に、閉まっていた背後のふすまがゆっくりと開く。

そうして暗い部屋の中からずるずると這い出てきたのは若い女。
ふっさぶさのロングヘアはぐっちゃんぐっちゃん、身体にフィッ

トしてないだぶだぶのタンクトップは肩からずれ落ちてるし、パンツは半分脱げかかっている横半ケツ状態。

ぶっちゃけ、半裸だ。

女とも思えないくらいに寝相がヒドすぎるせいなのだが、あられもないっただけありやしない。

彼女は床の上にぺったり座り込むと、手の甲でぐしぐしと目をこすり

「早く、帰ってきてよねえ。こーちゃんがないとお、キヤナ寂しいんだもおん……」

まだ眠いらしく、もごもごとぶーたれている。

「あーはいはい、わかったわかった！ だから、今日はさっさと帰ってくるって！」

ここでテキトーにあしらうと面倒くさいことになるのは百も承知だ。

だからちゃんと返事をしてやったのだが、キヤナはいきなりくりっと顔を上げて

「……ほんと？ほんとに早く、帰ってきてくれる？」

幼い子供みtainな表情をしている。

言っておくが、彼女は決して幼くはない。一見、俺よりやや年上なおねーさまだ。

「ああ、ホントだつて。……俺、行くからな。遅刻したらシャレにならないし」

「わあ！こーちゃん、だーい好き！あたし、待ってるからね！」

がばっ

思いきり抱きついてきやがった。

「あーあー、わーったわーった……。だから、大人しくしてろよ？
な？」

「はい！ キヤナちゃん、大人しくしてまあす！」

「よし。……じゃ、行ってくる」

やっと玄関を出られた俺。

寝起きの悪い女と同居することが、こんなに足かせになるとは思
つてもみなかった。

一人で暮らしていた頃は誰かに見送られることに憧れたけど、い
ざそうになると意外に面倒くさいものだ。

とはいえ 何も好き好んでこうなったワケではないのだが。

「……おおっ、いけね！ 遅刻しちまう！」

慌てて階段を駆け下りて行くと、頭上でカラリと窓が開いてキヤ
ナが顔を出した。

「こーちゃん！ 行つてらっしゃーい！」

「おい！ そのカツコで窓から身を乗り出すんじゃないやねえよ！」

俺の住んでいるボロアパートから学校までは歩いて三十分強。
だんだん暑くなってきたから走りたくはないのだが、遅刻す
れば便所掃除の刑に処せられる。

だから、徒歩でも安全圏に到達するまでは走って行くのが最善策
というものだ。

住宅街を駆け抜けて突き当たった大通りを右折。

ここからは信号が多いから、油断大敵ゾーンなんだな。うっかり赤信号に続けてつかまってしまえば、想定外のタイムロスになってしまう。

商店の立ち並ぶ通りを全力疾走していくと

「あら、おはよう孝四郎君！ あのね」

行きつけの肉屋のおばちゃん発見。ただいま開店準備中。

「お、おはよう、おばさん！ 帰りに寄るわ！」

挨拶ついでに来店予告を残して通過。こうすれば、あとで何かしらサービスが期待できる。ちょっとしたハンパものとか用意しておいてくれたりするのだ。

「あ！ あのね、孝四郎君！ さっきね」

背後でおばちゃん何か叫んでいるが、立ち止まっている余裕はない。

すぐ前方の信号が赤に変わりかけている。

ダッシュで横断歩道を一直線。

……ぎりぎりセーフ。ここで引つかかると長いから危なかった。

とはいえ、肉屋のおばちゃんを振り切って申し訳なかったな。

っていうか、おばちゃん何か言いかけてたけど、なんだったんだろっ……？

ふとそんな事を考えていた時である。

「オイ、風間！ ちょっと待てや、コラ！」

俺の行く手を遮っている人数がある。

どういつもこいつもブレザーがだらしく着崩れていて、ヘアスタイルがオスのライオンみたいな色と形状になっている。どっかの変身した戦闘種族にも似ているが、それはまあ、古い話だからいいとして。

連中はお隣の「生瀬高校」の不良ご一行様。

ちなみに生瀬高校を縮めて呼ぶととてもシヨボくなるってんで、ヘンな意味で有名である。

朝からお出迎えか。

それで了解した。

肉屋のおばちゃんが何か言いかけたのは、このことだったに違いない。

行く手に他校生のグループが俺を待ち構えているぞ、と。危険を報せてくれようとしたおばちゃんに心の奥で感謝しつつも、俺にとってこの連中ごときは危険レベルにカテゴリされたりはしないのだ。動物図鑑に出てくる「mamushi」とか「野生のニホンザル」の方がよほど危ないって。

俺はさつと相手の数をカウントした。

一人、二人……全部で六人か。今朝はちよつとばかり、多いようだな。このクソ忙しいのに、すこぶる迷惑な話だ。遅刻しちまうだろうが。

「風間てめえ、こないだ、うちのガッコーのヤツ、シメてくれたらしいな？」

ポッケに手をつっ込んでいる真ん中の生徒が俺にガンを飛ばしつつ訊いてきた。

田坂とかいう生高をシメている三年生。この辺りではワルとして多少知られている。

こないだ？

思い出せないな。

心当たりが多すぎる。

ええと、いつどこでやったやつだっけ……ほとんどバカみたいな面つきで考えている俺。ってか、半分はモロ「バカにしている」んだけれども。

「聞いてんのか、コラア！ シメっぞ、てめエ！」

田坂の隣にいる、ええと確か……川島だっけ？ が、咆えた。すると、その他雑兵どもも尻馬に乗って

「調子こいてんじゃねエぞ、風間ア！」

「タケシらやってくれた分、きっちり返してやるよ！」

ぎゃーぎゃーとわめいている。

こりゃ、アレだな。

言葉を尽くせばお引取りくださるようなアタマのいい連中ではない。ここは一つ、拳で語るしかねエよな、やっぱ。ガッソ、と一発くれてやるほうが物わかりが早くなるというものだ。

そう方針を軽快に切り替えた俺は「こないだの件」を思い出すのをヤメた。

「……シメる？ 俺を？」

思いつきり眉間に力を込めて六人を睨み据え

「お前等ごとき腰抜けの五人や六人、ぶっ飛ばすのに造作もないわ。悪いコトは言わねエから、ケガしないうちに大人しく帰れや」

ハッターはかましてない。

タイムン張る度胸もなくて群れでしか動けないようなヤツらを叩きのめすくらい朝メシ前……って、もう食ってきたけどさ。

「……！」

俺がたった一人で立ち向かう姿勢を見せてやったら案の定、生高の連中はビビったらしい。

急に黙りこくって「ちらっ、ちらっ」と仲間の顔色をうかがっている。

「ど、どうする、田坂！ やっちまうか？ あア！？」

うるさいよ、川島君。

どうせ逃げたい気持ちで一杯なんだろう？ じゃあ、逃げなさい。俺は某ゲームのモンスターみたいに回り込んだりしないよ？

だけど、グループをシメている田坂にしてみれば、退くに退けない。

一人相手にビビって逃げたことが他のガッコーに知れ渡れば、大きな力才をして道を歩けなくなるというものだ。リーダー格のツラさとやらね。

ほんのちよつと黙ったヤツは、キツと俺を睨み返すと

「……るっせエ、コラ！ ハツタリこいてんじゃねエぞ！ くたばりやがれエ！」

拳を固めるなり飛びかかってきた。

おお、感心かんしん。

だったらお望み通り、一丁相手してやろうじゃないの。

俺はポッケに突っ込んだ手を出しかけた。

しかし、その刹那 背後にとんでもなく凶暴で禍々しい殺気の

出現を感じていた。

その殺気の放出源を、俺は経験則で知っている。

(……！)

内心ヒヤリとしたのと、巨大な光のカタマリが俺の側頭部を掠めていくのと、ほとんど同時だった。

光の向かう先には田坂以下約六名、生高不良チームご一行様が！避けるかあるいは弾き返したならば、彼等に某戦闘種族の称号を与えてやりたいものだが　まあ、まずムリだ。

ごおん……

打ち上げ花火が破裂するようにして大爆発した光のタマ。

目も眩むような閃光が連中を包み込む。

「どうわあああああ……っ！」

「ぎいやあああああ！」

たちまち轟きわたる、哀れな不良どもの悲鳴。

間髪を容れて閃光がおさまってみれば　ヤツらは一人残らず、

路上で寝てやがった。

二十メートルも離れた向こう側で、だ。

全員、着ていた制服はスタボロ。ぷすぷすと煙らしきものが上がっているように見えるのは気のせいではなかった。

「あっちゃー……」

心底痛ましそうな顔をしながら、俺はゆっくりと背後を振り返った。

視線の先には、案の定なヤツが

「きゃはははははっ！　ざまあないわね、愚かで非力な人間ども！　せいぜい這いつくばって地面でも舐めているがいいわ！　きゃ

「ははははは！」

道のと真ん中で高笑いをこいている、乱れたインナー姿の女。
非の打ち所がないほどに美しい相貌だけに、却って冷酷冷血極悪
残忍という感じがする。

その女がどのどいつであるかは言うまでもない。

「お前な……」

俺の視線に気が付いたキヤナはつと高笑いをやめ、

「あーん！ こーちゃん！ 聞いて聞いてー！」

成層圏レベルのタカビーから一転、急にデレた声を出しながらふ
よふよと近寄ってきた。

ふよふよ。

そう、彼女は自分の足で歩いてはいない。

イリュージョンのように宙に浮いたゴミバケツの上に腰掛けてい
て、実際に移動しているのはそのゴミバケツだ。まるで生き物みた
いに空中をすいすいと動いていく。

キヤナは俺の首に「がっちり！」と抱きつき

「あのねあのね、こーちゃんが作ってくれた目玉焼きがあるでしょ
？ あれの端っこがね、ちょこーっと、コゲてたのよお！ あたし、
コゲてるのきらい！」

べっちょりとくつついてゴロゴロと甘えてやがる。

「あのな、キヤナ……」

「ねーねーこーちゃん、帰ってね、新しいの作ってよお！ あたし、

あつたかいのが食べたーい！」

「だーかーらー！ レンジでチンしてから食べと言ったろーが！
あと、それくらいのコゲなんざ食ったって死なんわ！ イヤならそこだけ取って食べ！」

「えー！ やだやだやだあ！ こーちゃんが作ってくれたすぐのが
食べたいんだもん！」

道行く人々は「奇異」を突破して「超常現象」を見るような目で
俺達のことを見ている。

そりゃまあ、そうだろうな。

何せ、下着姿でゴミバケツに乗った脳みそ謹賀新年な女が一
介の高校生に、通りのど真ん中でへばりついている光景なんて目に
した日には……。

「ええい、早く帰って大人しくしてろ！ だいたいそのゴミバ
ケツ、どっからパクってきやがったんだ！？ さっさと元のところ
に返してこい！」

「ああん！ こーちゃんのいぢわるう！ キヤナ、泣いちゃうから
ね！」

ガキか、おまいは。

一体何歳になつてんだよ……俺は心の奥深くでため息をつかずに
いられなかった。

見た目は二十歳前後、かつ、ちょっと（いや、かなりと言い直そ
う）おバカながらも愛くるしい表情をもった超一級の美人。

しかし彼女はすでに、百年以上も生きている。

なぜならキヤナは人間ではなく 魔女だからだ。

その2 男子便所と聖剣とエロスケベ

結局、俺は「便所掃除の刑」の判決を下されてしまった。

生高の連中……ではなく、キヤナのせいだ。

目玉焼きがあだこうだとしつこく食い下がってくるのを何とかなだめすかして帰らせ、やっとのことで校門まで辿り着いてみれば時計の針はとくに八時半を過ぎ、周囲に生徒達の姿は一人もない。

が、一名ばかり、静まりかえった門の前で手ぐすねを引いて俺を待ちかまえていた者がいる。

生活指導の田中という若い男性教師。

某神拳の伝承者よろしく、あと一息で破れんばかりな紺のタンクトップと短パン姿。その下でうねうねと不気味に躍動しているのはヤツご自慢の鍛え抜かれた筋肉だ。

田中は全く意味不明な満面の笑み（キモい以外の何物でもないが）をたたえながら

「よう、風間！ ちょーつとばかり、着くのが遅かったなあ。はははは 「びっ」。

ポーシングなんかキメンでいいっつーの。

朝っぱらから薄汚いコゲ色の筋肉なんか見たくもないわ。

「お、おはよう、ございます……」

隠しきれない引き笑いを浮かべて挨拶すると

「んー風間ア！ 八時半までにこの門を」コンクリートの塊を「ペーん！」と平手で叩き「くぐれなかった」ということは、どういっ

とか……わかってるな？ ん？ ん？」

笑みで真横に伸びきったキモい顔をコンマ数ミリまで近づけてきやがった。

……やめい。

貴様の顔が視界に入ってくるだけで十分暑苦しいんだよ。

思わず一発いれなくなったが我慢した。

この田中、ただの筋肉オタクじゃあない。その昔、この街ではかわせるヤツがいらないと言われた俺の一撃が、あっさりよけられたことがある。反撃されなかったのはラッキーだったが、どうやらヤツが途方もなく強いらしいと悟った俺は、それ以来田中の前では大人しくすることに決めた。

ちなみに田中を遠目に見てみると、胸から上が異様に発達しすぎているため体型が逆三角形っぽく見えてしまう。ゆえに、ヤツは生徒達から「男子便所」というあだ名を頂戴している。駅とかに張つてあるトイレのマークで、男子専用を示すアレのことだ。

それはともかく、遅刻は遅刻だから仕方がない。

放課後に便所掃除の刑、確定。

俺は黙ってその判決を受諾し、教室へ向かった。

言い忘れていたが、この学校は「県立一平北（かずだいらきた）高等学校」という。

短縮すると「一平高」。

誰が言い始めたかは知らないが「イーペーコー」と呼ばれているようだ。何のことはない、麻雀の役である。

正しくは「一盃口」だけだな。まあ「生高」なんて呼ばれるよりいくらかマシだけど。

「うーっす……」

二年二組の教室に入って行くと、すでにホームルームは終了して

おり、担任が去ったあとだった。生徒達はめいめいお喋りしたり、宿題を写させてもらったりしている。

俺の座席は後ろから二列目。今のところ、まあまあなポジション。席につくなり、背後からポンと肩を叩かれた。

「おはよう、孝四郎。遅刻なんて君らしくないなあ。……今日に限って、生高の連中に手こずったのかい？ それとも、あのキレイなおねーさんのせい？」

そう声をかけてきたのは聖乃剣治（ひじりのけんじ）という、メガネをかけたガリ勉風男子。

高校に入学してから知り合ったヤツで、他校生にからまれていたのを助けてやったのをきっかけに友達になった。俺とは何もかも真逆で、喧嘩御免な一方成績優秀、そこそこお金持ちなご家庭育ち。将来はどっかの一流大学を目指しているそうだが、この俺が知ったことではない。

ちなみにニツクネームは「エクスカリバー」で、ちと長い。

聖乃剣治を短縮すると「聖剣」になることから、ゲーム好きなクラスの誰かが閃いたものらしい。切れ味鋭いヤツの頭脳にはみんな何度も世話になっているから、エクスカリバーの異名もあながちハズレじゃなかったりするのが面白い。あと、微妙にウザイのもビンゴ。

「……その両方だよ、エクスカリバー君。こつも毎朝毎朝続くと、やってられねエわ……」

俺は椅子の背もたれにだらりと寄りかかり

「ま、生高のヤツらは屁でもねエ。……それよか、キャナだな。あいつをぐずらせると手に負えないから、扱いが超ハードってワケさ」

フツーにキャナの話をお口にしたのは、エクスカリバーも彼女の存在を知っているからだ。

「ふーん、そうなんだ。大変なんだねえ。あんな美人と一緒に暮らせるなんて、僕にはそれだけで羨ましい限りだけどね……」

情けなさそうなツラでばやいている。

いつぞや聞いた話だと、エクスカリバーは女の子と付き合った経験皆無らしい。当然、童貞。ヨゴレていないという点ではある意味これも「聖剣」だな。

ガリ勉強郎とはいえ、多少気を使えばさほど問題ない程度の見てくれはあると思われる。ただ、大学受験お大事なあまり、そういう方面にまで気が回らないようだ。もったいないハナシである。

「うおい、コウ！ 遅かったじゃねエか！ 便所掃除のお役目、ご苦労なこつて！」

聖剣と話しているそばから、クラス一やかましいバカ野郎のお出まし。

「うつさいわ、ボケ！ 余計な邪魔が入ったんでい。俺のせいじゃねーよ」

「はーん！ さては、アレだな……キャナおねーさまと朝からさんざん燃え上がったんだろ！ 今朝は何発ヤツてきたんだ？ え？」

卑猥な顔つきで要らんコトをお走っているこの男、男子バスケットが誇る最低お下劣野郎集団「エロチック艦隊」の旗艦兼主砲・江口祐平という。名前も、ちょっと読み方を変えれば「エロスケベ」。しかしながらイケメンでバスケット部レギュラー&ポイントゲッターの

雷鳴は伊達じゃなく、校内モテ男上位ベスト3から滑り落ちたことがない。とんでもないヤツだ。

こいつもキヤナと面識がある。

ひょっこり姿を見せた彼女を一目見るなり溢れ出る性欲を抑えきれなくなり、尻を触ろうとしてガチで蹴っ飛ばされたというドアホな初対面だったかと思う。俺が止めに入らなければ、キヤナは本気で江口を塵芥にしまっていただろう。

モロ顔面にも関わらず、蹴られたエロスケベは頬を「ぽっ」と赤らめたと思いきや

「ああ、いい！ おねーさま……もつと……」

いきなり恍惚とした表情で哀願を始めやがった！

何の冗談かと思ったが、エロスケベはずりずりとキヤナにすり寄っていく。

その後、殺さない程度にキヤナの魔法が炸裂、ヤツがさっきの生高生達と同様の運命を辿ったことはいうまでもない。

てなことがあって、ヤツの本性が真性DMであると知れたワケだ。東大医学部でも救えないド変態。

であるから、この野郎にキヤナとの関係をツツこまれると、ちょっとム力つかなくもない。

「……るっせエ、タコ。おめーみたいな通年発情動物と一緒にすんな」

女子生徒を取っ替え引っ替え手当たり次第、挙げ句場所を選ばずやりまくっている江口と同等にされちゃ敵わないってものだ。校内の綺麗どころはだいたいヤツが手をつけてしまったという噂もまことしやかに囁かれているくらいだからな。

俺に関していえば、そりゃまあぶっちゃけ、キヤナとエッチをしたことがないワケじゃない。

だけどそれは、彼女と出会ってからの一ヶ月間で二回だけだ。

キヤナは毎日俺にべっちゃりくっついてはくるけれども、だからってやり放題だなんて思ったことはない。ってか、キヤナに対して軽々しく手を出す気にならないのだ。

彼女が人間じゃなくて百年以上の寿命を保っている魔女だから？

……違うね。

人格も身体もまったく別々だけど、キヤナの半分は俺だからだ。

俺の分身にも等しい大切な彼女を、単なる「エッチの相手」だなんて思いたくはない。それが大きな理由っちゃ理由だ。キヤナを粗末にすることは、俺自身を粗末に扱うのと同義だと、俺は思っている。

こういう言い方をしてしまうと、何が何だかさっぱりわからないだろう。

俺とキヤナの複雑怪奇な関係が出来上がったいきさつについては、二人が初めて出会った日にまでさかのぼって語らなくてはいけない。その日 九十九パーセントいきあたりばったりではあるが、俺はキヤナと交わった。

瀕死の彼女に、俺の「魂の半分」をくれてやるために。

その2 男子便所と聖剣とエロスケベ（後書き）

追記

途方もない勘違いに気が付きましたのでアップ後に修正します。
気がつかれた方スミマセン・・・。

その3 魔女に出会った日1

あれは四月も末のこと。

ゴールデンウィーク連休本番を前にした雨の日だった。

学校からの帰り、いつものように俺は待ち伏せしていた他校生数人をあつさりぶちのめしたあと、肉屋に寄って豚コマを買い求めてから家路についた。

晩メシは魚にしようと思っていたのだが、余分なエネルギーを浪費させられた腹いせということで急遽肉にしたのだ。こま切れにしたのは、高い肉なんか買えないからである。

それは別にどうでもいい。腹いせにも何もなっていない。で、自宅近くにある児童小公園に面した通りに差し掛かった時のこと。

雨脚はやや強く、夕方だというのに辺りは陽がすっかり落ちた後のように暗かった。

(やれやれ。よく降りやがるなア……)

内心でばやきつつ、さっき潰した連中のことがちらと脳裏を過ぎった。

私立雲井高校の奴らだったが、あまりに弱くてシヤレにならなかった。

どいつもこいつも一撃で寝てしまい、俺がその場を去ろうとしてもまだ転がってやがったのだ。ぐしょぐしょのアスファルトの上で降りしきる雨に打たれるままになっている連中に一瞥をくれてやった途端、何だか哀れに思えてきて仕方がなかった。

二年生と一年生ばかりで、三年のヤツは混じっていない。

三年の不良どもは大分前に俺にシメられたのを根にもっていたものの、かといって自分達で返礼する度胸はなかったらしい。だから、

下級生に俺を潰してくるように命令したものとみた。

（けっ。所詮は雲高、か。学校名が学校名なら、その生徒も生徒だぜ……）

くもこう、じゃない。音読みの方だ。汚いからストレートに口に出せたものではないけれども。

ただ、その蔑称と連中の行状とが妙な具合にリンクしているような気がして、何となくイヤな気持ちになった。手前らの始末を下級生に押し付けて踏ん返り返っているようじゃ、雲高（音読み）そのものじゃねエか、と思ってしまう。

俺は物心ついた頃から両親がいなかった。

親戚だというおじさんとおばさんが面倒をみてくれたんだけど、内気だった俺は小学校に上がってすぐの頃からよく苛められた。

おじさんもおばさんもその事には気付いていたようだが、自分達の子ではないからという思いがあったせいかどうか、いじめっ子の家に抗議しに行くとか、担任に相談するとかいう行動をとってはくれなかった。

最初はそれを恨めしく思ったりした。

ただ、俺がさんざん苛められて帰ってくると、おばさんは黙ってスタミナをつく料理をたくさん作ってくれた。おじさんは休みという休みにはよく、遠くの山とか海に連れて行ってくれた。溺れたりガケから落ちて死にそうになったりしながらも、徐々に俺の心身は鍛えられていったものだ。

ああ、と気付いたのは小学校三年生くらいの時だっただろうか。

自分の身はで自分で守れ、ってことか、と。

今になって思うけど、おじさんとおばさんの態度は正しかったんだよな。

いじめられている子の保護者がいじめっ子の親なり担任にクレームをつけたところで、本人は何一つ変わりやしない。誰かが守って

くれるだろうっていう、甘えた根性が根を張るだけのことだ。逆に、俺自身が強くなるようにって仕向けてくれたおじさんとおばさんという人は、果てしなく偉大だと思う。

それからの俺は一変した。

例えば上級生が相手だろうと何人いようと、がむしやらに突っかつていった。

殴られようと蹴られようと喰らいついて離さず、向こうが泣いて詫びを入れてくるまで絶対に引き下がらなかった。そうになると、今度はアタマのおかしいいじめっ子の親が怒鳴り込んできたりしたが、おじさんは毅然として言い放った。

「うちの孝四郎は正しい。あんたのこのせがれにやられたから、孝四郎は自分の手でやり返したただけだ。そのどこに間違いがあるというんだね？ 謝る必要は一切ない」

チンピラみたいな親に胸倉をつかまれながらも断固として退かなかったおじさんの姿を見ていたら、泣けてきてしょうがなかった。

心の底からありがたいと思った。

絶対に負けるものと、固く誓った。

ある日、おじさんにそのことを言ったらばおじさんは

「……よし。その心意気だ。なんぼでも喧嘩してこい。相手の親が何人こようが、全部相手になっちゃる」

と言って二カツと笑ってくれた。

以来、無敗。

勝ったといえない喧嘩は何度かあったが、かといって負けることはなかった。

ただむやみやたらと乱闘を繰り返してばかりいたワケじゃあない。勝つために、相手を屈させるためにはどうしたらいいか。俺は色々

と考えたんだな。まあ、織田信長的に。

結論としてたどり着いたのは「相手よりコンマ数秒でも早く、とにかく一撃叩き込む」こと。

だから、俺は近隣校の不良連中から「神速鉄拳」というあだ名を付けられ、かつ恐れられるようになった。ポツケに突っ込んでいようが荷物を持っていようが、あらゆるアングルから瞬時に拳が飛んでくるからだ。

高校に入学してからの俺は一人暮らし。

中学の頃、連戦連勝しすぎて市内で有名になってしまい、そのことを知ったありとあらゆる高校から「来て欲しくない」みたいなことを言われてしまったのだ。俺を入学させると、他校生と問題ばかり起こすとも考えたのだろう。

だけど、俺は自分から手を出したことは一度もない。

俺の拳は、俺を守るための「リーサル・ウェポン」だ。覇の拳じやあない。

みたいなことを面接で力説したらば、何を思ったか合格にしてくれたのが今の「イーペーコー」だったというワケだ。サンキュー、校長先生。ハゲてるけどいいヤツだな。

ただし、一平高はおじさんとおばさんの住む街からは離れている。だから、一人暮らしをしなければならなかった。

だけど二人はあえて俺をその遠い学校へ通わせてくれた。すっごく金がかかるってのに。

引っ越して行く日の朝、玄関先で俺はおじさんに

「……ありがとう。俺、おじさんとおばさんには、すごく感謝してる」

そう言ってぐいっとアタマを下げた。

するとおじさんは、例の「ニカツ」って笑い方をして

「なんもだ。孝四郎が遅しく育ってくれて、こっちがありがたいと思ってるのさ」

で、続けてこんなコトを言った。

「孝四郎はもう、自分で自分を守る術を十分身につけられたハズだ。高校の三年間で、今度は誰かを守ることを覚えてこいや」

なるほどね。

それもまた、生きていく上でとても大切だ。

自分だけじゃなくて、誰かを守るために力を養い、使う。力の使い方として、それって一番正しいんじゃないかと思う。一人でも多くの人のために行使する力なら、結果として一人でも多くの人を助けることができるから。

で、一平高へとやってきた俺は、エクスカリバーだったりエロスケベだったり、女の子でも上級生でも、他校生にからまれている奴らを何度となく助けてやった。

おかげで他校の連中からは目をつけられちまつてるケド、かといって一平高の生徒達からは悪い目で見られちゃいないようだ。教師達も俺の方針がわかってるから、喧嘩の度にいちいち処分なんてかったるい真似はしないでくれている。なんとまあ、寛容な学校だこ

と。

ただ一つだけ、よくわからないけど何となくわかった。

俺が誰かを守った分だけ誰かも俺を守ってくれているっていう事実。

てな感じだから、俺としては雲高の連中のやり口が気に食わない。

だからといって、直接乗り込んでいって大暴れするのは俺のポリシーに反するけど。

まあ、気分的に不愉快になったのは、俺の背景にそんな色々があ

るからだ。

そういう時には、しっかり晩メシを食うことに決めている。腹を満たして栄養を摂ってしこたま眠ること。そうすれば身体も気持ちも回復する。

これ、おばさんから教わった哲学。……いや、現実論。

で、俺は豚コマをどう調理しようかと脳内レシピを検索しようとした。

そして、ふと公園の方に、何気なく目線を走らせた時だった。

「……？」

ドロドロにぬかるんだ地面の上に、人が倒れている。

暗いから、老若男女のいずれであるかはよく見えなかった。

近所の年寄りが散歩中に発作を起こして倒れたか、あるいはどっかの生徒がボコられて放置されたか。まあどっちでも良かったが、捨てておくのはまずいんで、とりあえず近寄って行った俺。

横倒しに転がって寝ているのがこういうヤツなのかに気付いた瞬間、ちよつとビビった。

女。

しかも、若い。

見てくれから察するに、年の頃は俺よりちよつと上。小さくて整った顔立ちとすらりとしたナイスバディの持ち主。ジジイとかボコられた男子ならそうでもないが、雨の中にこういう美人が倒れていたらフツーはビビるってものだ。

だけじゃない。

格好が明らかにおかしい。

胸から上が露出されたナイトドレスみたいなデザインの黒い衣装はまだいいとしても、首とか腕、それに脚とかいたるところに「これでもか」とばかりに貴金属的な装飾品がじゃらじゃら。イミテーションか本物かはわからないが、近くに強磁石があったら身動き取

れなくなるんじゃない？　みたいな。

なんかのコスプレイヤーだろうかと思った。

で、怪しげなイベントに向かう途中、この公園で何者かに襲われた。推理としてはいいセンだ。

さつと見る限り、女性は全身くまなく切り傷やらアザだらけ。もしかしたら、恨みをもった者の犯行ということも考えられる　つて、今その推理はどうでもいい。

俺は救急車を呼ぼうと思い立った。

か細くではあるが息はあったからだ。今なら手当てすれば助かるだろう。

ただ、残念なことに携帯電話という現代の必須アイテムを所持していない俺。

公衆電話を探すか、近所のご家庭に助けを求めなければならない。それで、駆け出そうとしたのだが

「……ま、待つて……」

いきなり、女性が俺のズボンのすそをぐいっとつかんできた。

「あえ？　ちょっと待つてろよ。今、救急車を呼びに行くから！」

「……こ、ここは……ここ、どこ……なの……？」

こんな時に所在地の確認もくそもあるか。

ってか、これは意識障害ってヤツ？　襲われた時に頭を殴られたのかもしれない。

「いいから、動くな！　じっとしてろ！　すぐに救急車呼んできてやるって！」

俺は知っている限りの医療知識を記憶の片隅から引っ張り出して

そう言ってやったのだが、女性は手を離そうとしなかった。
それどころか、

「おね、がい……やめて……捕まるのは、嫌……。ここで、ころ……して……」

おいおいおい。穏やかじゃねエな。

殺せ、とはどういう見だ!?

ひよっとして、どっかのヤクザとか暴力団から追われていて、んで命を狙われてるとか?

だとすればこのおねーさま、ちよつとヤバいご職業に従事していらつしやる方なのでは……。

思わぬシチュエーションに、ついまごついてしまった俺。

すると女性は、ずりっ、ずりっ這いずるように身を近づけてきて、両手で俺につかまりながらやつとのことで上体を起こし

「あたしはもうすぐ、死ぬ。あたしの魂と引替えに……禁忌の転移魔法を発動させてしまった。だから、お願い。魔界衆に……引き渡すのだけは、勘弁して……!」

切なさ溢れる美しい表情で哀願、ときた。

……だが、ちよつと待て。

何だ、その「禁忌の転移魔法」だの「魔界衆」だの、ワケのわからん専門用語のオンパレードは。

リアクションの取り方がわからず呆然としてみると、彼女はよほど体力を消耗しているのか、俺の胸にもたれかかるようにしてすうっと意識を失ってしまった。

「おいっ! しっかりしろよ、おい! 死ぬんじゃねー! コラ!」

呼べど叫べど、女性が目を覚ますことはなかった。
どないせつちゅーんじゃい？

さっさと救急車を呼べば良かったかもしれないが 彼女は泣き
そうな力才をして「それだけは勘弁」と頼んできた。救急車を断つ
たワケではなかるうが、ともかく誰も近づけて欲しくないことだけ
は確かなようだ。

……えーと。

降りしきる雨の中、一人途方に暮れている俺。

ついでに日も暮れてしまったから、辺りは真っ暗。

悩んだ挙げ句、俺がそのあとどうしたかというところ 女性を背負
い、ボロアパートまで連れて帰った。

ひんやりと冷たい感覚が、絶えず背中から伝わってきたのを覚えて
いる。

まだ温かくない季節、雨に打たれて身体が冷え切ったというだけ
のことではなかったようだ。

どうやら、彼女は本当に……死にかけていたのだろう。

六畳二間の狭いボロアパートに戻った俺は、女性を布団の上に寝
かせた。

その前にドロドロぐちゃぐちゃな衣装を脱がせ、量産した蒸しタ
オルで身体中を拭いてやったのだが……そりゃあ正直、かなりため
らった。

意識を失っていて抵抗できない状態の女の人をハダカにするなん
ていうのは、な。

どこぞのエロスケベじゃあるまいし、生まれてこのかた女性を脱
がせたことは一度もなかったし。

だけど、しゃあない。状況が状況だ。

放っておけば、この若いカノジョは マジで死んでしまう。
かなりの勢いで直感だが、俺には何となくそのことがわかった。

すっかりキレイになったところで押入れから救急箱を引っ張り出してきて、傷の手当を開始。消毒液くらいはウチにも常備していたから。

何をされたというのか、傷の数がハンパない。

大勢に取り囲まれて凄惨なリンチでも受けたのか……などと、イヤな想像をしていると

「……そんなことをしてもあたし、助からないわよ？」

不意に、女性が口を開いた。

ホットタオルで身体を温めてやったためか、うつすらと意識を取り戻したらしい。

顔を見れば、弱々しい笑みを浮かべている。

「涼しい力オして死ぬとか抜かしてんじゃねエ。俺ん家でくたばったら、承知しねエぞ」

言いつつ、手を休めない俺。

この部屋で息絶えられるのも迷惑だという気持ちもなくはなかったが、それ以上に　　こういうワケだが、この美しい女性に死んで欲しくなかった。

若い女だから、という単純な理由じゃあない。

かつて、俺の身边にいた女性が二人、若くして死んでいたから、というのが正しいだろう。

一人はおじさんとお婆さんの娘。俺が小学校に入る前、十六歳で交通事故死した。内気で弱虫な俺をずいぶんと可愛がり庇ってくれた優しいお姉さんだった。歩道を歩いていた時突っ込んできた飲酒運転の車にはねられたというからやりきれない。

もう一人は、記憶にはないけれども　俺の母親だったという人。俺がまだ二歳だったか三歳の時、病気で亡くなったらしい。まだ

二十歳をちよつとこえたくらいだったらしいけど、それにしても相当若い。十代の終わりごろに俺を産んだということになる。

付き合っていた男がいたが、俺を身ごもったと知るなり行方を晦ましてそれきり。生活に困った母親は無理を押して夜の仕事を続け、やがて身体を壊した。これはつい最近、おばさんがこつそり教えてくれたハナシである。

誰であろうと死なれるのは御免だが、そういう事情が重なっているから特に若い女性は、な。

「もう、ヤメたら？ 疲れるだけよ？」

懸命に手当てを続けている俺に、横たわったままそんなコトを言うてきやがった。

さすがにムカついたが、気がつけば、キレる代わりにそういう過去のあれこれを静かに語り聞かせていた俺。目の前で若い女性に死なれるのはイヤなんだ、って。

すると彼女はくすくすと笑って

「あたし、もう百年以上生きているのよ？ 人間だったら、ヨボヨボのばーさんじゃない？ 若い女性じゃないと思うけど？」

多少心地がついてきたらしい。ツツコミが鋭さを増しつつある。百年以上生きている？

このおねーさま、いったい何を口走っているのだろう。あまりに体力を消耗しすぎて、脳みそに行き渡るべき栄養がストップしちまつてるんじゃないだろうか。

俺はあまり取り合わず、黙々と消毒液をつける作業に専念していたが、そこでふと、思いだした。

さつき公園でこの女性は「転移魔法がどうの」「魔界衆がどうの」と不可解なことを口にしていたんだっけ。

「……」

失礼を承知で、俺は彼女の裸体をしげしげと観察してみた。
全身くまなくハリのある美しい滑らかな肌。……今は傷だらけだ
けど。

小さくなく、しかし大きすぎない形のいい乳房。
きゅっとくびれたセクシーな腰。

そこら中の雑誌モデル程度じゃ顔負けしてしまうような長い美脚。
完全無欠のいい女以外の何モノでもない。

「……どっからどう見たって、若いオンナの姿かつこうしてるじゃ
ねーか。いったい、あんたのどこをどう判断すれば百歳のババアに
なるのか、教えてもらいたいね」

「あら、それは人間基準の見てくれで判断しているから、そうとし
か思えないだけでしょ？ だけど」

彼女の形のいい色っぽい目がずっと細くなり、妖しさを湛えた視
線が俺に向けられている。

「あたしは確かに人間と全く同じ姿をしているケド、だからといっ
て人間だっていう保証はどこにあるの？」

何を言いやがるんだ、と思った途端。

急に俺は異変を感じた。

身体が 金縛りに遭ったかのように動かない。

「……！？」

声すら出すこともできなかった。

焦りつつ目だけを動かして彼女の顔を見れば、そこには冷たく残忍な魔性の笑みが浮かんでいた。

「……あたしはキャナ・ルーフェル。魔界から来た魔女なの。あなた達みたいな人間ごとき下等な存在と同じに扱われちゃ、たまらないわね」

その4 魔女に出会った日2

もしかして俺は……殺されるのか？

道端で倒れていたどこの誰とも知らない美女を、善良心から助けようとしたばかりに。

身動きできない状態のまま、ふとそんなことを考えた俺。

どうやら、このおねーさま 名前をキヤナという、自称魔女がさつきから言っていることは、どうやら嘘ではないらしい。ハロウィン限定ウィッチ風コスプレイヤーどころの騒ぎではなく、本当に怪しげな魔力を秘めている、真正正銘の「魔女」だというのは、さもなくば、俺が突然金縛りに遭っている説明がつかない。

ちよつと視線を合わせただけで、あつという間に自由を奪われてしまったのだから。

キヤナは布団の上に転がしていた腕をそつと持ち上げると、固まっ
っている俺の頬に触れ

「わかってくれたかしら？ 心優しい人間のおにいさん。誰でも彼でも、助けてやればいいってモンじゃないのよ。時にはそれが自らの命取りになるって、覚えておいた方がいいかも知れないわね……？」

低く湿った声で言った。

響きは艶やかだが、今の俺にはゾツとする悪魔の囁き以外の何でもない。

彼女はまるでゆっくりといたぶるかのように、冷たい手で俺の頬をそつと何度も撫でている。

生まれて初めて体感する「殺される寸前の恐怖」。

俺はいつぞやテレビ放映の映画で観た、処刑寸前の捕虜の姿を思い出していた。身動きする自由を奪われつつ殺されるということは、

人間にとってこんなにも恐ろしいことだなんて、想像もできなかった。

だが。

不意にキヤナは「ふうっ」と大きく一つ息を吐き出しつつ、つと俺から視線を外した。

「……あ？ あれ!？」

すると、固定されていた見えない糸が断ち切られたように、突然身体の自由が戻ってきた。

何が何だかわからず呆然としていると

「ま、今のはあなたがこれから生きていく上での警告みたいなものね。あんまりにもあなた、真面目そうだったから、ちよつとからかってみたくなっちゃった。……どう？ 怖かったでしょ?」

くすつと可笑しそうに笑ったキヤナ。

つい今しがたまでのおぞましい気配と殺気はもう、どこにもない。

「何で……？ 俺を殺すんじゃないかったのか?」

変化の理由がわからなかったから、思わずそんな訊き方をしてしまった。

彼女はちよつと悲しそうに

「そうできるなら、したかも知れない。でも、もう今のあたしには、それだけの力が残されていないのよ。言っただしょ？ 魔法を使うために魂の全てをつぎ込んでしまった、って。あとは残りの魂を使い果たして、それで死んでいくのを待つだけ」

ゆっくりと首を動かして薄汚れた天井を見たキヤナ。

「……あたしのことを、魔界から刺客が追ってきている。もし捕まれば残忍な連中のことだもの、幾らあたしが瀕死だからっていつても容赦なく拷問して、それで最後には処刑するでしょうね。確かにあたしは大勢の魔界衆を殺した重罪人。でも、あたしにはあたしなりの理由があつたんだもの、ただ無差別に殺した訳じゃない。だから、さ」

再び彼女の目線が俺に向けられたのだが　その頬を涙が一筋、伝っていくのを俺は見た。

「……命を全部放り込んで禁忌魔法使つて人間の世界まで逃げてきたのよ。どうせそう長く生き延びられる訳でもないし、でも捕まつてズタズタにされて死んでいくのは嫌だった。せめて、静かに死にたかっただけ。あたしが死んだってわかれば、魔界も元のように平静に戻るでしょうしね。人間の世界で死んでいくのは不本意だけど、あなたみたいな若い男の傍で死ねるなら、それも悪くないわ。あなたが魔界衆に通じなければ、のハナシだけど」

「……」

正直、今のハナシだけじゃ彼女に関わる全てを知ることはできなかった。

辛うじて理解できたのは、キヤナが魔界とやらでその人達を多数殺した犯罪者として追われているということ。しかし、逃げおおせるつもりなどさらさらない彼女は自らケリをつけるべく、禁じられた魔法を使うことによつて我が命と引替えに俺達の住む世界へとやってきた。

静かな死を迎えるために。

言うべきことだけは言ったと思ったのか、キャナは目を閉じたまま動かない。

「……」

彼女の美しい相貌をじつと見つめている俺。

このまま何もしなければ、やがてキャナは数日のうちに　死ぬだろう。

それが、彼女が望んでいる結末。

……違うな。

本当は、生きていたいんじゃないのか？

そうでなきゃ、涙をこぼすハズがない。やりきった涙なんかじゃない、悲しい涙。自分の運命を無理矢理諦めようとする時に流れる、いわば悔し涙。

もしも、生きて生き抜くための方法があるなら　彼女はここで死ぬことを選ばない筈だ。

とはいえ「自分は死ぬんだ」って思いこんでいるヤツのテンションを「生きよう」ってところまで引き上げてやるのはそう簡単なコトじゃない。

大切なのは、理屈でわからせることでもなければ気合で持ち上げることもない。

お前はまだ生きられるんだって、気付かせてやることなんじゃないだろうか。

「……もし、嫌でないなら教えてくれ。あんたさっき、大勢のなんたら人を殺したことに『自分なりの理由がある』って言ったよな？ それって、今でも『正しかった』って、自分で信じられるのか？」
「……？」

唐突な俺の質問に驚いたらしく、キャナはそのキレイな瞳を大き

く見開いている。

が、すぐに「ふっ」と笑みを漏らし

「面白い訊き方ね。理由そのものを尋ねるんじゃないくて、それを今でも信じてるのか、だなんて。答えるまでもないわ。だって、そのためにあたしは行動したんだもの。さもなきゃ、あれだけ多くの魔界衆の命を犠牲になんてできやしない」

悔いてはいない、か。

それが聞ければ十分だ。次の質問をするためには、その回答が欲しかった。

「もう一つだけ、教えて欲しい。今からあんたを、助ける方法は何一つ残されちゃいないのか？」

「馬鹿ね。まだそんなコトを考えているの？」

「質問に答えてくれよ。あるのか？ ないのか？」

畳み込んでやった。

放っておけば、死のうとしているキャナがとりあってくれそうもなかったから。

俺が強気に出たためか、彼女は仕方がなさそうな顔をして

「……あるわ。だけど、あなたに話したところでどうにもならない」「どうしてさ？」

「あなたが人間だから。あら、わかってないって力だね。いいわ、わかりやすく言ってあげる。人間が死を恐れる生き物だからよ。……これでいい？」

「ダメだ。肝心なところが聞けてない」

俺が容赦しないものだから、キャナは明らかにムツとした様子だ。

が、相手にするだけ無駄だとも思ったのか、そのまま静かに目を閉じてしまった。

……まあ、いいや。

話すつもりがないって言うんなら、話してくれるまで待つだけのこと。

全裸で横たわっている彼女に布団をかけてやると、俺は俺のことをやり始めた。

濡れた制服をハンガーに吊るして乾し、台所に立って晩メシの支度。しょうがをすりおろして醤油と混ぜ、そこに買ってきたこま切れを漬け込む。その間、米をといで炊飯器にセット、十円の特売もやしと冷蔵庫に残っていた油揚げで味噌汁をつくる。……あと、生野菜が足らん。そういや、キュウリが三分の一ばかりあったハズだ。

ほどなく、生姜焼き定食ばりの晩メシ、完成。

すっかり腹を減らしていた俺は早速食おうとして、ふとキャナを見やった。

こいつ、メシ食うんだろうか……？

ちよつと気になったが、どうも眠っているらしいんで放っておくことにした。

食い終わって食器やフライパンを洗い、することがないのでテレビでも観ようと思ったものの、テレビをつけるのが何となく憚られた。同じ空間に、ケガして寝てるヤツがいる。

仕方がないので横になってエロスケベから借りたコミックを読んでいるうちに、俺の記憶はとんだ。

妙に苦しそうな声が聞こえてきて、俺はハッと飛び起きた。

コミックを読みながら眠ってしまったらしい。

時計を見ると、深夜の二時を回っている。

一瞬夢でもみたのかと思ったが、夢ではなかった。

横たわっているキヤナの様子がおかしい。

あごを上げて、口で荒く呼吸をしている。しきりと表情を歪ませているから、よほど苦しいようだ。時々「あ、うう、ああ、あ、あう……」と呻くような声を発した。

「お、おいっ！　しっかりしろよ！」

慌てて呼びかけると、キヤナはうつすらと目を開けて

「……そろそろ、お別れ、みたいね。あたしもう、長く、もたない……。思ったより、早かった、みたい、ね」

「死ぬんじゃないエって！　ちつとは気張れよ！」

彼女は額にじつとりと汗をにじませている。

俺は洗面器に水を張ってタオルを冷やし、顔や首を拭いてやった。それがいくらか心地よかったのか、キヤナは呼吸を鎮めつつ

「あなた……やっぱり、優しいのね……。こんなあたしなのに、さ……」

弱々しく微笑んで見せた。

表情に力がない。

よほど危険な状態であることくらい、医者でない俺にもわかる。

「あ、あのさ、やっぱり俺、救急車呼ぶからな！　このままにしないとらあんた、死んじゃうし！」

「だから……死ぬつもりだって、言った……でしょ？　お願いだから……誰も、呼ばない、で……」

この期に及んでも、彼女は頑なだった。

俺は腹が立つやら悲しいやら、胸の内がぐちゃぐちゃしながらもぎゅーっと絞られるように苦しくて仕方がない。それというのは、キヤナが黙って死んでいくということよりも 死にたくないのに死ななければならなかった俺の母さんや、おじさんお婆さんの娘さんの事を思い出していたから。

キヤナは違う。

助かる方法があるのだと、彼女は言った。

しかし、それを口にすることを拒んでいる。

死なないで済むのに、わざわざ死のうとしている。

そんなバカなコトってあるかよ！

あとになって思うのは、このときの俺の中の感情、きつと「怒り」だったと思う。

「お前！ 意地張るのもいい加減にしろよ！ 死にたくなかったて、死ななきゃいけないヤツがごまんといるんだぞ！ それなのに、それなのに、お前……」

怒鳴っているうちに感情が高ぶってしまい、最後は涙で声が詰まった。

男として情けないことだが、どうすることもできない。

あとは何を言っているのかわからなくて、ただただ込み上げてくる涙を拳でごしごしぬぐっているしかなかった。

「……！」

俺が突然怒鳴り出したものだから、びっくりした表情で固まっているキヤナ。

が、そのあとひたすら男泣きしている俺の姿を見て琴線に触れるものがあつたらしく

「やれやれ、これだから、人間って……。怒るか、泣くか、どつちかに……。しなさい、よね……」

じんわりと染み入るような笑顔を見せた。

そうして彼女はようやく、俺の質問に答えてくれたのである。

「いいわ。それほどまでに、聞きたいって、言うんなら……。教えてあげる……。でも　あなた、には、できない……。コト、だから……」

「は、話してみよう。できるかできないか、それは聞いてみなくちゃ、わからないだろ」

そう言っでやると、俺を見るキャナの眼差しが深くなった。

「あたしが、助かる方法は、たった、一つ……。あなたの、魂を、半分、分けて、もらうこと、なの」

なるほど。

これはフツーの人間なら、到底承知できないだろうな。

どれだけ目の前の人を救いたって思っても、自分の命を半分くれと言われて「ほいきた」って返事できるヤツなんか、この地球上に一人だっていたものだろうか。誰だって、結局はためーのコトが大事なもの。

そりゃあ、無理だ。できっこない。ただし。

俺以外の人間には、な。

正直なところ、晩メシを食いながら俺は、恐らくそういうコトなんじゃないだろうかって考えていた。

魂を使っでしまっで死にそうになっている。

逆をいえば、その魂とやらを補充してやれば生き続けることがで

きるって理屈になる。

別に死ぬのが怖くないってワケじゃない。そりゃ、死ぬのは怖いけれど、それ以上に俺は 目の前でこのキヤナに死んで欲しくなかったのだ。

自分が正しいと信じてとった行動のせいで魔界から狙われることになった彼女。単純に悪いコトを仕出かして逃亡した挙げ句死にかけてるってんなら、まだ俺の気持ちも違ったかも知れないが……。すっかり話を聞いた訳じゃないけれども、このまま彼女を独り死なせることが不憫に思えて仕方がなかった。

正しいと信じたもののためにこうなったのだとすれば 俺は、キヤナを信じてあげたい。

人間じゃない上に、魔界の連中を大量に殺した極悪魔女だっていっても、な。

いいよ、くれてやろうじゃないか。

俺の魂の半分。

こったら安物でよければ、もらっていくがいいさ。

が、俺はそういうくどくどした諸々を、彼女に伝える気がしなかった。

恩着せがましい。男の覚悟をいちいち語るのは野暮というものだ。

だから、

「……魂の半分为やればいいというのはわかった。で、その方法は？」

そう尋ねただけだ。

が、キヤナは俺の予想外の返事に、思いつきり面食らったらしい。

「……しょ、正気、なの！？ 魂の半分为、分けるということは、あなたの寿命が、半分に、なってしまうって、コトなのに……」

見た目に動揺しているのがわかった。

まさか、俺があっさり快諾するなんて夢にも思わなかっただろう。いつの間にかすっかり気持ちを鎮めて腹を括っていた俺。

表情を動かさずに淡々と

「だから、いいって言っているんだ。それよか早く方法を教えるよ。じゃないとあんた、死んでしまうだろ」

「……」

「俺の勝手な思い込みだったら悪いけど、あんた、本当は死にたくないんじゃないか？ できれば生きていたくって、でもにっちもさっちもいなくなつて、死んだ方がマシだと考えた」

「……」

「でも、それはあんたが今まで独りでいたからだ。今は違う。ここに、俺がいる。あんたが言うように、人間は非力でダッサくて、頼りないかも知れない。……だけど、そんなクズだって、寄り集まつて力を合わせればできることがたくさんある。俺もそうさ。おじさんとかおばさんとか、ガッコーにいる友達とかの世話になって、俺がいるんだ。だからあんた、もう一人で悩むなよ。死にたいとか、そういう寂しいコト言うなよ。俺、友達になるから。人間とか魔女とか、そういうのどうでもいいし……」

そこまで言つて言葉を切らなくちゃならなかった。

目を大きく見開いて俺の言うことを聞いていたキヤナはやがて

みるみる涙を溢れさせたかと思うと、くるりと背を向けて嗚咽を始めたからだ。

彼女は魔界つてところで一人で戦い続けるしかなくって、心が力サカサに乾ききっていたに違いない。

人間と魔女は違うっていうけど、同じように心だけは持ち合わせている。

心ってモンは、独りぼっちのままできるといつしか壊れてしまう。
でも、逆にたくさん集まって寄り添うならば　それはそれとは
てつもなく、強いものになる。

「……っく。ひっく、うっ、ひっく。うっ、うっ……」

ややしばらく、キャナは泣いていた。

そしてようやく気持ち落ち着いてたのか、手の甲で涙を拭い、再び俺の方を向いた。

その表情は俺の気のせいかも知れないが　穏やかで、優しげなものになっていた。

「……ありがと。あたし、こんなに、優しくして、もらったコト、なかった、から、泣けてきちゃった。でも、とっても……嬉しかった。あなたが、自分の魂まで、分けて、くれるなんて、言ってくれて」

出会って以来初めて見せてくれた、とっても素敵な笑顔。

「じゃあ、本当に、いいのね？　あなたの、魂、半分、もらっても「ああ、いいって。ウソは言わねエよ」

俺は静かに頷いてやった。

すると、キャナは身体を覆っている布団をゆっくりとめくり上げた。

彼女の傷ついた、しかし美しい裸体が露わになる。

「魂を、授受する、方法っていうのは、男女の場合なら、たった一つだけ。　あなたとあたし、一つになる、ことなの」

その5 魔女に出会った日3

はい……？

なんじゃソリヤ！？

いきなりな展開にフリーズしていると

「……魂は、内なるもの。それを、分け合うには、体内で、つながるしか、ないの。心配、しないで。魂の儀式は、こういう、ものだから……」

キヤナが弱々しい声で補足してくれた。

つまりは エッチをするってことか。

出来過ぎなくらいに出来過ぎたシチュエーションだな。まあ、魂のやり取りをするためには「体内でつながらなければならない」というのも、何となく理屈としてわからなくもないが。

ってか、これが男同士とか女同士だったらどうするつもりなんだ？ まさか って、まあそれはどうでもいい。今この場面で、そういういかかわしい想像は全く不要だ。

キスじゃダメなのか……？

なんて、ためらっている余裕はない。

よほど体力が限界に近づいているのか、キヤナの呼吸はだいぶ荒い。元々透けるように白い肌だったが、次第に血の気を失っていつているようだ。あたかも幽鬼のように青白くさえ見える。

彼女は俺を受け入れる覚悟ができていいのか、布団の上に横たわってじっとしている。

この際、性行為だろうが何だろうが、やるしかないのだ。

俺の魂半分 くれてやる。

「……」

俺はゆっくりと立ち上がり、キャナの足元の方へ回った。
そうして穿いていたトレーニングウェアのズボンを下ろそうとする

「あの……あなたも、裸に、なつてね。下だけだと、その……なんか、ヘンな、感じだし……」

ちょっと恥かしそうに、キャナは注文をつけてきた。
おいおい。

この期に及んでエッチに対する要望事項ですかい。
ちゃっかりしてんなア……。

つてか、この経験豊富そうなおねーさまが恥らうつても、どんなものだろう？ 見た目とは裏腹に、意外に経験不十分？

なんか違和感を感じたものの、俺は一つ頷くと注文通り裸になつてやった。確かに、下だけ脱いでやるというのは、どうも薄みつともないような気がせぬでもない。

そうしてキャナの両脚を丁寧に（一応ケガ人かつ瀕死の状態だからだ！）持ち上げつつ身体を密着させると、

「じゃ、いくからな……」

そう告げてから、静かにゆっくりと腰を沈めていった。

彼女は目を閉じてされるがままになつていたが、大事な部分に俺を感じた瞬間

「……んっ！」

小さく声を漏らし、ぴくりと身体を震わせた。

百年以上生きているせいか、どうも処女ではなかったようだが、

別にそれはどうでもいい。

あとは、お決まり。

あまり激しくしてはいかんと何度も心の内で自分に言い聞かせつつ、腰を動かしている俺。

黙って俺に身体を預けているキヤナは、投げ出した両手で軽くシリツをつかんでいる。

美しい彼女の相貌を間近で見ていると、続けているうちに、苦しげだった表情が次第に穏やかになっていくのがわかった。単に気持ちがいいのか、俺の魂が彼女の体内に入り込んでいつているからか、それはよくわからなかったが。

ところが。

しばらくして異変は俺の方にやってきた。

キヤナの体内に挿れているナニと彼女の大事な部分に密着している辺りに妙な違和感がある。

そこから何だか……俺の中の何かがすうっと引つ張られていくような感覚をおぼえたのだ。

といって、まだイツてはいない。

魂を分け与えるという作業だし、と思いつつ腰を動かし続けていたが、突然心臓の辺りを激しく突き抜けるような衝撃に襲われた。

「……!？」

瞬時に目の前が真っ暗になり エッチの最中にダッサいことだが、俺はそこでふつつりと気を失ってしまった。

どれくらいの間、意識がなかったのだろう。

ふと、身体中に柔らかくて温かいな感触を感じ、俺は目を覚ました。

「……気がついた？ 無理に起き上がったちゃダメよ？」

その温かな何かから、微かな振動と共に優しい声が伝わってきた。

「う……」

網膜に飛び込んできた強い光が痛い。

昼……ということば、あれからだいぶ時間が経ったようだ。いやあって脳みそが働き始め、ようやく俺は状況を理解した。

エッチ 間違いはないが、正しくは魂分与の儀式 の最中に意識を失って倒れてしまった俺。

その俺の身体を、仰向けのキヤナが抱きとめていてくれたのだ。

目を上げると、ほんのすぐそこに、彼女の微笑む顔が見えた。

両方の即頭部に触れてくるこの柔らかなものは キヤナの豊かな胸らしい。

「キヤ、キヤナ……？ 俺、いったい……？」

「もう三日間も意識がなかったのよ、あなた。あたし、魂全部もらっちゃったのかと思って、気が気じゃなかったわ」

ふふ、と可笑しそうに笑ったキヤナ。

すつと目を細めて愛おしそうな表情をした。

「……でも、ありがとう。あなたのおかげであたし、生き伸びることができたの。ほら、こーんなに元気そうでしょう？ こつも清らしい気分になれたのなんて、もう何十年ぶりかしらね？」

俺の背中に回されている彼女の腕に力がこもった。すっかり甦っ

たキヤナのぬくもりが、ことのほか温かい。

ああ、心の底から感謝してくれている。

そう感じたら、俺自身もなんだか嬉しくなってきた。

魂を分けてやって、良かったかもしれない。この不安定な社会で長生きなんてくそくらえだし、まああとは何とかなるだろう。そういう感じで、俺は完全にタ力をくくっていた。

それにしても、壮絶な作業だった。

エッチだけで済むと思ったら、突然得体の知れない衝撃に身体中を貫かれ、そのまま三日間もぶっ倒れてたんだからな。魂をくれてやるのは、思っていたよりもそう簡単なコトではないんだな。連休中でホントによかった。

「あ、わりイ……。三日間も、重たかっただろ？ その辺に寝かせておいてくれても良かったのに」

起き上がろうとしたが、キヤナは俺の身体を抱き締めたまま、離そうとしない。

いたずらっぽい笑みを浮かべて

「……いいコト？ 魂を分け合った以上、あたしはあなたで、あなたはあたし。これからお互い、長い付き合いになりそうよ。二人とも元気になったコトだし、あらためて結盟の儀式を……ね？」

そのままくると身体を入れ替えるように回転させ、今度は俺が下になった。

え……？

前回のが中途半端だったからって、わざわざリベンジ希望かよ？

「お、おい。それはそうだけど、こんな真昼間から　！」

そう言いかけた俺の口を、キャナの柔らかい唇が塞いでいた。
生まれて初めてかも知れない、舌がうにようにのやつたらとデ
イープなキス。

で、そのあと俺達は、あらためて。

やることは済んだが、俺とキャナは裸のまま布団の上でごろごろ
していた。

どうせゴールデンウィークの連休なのだ。

お出かけしようとマッパで寝転がってようと、誰からも苦情を言
われることはあるまい。

仰向けになって大の字で転がっている俺の胸の上に、キャナがあ
ごを乗せてきた。彼女は俺の視線に自分のそれを絡ませながら

「そういえばさ、あたし、あなたの名前をちゃんと聞いていなかった
のよね。……なんていうの？」

「孝四郎。風間孝四郎ってんだ。今十六歳で、もうすぐ十七歳にな
る」

「へえ。じゃあ、孝四郎ちゃん、ね？」

「ちゃんはやめてくれよ。せめて、君にして欲しいんだけど」

「魔界じゃ、十六年ぼっちの人生なんてまだ幼児に過ぎないもの。

……あ！ いーこと閃いた！ こーちゃんって呼んだげる。呼びや
すくてえ、可愛らしいでしょう？」

こーちゃん、ね。

そういや、中学校の時付き合ってた女の子にそう呼ばれていたな。
あのコは別の高校に進学したが、今ごろどうしているだろう。

などと考えていると

「こら。よその女のコトを考えちゃダメ！ キャナのことだけ見て

よね!」

怒られた。

……あれ?

「キャナ、お前……俺の考えとか読みとれんの? それって、魔法なのか?」

「きゃはは、引っかったあ! 当てずっぽうだもん。でも、ホントに違う女のコトを考えてたなんて、ひどーい!」

そこでキャナの目つきが一瞬だけ鋭くなったのを、俺は見た。

「これからはあたし、こーちゃんに近寄る女は全部殺しちゃうからね。こーちゃんはあたしだけのもの。いいこと?」

そいつは勘弁してくれ……。

こうしていると優しくてほわーんとしたおねーさまだが、魔女の本性向き出しになると、やっぱりオドロオドロしいものがある。あんまり逆らわないほうが身のためかもしれない。

それからキャナは、俺の素性について幾つか質問してから、自分のことや魔界の存在について語って聞かせてくれた。

話はかなり長かった。

まるで独り言でも吐いているかのようなキャナの説明を、俺は天井を見つめながら黙って聞いていた。

あのね、本当なら、わざわざ魔界から逃亡する必要なんかなかったのよ。

あえてそうしなければならなかったのは、ハメられたから。

そのハナシ、話せば長くなるけど、これからこーちゃんと一緒に

いるんだし　　って、え？　だつてあたし、こーちゃんの魂もらつて生き延びることはできたケド、このあとほかに行くトコないもん！　ここに一緒にいてもいいでしょ？　二人で仲良く暮らすんだからあ、あたしのコト、聞いただけ聞いてよ。

めんどい？

そんなコト言つてると、またこーちゃんの周りの時間を止めちゃうぞ？　きやはは、うそうそ。

……魔界にいる奴らって、みんな大なり小なり魔法を使うのね。だけどほとんどの魔界人っていうのは、世界を木っ端微塵にできるようなすごい力はもっていない。ってか、みんながそうだったら大変なコトよね。

ただ、一部に例外な連中がいるの。

姿は魔界人とか人間と同じに人の形をしているんだけど、魔界人じゃない。魔族って呼ばれていて、彼等こそ魔界人を一瞬で皆殺しにできるほどの魔力をもっている。

どうしてそういう奴らがいるのか、正直なところよくわかってないのよね。きつと本質的には魔界人とは何にも変わらなくて、たまたま人並みはずれた魔力をもつて生まれた魔界人っていうだけのことだと、あたしは思っている。その証拠に、最初の頃は魔界人とかに混じつて普通に暮らしていたのよ。

だけど、彼等の力を恐れた魔界人達からの迫害が始まつて、追放されたり殺されたりした。それで人数はばたばたと減ってしまった。今生き残っている魔族はあちこちに散り散りになつて、魔界人に見つかからないようにひっそりと生きている。

その強大な力で魔界人達を見返してやればいいって？

残念ながら、魔界人は魔族にそういうことをさせないようにするために一つの策を考え付いたのよ。その話はあとでなくちゃいけないから、ちよつとすつ飛ばすわよ？

え？　あたし？　……うん、実は、そう。

あたしの父親はフツの魔界人だけど、母親は魔族だったみたい

なのね。

で、生まれてきたあたしにも魔族特有の絶大な魔力が具わっている。だから、あたしも魔族の端くれね。ちなみに、男の魔族を「魔人」、女を「魔女」っていうの。あたしは女だから魔女なのよ。

あたしが生まれてきた頃はもう、魔族への迫害がひどくなっていた。

聞いた話だと、母親は魔界人に追われて殺されそうになって、でもそこを助けたのが魔界人である父親だった。そういう風に、魔界人の中にも魔族の理解者は少なくないわ。だけど、彼等の力ではもう、魔界人全体に根付いた魔族への憎悪を食い止めることはできなくなってしまうた。逆に、魔族に協力した魔界人が同じ魔界人に殺されてしまうほどなもの。

言ってるコトの意味、何となくわかった？

そうなのよ。あたしがまだ幼い頃、父親と母親は魔界人に捕えられて連れ去られてしまって、二度と戻ってはこなかったの。

ずっとあとになって聞いたんだけど、両親は……魔界人に殺された。何の罪もないのに。

大勢の群衆の前で、火術で足、手、腹、って少しづつ焼かれながら処刑されたんだって。苦しかったでしょうね。でも、あたしも捕まったらそうやって殺される。魔界なんて、そういうところよ。それにしても人間の世界って、すごく平和なところだわあ。魔界の現実がウソに思えてくる。

で……なんだっけ、そうそう、そういうことがあったから、あたしはいつか魔界人に復讐してやろうって、固く心に誓ったの。

何度も危ない目に遭いながら、必死に逃げて逃げて逃げ延びた。言い忘れてたけど、魔界は優れた術者達の集団に治められているの。

「魔界府」っていうんだけど、そこに所属している奴らは「魔界衆」と呼ばれている。

こいつらが魔界人の恐怖心を煽って魔族を迫害させているのよ。

あたしはほかの魔族の人達にかくまわれながら少しずつ魔法の技術を磨いて、それで魔界府への復讐を始めた。

魔界衆の連中を見つけ次第、片っ端から殺していったの。

ここ二十年の間に、二千人以上は葬ったわね。あたしには、それだけの魔力があったから。力の弱い魔界衆の奴らを殺すくらい、造作もないことよ。

当然、魔界府は騒ぎ出した。

でも最初、犯人があたしとまではわからなかったみたい。

それで彼等は本格的に始めたの。悪夢のような「魔族狩り」を。

捕えられて殺されたのは、魔族だけじゃないでしょうね。魔界人であっても、疑われればそれまで。どんなに無実を訴えようと、待っているのは処刑だけ。

あたしは長い間ほとんど独りぼっちだったけど、たまたま魔族の親友ができた。

メイアっていう女の子。魔女ね。

あたしほどの魔力はないけど、それでも実力は高かった。彼女と組んで魔界衆の奴らをどんどん蹴散らしてやった。楽しかったなあ。メイアも家族を魔界衆に殺されたらしくて、魔界府に強い恨みを抱いていた。

だから、彼女となら魔界府を潰してやることも不可能じゃないって思ったりしたんだけど、そうは甘くなかった。

さつきちよつと言いかけたけど、魔界府は魔族の強大な力に対抗する研究を何百年も続けていたの。

それでようやく一つの形が出来上がった。

「魔封」っていう術。

……あ、こーちゃんたら飲み込みが早いわあ！

そうそう、魔力を封じてしまう術なのよ。っていっても、術者が単独で発動できるような代物じゃない。大地とか壁に魔封陣を張って魔力の強度を固定しないとならないんだけどね。

魔界府の中心者　魔界府八術師　は魔界衆に命じて、魔界全体に魔封を施すってとんでもない策に打って出たの。そんなコトしたら、みんな魔法を使えなくなるだろうって？　そこはそれよ、極めて強力な魔力を持つ者にだけ作用するようない方もできるのね。わかりやすくいえば、魔族だけを無力化するってコト。

正直、これをやられてしまえばあたし達魔女はお手上げ。魔法を封じられたら、何もできないただの人になってしまふからね。

それであたしとメイアは相談した。　魔界中に張られつつある魔封陣を潰すしかない。

でも、いくらあたし達が魔族だからっていつても、とてつもない困難を伴うのは目に見えていた。魔封の術を発動させるのは魔界府の中心・宝魔殿にいる強力な術者達だからね。魔封陣を潰すと同時にそいつらを止めなくちゃイミがないってことよ。宝魔殿に潜入するのは、地獄のど真ん中に飛び込んで身を焼かれてもいい、くらいに決死の覚悟が要る。

さすがにためらうわよ。

そうしたらメイアが「魔界府にはあたしが乗り込むから」とか言い出した。

止めるわよね、友達なもの。生きて帰れる見込みのない場所に行かせる訳にはいかない。

でも、メイアは言ったの。

「あたしの手元には両親と祖母が遺してくれた、古代魔術書写本の一部がある。これに書かれている古代転移魔術を駆使すれば、魔界衆と戦うことなく宝魔殿にたどりつける筈よ」って。

古代魔術。

その名の通り、遠い昔に魔族だか魔界人だかしらないけど、地上に現れて殺戮の限りを尽くした魔神と戦うために編み出したといわれる究極の魔術よ。その術果や破壊力は常人の想像の及ぶところではないみたい。みたい、って曖昧な言い方をしたのは、古代魔術に手を出した者でその後まともに生き長らえた者はいないから。

どうしてって？

今はもう伝承に過ぎない存在だけどその昔、人並み外れて強い魔力を持った者がさらなる力を欲するあまり摂理からはみ出したいかがわしい魔術に手を出した挙げ句、心も姿も醜く歪めた狂気存在に堕してしまった。これが魔神。魔神は他者の魂を奪い、自ら取り込んでさらに力を増長させる。だから、例え魔族の力をもつても、魔神を食い止めることはほとんど不可能だったといわれているの。

でも、放っておいたら魔界そのものが滅ぼされてしまう。

だから、心ある魔族だか魔界人だが、自分の魂を犠牲にして強力な術果を得られる魔術を編み出して魔神に対抗したってワケ。それで魔神と術者は滅んだけど、古代魔術だけは今に伝えられていた。とはいってもね……残っているのはその全部じゃないのよ。

アタマのいいヤツがいたらしくて、破壊魔術とか創造魔術みたいなヤバっちいのは歴史のどこかに葬り去っちゃって、今魔界にあるのは転移魔術とかちよつとした系統のものだけ。

結局、宝魔殿の方はメイアに任せて、あたしは魔界都の外れに作られつつある魔封陣をぶっ潰しに向かったの。

そりゃあ、泣いてお別れしたわよ。

時空転移じゃないから魂全部持っていられることはないけど、それでも大部分を消耗してしまうことは目に見えていたしね。でもメイアは笑って宝魔殿に乗り込んで行った。

だから、あたしも腹を括った。

メイアが生き延びるためなら、あたしは魔封陣をぶっ潰してから死んでも構わないって。

魔界衆の連中、さすがに襲撃を警戒してたらしくて魔封陣の辺りにやたらと人数を置いていた。あたしが魔女だっていっても、一度に何百も相手にするのはツラかったわあ。ちまちまと飛んでくる殺傷魔術を防ぎきれないのよ。……このキズはその時にできたのね。魂が回復したから、すぐに治ると思うケド。

そこまではよかった。

でも、そのあととんでもないことが起きた。

潰した筈の魔封陣が発動し始めたのよ。

最初は何がなんだかわからなかったけど、魔界衆の慌てる様子を見てあたしは事実を知った。

メイアのヤツよ。

あの女、秘かにろくでもない禁忌の魔術なんか手に入れていたのね。

犠魂陣っていつて、古代魔術の一種らしいんだけど、要は犠牲者の魂を奪い取って魔力に変えてしまうつていう、これこそ究極の悪魔の術よ。噂には聞いていたけど、本当に存在するのかどうかはわからなかった。どうやって手に入れたのか、メイアはあたしに黙ってそんなアブない術を隠しもってやがったのよ。

……あとは、こーちゃんでも簡単に想像できるハナシ。

メイアはまず、そのヘンの魔界人から奪った魂の力で転移魔術を使って魔界府に乗り込んだ。

今度は魔界府八術師とか魔界府の連中を片っ端から犠魂陣にハメて抹殺、事実上魔界府はあっけなく彼女の手に落ちたつてワケ。大した魔術の技量もない奴らはほとんど殺されたでしょうね。

忌々しいのはそのあとよ。

何を思ったのか知らないけど、メイアは自らの手で魔封陣を発動させ始めた。

きつと、あたしをも葬り去ろうとしたんでしょうね。本気出せば力はあたしの方が勝っているから、のちのち邪魔になると踏んだに違いない。こうなった以上はもう、彼女は「魔神」と同じよ。あたしがいなくなった魔界で踏ん返り返って君臨しているんでしょうね。……で、強力な封魔の波動が迫ってくる中で、あたしは思った。ああ、味方のフリして近づいてくるような輩は、全部敵なんだつて。

悟ってはみたけど、その時はもう遅かった。

あの女が放つ魔封の術を妨げるヤツなんかいないから、ほとんど成功したようなもの。黙っていれば数分もしないであたしの魔力は完全に封じられてしまう。

でも、一つだけ逃げ延びる方法がある。

あたしもまた、実は転移魔術の使い方を把握していたの。

いつか魔界衆の連中に追い詰められるようなことがあったら、それを使って逃亡しようって思っていたから。両親みたいに、捕まっても痛めつけられながら死んでいくのはイヤだったもの。もちろん、使えば魂を根こそぎ持っていかれるけど、転移して魔界衆のいないところで静かに死ねばいいって考えていた。

あたしが知っていたのは、メイアが使ったようなハンパな転移の術じゃない。時空を跳躍して異世界へ移動するための転移魔術。その跳躍先はどうやら人間の世界らしいってコトは聞いていた。どうも、かつてそれに成功した魔族がいるらしいんだけど、その真偽のほどは……ね。

そこから先は、こーちゃんが知っている通り。

力を使い果たして倒れていたあたしを、こーちゃんが見つけて助けてくれた。

自分の魂まで分けてくれたってのは、ホント、予想外だったけどね。

でも、こっちの世界にきてわかったコトが一つある。

魔界では異世界に暮らす人間なんて魔術も使えない下等な存在だっって言われていたけど、あたしを庇ってくれた魔族とか魔界人の人たちと同じように、自分を犠牲にしても力を貸してくれる人間がいたっていうすごい事実。

意識のないこーちゃんを抱き抱えながらしみじみ思ったわ。

あたし、死ななくて良かった。

こっちの世界で、あたしを守ってくれたこの人を、今度はあたしを守って暮らしていくってのも、何だか悪くないような気がするって。

一部始終を語り終えたキャナは、自分の顔を俺にぎりぎり近づけてきて、尋ねた。

「……もう一度だけ訊くわね、こーちゃん。今聞いた通り、あたしはこんな女。魔界では数千人を殺した重罪人よ。悪魔とか魔神呼ばわりされている、血も涙もない冷酷非道な魔女。ついでに言えば、自分の身を守るために身体を売ったコトだって一度や二度じゃない。あなたは、そんなあたしに大事な自分の魂を分け与えたのよ？ イミ、わかつてる？」

「あア、まあな……」

俺は気のない返事をしつつ、ゆっくりと起き上がった。

何を言い出すのかと思ったら。

いちいち、念を押されるまでもねエ。

「……俺はね、キャナ。あんたが大量殺人鬼だろうと魔女だろうと、そこはどうだっていいんだ。魂を分けてやる前に訊いたよな？ 自分が正しかったって、今でも信じているのかって」

「……」

「正しいと信じてるっていうから、それでいいじゃねエか。俺は自分の行動をあとからグチグチ言うような趣味はねエんだ。キャナを信じたから俺は魂をくれてやった。それだけのことさ」

きょとんとしているキャナ。

事実、俺はどうでも良かったんだ。

これが人間の女だったら取りあえず警察に自首して貰わねばならないけど、日本の法律で魔界の魔女なんか裁けないし。

本当に知りたかったのは、キャナがスジを通していいのかどうか、

それだけ。

「ハラ、減ったな。三日間飲まず食わずでぶっ倒れていたし。とりあえず、メシ、食わね？」

キヤナはぼーっと俺の顔を眺めていた。
が、みるみる笑顔になって

「……うん！」

子供みたいに無邪気にうなづいた。
まあエツチも悪くはないけど、それよりも向かい合って一緒にメシを食うこと。

友達だろうと恋人だろうと家族だろうと、お互いに分かり合うために、これ以上に大事なコトってないんじゃないだろうか。

俺はそう思っている。

その6 最初の刺客1

そんなこんなで、俺とキャナの奇妙な同棲は始まった。

魂が半分なくなっただとはいえ、日常生活にこれといって支障は感じなかった。

普通に朝起きて学校へ行き、普通に帰宅して、普通に寝る。……言い忘れていたが、帰宅途中に近所の学校の不良どもをぶちのめしてから商店街で買い物をするというスケジュールも普段通り。

大きく変わったことといえば 誰もいないハズだった俺の部屋にいつも、キャナがいる。

転がり込んでから数日というものの、彼女はほとんど死んだように眠りこけていた。

魔界にいた頃、生きるか死ぬかというぎりぎりの毎日を（ざっくりで）百年間も送り続けていたキャナ。想像しただけでこっちがしわくちやになっちまいそうだ。爆睡できるということは、平和な人間世界にやってきて心の底から安心したのだろう。だから俺は、三度のメシだけは用意してやりつつ、寝ているときはそのまま寝かせておいた。

朝、俺が学校に行く時はほとんど寝ているキャナ。
夕方、学校から戻ってくると

「……あえ？ こおちゃん、いるのオ……？」

もそもそと起き出してくる。腹が減って目が覚めるらしい。

寝乱れた姿のまま手の甲でぐしぐしと目をこすっている仕草が無邪気で子供っぽくて、思わず抱き締めたくなるほどカワイイ。……って俺は口り萌えか。

「おオ、帰ったぞ。今晚は肉じゃがとほうれん草のおひたしにすっ

「からな。カオ、洗ってこーい」
「はーい」

台所に向かって包丁を振るっていると、すっきりしたキヤナが後ろから俺に抱きついてきて

「こーちゃん、手際がいいのねえ。むふふ、ホレなおしちゃう！」
「あア？ 俺にホレても、何もでんぞ？」
「ううん！ ごはんが出てくる！」

新婚さんのな、実に他愛もない会話。

まー、すっかり元気になったみたいだから良しとしよう。
こうしている時のキヤナはどこまでも「ほわーん」ってしていて、とても冷酷な魔女には見えない。

で、メシが出来上がると一緒に食う。

最初はこっちの世界の食い物なんか食えるのかと思ったが、

「魔界で食べてるモノもあんまり変わらないわね。ってか、こっちの世界の方がおいしー！」

特に好き嫌いの発動もなく、喜んで食っている。作っている俺にすれば悪い気はしないな。

食い終わってからはテレビを観ながら二人でああでもないこうでもないって話をして、寝る。意味があるようなないような一日だが、彼女にとってはせっかく手に入れることができた安穩とイノチ。しばらくはしたいようにさせてやっただけいいと俺は思っている。

そういう時に魔界からの追っ手に襲われたりしないかって？

もち、気にならなかったわけじゃない。

その点については彼女がやってきてすぐの頃に訊いてみたのだが

「うん？ 追っ手？ だーいじょうぶよお！ 心配ないない！」

ご飯を頬張りながら、のんびりとした調子でキヤナは答えた。

「だって、ほら、魔界からこっちに来ようと思ったら、転移魔術じやなきゃダメでしょ？ でも、転移魔術を使ったらあ、あたしみたいに魂がすばーん！ って、もってかれちゃうからねえ。運良く転移に成功してもお、着いた途端に速攻で死んじやうワケ。イミないのよー！ きやはは」

ノーテンキに笑ってる場合かよ。お前はそれで死にかけたんだろ
うが。

でも……よく考えてみれば、それもそうか。

ん？ 待てよ。

じゃあ、その転移魔術とやはは、何のためにあるんだ？

「それはねえ、古代魔術っていうのは、いわゆる『自己犠牲』なのよ。自らの魔力とか魂ぜーんぶ引き替えにして発動するでしょ？ 要は、自分が犠牲になって誰かを助けるための魔術なのよね。だから、本当は自分に対して作用させるものじゃないのよ。あたしはたまたま。魔界衆に捕まるくらいなら静かなところで死にたいと思って、使っただけなの」

なるほど。

じゃあ、誰かが犠牲にならなきゃ、追っ手の連中がこっちの世界にやってくることはないワケだ。

という意味のことを言うと、キヤナは途端に真面目な表情をつくって

「そこよ。どうせ魔界衆の連中だもの、転移魔術を発動させるため

には生け贄を仕立て上げるに決まっている。……わかるでしょ？
捕らえた魔人とか魔女、それに魔族にでっち上げられた魔界人とかを、ね。魔族は犠牲者一人でも十分な発動魔力を得られるけど、魔界人じゃちょーっと厳しいわね。そうねえ……一度に五十人くらい殺せば、何とかなるかしら？」

魔族一人で魔界人五十人分の魔力を秘めているって計算になる。
それがどういふことなのかはよくわからなかったが、ともかくも
魔族　魔人や魔女　の魔力がそれだけすごいって意味なの
だろう。

「だけどさ、キャナ」俺は漬物をぼりぼりと噛みながら「メイアだかつてのは犠魂陣を操ることができるんだろ？　んじゃ、ヤツは魔界人を何人犠牲にしてもお前を殺しに刺客を放ってくるんじゃないのか？」

単純に思った疑問を口に出したただだったが、キャナは真剣な眼差しを俺から外すことなくきっぱりと言い切ったのだった。

「メイアのことだから、蹂躪した魔界衆の連中を犠魂陣に放り込んでおくでもないコトをやるのは目に見えている。でも、安心して。例えあの女が何を仕出かそうとも、あたしはこーちゃんを守るために戦うから。そのためにこっちの世界をぶっ壊しちゃったら、それは勘弁。……例えそうなったとしても、こーちゃんには指一本触れさせやしないわ。命を半分あたしに捧げてくれたんだもの、今度はあたしがこーちゃんのために何かしてあげたいのよ」

そっか。

魂を分けてからこっち、俺からはキャナに何も求めちゃいなかったが、彼女は彼女なりに俺に報いるために何ができるか、考えてい

てくれたようだ。

いつになく真面目に固まっているキャナ。

そんな彼女の顔をじっと見つめていたら、思わず腹の底から笑いが吹き上げてきた。

「なあに？　笑うコトないでしょお！　あたし、マジメなのに！」

「悪イ、そんなつもりじゃねエよ。　ま、あんまり肩に力入れないでいけばいいんじゃない？　魔法なんか使えねエケド、拳の戦いなら俺にもできる。伊達に『神速鉄拳』ってあだ名されてるワケじゃねエしさ。一緒に戦えば二人力弱、くらいにやなるだろ」

そよ風に吹かれているみたいなの、俺の太平楽々な言い草が可笑しかったらしい。

ぷつとふくれていたキャナも笑い出し

「そおねえ。魔界人っていつても、身体づくりは人間とあんまり変わらないし。　もしも肉弾戦になったら、その時はこーちゃんにお任せした方がいいかもね？」

「おオ、そオだ。ヒヨロい魔法使いの十人や二十人、どーってことねエよ」

「じゃあ、あたし……高見の見物してるから！」

ひとしきり笑った俺達。

別に楽観視するつもりはなかったけど、びくびくと怯えながら暮らすのも癪だと思った。

相手が不良だろうと魔界の連中だろうと知ったコトではない。

死ぬ気になって喰らいついて離れなければ、勝てはしなくても決して負けないものだ。喧嘩の極意っていうのは、突き詰めるとそれしかない。動物でもそうだけど、最後まで粘った方が勝ち、根くれたびれしたら負け。

が その会話の夜からわずか二日後のこと。
思いがけない早さで「まさか」の事態はやってきた。

その7 最初の刺客2

キャナと晩メシを食いつつ魔界からの追っ手云々について話をしてから二日後。

その日は休日で、俺はちよつと遠くのスーパーまで買い物に出かけた。

月に一度の特売をやるという、聞き捨てならない情報を得たからだ。

教えてくれたのは近所に住んでいる大井カネさんという婆ちゃん。いかにも裕福そうな名前だが、まったく関連性はない。タマというネコを飼っているが、この情報もとりわけ重要ではない。

このカネ婆、最近腰を病んでいる。

で、毎朝ゴミを出すのに難渋しているようなので手伝ってやるようになったのだが、それを有り難がって晩メシのおかずを分けてくれたり、周辺のスーパーのお買い得情報をこっそり教えてくれるのだ。別に秘匿する必要性はこれっぽっちもなさそうだが、どうやら自分の耳が遠いから周囲の人間も同じだとカン違いして耳打ちしてくるらしい。

「風間君、あのね、明日の土曜日なんだけどね、ごによごによ……」
「……！？ マジっすか、それ？ チョー安いじゃないっすか！」

老婆と男子高校生の会話としてはきわめて珍妙なものがあるが、それはまあいい。

牛乳パックが一本九十八円、納豆が五十円、キャベツ一玉百三十八円、その他諸々……どこから仕入れてきたのか知らないが、カネ婆の情報は実に詳細を極めていた。

価格破壊という小売最大の強敵に真っ向から勝負を挑んでいるそのスーパー！ 天晴れ！ 潔し！ この風間孝四郎、是非参ってや

ろうじゃないか！

というマグニチュードな感動はさておき、午前中からのこのこと出かけて行った俺。

例によってキャナは熟睡中。

電車で二駅離れた街にあるから、帰ってくれば楽勝で昼過ぎになる。という時間計算をした俺は、彼女のためにアンパン一個をテールブルの上においてやった。牛乳はまだ冷蔵庫に残っていたハズ。当然、徒歩。

電車なんか利用しようものなら、わざわざそのスーパーへ出向く意義は消失する。若いという特性を十分に活かせば、多少の歩行距離など苦にならぬものだ。

あたかも俺の買い物を祝福するかのように空は青く澄みわたり、日差しはことのほか温かい。

意気揚々と歩いて住宅街を抜け商店街をスルーし、近道をしようと川べりの遊歩道に下りた時だった。

川をまたいでいる大きな橋の下、日陰になったところにたむろっている数人の高校生がいる。

以前ぶちのめした記憶のある顔が混じっていたから、どこの連中ははすぐにわかった。

……私立東掛七星高校、通称「東高」もしくは「セッター」。どのみちＪＴがらみだ。

「……お、オイ！ あそこにいるの、イーペーの風間じゃねエ！？」

俺に気付いた一人が声を上げた。

イーペーの風間、か。俺はいつから雀士になったんだ？

「マジだ！ 江香さん、どうします？」

「やっべ！ 俺らだけじゃ、ぜってエ勝てねエって！

逃げっ

ぞ！」

江香という三年のヤツに促され、タバコの連中はそそくさと退散していきやがった。

正直、ホッとしていた俺。

向かってくれば相手にならないことはなかったが、牛乳一本九十八円はタイムセールだから、十一時までに行かないと手に入らなくなってしまう。どうやら、その懸念は去ったようだ。

と、思ったのも束の間。

一目散に逃げ去ったばかりの江香以下タバコ軍団が舞い戻ってきたのだ。

数が増えている。

ざっと見て十人。倍以上になってやがる。

よくよく見てみれば、タバコ以外の連中が混じっている。

東掛平和高校の奴ら。さして必要もない情報ではあるが、通称ピースである。意味的には戦争がない状態じゃなくて、自動販売機で買えるアレだ。

「おい風間ア！ こないだはようやってくれたのオ！」

さっきまでおどおどしていた江香、増援を得たものだから居丈高になって喚いている。

短髪で剃りがキツく、生高の田坂なんかよりは十分ワルに見えることは認めよう。

だが、いかんせんヤツも腰抜けでしかない。

その証拠に、俺の顔を見かけるなりダッシュでとんずらしたクセに、シマの生徒を人数に引き込むなり態度しときたモンだ。

ヤツはずいつと前に進み出て来て

「いくら手前エが強かったって、この人数相手にケンカはできんだろオが！ あア！？」

ちっ。

俺は内心で舌打ちしていた。

……牛乳が買えなかったらどうしてくれるんだ。

やむを得ない。行く手を遮る連中の中央を突破して、スーパーへ急がなければ。

そう決めた俺は一步踏み出した。

駆け抜けざま左右に一撃つつ見舞ってやれば、奴らは簡単にひるんで道を開けるハズ。

ところが。

「……風間よオ、休みの日になアにやってんだ？」

土手の上から聞き知った声が！

ハッとして見上げれば、ちっこいポメラニアンを連れて散歩中のいかついーちゃんがいる。

山田康夫。

チープな響きにしか聞こえない名前の持ち主だが、ケンカはハンパなく強い。俺が勝てなかった何人かのうちの一人に入る。橘商業高校、通称「タチシヨン」の生徒で、同じ二年生。うちの男子便所みたいにアンバランスにガタイがでかく、しかもなんちゃらメールのように力強い。

以前どこかでかち合ってケンカになったのだが、一撃離脱式な俺の攻撃では決定的なダメージをくれてやることはできなかった。その時は決着がつかずドローとなり、しかし去り際にヤツは

「お前とやり合っても埒があかん。俺達は今後イーペーに手エ出さんから、お前らはうちの連中に関わらんようにしてくれや」

と、なにやら不戦条約的な台詞を吐いて姿を消した。

ってか、イーペーの連中は俺以外誰も鉄拳を振るうヤツはいないんだけど……。

その後何度か、街で他校生に絡まれているタチシヨンの奴らを助けてやったことがあり、いつの間にか山田とは友達のようになっていた。不良というよりはタチシヨンの「守護者」みたいな存在だから、好んで他校生をぶちのめするような真似はしない。少なくとも生高の田坂とか、今日の前で騒いでいる江香なんかと比較してはいけないおりこうちゃんなのだ。……ついでに動物が大好きだし。

「おい！ アレ、タチシヨンの山田じゃねエ？ 風間の加勢にきやがったんじゃないのか？」

タバコの一人が叫んでいる。

おいおい、お前の目は風穴か（正しくは節穴だ）……。さもなきやKYか。

どこをどう見れば、山田が俺の助太刀に駆けつけたって構図になるんだ。ただの通行人だろうが。

それはともかく、これはいよいよまずい。

なんでって、このシチュエーションなら間違いなく、山田もペットのポメラニアンも巻き込まれる。ヤツを一人戦場に置き去りにして俺がスーパ―へ急ぐワケにはいかないじゃないか。

「山田アコラア！ てめエも潰されにきやがったかア！」

「いや。俺は偶然通りかかったただだが……」

悠長な返事をしつつも、ポメラニアンのリードを近くの鉄柵に結びつけた山田は土手の下へ下りてきた。ゆつたりと俺の傍へやってくる、

「風間には、借りがある。それに、一人を十人で囲むってのはどう

見ても卑怯だろう。だから、俺が援護する。……キヤメロンが待ってるから、早くしろ」

キヤメロン？

……ああ、土手の上でご主人を恋しがってキャンキャン咆えているあいつか。犬っころごときにずいぶんとけつたいな名前をつけたものだ。

だけどそれはまあ、いい。個人の自由だ。

キヤメロンにされた犬の気持ちは知らんが。

「いいのか？ お前ントコのガッコー、喧嘩にうるせえんじやなかったっけ？」

「教師達よりあいつらを黙らせる方がよっぽど早い。この前もうちの一年生がボコられてる」

「……違いねエ」

かくして、連合軍同士のケンカは始まった。

セッター&ピース連合軍VSタチシヨン&イーペー連合軍。

……すでに地球外生命体同士の銀河戦争って観があるな。

俺の戦術は常に一つ。

相手の旗頭へ一直線、速攻で沈める。

そうすれば下っ端の不良どもはビビり、雪崩を打って逃げ出していくものだ。このやり方は、昔どこかであった海戦の戦術から学んだ。

地を蹴って江香目掛けて突進していく俺。

その他の雑魚には目もくれない。

「てっ、てめっ！ かつ、風間」

猛然と突っ込んでくる俺に気付いた江香は慌てているが 遅す

ぎる。

ぎりぎり間合いに踏み込むタイミングで、俺は初めて拳を固めた。次の一步、ほとんど駆け抜けていく一瞬でヤツの顔面を意識する。そうすれば、拳はあたかも遺志が宿ったかのようにして、勝手に相手の顔面を目掛けて飛んでいく。

ここでちょこまかと要らない小細工を弄してはいけない。

ケンカは常に一撃で決するつもりでなければ、こっちの身だって保たないのだ。だから、狙うのは顔面しかない。それも、渾身の一発のみ。土方さんとかいうどこかの集団の副長も言ったじゃないか。常に面の斬撃が突きを狙え、と。あと、薩摩の何とか流って剣術もな。

不意を衝かれた江香ごときに、俺の神速鉄拳を避ける術はない。何しろ、放っている俺ですら　どの角度から撃ち込んでいるかなんてわかつちやいないのだ。

「べっ

」

拳に変な感触があたりと同時に、江香が奇声を発した。

構わず一気に駆け抜けた俺の背後で「どさっ」と地面を打つ音。立ち止まって振り返り見れば、江香が地べたに転がっている。

あまりの衝撃で目眩でも起こしたのか、仰向けに寝たまま起き上がろうとしない。

「うわっ！　え、江香さんっ！？」

自分らのリーダーが秒殺されたのを知って、案の定下っ端どもは動揺している。

「……ケンカ中によそ見してんじゃねエ。危ないぞ」

そこへ山田の剛拳がお見舞いされたからたまらない。

「ぼっ！」

「ぶっ！」

「がっ！」

言い忘れたが、山田の拳はでかくて硬い。これで一撃されれば、大抵の不良はピヨる。

しかもリーチが長いから、よほど注意してかわさなければ素直に一発もらってそれまでだ。

開始早々、江香はじめ四人を撃沈。

残り、六匹。ピースの連中ばかりだ。

山田はビビって立ちすくんでいるヤツらの方へつかつかと歩み寄っていきなり一人の胸ぐらをつかまえ

「風間ア！ 三田をやれエ、三田を！ ほかは雑魚だけだ！ 俺が片付ける！」

「あいよ」

なんとまあ、頼りになる味方だこと。

俺はジープランを中途半端にだらしく穿いた、威嚇的な長髪の男に一瞥をくれた。

ピースの中心格・三田。確か俺達と同じ二年生。

これも以前、撃退済み。いつだったかはもう思い出せないけど。率直に言ってこれも江香と五十歩百歩なフニヤチン野郎。江香が速攻でのめされたのを見て怯えたらしく、早くも背中を見せて逃げ出そうとしている。

「……おい、三田らし団子！ 逃げんのか？ だらしがねエ」

みたらし団子と三田をかけただけで、まったく意味はない。
ヤツはちらりと俺の方を振り返ったが

「お、オレは知らねエ！ 江香さんに呼ばれたから、き、来ただけだつて！」

惚れ惚れとする逃げ足の速さで現場を離脱。

あーあ。あとで江香にシメられても知らんぞ。よりによって、先輩を見捨てて逃げるとは。

ボコるべき相手にとんずらされた俺は仕方なく山田に加勢しようとした。

その時だった。

「うわぁ！」

「どわっ！」

俺の背後で超でかいフラッシュ、そして野郎どもの悲鳴が。

ハッとして振り返った俺の目に飛び込んできたのは 数メートルも先に吹っ飛ばされて転がっている山田、それにピース連中の姿だった。

ほんの数秒前まで彼等がいたと思われる、舗装されていない草むらの地面がごっそりと半球状に削り取られ、黒土が見えている。周辺の草は帯電したようにビリビリと発光を繰り返す。

キャンキャンキャン

ただならぬ気配を察したのか、土手上のカメラロンがけたたましく咆えまくっている。

そして、陥没した部分の真ん中のあたり……白い衣装を身につけた何者かがうずくまっていた。

「……！？」

やがてゆらりとゾンビのように立ち上がったそいつは、年の頃は中年の男だった。口の周りのヒゲはぼうぼう、頬はげっそりとけてしまっていて、死体のように顔色が悪い。

衣装の仕立てはどこぞの教会で神父の着ているそれに似てはいるが、似て非なるもの。上から下までワンピースで裾が引き摺るほどに長く、その上にマントのような肩掛けのようなものを羽織っている。RPGで例えるなら、プリーストとメイジの格好を足してどうにかしたようなデザインだ。ただ、あちこちが擦り切れてボロボロ。ほとんど、行き倒れの冒険者コスプレ。

男は呼吸が苦しいのか、肩をひどく上下させている。

やがて、身体全体でゆっくりと俺の方を向き

「……キャナを、キャナを、知っているのか？ お前、キャナの気配がする……」

腹の底から搾り出すような恐ろしい声。

ってか、完全に目がイッてる。

瞳に光がなく、まるで催眠術にかけられたかのように視線が定まっていない。おまけに、クスリの常習者みたいに身体をがくがく震わせてるし。

咄嗟に俺は悟った。

こいつ　キャナを追ってきた刺客だ。

と、すれば、迂闊な返事をすれば命取りになりかねない。

魔界衆か魔界人かは知らないが、どのみち魔法を使える連中であることに変わりはないのだ。どうやらアブナイ人と化しているから、いつそれをぶっ放されないとも限らない。

「……」

はてさて、どう答えたものか。

俺は男の様子をうかがいながらも忙しく脳みそを回転させているが、その思案は無駄だった。

「……お前、キャナの気配がする。キャナ、処刑しなければなら
ない……」

「……え？」

いきなり男が両腕を俺の方へと突き出した。

同時に、その手の平に白い光のタマが発生し、みるみる膨張していく。

あまりの眩さで男の姿が見えなくなるまで十秒もかからなかったように思われる。

男は両腕に念をこめつつ、舌を噛みそうな超早口で何事かの詠唱を始めていた。

「……あまねく大気の精、我が掌中に集いて一閃の刃となり、我が敵に向かってその威を示さん。我、汝に奉るは我が魂、我が生命、我が魔力……我が前に姿を現し給え、我が敵を滅せよ……」

ぶつぶつ言っているのがふと、途切れたかと思った途端

「ハアッ！」

突然、一声を発した。

その掛け声に導かれるように光弾が男の掌中を離れ いきなり俺を目掛けて一直線に迫ってきた！

その7 最初の刺客2（後書き）

次話掲載は来週になります。

その8 最初の刺客3

「おわあっ！」

カッコ悪いとかなんとか、ごたくを並べている余裕はない。
反射的に横っ飛びをかました俺の背中すれすれを、光弾がかすめていく。

二つの光弾はそのまま宙を飛んで、川面を直撃した。

ばっごおおん……

派手に舞い上がった水柱、そして川底の石。

ぶっ倒れた姿勢のまま恐る恐るそちらの方を見やれば なんと、
川底にでっかい大穴がぶち開けられてるではありませんか。川の流
れ、微妙に変わってるし。美空さんもびっくりだ。

……それはいいとして。

初めて見る魔法の威力に怖気が立った。

運悪くあれをくらっていたら、俺も今頃はスプラッタ……？

神速鉄拳をかましてやるどころの騒ぎじゃない。

キヤナの話を聞いていた俺は割とお気楽に考えていたが、どうも
勝手が違うようだ。

（やつべ……逃げた方がよさそうだ……）

この瞬間、不覚にも山田とかピースの連中のことはまったく頭に
なかった。

黙っていれば殺されてしまうという恐怖だけが俺を支配していた。
慌てて起き上がろうとすると

「痛って……」

脇腹を貫く鋭い痛みがはしった。
どうやら横っ飛びして地面に落ちた際、打ち所が悪かったらしい。
たまらずうずくまった俺の上に、ゆらつと影がした。
すでに刺客の男が近寄ってきて俺の傍に立っている！

「キヤナ……処刑……する……」
「……！」

俺を見下ろしている、何かに取り憑かれたような魔性の眼差し。
情けないが、こればかりはちびりそうになるほどゾツとした。
出会って間もなくキヤナに魔法で身動きを封じられた時も恐ろしかったが、それとはまた別の恐怖だ。正気を失った存在に命を狙われると気持ちが完全にフリーズしてしまふらしい。ホラー映画で殺される人の気持ちがちょっとだけわかったような気がしたが、この期に及んでそれはどうでもいい。

もう、逃げる余裕はない。

差し向けられている男の両手の平が鈍く輝き始めた。

俺はぐったりとして冷たい土の上に頬をつけた。こうなってしまうばもう、どうにもできない。

おじさん、おばさん、それにキヤナ　　！

目を閉じて無意識にキヤナの名を念じていた俺。

その瞬間、頭上で「ザンッ！」という鈍い、そして何ともイヤな音を俺は確かに耳にした。

「……？」

微かに訪れた静寂を不思議に思った俺は、恐る恐る目を開けてみた。

網膜に飛び込んできた午前の明るい陽の光、それからふわっと舞ってきた数滴の黒い滴。

これって 血！？

ぎよっとして俺は目を見開いた。

俺を殺そうとしていたハズの男の姿が、ない。

一体全体、ほんの僅かな間に何が……！？

その答えはすぐにわかった。

「……意外に早かったのねえ、メイアったら。あのバカ女、時空転移のやり方にあっさり気がついたってワケね。ちょおーつとばかり、見くびっていたかしら、アタシ」

低くねっとり湿ったような、艶っぽくも冷酷な響きのある女の声。

そう。

この声の主は、もしかしくてももしかして

「こーちゃん、大丈夫う！？ しっかりしてよお！ こーちゃんが死んじやったら、あたしも死んじやうんだからね！」

がくがくがくがく……。

いきなり猛烈に身体を揺さぶれている俺。

「……何となく生きてるわ。だから、揺らすのをヤメンか……」

「あーっ！ こーちゃん、無事だったあ！ よかったあ！」

キヤナ。

俺の顔の真上に、にこっと嬉しそうに微笑む彼女の姿があった。だぶだぶのＴシャツとパンツという、それはそれはとても色っぽい姿で

「……って、キヤナ、お前！？　なななな、なんつーカッコで外、出歩いてんだ！？　それに、何でここが……？」

きよんとした力才をしているキヤナ。

「あたし、歩いてないよあ？　飛んできたんだもん。……ほら！」

見覚えのあるテーブルがふわふわと低空で宙に浮いている。
キヤナはそれにべったりと女の子座りをしていやがった。

「魔法を使う者が放つ気配っていうか魔力の波長？　寝てたら急に感じちゃったのよねえ。なんかいいモノないかなあと思ったら、コレがあつたから魔法かけて乗ってきちゃったの。きやはは」

おい。

呑気に「きやはは」じゃねエよ。

そのテーブル……うちのじゃね？

ってか、彼女がそういう小細工魔法を使えることも知っていたから大して驚きはしなかったが、いくら魔女とはいえ外出していい服装とそうでない服装ってモンはあるだろう。

「なるほど、歩いてきたんじゃないのはよつくわかった。それにしてもそのカッコ……痛っ！」

「あーん！　こーちゃん、だいじょうぶう？　……ほら、あたしにつかまって！」

つかまるも何も、ほとんど抱き抱えられるようにしてテーブルの上に乗つけられた俺。

途端にテーブルはゆつたりと高度を上げ、落ちたらタダでは済ま

ない位置まで上昇した。

そこから何気なく下を見やった俺は、衝撃の光景に背筋が凍りつくのを禁じ得なかった。

例の男がコンクリート製の橋脚に 磔にされていたからだ。

胸の中心を光が鋭く固体化したようなもので刺し貫かれ、その光が勢いで男の身体ごと持っていつて橋脚に突き刺さったらしい。俺が微かに耳にした「ザン！」という鈍い音は…… キヤナの放った光が、男の身体を貫く音だったのだ。

男は口から血を吐きながら、ぴくぴくと身体を痙攣させている。何度も片手を差し上げようとするのだが、力が入らないらしい。そりゃあ、そうだ。

胴体串刺しにされてりゃ、な。

「キヤ、キヤナ！ あ、あいつ、なんで、あんな風に……？」

俺の質問に、彼女は

「え？ だってあいつ、あたしを殺しにきたんだもの。つーか、血迷ってこーちゃんのコトも殺そうとしたのよ？ だからあ、さつさと殺さなくちゃ」

……事も無げに言っただけだ。

やっぱりこいつ、本性は冷酷非道な魔女以外の何者でもない。

しかもキヤナは、人差し指をあごにあてて可愛い仕草でちょっと考えている風だったが

「……やっぱ、聞き出しておいた方がいつか」

パチン、と指を鳴らした。

その直後。

「　　っぎゃあああああああぁぁぁっ！！」

男が絶叫した。

いつの間にか、左の肩から先、左腕が丸ごと松明と化したように轟々と燃え盛っている！

もはや呆然とするよりない俺。

その俺をそっと優しく抱き締めながらも、一方でキヤナは悪魔のようにつづ。

「さあて、これ以上苦しみたくなかったら、正直におっしゃい。アンタをこの世界へ送り込んだのは、メイアのヤツかしら？ それとも、ほかの魔界府の連中かしら？」

普通だったらこんな拷問に耐えられるような人間なんて、いるワケがない。

だが、眼下の男は魔界人だからだというのが、苦しみながらもゆっくり顔を上げると、引きつったその表情に微かに笑みを浮かべ

「わ、私を殺したところで……次の刺客が……お前を　　っがあああああああああぁぁぁっ！！」

今度は右脚が燃え出した。

「……質問に答えないからよ。言っとくけど、アンタを助けるつもりはこれっぽっちもないわ。素直に吐けば、せいぜい楽に殺してあげるって。無駄な我慢はしない方がいいわ。そもそもアンタ」

キヤナの眼差しがぐっと鋭くなる。

「あたしの大事なオトコ、殺そうとしてくれたものね？」

パチン。

冷たく鳴り響く指先。

「うつぐおおおおおおおつ！ いぎゃああああああ」

いつ、それが飛ばされたのかはわからない。

男の下腹部や太もみにぐさぐさと、例の光の刃が……。

片手片足を根こそぎ燃やされ、あちこちを串刺しにされながらも男の息が絶える様子はない。

魔界って なんなんだ！？
違う。

魔女って、なんなんだ！？

訳がわからなかった。

俺に対して母親のような姉のような恋人のような愛情を振りまくそのすぐ裏側で、敵対する者を容赦なく地獄の苦痛に叩き込み、しかし顔色一つ変えない。

ようやく、キヤナが繰り返し問うてきた言葉の意味を知った。

あなたは、そんなあたしに大事な自分の魂を分け与えたのよ？

イミ、わかってる？

わかってなかったかも……知れない。

いや、わかってなかったよな、俺。

あとから思えば、俺の態度は簡単すぎた。アバウトっていうのも、時には罪になる。

だけど。

まかり間違えば、俺達の知らない魔界のどこかで、彼女はいつ何時ああいう目に遭わされていたかも知れないのだ。百年以上ってい

う、気の遠くなるような歲月、キヤナはそついう危険から身を守りながら必死に生き抜いてきた。

やるか、やられるか。

弱肉強食。

だけじゃない。

キヤナの両親、あるいはほかにも大事な人達が、魔界衆とやらに捕まってああいう残酷な殺され方をした。復讐は悪だって主張するヤツは世界中にたくさんいるけど、実際に自分の大切な人を殺したヤツが目の前にいたら、平静でいられるだろうか？

俺だって、おじさんとお婆さんの娘　佐奈さんっていったを轢き殺したヤツが目の前にいたら、死ぬまでぶん殴ってやりたい。人間の世界には法つてもものが存在しているから、俺やおじさんが裁くんじゃなくて法が犯人を裁く。

でも、魔界にそんな法も秩序も存在しない。

キヤナは自分の手で自分を守り、自分の手で仇を討つよりなかった。

だから、今の俺には、彼女を制止する権利は　ない。多分。ないんだけど

でも、仮に、彼女がその復讐に燃えろどす黒い心を、何回かのうちの一回だけでも、あるいはほんの一時だけでも、静めることができるならば　その瞬間、キヤナは俺に見せるようなあどけなくて可愛らしい彼女でいることができる。

キヤナは言つた。

あなたはあたし、あたしはあなた　。

俺達は魂を分け合つた。

だったら、俺はもう一人の彼女になって、優しい彼女でいられるためにできることをすればいい。

復讐に心を燃やしても、その行き着く先は虚しくて悲しいだけ。キヤナがそんな悲しい気持ちで心を満たしてしまわないように。

「……キヤナ、あのさ」

「ん？ なぁに、こーちゃん？ もーちょおっと、待ってね？ あいつに誰が黒幕か、吐かせ んんっ！」

俺は身体を起こし、キヤナの唇に自分のそれをすつと押し当ててやった。

びっくりして目を丸くしたキヤナ。

が、すぐに彼女は、俺の背に回している腕にきゅっと力をこめ始めた。

空中に浮いたテーブルの上で熱いキスを交わしているという、何とも奇っ怪な光景。

山田達が気絶していたのは幸いだったかもしれない。こんなシーンを目撃されたら、ヤツらはどんな顔をするだろう？ いや どういう力才をしていいかわからないのは俺の方だ。

やがて、俺達はどちらからともなく唇を離れた。

顔と顔が触れ合う近さのまま、キヤナは子供のような微笑みを見せ

「……どおしたのお、急に？ いきなりこーちゃんが積極的になるからあたし、びっくりしちやっただよお！」

「あのさキヤナ、聞いてくれるか？」

「なぁに？」

「……あの野郎を楽にしてやってくれ」

俺の頼みに、小首を傾げたキヤナ。

口元にどこか挑戦的な笑みを浮かべつつ、彼女は問い返してきた。

「イヤだつて言ったら？」

まるで俺を試しているかのようだ。

俺は重ねて、短く言った。

「頼む」

キャナの顔には明らかに不服そうな色が浮かんでいる。

「……あいつ、魔法も使えないこーちゃんを魔法で殺そうとしたのよ？ だから、お仕置が必要じゃない。どのみち死んでもらうんだけどさ」

「だから、さ。無駄な苦しみを与えないでやれないか？ 相手を無駄に傷つけようとする、その分だけ自分の心も無駄に暗くなると思うんだ、俺は」

上手い言い方が見つからないけど、きつとそういうコトじゃないだろうか。

敗者に対する勝者の礼儀、みたいなヤツ。

そういう気持ちがあればこそ、どんな血みどろの戦いにもほんのささやかだけど「救い」が残る。

逆に、ぎったぎたのねちねちに虐めたりしたら、どんな救いもない。泥沼に沈んでいくような、イヤな気持ちだけが後に残るだろう。最後にぼつんと針の先みたいな程度でもいいから、キャナの心の中にその「救い」が残って欲しかった。

救いを失わないヤツは、本当の意味で強者だと思う。

だけど、それは俺の中で渦巻いている漠然とした思いだし、その通りキャナに伝えられるだけ俺は人間として成長できていない。

だから、俺が口に出して彼女に伝えたら、こんな風になった。

「俺、まだまだガキだしエラそうなコトはいえねエケド、ちょこつとでもキャナを受け止めてやれるように、なんとかすっからさ。だから、その……あんまり、殺すとか復讐とか、暗いコト考えないで済むんだったら、その方がいっかな、って」

それで良かったのかも知れない。

シンプルじゃないと、思いつて伝わりにくいから。

キヤナは少しの間、じつと俺の顔を見つめていたが

「……よくわかんないケド、わかったよん。こーちゃん優しいから、要は殺すとか殺されるとかいうのがイヤなんでしょ？ 人間の世界にそういう命のやり取りってないものね」

にこつと笑ってくれた。

弟を可愛がる姉のような表情。

確かに、残忍な魔女の一面をもっているけれども 本当のキヤナって、聡明で優しくてのほほんとした人柄（魔女柄？）なんじゃないかっていう気がする。

あまりにも過酷な魔界の生存闘争が、そういう彼女でいることを許さなかっただけ。

そうでなかったら今、こんなに素敵なおねーさまでいられるハズがない。

「でも、これだけは覚えておいて頂戴」

途端にキヤナの眼差しが深くなった。

「何度も言うケド、こーちゃんに手エ出すような奴らはあたし、こーちゃんが何と言おうと許さないからね？ 百万回焼き尽くして百万本の光刃を突き刺してやるんだから。それは止めても無駄よ？」
「ああ、わかってる。俺に止める権利はねエ」

キヤナは頷くと、橋脚に磔にされたままの男へ視線をやった。
その刹那。

ドンッ

鈍く重い唸りと共に、真っ白い閃光が辺りに満ちた。
瞬きをする間にそれは収まったが、男の姿も同時に掻き消えている。

「……一瞬で塵にしてやった。あいつ、自分が死んだことにまだ気付いてないかもね」

それでいい。

本当の勝者っていうのは、勝ちを引き摺らないヤツのことだから。

そのあと、俺は地面に下ろしてもらい、ぶっ倒れている山田やピースの連中の傍に駆け寄った。

幸い、みんなかすり傷一つなく無事だった。

魔界衆の男がこっちに転移してきた現出位置が乱闘現場に重なってしまい、放散する魔力というかエネルギーにぶち当たって吹っ飛ばされたものらしい。これはあとでキヤナが解説してくれたハナシ。一人一人揺さぶって起こしてやったのだが、ピースのヤツらは俺と山田にやられたものと勘違いしたらしく、一目散に逃げ去ってしまった。

山田はキヤメロンの散歩を続行。

俺はヤツに礼を言い、キヤナが乗ってきたテーブルに便乗してボロアパートに帰ることにした。

気が張っている時は特に感じなかったが、緊張から解放されて初めて気が付いたことがある。

……テーブルなんて、飛行する乗り物にすべきではない！

落っこちられば死ぬというレベルの高度を飛んでいるのがそもそも

おかしいんだけども。

キヤナに後ろから抱きついた状態で完全に凍り付いていると、

「ねえねえ、こーちゃん。あたし、お腹すいたよお」

「あ？ アンパンおいといてやったるーが。食ってないのか？」

「追っ手が現れたのに気付いたから急いで飛んできたしい……。それにあたし、あの赤くてとろんとしてあまーいのが入ったヤツが好きー！ 黒いの好きじゃないもん」

アンパンが得意じゃなくて、ジャムパンが好きだということらしい。

パンはともかく、帰ったらちゃんとメシの支度をするから……と
言い掛けて、俺はハツとなった。

「……あゝ！」

「あえ？ どおしたの？ こーちゃん」

「買い物行くの、忘れてた……」

絶好のお買い得チャンスを逸した俺達はその日、仲良くふり
かけ&ご飯をいただいた。

その9 格の違い1

キヤナを狙った刺客が襲来したのは、それっきりだった。

「たぶん、転移魔術を上手く操れていないのよ。犠魂陣で生成した魔力が不安定すぎて一定の状態に保ち続けることができないのね。続きがやってこないのはそのせいだと思う。この間のヤツはまぐれだったんじゃないかしら。……っていつても、精神と魂と魔力を完全にとって行かれちゃってて、人格自体がほとんどダメになっちゃったケド。強引に時空転移に放り込んだりするからよ」

あるとき、俺の焼いたホットケーキをもしやもしや食べながら、彼女はそんなことを教えてくれた。

魔法って不思議なチカラは、人間なら誰もが一度は憧れる。だけど、実際にはそれほど便利なものじゃないようだ。

例えるなら 錬金術。

魔法の効果と術者の魔力は等価交換。

魔力以上の魔法を行使することはできない。無理をすれば術者の魂を持って行かれてそれまで。

ま、ケンカも似たようなものだろうけど。

やりあっている時はそいつの持っている實力しか発揮できないから。強引なケンカに持ち込もうものなら、却ってこっちが自滅する。昔のどこぞの強い剣客集団（誠って旗を持った方々）も、必ず相手と渡り合える体勢を整えてからケンカを売ったという。歴史の流れは彼等に味方しなかったが、それはとても合理的な考えだと俺は思っている。

ともかく、しばらくの間は何事もなく平穏に過ごすことができた。その間、部屋でじっとしていられなくなったキヤナが学校に押し付けてきたりして、エクスカリバーやエロスケベに彼女の存在を知

られてしまったワケなのだが。

ま、ヤツらは俺の友達だし、そもそも彼女は人間自体を敵だとは思っていなかったから、顔面蒼白になるようなトラブルも起こらずに済んだ。キヤナ的には、エクスカリバーみたいな秀才はさほど問題ないが、全身から性欲を垂れ流して歩いているエロスケベはどうも好けないらしい。ヤツは時々ちよっかいを出そうとして生命に関わらない程度の（キヤナにしては出来すぎな手加減だ）魔法をくらののだが

「ああ、いい……！ おねーさま……」

と、自重するどころかエクスタシーを感じてしまうからタチが悪い。

エロスケベいわく、女の性的な魅力は「美尻もしくは美脚」らしい。胸のでかさは関係ないと主張しておるのだが……だから何なのだ。

悪いことに、寝起きの姿そのままやってくるキヤナはいつも美尻と美脚全開。

まるでエロスケベの下半身を「ほーれ」って刺激するために見せつけているようなものだ。

とまあ、キヤナには承認を与えてある。

触ってきたら、ためらわずにぶっ飛ばしてよし、と。

大分遠回りしてしまったが、そんなこんなで俺はキヤナと暮らしている。

人間世界の生活に慣れてきた彼女は退屈すると、手当たり次第そこらへんに転がっている物に魔法をかけて奇妙な乗り物に変え、留守番そっちのけで俺を追ってくるようになった。

ただ、乗り心地が悪いからといって、ホウキに乗るつもりはない

らしい。普段のカッコがカッコだから、ホウキにまたがったって魔女には見えないだろうけど。

別にやめさせる必要はないが、古タイヤに座って空を飛んでいる自分の姿を想像してみたいものだ。

「近所さんにもしばしば目撃されているようで、例の耳打ちカネ婆にも

「今朝ねえ、風間君とこに住んでいるおねーちゃん、空高く飛んでいったよ。すごい特技だねえ。魔法使いみたいだねえ」

なんてワケのわからない感心の仕方をされたりした。

いやいや、魔法使いそのものですから。

……ってか、空飛んでる時点でツツこめよ。

で、俺が他校生と乱闘をかましていると、いつの間にやら背後にキヤナが姿を現していて

「きゃはは！ みんな吹っ飛んじゃえ！」

とか高笑いしながら、頼みもしないのに魔法で一撃粉碎してくれる。

おかげ様で、他校では噂になりつつあるらしい。

風間に取り憑いているパンツ女の幽霊に気を付けろ、と。

幽霊ではないが、確かにパンツ女……ああいやいや、この噂は俺にとつて甚だ不名誉である！

俺に恨みを持っている連中なんかは

「あいつは借金を苦に自殺したデリヘル嬢の霊に片思いされている」
「浮気相手に殺害されて浮かばれない人妻が、自分を殺した浮気相手と風間を勘違いしている」

などなど、あちこちで根も葉もない誹謗中傷を撒き散らしてやるのだ。

そういうヤツらは発見次第、ボコらない程度にシメることになっている。

ただ。

正直な話、キャナには女性らしい衣服を与えていないんだよな。

それが原因の一端であるといえなくもない。その点、やや俺のせい。

彼女が普段着ているものの上半分は俺のだし、下半分（って、要は下着だが）はおじさんとおばさんの家からこっそり持ってきた。念のためにいつとくが、おばさんのじゃない。

死んだ佐奈姉ちゃんが身につけていたヤツだ。遺品を持ち出すことにためらいは小さくなかったが、かといって今生きているキャナを大事にしなければならぬ。パンツくらいいいだろう、というのが俺のせめてもの妥協点である。おいといたって、誰かが穿くワケじゃないんだし。

どんな服を着せてやったらいいのかもわからないし、ついでに買ってやる金もない。

ぼちぼちそんな悩みがきつった俺。

（あー……どうすっかなア……。これから暑くなるし、服なんか要らねっていえば要らないけど）

……ああつと、そういう問題じゃない。

同居の女性にマップで暮らせと命じる（キャナはやりかねないが）のは正真正銘の変態だろう。

俺はグランドの隅っこにある草むらの上に腰を下ろし、独りアヤしげな思案にくれていた。

時間は三時間目、体育の授業。

数人づつタイムを計測しての短距離走だから、一回走ってしまえ

ばしばらく出番がない。

担当教師は例の男子便所。

遠くでカキコキとロボットのようによね働しているヤツの姿をばーつと眺めていると

「……よオ、コウ。なあにを、そつたら真剣に見つめてやがるんだ？ ん？」

走り終えたエロススケベが擦り寄ってきた。
相変わらずにやけた顔がいやらしい。

「なんも見つめてねエよ。考えごとしてたんだっての」

「はア？ またまた、コウつてばムツツリだなア。どーせ、あのコの揺れるボインに釘付けだったんだろーが。俺の目はごまかせんぞ！」

「……あのコ？」

訊き返すと、エロススケベは黙ってあごをしゃくつた。

そちらの方角では、女子の体育の授業が行われている。

純白のＴシャツと赤い短パンで動き回る若い乙女達。

確かに、爽やかな色気があるっちゃある。

とはいっても、日々キャナの色香に接しているうちに免疫が構成されてしまったらしく、あれらをオカズに自分を慰める意欲は湧かない。……それも変態か。

と、一人だけ色の違う短パンを穿いているコがいる。

すらりとした後ろ姿が妙にキレイで、プロポーションの良さは他の女子に比べれば明らかに群を抜いている。

しかも、ちらつとこちらを向いた瞬間に垣間見えた容貌は超可愛い。小顔にぱっちりとした瞳、そして鼻と口が絶妙のバランスで配置されているではないか。ツンツンした感じは微塵もなく、みんな

のアイドル的スマイルが破壊力抜群。とどめに、エロスケベが言う通り、Ｔシャツの胸のあたりがおかしな具合に盛り上がっている。即ち、巨乳。いや「爆」でも十分通用する。滅多にお目にかかれない特盛りだ。

そこで俺は気が付いた。

「……お前の言うイミがやっとわかった。ってか、あんなコいたっけ？」

すると、エロスケベはムフフ、と気持ち悪い笑いを漏らし

「そーいやコウ、遅刻してきたから聞いてないんだっけな。今日、六組に転入してきたんだとさ。天海明（アマカイメイ）ちゃんっていうそうだ。……いやあ、あのケツと美脚、校内トップレベルだな。神は我が校に天使を遣わしたに違いない！」

「ふーん」

天使ね。

天使の転入、ついでに巨乳。

天乳？ 転乳？ 字的にもイミ的にも、どちらも適っているような。

……いや、妄想の度が過ぎた。

見てくれもさることながらその挙措振る舞い、確かに天使的な観はあるな。やってきて間もないというのに、すでに大勢の女子に取り巻かれて楽しそう。

ってか、俺の背後に佇んでいるエロチック艦隊主砲の照準にさらされないように願いたいものだが。

エロスケベは別名『エンジェルイーター』だものな。

校内の綺麗どころに手をつけすぎた結果、一部の野郎どもが反感を込めてつけたあだ名である。

が、いかんせんイケメンかつ運動神経抜群だから、そういう不届きな行為を繰り返すにもかかわらず、俄然女子達からの人気は衰えない。その点、知性派好みのキヤナはやはりオトナなのだろうか。ニヤニヤづらで腕組みをしてメイちゃんを見つめていたエロスケベ、ふと思いついたように

「お前んトコのキヤナおねーさまはオトナのエロい魅力に満ち溢れている。しかしメイちゃんは純粹で爽やかな、それでいて肉体的にも申し分ないエロさをたたえている。……うーむ！ どちらも捨てがたい！ 神はこの学校に天使を与え、俺には試練を与えたというワケか！」

身体をよじって悶絶しはじめた。

……死ぬまでほざいてやがれ。

相手にするのが馬鹿馬鹿しくなった俺は、エロスケベをシカトしてグラランドの方へ目を向けた。

そろそろ、二本目の計測をする順番が回ってきそうだ。

しかし、高校生に百メートルのタイムなんか計らせて、文部科学省はどうするつもりなんだろう。

まあそれはどうでもいい。俺の知ったコトではない。

俺は立ち上がり、スタート地点に向けて歩き出した。その時である。

「すいませーん！」

女の子の声がした。

「……あ？」

見れば、俺の方へコロコロとボールが転がってきている。

女子はソフトボールをやっている、ボールを逸らしてしまったようだ。

拾って投げ返してやろうとすると、相手のコはご丁寧に俺の傍まで駆け足で取りにやってきた。

よりによって、そのコはメイちゃんだった。

「ごめんなさい！ 受け損なっちゃって……」

例のエンジェルスマイル炸裂。

近くで見ると、その可愛らしさがよくわかる。

こういつちやなんだが、完璧というのはこういう顔立ちをいうのかも知れない。雑誌のモデルとか芸能人はオリジナルをイメージできないまでにメイクで塗りたくるが、彼女はほとんどノーメイク。それでこの美貌なんだから、恐るべしである。

これなら校内はおろか、近隣校の男子どもを瞬く間に虜にしてみようだろう。

が、初対面の美少女に接近されたくらいで舞い上がってしまうような俺ではない。

「はい、コレ」

ボールを差し出してやると、彼女はタマゴでももらつようにして両手で受け取り

「ありがとうございます！ すみません！」

にこつ。

視線と視線がぶつかった。

その瞬間、彼女はちよつと不思議そうな、軽い驚きの混じった表情を見せた。

が、コンマ数秒後には笑顔に戻ると、一礼して駆け戻っていった。

「……………」

その場につく立って、遠ざかっていく背中を眺めている俺。

なんだアレは？

俺をどこかの知り合いかと思ったのだろうか。

何となくあの表情にはそんな含みがあるような気がした。

といって、俺は彼女のコトなどまったく知らんのだが……。

「コウ！ お前エ、ちゃっかりメイちゃんとお話しやがってエ！

キョーミなさげな顔してたクセに、やっぱお前はムツツリだよなア

！ このオ！」

「ぬおっ！？」

いきなりエロスケベが首に腕を回してきやがった。

考え事モードに入っていた俺、不覚。

「メイちゃんにボール手渡ししたんだろ？ ん？ こっそり手エ握
ったりしたんじゃないだろーな？ 握るのは自分のナニだけにしと
けよ！ おっ立ててたら嫌われるぞー」

「やかましい。貴様の股間と一緒にするな。ってか離せ！ アホと
下品がうつつちまう！」

「……………おい、風間に江口！ お前らの番だぞー。そんなところで
いちやいちゃとたわむれてないで、さっさと位置につけー！ 乳繰
り合うのはアトにしるよー！ はっはっは」

男子便所に呼ばれてしまった。

ってか、要らんコト言わんでいい！

他の連中にげらげら笑われてしまったではないか。

誰がこんな汗臭いゲロ野郎と乳繰り合うかよ。

その放課後のこと。

俺は大人しく便所掃除の刑に服していた。

校舎は四階建てだから、少なくとも便所は四箇所ある。

さすがに女子便所の掃除は免除されているものの、それにしてもメンドクさいったらありやしない。

（あー、キヤナのヤツ、待ってるだろうな……。遅くなって帰ったら、またむくれちまう）

胸中でぶつくさいいながら、モップで床をこすっている俺。

キヤナのせいで遅刻して便所掃除の刑罰を受けているというのに、帰ったら帰ったでそのキヤナに苦情を言われなきゃならんというのはどうも腑に落ちない。といって、不服を述べたところで聞き入れてくれるような相手でもないのだが……。

一平北高の場合、四階が一年生フロア、二階が三年生フロアという順番になっている。

俺は四階の便所から掃除に取りかかっていた。

一年生はまだ学校に慣れきっていない時期だから、部活をやっていない連中の多くはさっさと下校していつてしまふ。そんなワケで、四階にはほとんど人の気配がなかった。

床をモップがけして便器をタワシでこすり、まず一箇所目終了。それなりにピカピカ。

次は三階の便所が待っている。

このままとんずらしようと思えばそれも可能だが、罰は罰だ。

知らんぷりして脱走を試みるというのは俺のポリシーに反する。ってか、別に掃除嫌いじゃないし。自慢じゃないが、若い男の一人暮らしにしては俺の部屋は美しい方だと思っている。

用具箱に掃除道具を納めて、四階便所から出た。
そして廊下の角を曲がろうとした時だった。

「風間クン……」

不意に俺を呼び止める声がした。
ハツとして振り返れば、そこには なんと、あのメイちゃん
いた。

制服に身を包んだ清楚な姿で壁にそつともたれている。
体育の時の明るさとはうって変わり、やや物憂げな表情。

おおつと？

美少女が一人きりで俺のところへ？

ということは ！

……などという学園ラブストーリー的なトキメキは、残念ながら
一切ない。

なぜなら、彼女が寄りかかっているその壁、袋小路の行き止まり
だからだ。

この学校のトイレは廊下の一番端つこに位置している。そんなワ
ケで、反対側の教室の連中からはえらく不評だった。トイレに隠れ
て悪いことをするヤツを発見したら逃がさないよう、という意味が
あるとかないとか。これは生徒達の噂に過ぎないけど。

床磨きに熱中していたとはいえ、トイレの前を人の通る気配がす
ればイヤでもわかる。

つまり メイちゃんは「降って湧いた」ように、現れたという
ことになる。

ゆえに俺は彼女の登場に驚いたワケだ。

「いきなりごめんね。クラスのコから、名前を聞いたの。風間クン
っていう名前だって教えてもらっちゃった。 私の名前、まだ言
ってなかったよね？」

「……天海明ちゃんだろ？ 学校中で噂になっっているよ。とんでもなく可愛いコが転入してきたって」

逆に答えてやると、メイちゃんはちょっと笑って

「そ。私、あまかいめい、っていうの。あまかい、めい、よ。……何か、気付かない？」

「……？」

何を言ってるんだ？

気付くって、何を？

言っている意味がわからないまま、俺は彼女の整った小顔をじっと見つめている。

メイちゃんの様子はどこかおかしい。

みんなの前で見せていたあの快活さはすっかり鳴りを潜めてしまっていて、うつかりすると電車に飛び込んで自殺する寸前の青春思い詰め少女的な暗いオーラを放っている。

なぜそんなに影を落とす必要やある？

もしか、どこかで会っていて俺が何か失礼をかましていたとか？

あるいはぶっ飛ばした他校生の誰かの力ノジヨ？

後者はないな。可能性があるとしたら前者だ。

とはいっても……あまかいめい、か。

思い出せねえ。

あまかいめい、あまかいめい、あまかいめいあまかいめい……あまかい、めい……。

あまかいめい。

……ん？

この響き。

なんか、おかしかねえ？

苗字とはいえ、訓読みと音読みが混ざり合ってるって、ありえな

いぞフツ！。

あま、かい、めい。

彼女の名前をバラしてゆっくりと反芻しているうち、俺はイヤな予感がした。

あま、かい、めい。

あ、ま、か、い、めい。

これって……もしかして……？

「……お前、ひよつとして」

そこまで言いかけた途端、急に視界全体がぐわつと揺れた。ほんの一瞬のことだ。

目の前にシャッターが降りるようにして真っ暗になり 俺は意識を失っていた。

意識が完全に飛ぶ寸前のコンマ何秒、俺はメイちゃんの口元に不気味な笑みが浮かんでいるのを見たような気がした。

その10 格の違い2

「ん！ こーちゃん！ しっかりしてよオ！ こーちゃんってば！」

「……？」

必死に俺の名を呼ぶ誰かの声で、徐々に意識を引き戻された。

「こーちゃん！ 眠っちゃダメよ！ 気をしっかりもつのよ！ 魂を持っていかれちゃうわよ！ こーちゃん！ 今、助けてあげるからね！」

「……あ？ あれ……？」

こーちゃんって……。

その呼び方をするのは キヤナか？
キヤナ？

彼女の名がテロップのように脳みそに流れた途端、朦朧とした意識が少しずつ鮮明になっていく。

「う……」

俺はうつすらと目を開けた。

自分の脚が見える。

ぼんやりとしたアタマと視界のまま、ゆっくりと目線を動かしていくと、遠くで懸命に叫んでいるあられもない格好をした女性の姿が見えた。

彼女の背後には、ややオレンジ色を帯びかけた青い空が。

ここは……どこだっけ？

空が見えるというコトは、外なのか？

俺、なんで外にいるんだろ……？

ってか、身体がやったらと重たいな。

なんとなく、めんどくさい。

どうせなら、このまま眠ってしまっても

「こーちゃん！！　ダメだったら！！」

「……！」

あたりの空気を切り裂くような、ひときわ大きな叫び声が耳に入った瞬間、俺は一気に現実へと引き戻されていた。

「……！？　キャナか！？」

はつきりと目が覚めた。

何十メートルか先にいる乱れた下着姿の女性、あれは紛れもなくキャナだ。

なんでこんなところにいるんだ？

もしかして、俺の帰りが遅いからっていつてまた何かに乗って追っかけてきたのだろうか。

あんな姿を他の生徒とか教師に見られたらどうするつもりだ。つたく、しょーもないヤツだな。

「キャナ！　また、そんなカツコで　」

立ち上がろうとして、俺は気がついた。

両脚が、動かない。

いや、脚だけじゃなかった。

両腕も動かない。

どういうワケか、俺は両腕を背中に回していた。

「……！」

自分の身体をよく眺めてみて、その理由がはっきりした。

白く鈍く光る、細いロープのようなものが身体に巻きついていて、それが俺の両腕両脚を固く締め上げているのだ。テレビドラマとかに出てくる誘拐された子供のように、縛り上げられていた。

試しに両腕に力を込めてみたが、鋼線か何かのようにカタくてびくともしない。

無理をすれば、こっちの皮膚が破れるだろう。

しかし、これは一体どういう状況だ？

何で俺はがんじがらめに縛られているんだ……と考えてみて、ハッと思い出した。

四階便所の掃除を終えて三階へ降りようとしたところで、天海明ちゃんに呼び止められて一言一言交わしたあと不意に意識を失ったのだ。

天海明。

一見超可愛くてボインの転入生だが、俺は意識が遠のいていく瞬間に気付いていた。

魔界からの追っ手。

それも、この前川べりで遭遇したあの狂った男なんかとは比較にならない強敵。魔女だ。

なぜかって？

キーは「あまかいめい」という名前にある。

あまかいめい。

これを言葉遊びのように何度も繰り返してみると

「……お久しぶりね、キャナ。魔界府に乗り込んだとき以来かしら？」

頭上で声がした。

屋上の一部にぼこつと突き出た形で設けられた機械室の上にいるらしい。

俺はその壁に背中を預けるようにして転がされている。遠くにいるキャナの表情が俄かに険しくなった。

「まさか、あんたが直々にお出ましとはね、メイア。暴虐の限りを尽くしすぎて、魔界府から叩きだされちゃったのかしら？」

そう。

あまかいめい「メイア。

何のことはない「魔界」と「メイア」をくつつけてもじつただけのことだ。

それにしても、サプライズすぎる。

ゲームでいうなら、序盤から（俺にとっては、だが）ラスボスが出てきたようなものだし、そのラスボスがあんなにキレイでナイスバディな女の子だとは！

キャナが全てを語ってくれた時、確かにメイアのことを「あのコ」「女の子」と呼んでいた。

魔界基準の年齢でいえば、キャナよりも年下だというのだろうか。まあ、見た目的にはキャナの方がおねーさまだし、メイアは女の子でしかない。

しかし、そのメイアはキャナをハメて死ぬ寸前まで追い詰めた上、魔界を支配している魔界府八術師とやらをことごとく葬り去った最凶最悪の魔女だという。その行いはすでに伝説の「魔神」に代わるところがないとまで、キャナは言い切った。

そんなヤツがなぜ自ら人間世界へやってきて、イーペーに潜入してきたのか。

答えは彼女とキャナの応酬の中にあった。

「魔界府なんて、大したことはなかったの。小賢しい術者達の寄せ

集めに過ぎなかった。あんな存在に何百年も怯えて暮らしていたなんて、魔族も結局は臆病者の集まりだったのね」

小ばかにしたように言いつつ、メイアはふわりと宙を飛んで俺達のいるフィールドまで降りてきた。

俺の前方で、ちょうど対峙する形になった二人の魔女。

下着姿のおねーさまVS制服をまとった美少女。

まるで横スクロールの格ゲーを見ているようだ。

「それってというのは、要するにアンタが犠魂陣なんていうシロモノを手に入れたからでしょ？ 魔界誕生以来何千年にもわたって誰も手を出すことのなかった禁忌の魔法なのに、アンタはあっさりと手を出した。自分が何をやってるか、わかってるの？ 魔神と一緒よ、魔神」

「あら？ 魔界人に迫害され続けてきた同志に向かってヒドいコトを言うのね？ キヤナ、あなただって数千人もの魔界人を殺害して『悪魔』とまで呼ばれていたんじゃないかな？ 魔界からノコノコ逃げ出したと思ったら、今度は人間世界を支配するつもり？ あの男は最初の下僕ってトコ？」

「……アンタには、関係のないことよ。アンタの狙いはあたしでしょ。黙ってこーちゃんの拘束を解きなさい。さもなきゃ、タダでは殺さないわよ？」

キヤナの静かな怒りが、俺にも伝わってきた。

彼女は、自分を誘き寄せるために俺を囫にしたメイアのやり口が許せないらしい。

が、メイアは「あははははっ」と可愛い笑い声をたて

「あれ？ 怒っちゃった？ だって、彼からあなたの気配がぶんぶんなんだもの。自分に時空転移なんかかけたからさっさと死ん

じやったと思つてたのに、キャナったら人間の男を捕まえて魂を奪つていたんだものね。よりによつて、自分よりも若い男を狙うなんて。……独りぼっちが長すぎたから、男が欲しくてガマンできなくなつちやつた？ あはは、キャナってば、びっくりするほど淫乱女なのねえ」

ドンッ！

メイアが言い終わるのを待たず、キャナの周囲で白い光が発生し、大きな半球の形態に変化して彼女を包み込むようにした。怒れるキャナの波長が反映しているのか、ドーム表面のあちこちらから有り余つた魔力が光になってバチバチと弾けている。

「黙りなさい、小娘。……あたしは実際、死ぬつもりでこつちの世界へやつてきた。それは嘘偽りないホンネの話よ。でも、こーちゃんはそのあたしに自分から魂を分け与えてくれたのよ。魔界の連中が見下すほど、人間はヤワな生き物じゃない。あんたみたいに生贄にした魔界人の魂を食らつて平然としている化け物なんかにはわからないでしょうね。こつちへ来たのだからどうせ、魔界衆を犠魂陣に放り込んで得た魔力を使つてるんでしょ？ 魔女の風上におけない情けないヤツね」

バンッ！

今度は、メイアの周囲に光のドームがうまれた。

が、キャナのそれとは違って、毒々しいまでの真紅。

それはあたかも 犠牲にされた魔界人達の血の色であるように、俺には思われた。

二人が放っている魔力のテリトリーは、途方もなくでかい。

ほとんど接触するばかりになつていて、時々触れ合った光同士が「バチッ」と弾け飛んでいる。

人智を超越した魔女同士の、ガチなボコリ合いが始まろうとして

いるのだ。

こうなった以上、俺にはどうすることもできない。
ただ大人しく……キャナの勝利を祈るだけ。

「……力無き者は力ある者の前に伏す。それが魔界の掟でしょ、キャナ」

つと、メイアの表情から余裕が消えた。

「そもそも、この私が直々に人間世界に乗り込んでくるなんて、あり得ないってハナシ？ ……だけど魔界人の連中も魔族も、ホント使えなかった。せつかく百人もの生贄潰して魔力を整えてあげたっていうのに、その魔力を支えきれないで潰れちゃうんだもの。それで私、気付いちやったの。ああ、せつかく生成した魔力をこの人達に使わせるのは無駄すぎるんだって。どうせなら、この私がその魔力をいただいた方がよほどマシ。ほーんと、だらしない人達よねえ、魔界の人々って」

「アンタ……自分が時空転移するために、同族の命をも犠牲にしたって言うの！？」

「うん、魔族は百人くらい」

その瞬間、俺は目が潰れたかと思った。

キャナが怒りの余りメイアに向けて放った魔力が、メイアの魔力に弾かれて広範囲に拡散したのだ。

いつだったか、キャナは俺に教えてくれた。

ほんつとーに強い魔力を持った者同士？ ま、例えばあたしとメイアが戦うとするでしょ？ そおしたらあ、簡単にはケリなんかつかないのね。魔法で相手を倒すっていうコトは、自分の魔力を相手に影響させるってコトなのね。だから、相手の魔力が強かった

ら、そう簡単に影響させることなんかできないってワケ。魔力の強さがそのまま防壁になるのよ。

まさしく、そのまんま。

四散した魔力のエネルギーは、目に見えない衝撃波となって大気を揺るがし、障害物を吹き飛ばす。

イーペーの屋上はたった今、キャナの魔力によって暴風が吹き荒れているようなものだ。

「くくつ……！」

そのプレッシャーを真つ向から食らっている俺。

全身を壁に押し付けられ、臓物が一気に噴き出してしまいそうな苦しさを感じた。

長い間そんな状態が続いたように感じられたが、実際にはほんの数秒間のことに過ぎない。

キャナの怒りを遮断しきったメイアは、事も無げに

「何をそんなに怒ることがあるの？ 魔族の人達なんて、結局は私のこともあなたのことも、守ってはくれなかったのよ？ 禁忌がどうした、古代魔術はいけなくて、戒律にとらわれてばかりで、自分達の身すら守らなかった。……でも、それは大きな間違いよ。禁忌と呼ばれる魔法には、それなりのチカラつてもものがちゃんとあつたっていうのに。ほら！」

すつと片手を差し伸べた。

その刹那、キャナの身体がふわりと床を離れたと思いきや あつという間に、彼女は目に見えない力によって数十メートルも吹っ飛ばされていた。

ガーン、と屋上の鉄柵に背中から叩き付けれたキャナ。

「あうっ!!」

大きく仰け反ったあと、ぐったりと床に崩れ落ちた。

あれは……キツイ!

魔女といえども、人間の女性と同じように身体は生身に過ぎない。壁に叩き付けられたりしたら、タダで済むハズがないじゃないか。

「おいっ、お前! ヤメねエか! 元はといえば、お前がキヤナをハメようとしたのが悪いんだろ!? なんでキヤナをキズつけるんだよ!」

思わず、叫んでいた。

残酷非道な魔女だし、人間じゃないっていつても俺は キヤナのことが好きだし。

彼女が酷い仕打ちを受けている様子を見ているなんて耐えられない。

「こーちゃん……」

キヤナは必死に身体を起こそうとするが、力が入らないらしい。

真紅の光をまとったメイアはちらと俺の方に一瞥をくれ、冷たい微笑みを浮かべた。

「風間クン、だっけ? あなたがキヤナにあげた分の魂、私がいただいちゃうから。……安心して。犠魂陣で魂を抜かれたらすぐ死ぬから。キヤナが苦しむ姿は見ないで済むよ?」

言うのが早いか、倒れているキヤナを中心に、赤い光で大きな二重丸が浮かび上がった。

鉄柵の先は何もない空中だが、透明な床が続いているみたいに円の一部は宙に浮いている。

まるで誰かが書き込んでいるかのように、外円と内円の間に奇妙な幾何学模様が凄まじい速さで描かれていく。

その間、ほんの数秒。

陣が完成するなり、円の内部に赤い光の粒子が立ち込めだした。

細かい光の一粒一粒が、キヤナの身体にまとわりついていく。

そうして彼女の全身が赤いジェル液でもぶっかけられたように光で覆い尽くされた瞬間、

「……つくああああああっ!!」

キヤナが苦しそうに絶叫し始めた。

俺は呆然としてしまった。

あれって、あれって、まさか……キヤナの魂が奪われていつているのか!?

放っておいたら彼女は、幾許もなくして死んじゃうって!

タダでさえ、今のキヤナの魂は俺がくれてやった半分のそれしかない。

吸い尽くされてしまうのは時間の問題だ。

「手前エ、メイア!　ぶっ飛ばす!」

俺は無我夢中で跳ね起きると、不自由ながらもうさぎ跳びのようにしてメイア目掛けて突っ込んでいった。

薄みつともねエがしゃあない。

キヤナに死んで欲しくない　アタマン中、ただそれしかなかった。

が、メイアはちょっと不快そうな顔をしただけで

「……大人しく寝てなさいって。あなたの魂はあとでちゃんともらうから」

その途端。

身体全体がふわっと、大きな力によって持ち上げられるような感覚を覚えた。

それも一瞬のこと。

あっという間もなく、全身の骨が砕け散るような激痛が背中一面から身体中を貫いていた。

俺はメイアの魔力によって、機械室の壁に叩きつけられていたのだ。

「……がつ!!」

なす術もなくやられ、膝からがくりと倒れ伏した俺。

もはや、痛いのか痛くないのかすらもわからなかった。意識が朦朧としていく。

キャナは……キャナは……。

冷たい床の感触を頬に感じながら、俺は無意識のうちに彼女の名を呼んでいた。

その11 格の違い3

あれは確か、キャナがやってきてから二週間ばかり経った頃だったろうか。

翌日に単発のテストを控えた俺は、夕食後を終えてから（沖縄に雪が降るくらい）珍しくカリカリと勉強に勤しんでいた。

というのも、その日学校から戻ると、いつもは寝こけているハズのキャナがテーブルに向かって何やら懸命に書き物をしている姿を発見したのだ。要らなくなったプリントの裏に、鉛筆で細々と書き込んでいる。俺にはよくわからない横文字だったが、英語の文章でも綴るようにして滑らかに書き進めていく。鮮やかなものだ。

「……なアに、やってんだ？」

背後から覗き込むと、彼女はくりっと振り返ってにっこり笑いながら

「あ！ おかえり、こーちゃん！ あたしね、ちょっと研究してたの」

「研究？ 魔法のか？」

キャナいわく、魔法というのは生まれ持った魔力だけが実力を左右するのではないという。

己の魔力の強弱を前提におきつつ、術の効力や発動条件、行使する環境を考慮しながら工夫を加えることで、ある程度の改善が可能になるらしい。

魔法などは術者の素質あるのみだと思っていた俺には、初耳だった。

「へえ、そいつはすげエじゃねエか。……で、何の魔法を研究してるんだ？」

買ってきた魚の切り身に塩を振りながら訊いてみると、キヤナはふふん、と子供が秘密を隠す時のような悪戯っぽい笑顔を見せて

「ないしょ。……でも、こーちゃんにとって悪いコトじゃないよ？
これが上手くいけば、あたしとこーちゃんはズーっと、仲良く暮らしていけるんだもの」

「……そかい。じゃ、上手くいったら教えてくれや」

正直、俺の成績は良くない。

授業の内容がまったく理解不能とかいうワケじゃなくて、いつもなんとなく気合いが入らなかったのだ。

自分でも理由はよくわからないが、ちよいとだけ心当たりなのは
佐奈さんを轢き殺したのが、まだ若い大学生だったということ。
飲み会の帰りに軽い気持ちでハンドルを握り、事故を起こしてしまった。車は、親から買ってもらったばかりの新車だったという。

あとで聞けば、一流にランクされている有名大学の学生で、医者を志望していたらしい。

お医者様になろうと思ったら、それなりのお力ネと頭脳が必要なことくらい、俺にもわかる。

……だけど、お力ネと頭脳があってもそのザマか。

勉強学問、否定はしねエが、まったく当てにならんものだ。

それがあるから人生を真っ直ぐ歩いて行けるかどうかなんて、まったく関係ねエよ。

頭脳&お力ネ持ちだって、酒飲んで車を運転して人殺すようなバカもいる。

そういうことがあったから、学校の勉強なんて何に役立つんだって、思っている俺がいた。

自分の拳の方がよほど役に立っている。

まあ、故意に勉強怠けてるようなモンだから、それで成績がよくないってのはガッコー行かせてくれているおじさんとおばさんに悪いような気はしてただけども。

ちゃんと将来の進路を決めて三年ポツキリで卒業すれば、別に学年何番の成績でなくたっていいだろうと思っっちゃったりしてた。学年上位はエクスカリバーにでも狙わせておけばいいかな、なんて。

でもまあ、キャナがテーブルに向かって無心にカリカリやっている姿に心を動かされてしまった。

こーちゃんのため、か。

要は、気持ちとか目標がどっちを向いているかが大事なのかも知れない。

そういうガリ勉じみた作業も、向くべき方向を向いてやれば決して悪かねエなつて、いう気がした。

だから俺も、ちょっとくらいやつてみる気になった。

そうして翌日のテストに臨んだ俺。

数日後、廊下で奈々子ちゃんに呼び止められた。

俺のクラスの担任。まだ相当に若くて美人で、明るいから人気がある。みんなから奈々子ちゃんと呼ばれているが、イーペーで歪んだあだ名を授けられていない教師は彼女くらいなものだろう。

「孝四郎くん、聞いたよお！ こないだのテスト、すっごい良かったそうじゃないの！ 大島センス、びつくりしてたよ！」

きやたきやたと嬉しそうに、奈々子ちゃんは言った。

まだ答案が返されてきてなかったから、俺にとっては寝耳に水。

「あ、そうすか……。バングラデシュ、じゃなかった大島先生がそんなことを……」

バングラデシュ。

大島という教師のあだ名。

顔色がやったらと浅黒く、でっかい鼻がどういいうワケか赤いところからバングラデシュの国旗に似ているということで命名された。そうして返ってきた答案をみると、確かに普段の三割増しの点数になっていた。

この結果を聞いたエロスケベは落ち込んだが、エクスカリバーは手放して喜んでくれた。こいつは俺の家庭教師を自負しているからだ。どうも、勉強のことでは放っておけないらしい。

少しだけ、わかったような気がせぬでもない。

……研究とか工夫とか努力、あるいは勉強。

自分が思っている以上に、効果があるものだ。

ってか、よくよく考えれば、ケンカのやり方ってのは俺が自分で工夫したんだっただけ。料理とかもそうだった。そういう感じで、人間ってのは関心が向かなきゃとことんやらない生き物だが、やればそれなりにできるってこった。

ま、キヤナに触発されてやったコトだから、かなりの割合で彼女のおかげだったかもしれない。

そのキヤナは、相変わらず横文字をたくさん書き並べては

「うーん……」

と首を捻ってばかりだったが。

ズン、という地響きにも似た大きな唸りで、俺は遠くなりかけていた意識を呼び覚まされた。

ハッとして目を開けた俺。

どうやら俺のアタマん中、過去のシーンが走馬灯のように流れまくっていたらしい。

首だけを動かして様子をうかがうと　何やらおかしいことになっている。

キャナを囲んでいた犠魂陣の赤い光が急速に輝きを失い、替わって白い光の粒が夕陽を受けてダイヤモンドダストのようにキラキラと点滅を繰り返していた。

ほどなく、屋上の床に滲みこむようにして赤いサークルはすうっと消えてしまった。

一瞬、キャナの魂が完全に奪われてしまったのかと思い焦りそうになったが

「……どういうコト！？　どうして犠魂陣が途中で消滅してしまうの？」

メイアの眩きで事態を理解した俺。

どうやら、彼女の想定外の何事かが起こりつつあるようだ。

「……調子にのるのもほどにしなさいよ、メイア。アンタ、犠魂陣が万能だなんて、思ってたんじゃないでしょうね？」

顔を上げたキャナ。

さすがにダメージは効いているみたいだが、相好には不敵な笑みが浮かんでいた。

床に手をつき、ゆっくりと身体を起こしていく。

「この世界に逃れてきたあたしが、ただ食っちゃ寝して毎日過ごしてるでも思った？　こう見えてもあたし、古代魔術相伝書の全巻は読んでいるのよ。中身もきっちり覚えてるの」

「……！？　キャナ、あなた、もしかして……！」

メイアの表情に初めて怯えの色が見えた。

「ふふん、わかったかしら？ あたしはこーちゃんがくれた魂と時間を使って、対魔封陣と対犠魂陣の研究をしていたのよ。いつかはアンタと命のやり取りする日がくると思っていたからね。古代魔術は確かに厄介だけど、所詮は人が創りしもの。破る方法は必ずあるってコトなのよ」

おお？

キャナのヤツ、いつの間にそんなコトを？

……ああ、そうか。

やっとながった。

プリントの裏に一生懸命に書いていたアレ、魔封陣と犠魂陣を破るための研究だったのか。

彼女は一切口にしてなかったから研究が完成したのかどうか知らなかったが、メイアが放った犠魂陣を無効化させたところを見れば、まずまず答えは出ていたみたいだ。

いやいや、どうなるコトかと思ったよ。

さすがはキャナ。

ただごろ寝しているだけのプーなおねーさまなんかじゃない。

「どこまでもめんどくさいおばさんですこと！」

キャナとメイアの間でズドン、と光が弾けた。

俺の目には止まらない速さで二人の魔力が衝突しあっただけらしい。

メイアが軽くよろめいた。

が、吹っ飛ばされてダメージを食らっているハズのキャナは微動だにしていない。

「……！？」

「魔力の発動を押さえ込んでしまえばそのエネルギーは術者目掛け

てリバースしてしまうって法則、アンタも知らないワケじゃないでしょ？ …… 犠魂陣の発動ベクトル、全部ひっくり返しておいたからね。そろそろアンタの魂、目減りしてるんじゃない？」

かくんと膝をついたメイア。

キャナの言う通り、少しづつ魔力が消滅していつているようだ。

メイアは顔を上げ、キツとキャナを睨んだ。

美少女の相が、レディースのそれに豹変してしまっている。すっぱり切れそうな鋭い目つき。 …… いや、すでに彼女自身がキレていた。

「 …… いい加減にしなさいよ、異端のクセに！ あなたは無事でも、これならどう！？ 」

素早く俺の方に左手を差し向けた。

転がっている俺の周囲に、赤い二重円が浮かび上がった。

俺に犠魂陣！？

メイアのヤツ、キャナが無駄だからって、今度は俺から魂を奪おうって魂胆か！

見る見る俺の視界がフィルターを通したかのように赤く染まっていく。メイアの放つ魔力が俺の身体に侵食していこうとしている。が。

ほんの数秒も経たないうちに二重円から「ぱすつ」とシヨボい煙が上がり、魔力の気配はあっさり霧散してしまった。

これは一体……？

キャナが何か仕掛けたのだろうかとそちらを見やれば、彼女の姿がない。

「 …… こーちゃん、大丈夫？ ごめんね、あたしのせいで…… 」

不意に、すぐ間近から声がした。

いつの間にか彼女は、俺の傍にやってきていた。

「キャナ？ これって……どういう……？」

キャナは俺をがんじがらめにして、いる魔力のロープを切り解きながら

「あいつが犠魂陣をあたしに施そうとこーちゃんにかけようと、同じコトよ。メイアが犠魂陣を使おうとする限り、その効果を全部リバースさせてしまうように魔力の流れを変えてしまったんだもの。犠魂陣を使えば使うほど、メイアは自滅していくってワケ」

「おお！ すげエな、キャナ！ 短い間に、そこまで研究していたのか！」

素で感心してやると、キャナは「きゃっ」と嬉しそうに笑った。

「だからあ、こーちゃんが魂と研究する時間をくれたからよ！ あたし、こーちゃんを守るために頑張って考えたんだもん！ ねーねー、よしよしってなでて！」

「うむ、よく頑張った！ えらいぞ、キャナ！」

「えへへ……」

アメ玉をもらった子供みたいに無邪気に喜んでいる。

が、すぐに「キッ」と表情を引き締め、魔女の顔に戻ったキャナ。立ち上がってメイアにきつっーい視線をくれてやりながら

「……アンタ、今、自分が何やったかわかってんの？」

「あら、キャナったら怒ってるの？ 私は下等な人間から魂をいただこうとしただけで くあぁっ！」

瞬間的に突風が起こったように空間が歪み、あっという間にメイアの小さな身体が吹っ飛んでいた。

ガッシャアアン、と今度は彼女が鉄柵に叩きつけられた。

しかしキャナの魔法はなおも途切れない。

メイアは強烈なプレッシャーに押さえつけられ、鉄柵に磔にされたような格好になっている。

「あたしのこーちゃんに手エ出しておいて、無事で済むと思ってるの？ …… アンタは八つ裂きじゃ済まさないからね。生きたまま全身細切れにしてやるわよ！」

聞いている俺がすくみ上がるような、凄まじいキャナの怒り。

魔力の波長が最大級に高まっているのか、彼女の周囲の空気がビリビリと振動している。

川べりでメイアが放った刺客と戦った時の比じゃない。

パチン、と指を鳴らすなり

「……うあああああつ！！」

絶叫するメイア。

彼女の身体中にバチバチとした電気のようなものが巻きついていて、肉体を砕かんばかりに締め上げている。それらはまるでキャナの意味がそのまま実体化したかのように、急激な収縮を繰り返してはメイアを苦しめていく。

その度に、彼女の口から悲痛な叫び声がほとばしり出た。

「くううううう……う、う、あつ、あああああつ！！」

「きゃははは！ ざまアないわね、メイア！ あたしをハメ殺そうとした分の報い、きっちりその身体で味わうがいいわ！ きゃはは

は
」

「いやああああっ!!」

メイアが悪いのは、俺もよくわかっている。

だけど 見るに耐えない。

あまりにきつく締め上げられているせいで彼女の露わな脚はところどころ傷ついているし、苦しくて唇でも噛んでしまったか、口の端からは血が流れている。

傷だらけのキヤナを目にした時もそうだったが、俺は若い女性が傷つき苦しむのが耐えられない。

しかし、この前彼女は俺に宣言した。

こーちゃんに手エ出すような奴らはあたし、こーちゃんが何と言おうと許さないからね？

そうだった。

そして、それを止める権利はないといって同意している俺。

だから止めたくても止めようがなかった。

惨殺されていくメイアを黙って見ているしかない。

すでに彼女はありつたけの体力を奪われてしまったようで、鉄柵に両腕を拘束された状態でぐったりとしている。

が、それでもキヤナは容赦しようとはしなかった。

「……………くたばるのはまだ早いわよ、メイア。まずは両手両脚、一本づつ砕いて差し上げるから」

俺の方がくたばりそうになった。

メイアの五体を分解していく様子を、黙って見てなきゃならないのか!?

こうなったら、約束もへちまもあったモンじゃない。

残酷な真似はやめてくれ、と彼女に頼もうと腹を括った時だった。ぼろきれのようになって動かないメイアの全身から、すーっと黒煙のようなものが立ち上り始めた。

それは空中の高いところで一つにまとまり、次第に大きく膨張していく。

球状のそれは、いつか図鑑で見たブラックホールにも似ていた。

「……キヤナ？ 何だよ、あれ？」

尋ねたが、彼女は少しの間返事をしなかった。

今までのタカビーな態度はどこへやら、完全シリアスモードな顔で黒い物体を見つめている。

やがて、キヤナはぽつりと独り言のように呟いた。

「……思った通りね。犠魂陣の恐ろしさは術者が無限の魔力を得られるコトなんかじゃない。それ自体が魔界に災禍をもたらす力ギだったのよ」

「災禍？」

「そう。犠魂陣の生贄にされた人々の恨みや無念が一点に凝縮されたあと、それが擬似的な意思を持った具現体に変化して、ひとりで報復を始めるの。あたしはあれこそが 魔神の正体だと思っている」

その11 格の違い3（後書き）

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます！

その12 格の違い4

……魔神だとオ!?

遠い昔、忽然と現れて魔界を滅亡させかかったという、あの伝説の魔物のこと!?

「そう。あたしのハナシ、ちゃんと覚えていてくれたのね。あたしが知る限り、過去の古い時代、犠魂陣が編み出されたのときをほぼ同じくして、魔神が出現している。ヤツと戦うために古代魔術が編み出されたっていうハナシもしてあげたと思うけど、古代魔術の発動に必要な『自己犠牲』っていう魂の働きを、魔神は嫌ったハズなの。当然よね、魔神なんてのは、他者の魂を食い物にする極端な自己愛のカタマリみたいなものだもの。……メИАのヤツ、厄介なコトを仕出かしてくれたものだわ」

いつになく真剣な顔で語るキヤナ。

そんな彼女の横顔を見ている俺は、相当ヤバい事態になりつつあるのだということを、あらためて知った。

「じゃあさ、メИАはわざと魔神を甦らせようとして犠魂陣を使っただっていうのか?」

「いんや、そうじゃないような気がする」

キヤナはかぶりを振り

「あのバカ女は、単に強大な魔力を手に入れたかっただけでしょ。だってか、まさか魔神を呼び起こすきっかけになるなんて、夢にも思わなかったんじゃないかしら? 犠魂陣が想像以上の効果を発揮するってわかったから、自分に具わっている以上の魔力が得られるの

が嬉しくて、ポンポン使ってしまった。……ただし、副作用として犠魂陣は術者の魂を歪めてしまう。それであいつ、精神が狂ってたんだと思うの」

話している間にも、空中の黒い塊はどんどん大きくなっていく。すでに、熱気球のバルーンくらいはあるかも知れない。
このままだとどこまででかくなるのかわかったモンじゃない。

「キヤナ、アレ、どうにもならないのか？」

聡明なキヤナなら何か打つ手を知っているかもしれないと思って訊いてみたのだが、彼女は黒い物体を見上げたまま事も無げに

「ムリ。あんなに禍々しい力の集合体なんて、百年以上生きてて今まで見たこともない。さすが、大勢の魔界人の恨みとか憎しみを寄せ集めただけのことはあるわね。ビビるとかヤバいとか通り越して見事としか言いようがないわ……」

仕方なさそうに笑っている。

おいおいおい……。

さすがのおねーさまといえども、打つ手なしかよ。

ホントにまあ、今日は朝からとんでもない日だよ。ラスボス日だ。

魔界府を潰滅させキヤナを追い詰めた元凶のメイアが突然姿を現し、俺達は一度やられそうになった。

で、奇跡の逆転劇を演じたと思ったら、今度はさらにヤバさ百二十パーセントの化け物ときた。

……待てよ。

俺はふと、肝心なところに気がついてしまった。

魔族でも魔界人でも相手にならないような化け物が人間の世界に

解き放たれたら、マジでシャレにならないんじゃないか!? それ
って無難に世界滅亡だろ!? 環境破壊おとといきやがれじゃねえ?

みたいなことを、泡食って訴えた俺。
するとキヤナは

「本当かどうかはわからないけど、ヤツは他者の魔力を食って進化
するらしいのよね。そうすると、人間の世界では生き延びることが
できないから、魔界へ転移しようとするんじゃないかしら? 今の
あたしじゃ太刀打ちなんかできそうもないから、大人しくそうして
くれれば助かるんだけど……」

「大人しく転移してくれなかったら?」

「……その時は、二人で一緒に死にましょ?」

勘弁してくれ。

美女と抱き合い心中も悪くないが、この歳でそれやるには早すぎ
る。せめてあと十年は生きたい。

為す術もない俺は、成り行きを呆然と見守っているしかなかった。
と、メイアの身体から放出されていた黒い煙がふつとりと途絶え
た。

黒いカタマリはそれから少しの間、勝手にもごもごとうごめてい
た。

まるで内側に潜んでいる何者かが表面を押しているようで、気持
ち悪いったらない。このまま空気の抜けた風船よろしく宇宙まで飛
んでつてくれんかなーと、都合のいい事を考えていた俺。

が、次の瞬間。

ヤツの周囲で空気がピシッ、と大きく震えるなり、突然猛烈な勢
いでエネルギーを放出し始めたのだ。

その凄まじさたるや、風速三十メートルの突風並み!

「ぶわっ!」

「きゃん！」

急いで床に伏せて堪えようとしたが、おっつくものじゃない。
近くにつかまれるような出っ張りも何もないのだ。

「……おわっ！」

たちまち、悪意のような風の流れに身体をさらわれてしまった。
ほとんど紙きれのように吹っ飛ばされた俺は、目の前に迫り来る
鉄柵に気がついた。

そこを越えてしまえば 屋上から落っこちるしかない。

「くっ……そおっ！」

無我夢中で腕を伸ばし、必死の思いで鉄柵をつかんだ。
幸い、手が届いてくれた。
屋上から転落死は免れたものの、なおも嵐のような突風は止まな
い。

人間鯉のぼり状態な俺。

鯉のぼりの気持ちがあったような気もするが……今はそれどこ
ろじゃない。

大気の刃に顔や身体をぶたれながらも、懸命に堪えた。
手を離せば命がないのだ。

「くっ……この……！」

ふと、渦巻く黒い風の向こう側で、不気味に伸縮を繰り返してい
る魔神 なりそこないだが の様子が目に飛び込んできた。
もはや、異形の悪魔だ。

意思を持っているかのように球体がぐねぐねとうごめき、全体に

バチバチと放電のようなスパークが散っている。

俺は咄嗟にアニメのワンシーンを思い出していた。

時空を飛び越えるべく、エネルギーを蓄積しているタイムマシー
ン。

どこか、それに似ていた。

そんな状態が続き、すうっと収束したと思われた途端。

ボムッ

ひととき大きな爆風が巻き起こった。

屋上は黒い煙とも霧ともつかない気体に覆われてしまっている。

「どわあっ!」

一段と強烈なプレッシャーに包み込まれた。

こうなると、腕の力だけでは支えきれない。

ついに俺は鉄柵を放してしまった。

身体全体にふっと浮くような感覚があったのも束の間、すぐに俺
は下向きの重力に引つ張られることになる。

「……う、うわあっ!」

ちらりと、前庭のアスファルトが眼下に見えた。

それが3Dのように見る見る迫り来る。

俺、墜落死!?

と、思った時だった。

「……こーちゃん、キャーッチ!」

急に、下から何かが俺の身体をふわりと受け止めた。

キヤナ。

彼女が墜落しかけた俺の下に回りこみ、逆お姫様抱っこをしてくれていたのだ。

「キヤ、キヤナ!？」

「あつぶなかつたあ！ あと一瞬遅れてたら、間に合わなかったよお！　いくら魔女だっていつても、単独で空を飛ぶのは楽じゃないのよね。浮遊するための魔力を固定する何かがないと、ね」

笑みを見せてはいるが、よほど焦ったらしい。

動揺がかなり顔に出ている。

言われてみれば、テーブルとか古タイヤとかゴミバケツに乗っかっていない。

彼女が自力で宙に浮いているのは、これが初めてだった。

「す、すまねエな。俺、この前から助けてもらってばっかで……」
「そんなコトないない！　あたし、いつもこーちゃんにごはん作ってもらってるもーん！」

見栄を張ってみんなには黙っていたが、軽く高所恐怖症の俺。なるべく下の方を見ないようにしながら、キヤナにつかまっていた。

というか、ほとんどコアラのようにがっちり抱きついていて。みつともないったらないのだが……それでも高い所はキライだ！

「魔神、消えたのか……?」

「まだね。でも、消えようとしているみたい。ちょっとラッキーかな」

屋上に目をやれば、確かに黒い大きな影はまだそこにいた。

S.L的に全体から「シユーツ」と煙を撒き散らしつつ、軽く上下に揺れている。

が、ほどなくトドメの爆発（ではないだろうが、そういう風にしか見えないのだ）。

またも周囲に烈風の嵐を巻き起こしながら、瞬く間に小さく縮んで消えてしまった。

その光景を、浮遊したまま呆然と眺めている俺、そしてキャナ。ひとまず人類世界の脅威は去ってくれたのだ、と思いかけたその時だった。

「……キャナ！ あれ、あれ！」

俺は見逃さなかった。

メイアの華奢な身体が爆風で跳ね飛ばされ、宙を舞っている！
しかし彼女は、どういうアクションもとろうとしない。力なく煽られた勢いのまま空中を流れていくだけ。

意識を失っているらしい。

このままいけば数秒経たずして彼女は頭から地面に落下して死ぬ。

「キャナ！」

「はいさ！ つつても、ちょーっち、キツイケド……」

彼女が早口で何事か詠唱した途端。

俺の目の前の景色が、スライドを入れ替えたようにしていきなり変化していた。

俺を抱えたままで転移魔術を使った！？

が、いちいちそれに戸惑っている余裕なんかない。

「こーちゃん！ あとお願い！」

「お？ ……おオ！」

意外にもメイアは、ゆっくりとした速度で俺達の上に落ちてきた。キヤナは転移と時流緩解、二つの魔法を同時に発動させたのだ。さすがはおねーさま。

だから、紙風船をキャッチするユルさで、メイアの身体を受け止めることができた。

俺達は、三階と二階の間あたりの高度で空中に浮いている。

キヤナが俺を抱っこし、その俺がメイアを抱きとめているという、かなりムリのある体勢。

さつきからどうもキヤナがテンパリ気味だなとは思っていたのだが、メイアの救出に成功するなり案の定、

「あ、あのね、こーちゃん」

「ん？」

「そろそろ……あたし、限界……」

「え……？」

ずりっ、ずりっと段階的に落下していつてる！

「欲を、いえば……あたしの、代わりに、着地して……くれると……

…嬉しい、かも……」

「わ、わーった！ だから、落ちるな！ 堪えろ！」

「あ、あたし、女だもん……。こーちゃんみたいに、チカラ、ない……のよ……」

俺はメイアの身体を担ぎつつ、キヤナと水平に抱き合うような姿勢をとろうとした。

そうすれば、何とか足から着地できると考えたのだ。

その間高度はぐんぐん下がり、あとほんの数メートルで地面に降

り立てるところまでやってきた。

「キャナ、耐えろ！ もうちょいだ！」

「う、うん。……あのね、こーちゃん」

「なんだ！？」

「子供、産む時みたいなの、励まし方、するのね？」

……フィニッシュってトコで、何を言いやがる！

キャナの吐いた一言に集中力を根こそぎ持っていかれた俺は全身から力が抜け、思わず彼女につかまっていた片手を外してしまった。もう片方の腕には、メイアを担いでいる。

魔力の影響による浮力を得ていない俺に、彼女の物理的な重さ×重力を支える術などあるワケがない。

結果は ニュートンさんの発見した法則通り。

「……でえっ！」

「あえ？ こーちゃん、だいじょうぶ？」

一人、ゆっくりと降りてきて着地したキャナ。

その傍ら、胎児のように身体を丸めてぐったりしているメイア、そして彼女の下には

「……大事なトコでヘンな発言をするな。打ち所が悪けりゃ死ぬトコだったぞ」

大の字に倒れこんでいる俺がいる。

もう、体内にはどういうエネルギーも残っちゃいない。

アスファルトの上に頭をつけて暮色に染まった空をぼんやり見上げてみると、キャナがひょいと俺の顔を覗き込んできた。

「あたし、なんかヘンなコト言ってたわけ？　子供は二人欲しいって言ったケド」

「……ほざけ」

それからしばらく、俺達は校庭の脇にある芝生の上で転がっていた。

すぐに帰ろうにも、キヤナもまた魔力と体力を消耗していてすぐに魔法を使える状態じゃなかったからだ。

メイアは気を失ったまま、目を覚まさない。

そんな彼女を、優しく膝枕してやっているキヤナ。

屋上ではぶっ殺さんばかりのボルテージで激怒していたからどうなるのかと思っただが、墜落するところを助けてやってからこっち、意外にも手荒な真似をすることはなかった。

俺にはその理由が何となくわかっていたが、あえて訊いてみたい衝動がある。

「……これで、よかったのか？　俺達結局、メイアを助けちゃったけど」

すっかり乱れてしまっているメイアのロングヘアをそつとすいてやりながら、キヤナは

「……魔神はね、恐らくメイアの肉体を乗っ取るつもりだったのよ。だけど、あたしがメイアの肉体をさんざん虐めて彼女が耐えられなくなったものだから、魔神は諦めて彼女の魂から抜け出した。そーいうワケだから、助けたくて助けたというよりも、成り行きで助かってしまったという方が正しいかもね」

視線がメイアの相貌に注がれている。

真つ赤な夕陽を浴びたキャナのすらりとした横顔。

今はもう、おぞましい魔女の影はどこにもない。

むしろ　女神か天女のような神々しさ、そして美しさがある。

「……結果オーライっちゃそうなんだけど、メシアには感謝して欲しいわね。魔神に取り込まれる前に助けてあげたんだからさ」

そう言ってキャナは疲れ切った顔で可笑しそうに笑って見せた。

……ホントかね？

俺、ちよつとだけ疑っている。

実をいえば、メシアの魂から魔神が逃げ出したのは、キャナが狙ってやったことなんじゃないかっていう気がしていた。

確かにメシアはキャナを裏切り、酷い目に遭わせた張本人。

本来なら復讐されてもおかしくはない。キャナ自身、それを心に思った瞬間もあるだろう。

だけど彼女には、メシアみたいなお嬢ちゃんが到底及びもしないすごいものがあつた。

一言でいえば、境地。

恨みも憎しみも友情も愛情もみんなまとめて飲み込んで超越した、そいつのでかさつてコト。

今の彼女の姿を見ていたら、そんな気がする。

本当に殺してやろうとしていたのなら　傷ついて倒れているメシアを優しく撫でてやったりなんてしないんじゃないだろうか。

それに、キャナは犠魂陣と魔神の本質を見抜いていた。

メシアが犠魂陣の魔性に取り付かれている　魔神に　ってこと
とがわかっていればこそ、なおさら彼女を殺せるハズがない。

屋上で魔神が正体を見せ始めた時、キャナはこう口にした。

副作用として犠魂陣は術者の魂を歪めてしまう。それであいつ、
精神が狂ってたんだと思うの。

間違いないよな。

いつかやってくるメイアとの対決のために彼女は真剣に工夫を重ね、そして成功した。

そのことは結果として、メイアを助けることにもつながった。

いつてみれば、それはキャナとメイアの「格の違い」だ。

強いヤツは自分なりに一生懸命努力する。

強くなれないヤツは、自分以外の何かに力を求める。

あらためて思うけど、キャナって　　すげえんだよな。

いつつも下着姿で食っちゃ寝してる姿しか見てないが、やるきややるモンだ。

メイア、本当は彼女に嫉妬したりしてたんじゃないだろうか。何の根拠もないが、ふとそんな気がした。

「犠魂陣ってさ、誰でも使った奴は魔神を呼び起こしてしまうのか？」

「どれだけの魂を犠牲にしたかにもよると思うけど、大筋ではそうね。他者の魂を取り込むということは、その人自体を取り込むことにも近いのよ。魔力は使ってしまったえなくなるけど、魂に含まれている念はその術者の中に残留する。犠魂陣が禁忌と言われている一番大きな理由はそれよ。魔力生成の犠牲にされた者の無念や憎しみをずっと背負って生きていけるほど強いヤツなんかいやしない。……だから、溜まりに溜まった念の強さに耐え切れなくなった術者の魂や精神が逆に飲みこまれて、そこから魔神が生まれる」

なるほど。

それは人間にも同じことがいえそうだ。

誰かを踏んづけて自分がの上がろうと企むヤツは、最後にみんな自滅していく。

そういう意味のことを伝えると、キャナはちよつと笑って

「ま、良くも悪くも、魂つてのはお互いに影響されあつて存在する
つていうことかしらね。前に言つたでしょ？ あたしはこーちゃん
で、こーちゃんはあたし。つまりはそーいうコト。　　そういやあ
たし、何だかこーちゃんに似てきたような気がする」
「どのへんがだ？」

何気なく尋ねてみたのだが、彼女は即答しなかった。
言葉を選ぶようにしてしばらく考えていたが

「……あの時、メイアに腹が立つて勢いで『殺す』とか言つたケド、
あれが本音だったかどうか、自分でもよくわからないのよ。いきな
り魔神の仮想体が現れたからうやむやになつちやつたけどさ。仮に
魔神がメイアから出てこなかったとして、もしかしたら、それでも
あたし」

そうしてキヤナが口にした言葉は、俺の想像の正しさをまったく
もって簡潔に象徴していたのだった。

「　　ホントは、殺せなかったかも知れない」

その12 格の違い4（後書き）

次話掲載は10/12の予定です。
よい三連休を。

その13 二人の魔女

俺達がボロアパートへ帰つてくると、すっかり陽は落ちていた。もちろん例によってキャナが魔法を使って怪しげな乗り物を仕立てたのだが、

「……おい。誰がこんなモノを拾ってきていいと言った？」

「え？ だってえ、乗りやすそうだったしい……。それに、魔力のノリが良かったのよ、これ！」

「明日、ちゃんと返しておけよ！ こんなモンなくなつたって知れたら大騒ぎだぞ！」

メイアもいるから仕方がなく乗りはしたが、まかり間違つても空を飛ばしていいシロモノではあるまい。

学校を創立したなんたら権造さんの胸像。

よくわからないが、魔力が安定しやすいようだ。権造さんの何かの影響しているのか？

あれ？

台座から簡単に外れるのね。

メイアの怪我は大したことなかった。

あちこち小さなキズやアザができていたが、命に関わるようなこととはなさそうだ。

それよりも彼女にとって大きなダメージとなつたのは 犠魂陣の発動ベクトルをリバーズされて自らの魔力を食われていたこと。正確には、そのタイミングで具現化した魔神に、だけど。

とはいえ、キャナの時みたいに魂丸ごと消失しているワケではない。

しばらく休めば回復するでしょう、というのがキャナの診断（？）だった。

とりあえず、脚の傷を手当てしてやるか。

俺はそう思い、押し入れから薬箱を探し出した。

で、振り返ってみれば

「……キャナ？ 何、してんの？」

「あえ？ だってこーちゃん、このコの手当てしてあげるんでしょ？ だからあ、こうした方がやりやすいかなあ、って思ってた……」

言ったよ。

言ったが、俺は「全裸にしろ」と命じた覚えはないぞ……。

身につけていた制服を脱がされ、一糸まとわぬ姿で横たわっているメイア。

キャナを助けたトキは「一刻の猶予もない」ってカンジだったから介抱するのにテンパってたけど、今は気持ちに余裕があるから俺の煩惱も通常通りに機能中。

メイアのハダカ、キャナとはまた違ったエロさに満ち溢れている……！

その気になるまいと自分で自分の精神を呪縛しようと試みたが、フツーに無駄だった。

思わず視線を向けてしまったよ。

「ねえこーちゃん。メイアったら、こーんなに胸がおっきいんだよ。何食べたらここまで大きくなるのかしらねえ。ちよっと嫉妬しちゃうなあ。……こーちゃんは、胸が大きい方がいいの？ あたしも魔法でボインになれるかなあ」

やめい。

指でつんつんやってんじゃねエ。

そいつは怪我人だ。

意識のない怪我人をハダカにひん剥いて乳繰るヤツがあるか。

まあ、確かにちよつとでかすぎなくらい豊かで張りがあつて形状抜群、思わず揉んでしまいたくなるような見事なバストであることは認めるが……。揉まないけどさ。

こりゃあ、軽くF以上確定だな。

G級でも通用するかも知れない。

ああつと、でかいチチに見とれている場合じゃなかった。

「……ほれ、アザんなつてるトコにこれ貼っておいてやれよ。思いつきり締め上げたから、身体中痛々しいコトになつてるじゃねエか。冷やしてやらないと、痕が残るぞ」

「ぶーっ！ なにそれー！ まるであたしがメイアをイジメたおしたみたいじゃない！」

イジメたおしたんだろーが。

いたぶられていた時のメイア、マジ悲鳴上げてたぞ。

とまあ、あれはあれで仕方がなかったんだけどな。

メイアの姿をしたメイアじゃなかったんだし。半分魔神に乗っ取られていたようなものだ。

キヤナが守ってくれなかったら今ごろ俺、死亡フラグだった。

「誰もキヤナが悪いなんて言つてないだろ。……んじゃ、手当てしてやつてくれ。俺、晩飯の支度をしなくちゃ。腹減つたし」

「わーい！ 今日の晩ご飯はなーに？」

「ドタバタがあつて買い物に行つてねエからなあ……。昨日の煮物の残りど、野菜の切れっ端の炒めものつてトコかな？ ……あ！ ネギがあつたからそれでネギめしにしよう。しばらく食つてねエし」

そんな感じでキヤナにメイアの介抱を託し、俺は晩メシの支度を

開始。

冷蔵庫の中に残っていた野菜をざくざくやってからフライパンで炒めていると

「……あ、あれ？　ここは、どこ？　私、どうして……？」

メイアの意識が戻ったらしい。

彼女は傍に座っているキャナの姿を発見すると

「キャナ……？　どうして、ここに……？」

「どうしても何も、ぶっ倒れているアンタを担いで連れてきたのよ。アンタ、もしかしてずっと記憶がないの？」

「いや、記憶はあるのよ。でも、なんというか……私の意識は確かにあっただけで、自分で自由に動くことができなかったの。もう一人の自分？　みたいな意識が勝手に私の身体を動かしているように　　どうすることもできなかった」

「そんなこったろうと思った。魔界で別れて以来久しぶりに会ったけど、今日のメイアはまるでメイアじゃなかったもの」

キャナに沈黙がある。

彼女が再び口を開くまで、やや間があった。
明らかにためらいの空気。

本当のことを話したものでどうか、迷ったに違いなかった。

「……メイア、あんたは魔神に魂を飲み込まれる寸前だったのよ」

「え……？　魔神？」

「そう、魔神」

キャナは俺に説明してくれたように、犠魂陣が魔神を呼び覚ます引き金になるということを丁寧に語って聞かせたあと、メイアにこ

んな質問をした。

「一つだけ教えて欲しいのよ。 あんた、どうして犠魂陣に手を出したの？」

「それは……」

答えに詰まっているメイア。

回答を催促することをせず、キャナはひたすら彼女が何か言い出すのを待っている。

狭いボロアパートの一室に流れる、変な重苦しさ。

フライパンの中で炒められている野菜の、ジュージューという音だけがはつきりと聞こえてくる。

俺は黙って、思い出したようにフライパンを揺する作業に専念している。

「……どんな術者にも劣らない、強い魔力を手に入れたかったの、私」

しばらくして、メイアがおもむろに言葉を発した。

わかりすぎるほどわかりやすいくらい、キャナの想定通り。

子供がおもちゃを欲しがって人目をはばかることなく泣きわめくように、メイアはあと先のどういうことも考えず犠魂陣という悪魔の手段を選んできました。

禁忌に手を出したというのは、そういうコトだ。

「禁忌だっというのはもちろん知っていたし、他者の魂を奪うことに抵抗がなかったワケじゃないの。だけど、使わずにいられなかった。魔界府に行くって自分から希望したのは、そこにいる優れた術者達を犠牲にすればそれだけ強い魔力が得られると思ったから。どうしてそこまでして強い魔力が欲しくなったのか、それは自分でも

よくわからないんだけど、今になって思うのは」

いかにも悲しそうな声で、メイアはぽつりと言った。

「結局、キャナのことが羨ましかったのよね、私……」

心が間違った方向に曲がってしまっただけというのは、得てしてそういうコトなのだろう。

ものすごく重大なんじゃなくて、ごくごく簡単な理由。ちょっとした感情レベル、みたいな。

だから、誰でもそうなる可能性をもっている。

だったら心を真っ直ぐに保ち続けるためにはどうしたらいいのか。

「もう、いいわ。あんたが魔神を呼び覚ましてしまったコトを、あたしは今さうどうこう言うつもりはない。ただ、メイアがメイアじゃなくなってしまった理由を知りたかっただけ。怖いものね、嫉妬って。ただそんな心の働きがあっただけで、あたしもあんたも死にかけたんだし、ついでに伝説の化け物まで呼んでしまったんだから。でも今、あたしはあんたを恨んでないわ」

「どうして？」

「こーちゃんっていう、人間と出会うことができたから。こーちゃんのおかげであたしはあんたに対抗する術を身につけられた。魔界にいた時よりもあたし、成長できている。もうちょっと頑張れば、きっと魔神とだってやり合えるわ」

「……」

まったくもって簡潔に、キャナが語ってくれた。そう。

独りぼっちにならないこと。

誰かをうらやんだりするのではなく「自分は自分」だって、強い

気持ちをもつこと。

例えばそれは、森と同じだ。

木が一本だけで立っていると、強い風が吹いたりすれば倒れてしまふ。

かといって、一本一本の幹がしっかりしていないと、周囲の木が曲がったり倒れたりしたら、一緒になつて曲がったり倒れてしまふ。今の俺、別に立派でもないし優れてもいない。

だけどこうやって生きていられるのは、おじさんやおばさん、エクスカリバーやエロスケベ（こいつは多少疑問が残るけど）、肉屋のおばちゃんとかカネ婆、そしてキャナ、みんなに支えられているからだ。独りだったら俺、どうなっていたかわからない。

そついう意味の何事かを、キャナはメイアに伝えたかつたのだらう。

二人のやり取りを、背中では聞いている俺。

魔女同士の突っ込んだ話は一区切りらしい。

キャナとメイア、二人の関係に関わる中身だから、敢えて立ち入らないようにしたのだ。

彼女達が元の鞘に納まるために、俺ができることはたった一つ。

俺は三人分の食器をトレイに乗せてくると振り返り

「うおい！ まず是一緒にメシでも食おうぜ。顔突き合わせてメシ食えば、心の距離も近づくつてモンだぜ？」

「あ……！」

メイアは自分が素っ裸だったことに気が付いたらしい。がばつと跳ね起きるなり、慌てて手で胸と下を隠した。

その恥じらいようが可愛くもあり、それ以上にエロすぎだが、傍にいるキャナは事も無げに

「こーちゃんはねえ、あたしにタマシイ半分くれたのよお。だから

あ、あたしはこーちゃんのものでえ、こーちゃんはあたしのもなの！」

「え……？　ってことは、キャナ、あの人と……」

「そーそー、あたしとこーちゃん、一つになったんだもん。だからメイア、ハダカ見られたって、どうってコトないない！　安心しなよ」

むふふ、と笑みをもらした。

いや……俺としては大いにどうってコトあるんですけどね……。ちよつとでも（股間に）その気配を見せようものならキャナにチヨン切られかねないから、必死に堪えておるのだが。

「そう……。そうだったんだよね……」

恥ずかしそうに俯いていたメイアだったが、やがて表情を緩め

「やっぱり、ちよつと羨ましいかも……」

そっか。

そのでかい胸の内側には　ぽっかりと大きな穴が空いてたんだな。

嫉妬は孤独を生み、孤独は心を侵食する。

だけど、悲観することないんだ。

どんなに深くて大きくなった、埋められない心の穴はないから。

その14 三人の食卓

三人で囲む食卓。

キヤナはいつもの通りとして、メイアもまた俺の作ったメシを食ってくれている。

食材が何もなかったからちょっと後ろめたさがあったものの、気にするまでもなかったようだ。

なぜなら

「こーちゃん、おかわりー！」

キヤナが茶碗を差し出すと

「あ、私も……」

メイアもまた、俺の必殺「ネギめし」をおかわりしてくれるという。

何のことはない、炊きたてのコメの上に細かく切ったネギとかつおぶしを乗せただけの代物だが。

しかし、あなどるなかれ。

これに醤油を垂らして食うと絶品なのである！ もしくは麺つゆ、焼き肉のタレでも可。

ネギの辛みとかつおぶしの香ばしさ、そして醤油が絶妙なバランスで白米とからむのだ。

「……はいよ。多めに炊いたから、まだおかわりはあるぜ」
「うんっ！」

につこり。

これが本当のメイア。

完全に癒し系。

こんな可愛らしいコがついさっきまで魔神に侵されていたというのは、にわかに信じがたい。ってか、魔界にいた頃はキャナとつるんで魔界衆をバツタバツタと殲滅していたんだよな。どんな力オして破壊魔法をぶちかましていたんだろう。ちよつと想像できない。

ところで 当然なハナシだが、メイアはちゃんと服を着ている。ズタボロになった制服じゃなくて、女の子らしい普段着。

彼女はキャナが使えない類の魔法を二つばかり扱うことができた。再生転換と広域催眠。

これらを使うことによって、イーペーへの潜入が可能になったのだ。

再生転換というのは物質に対して影響を与えるもので、錬金術的にいえば再構築。物質を瞬時に分解して類似したものに構築してしまふ。例えば、ボロボロの古着にこの魔法を使えば新品に近い服に再生できるし、あるいはメイアのイメージによって多少デザインをチェンジすることすら可能なのである。ただ、同等の質量という制限がつくから、パンツ一枚を毛皮のコートに変えるとかいうことはできない。ついでに、生命体を再生転換させることも不可能なようだ。

それから広域催眠というのは、読んで字の通り。

広い範囲の生命体に催眠をかけるという魔法。人だけでなく、犬でもバツタでも鯖でも可、らしい。

つまり、再生転換によって制服を手に入れ、広域催眠によって教師や生徒達に自分をイーペー生だと信じ込ませたのだ。ある意味、破壊魔法よりも恐るべし、である。

ただ、メイアのこの魔法によって俺の懸案事項が一点解決をみた。

キャナの服。

俺の服の幾つかを、キャナ仕様に転換してもらったのだ。

これからはおじさん家から佐奈さんの服を持ち出してこなくてい

い。

「メイアっていいよねえ。あたしもこういう魔法、使えるようになるーい」

キヤナも素直に喜んでいる。

ふわっとしたシャツとお洒落なショートパンツ姿になった彼女。

うんうん、着たきりスズメの下着姿より全然いい。

そのほかにも何枚か生成してもらったから、しばらくは着る物にも困らないだろう。

正直、助かった。

キヤナがやってきてエンゲル係数うなぎ登り状態だったから、ホントに金なかったし。

「……ところで、メイアさん」

「あ、メイ、でいいよ？ 私、あまかいめい、って名乗ってたよね？」

まだその名を使うのか。

まあ……別にいいけどさ。

「魔界には戻れないんだろ？ 転移するための魔力も手に入らないし、帰ったところで居場所がないんじゃないか？」

「うん、そうなのよ」

「これからどうするんだよ？ 行くアテ、あるのか？」

キヤナは俺の部屋に住みついたからいいものの、メイちゃん（以後、そのように呼ばう）は独りきりだから当然住むところなんかないハズ。

と、思ったのだが……。

「それが、親切な人間のお婆さんに出会ったの。私、その人に催眠をかけてしまったから、私のことを家族かなんかだと思ってるのよね。悪いかなとは思ってたけど、お婆さん、独り暮らしだったみたいで、私がいると喜んでくれるの。しばらくはそこで厄介になろうかと思ってる」

なんだソリヤ？

半善半悪、って感じ？

魔法を使っただけ騙しているのはただけじゃないが、独り暮らしの年寄りが相手じゃ、な。

軽く住み込み介護みたいなものだから、まあ目をつぶっておくとするか。

とはいえ、その婆さんがポツクリ逝ったところで再生魔法じゃどうにもならないけど。

「そっか。その婆さんの家、どこにあるんだ？」

「それがね、さっき気が付いたんだけど、この近くの」

ほお。

そりゃまた、因果なことだ。

近所っていつでも何十軒もあるから、どのお宅か訊いたところではわからない可能性大だけど。

メシを食い終わった俺は、ずっとお茶をすすった。

メイちゃんは何かを思い出そうとしていたが、急にポンと手を打って

「そうそう、思い出した。お婆さんの名前ね……大井カネさんっていった！」

「ぶっ！！」

思わず口に含んでいたお茶を吹きだしてしまった。
よりによってカネ婆かよ！

あのババ……いやいや婆ちゃん、魔法で洗脳されてやがったのか……。

どっからか仕入れてくる謎の特売情報も、もしかして魔法の力だとか？

まあ、それは根も葉もないハナシとして。

一緒にメシを食って心地がついたメイちゃんは、カネ婆の家へと戻っていった。

部屋の中、俺とキヤナの二人きり。

俺はキッチンで食器洗いにとりかかろうとした。

そしたらば、何となくキヤナの様子がおかしい。

しみりとした力才をしている。

「……ねえ、こーちゃん」

「あ？」

「あたしね、もしこーちゃんが、メイアに『ここで一緒に暮らそう』とか言ったら、どうしようかと思ってたの。メイアは大事だけど、あたしは……こーちゃんと二人きりで暮らしていたかったから」

心底安心した顔をしている。

まあ、気持ちはわかる。

そういうキヤナの心の動き、メイちゃんに対して薄情、とかいうのはちと違う。

彼女にとってメイちゃんは肉親を魔界衆に殺されたという同じ悲しみを背負った同志であり、同じ魔族。ほとんど運命共同体みたいにして過酷な魔界で生き延びてきた。

だからといって、何もかも共有しあえるってワケじゃない。

キヤナにはキヤナだけの、メイちゃんにはメイちゃんだけの幸福

とか悲しみつてもものもあるのだから。

キヤナは人間の世界にやってきて、自分だけの幸福を見つけた。それは、百年以上魔界にいても巡り逢うことができなかったもの。簡単に手放したくないのは当然だ。

そして成り行きとはいえ、それを彼女に渡したのは　俺なんだし。

俺には、彼女の幸福を最大限守ってやる責任がある。相手に対して責任を感じるようなのは愛じゃない？知るかよ。

恋愛プロ気取りなバカ芸能人とかの言い分なんか知ったコトじゃねエんだ。

「わかってるよ。だから、アテがあるのかは訊いたけど、ここに住めって言うつもりは最初からなかったさ」

「……ホント？」

「ウソなんか言うかよ」

いきなり抱きついてきたキヤナ。

「こーちゃん、だーい好き！　愛してる！　ずーっと、一緒にいようね！　死ぬときも一緒よ！」

ネコみたいにごろごろと甘えている。

死ぬ時……ね。

魂のポリウムが等分されてるから、恐らくそうなるだろうけど。まあ、あらためて思う。

やっぱり俺、キヤナのコトが好きだな。

そのあと、成り行きながら　俺達の間でひと月ぶりに三度目が交わされた。

翌朝。

「……火の元、よし！ ガスの元栓、よし！ テレビの電源、よし！ ついでに……俺の身だしなみ、これはもつともよし！」

いつものチェックを終え、俺は部屋を出た。

六月に入ったこともあり、朝から日差しが妙に暑い。

キヤナはお休み中。

昨晩は遅かったから、今朝は俺が起きて活動していても全然目を覚まさなかった。

色んな意味で安心要素が増えたせいか、心おきなくお楽しみ……ってカンジだったし。

メシはいつものように用意してあるから、起きればわかるだろう。カバンを肩に担いでとてと階段を降りていくと

「……おはよう、風間クン！」

いきなり挨拶の声が。

「あ？ メイちゃん？ お、おはよ……」

両手でカバンを持った彼女が立っていた。

あれから再生転換したらしく、新品のようにまっさらな制服を身にまとっている。

俺の姿を見て、にっこりと例の癒し系スマイル。

「ど、どーかしたのか？ 忘れ物とか？」

「うっん、違うよお。風間クンと一緒にっこうと思って待ってたの。私、すぐそこに住んでるし」

「そ、そうかい」

さり気無い風を装いつつ通りに出て歩き出すと、彼女もひょこひょこ後についてきた。

何が嬉しいのか、にこにこしている。

……いかん。

咄嗟に思った。

あくまでも俺の直感に過ぎないが、これはどうも……あんまりいい風向きじゃない。

もちろん、メイちゃんに好かれたとか、男目線の自分勝手な妄想にはしまったワケではなく。

言ってみれば、彼女との友好度合いが高まったことにより、周囲に色々とめんどくさいコトが巻き起こりそうなの、そんな予感だ。

神様仏様、そしてキヤナ・ルーフェル様。

どうか、俺に平穏かつ平和で幸福な夏がもたらされますように。

その15 危険なエンジェル

メイちゃんとはできるだけ一定の間合いを保つようにしよう。
思いつつ俺は歩いている。

迂闊に仲良くしてしまうと、妙な噂をたてられたり面倒くさいコトに巻き込まれるようなニオイがぶんぶんする。まかり間違えば、キヤナが悲しむ。……いや、勢いあまってメイちゃんを殺しかねん。そんな俺のイヤーな予感を知ってか知らずか、ぴったりとくっついて歩いているメイちゃん。
可愛いのはいいんだけどさ。

このコは恐らく 何かを呼び寄せる体質をもっているような気が、すごくする。

それが何かと訊かれても上手く説明できないケド。
お。

肉屋のおばちゃんだ。

仕入れてきた肉を運んでいるな。

「おばちゃん、おはようございます」

「あら、孝四郎君、おはようござ……」

肉屋のおばちゃん、俺達を見るなり口をあめぐりで、手にしていた冷凍肉のカタマリがするっ

「……っ！」

慌てて飛び込みざま、間一髪キャッチ。

落としたら売り物にならないじゃねエかよ。

「おばちゃん、あぶないっての！ ちゃんと持ってなよ！」

「あ、ああ、ごめんね。孝四郎君があんまりキレイなコと一緒にいたものだから、つい」

メイちゃんの美しさに度肝を抜かれたようだ。

その彼女、おばちゃんに向かってゆったりと頭を下げつつ天使のスマイル。

「うちのガッコーに転入してきたんだよ。ワケあって、お知り合いになったんだ。ああ、帰りに寄るから。鶏肉、なんかあったらとつといてね」

「あ、え、メンチカツね。わかったよ。いってらっしゃい」

だから鶏肉だったの。

メンチカツも悪くはないけど。俺的には牛肉コロツケの方が好きだ。

ってか、同性にも動揺を与えるとは……。

メイちゃんの美貌恐るべし。

「いい人みたいね、あのおばさん」

「だな。よくおまけしてくれるし」

それきり会話も弾まぬまま（わざとだが）、車の多い大通りをイーペー目指して歩く俺達。

途中に「魔の信号」と呼ばれる、いや、俺が呼んでいる地点がある。

理由その一、歩行者側の時間がやたらと短く、ひっかかる可能性がきわめて高い。

理由その二、俺を狙ってくる他校生がバカの一つ覚えで待ち伏せしている場所だから。

ちなみに、昨日は生高のバカども約六名ばかり、キャナに一撃で

殲滅されている。

「　　オイ！　風間！」

……ああ。

やっぱりお待ちでしたか。

今日は私立安岡高校、通称「アンコー」の奴ら。

三人か。ちよっと少ないな。これって三暗刻（サンアンコー）……？

生高や雲高、タバコーにセッターといった学校は不良率が比較的高いものの、アンコーでそういうワルを気取っているバカはほんのちよっとしかいない。だから、市内不良勢力分布図的にはまったくといっていいほど生息域が狭い。ファミコンの三国志でいえばこーそんさんの領国よりまだひどいんじゃないだろうか。

だいたい、ワルぶり方からしてなっていない。

学ランはボタンフルクロース、あるうことか詰め襟までぴしつ。

下に目をやりやストレートのズボンだから、ポツケに突っ込んでいるその手が窮屈そう。

髪の毛だって、一見フツの男子高校生。染めもしてなけりゃソリもない。

不良っていうよりもむしろ「並んで歩いている生徒会役員」もしくは「僕達、大学合格目指してなんちゃら予備校通ってますCM学生」にしか見えないツツの。

以前、道を歩いていたら「お、イーペーの風間だ」とかって道をふさがれたので、俺の拳が出動した。

が、可哀相なくらい不良のオーラがないから仕方なく、七十パーセントカットにしておいたのだが……それでも奴らは卒倒した。傍目から見れば、まるで俺が苛め倒しているようだったろう。

本日はどうもそのお礼にいらっしやったらしい。

「この前はよくもやってくれたな。今日は仕返しにきたぞ」

ちなみに俺、こいつらの名前は知らない。

左から順番にA、B、Cとしておく。なんかドラクエのモンスターだな。

今のはCが発したマジ文句である。学芸会の台詞じゃない。するとB

「俺達、マジメだからな。お前を倒して、それで停学になってもいいと思っっているんだぞ」

すでにこの時点で俺、腹が痛くなっていた。

……心の底からマグマのようにぶくぶくと、笑いが沸いてきて堪えるのに精一杯。

なのに、Aときたら

「朝からそんな美人の彼女連れて歩きやがって。彼女の目の前でめちゃくちゃにしてやるよ」

「……ぶっ！ あっはっはっは」

ダメだった。

笑っちまった。

「てめえ！ 何、笑ってるんだ！？ バカにしているのか！？」

「ひーっひっひっひ」

もう、腹の皮がよじれて死にそう。

なんだその「停学になってもいいと思っているんだぞ」ってのは。トドメに「めちゃくちゃにしてやるよ」ときた。

脅し文句にも何もなっていないどころか、ほとんどコント。

こいつら、真性のアホだ！

絵に描いたワルを演じようとして、出来上がったのは子供のお絵かき。

のたうちまわってげらげら笑っている俺の背後で、不思議そうな顔をして立っているメイちゃん。

「……風間くん？ この人達、お知り合い？ っていうか、どうしてそんなに笑ってるの？」

答えようと思ったけど、ムリ。

笑いが止まらない。ツボにきちまってる。泣けてきた。

俺がそんな状態でいつまでたっても相手にしないものだから、三暗刻はいよいよムカついたらしい。

Aがずいっと前に進み出て

「風間！ 許さないぞ！ こうなったらお前を倒して、その彼女を連れていくからな！」

「……私を連れて行くの？ どこへ？」

メイちゃんが静かに応じた。

この時、俺は気付くべきだった。

彼女は一切「ウケて」いないというコトに。
が。

「え、えーっと、その……」

想定外の返答に面食らったA君は、困ったようにB、Cの方を見た。

Cもまた「そんなこと訊かれても……」みたいな表情をただけである。

それではさすがにカツコがつかないと思ったのか、Bは止せばいいのに

「よ、よし！ ゲーセンだ！ ゲーセンに連れて行くからな！ どうだ！？」

ゲ、ゲーセンって……！

ここまでくると、声も出ない。

呼吸困難に陥ってしゃがみこんでいる俺。

と、メイちゃんがすつと俺の横にやってきた。

「ゲなんとかっていう場所、私にはよくわからないわ。でも、とりあえずわかった。……あなた達、風間クンを狙っている人間達でしょう？」

「そ、そうだって言っただろ！ 俺達は、風間が来るのを、八時からここで待っていたんだ！」

「そう……。じゃ、風間クんに代わって私が相手になるから」

その一言で、ようやく俺は気がついた。

「……メイちゃん！ ちょ、ちよっと待て！」

叫んだ時にはもう遅い。

バチバチツと空気を引き裂くような音が聞こえた次の瞬間。

間欠泉のように、地から天空へむけて白く大きな三本の光が吹き上げた。

「ばわわわわわわわっ」

「どびびびびびびい」

「れべべべべべべ」

強烈な電撃。

あっと思ったときにはもう、三暗刻の五体を貫いていた。

すぐ目の前に雷が落ちたのかと見まがうような、すさまじい連続フラッシュ。

三暗刻A、B、Cはあまりの衝撃にがくがくと身体を震わせ、言葉を発することもできない。

それが数秒間続いてようやく収まると同時に、三人は白目をむきつつその場に崩れ落ちた。

辛うじて三暗刻を殺さなかったのは、幸運中の幸運かも知れない。

が、メイちゃんが放った電撃が影響したのは、何も三暗刻だけではなかった。

正面の信号機が突然、チカチカと点滅を繰り返したと思いきや点かなくなってしまったのだ。

周辺のオフィスビルの照明が一斉に消え、街頭放送はぷつりと途絶えた。

突如街を襲った異変に、道行く人達は立ち止まって不審そうに周囲を見回している。

交通をつかさどる信号機が機能しなくなったからさあ大変。

交差点を行き交いできなくなった車が渋滞を引き起こし始め、あちこちからクラクションがブーイングのように鳴り出した。

…… やっちまったよ。

電撃が強烈過ぎて、付近の送電をストップさせてしまった。

この分だと、近くを走っている電車も停まってしまっているのではなからうか。

俺は立ち上がりざま、メイちゃんの腕をつかんで駆け出した。

「風間くん！？ ど、どうしたの？ 私、まだトドメを」

「ささんでいい！ とにかく、逃げるんだ！」

こうなりや、逃げるしか手がないつつーの。

バレたらタダじゃ済まない。

あのキヤナだつて、さすがにここまでやったコトなんてない。

ってかメイちゃん　俺が予想した通り、早くも仕出かしてくれ
ちまった。

カワイイ顔して、ろくでもない魔女だ。

その15 危険なエンジェル（後書き）

お気に入り登録、評価をくださった方、ありがとうございます！
書き溜めますので、次話の掲載は10/18です。

その16 メイちゃん騒動

ほうほうの体で学校に着いた俺達を、案の定な事態が待ち受けていた。

校門をくぐるなり、何やら殺気と嫉妬に満ちた視線がレーザーのように、俺を目掛けて飛ばされてきているのがわかる。

大体の察しはついている。

ここまで来る途中、メイちゃんと並んで歩いている姿を大勢の野郎どもに目撃されているからな。

ってか、俺は彼女に何ひとつアプローチなどかけていないのだが……。

メイちゃんが勝手に俺を玄関先で待ち伏せた挙げ句、後についてきたのだという客観的事実を、誰か俺に釈明させる！

全校集会でも校内放送でも、許されるならどこでも喋ってやるぞ！

「コウツ！ 貴様というやつはあぁっ！」

と、玄関の方から土煙とバカ声を上げながら爆走してくる汗臭いイケメンがいる。

朝っぱらから練習三昧のエロスケべ。

臭いから近寄らないでいただきたい気持ちで一杯なのだが。

「キャナおねーさまというものがあひながら、明ちゃんにまで手を出しおって！ ゆるっさァん！ この江口祐平様が、正義の鉄槌をぬおっ！？」

どこぞの伝承者よろしくかまされてきた飛び蹴りを、ひょいと避けた俺。

エロ性拳伝承者はそのまま道端の植え込みへと突っ込んで果てた。

「……おめーの場合は正義じゃなくて性技だろーがよ」

朝からアホの相手をしているヒマはないのだ。

後を振り返らず校舎の中へ急ぐ。

「じゃあ、また後でね！ 風間クン！」

天使の微笑を残し、メイちゃんはクラスの女子達に囲まれながら去って行った。

彼女とはクラスが違うから、ここでお別れ。

やれやれ。

やっと災難の元凶がいなくなってくれたか……思っていると

「よオ、風間！ 事情を聞かせてもらおうじゃねエ？」

「そうそう。何で天海と仲良くなっちゃってんの？ カノジョ、昨日来たばかりなのに」

上履きに履き替えたところで、背後からとっ捕まえられてしまった。

同じクラスにいる小野寺と高橋。

小野寺はデラックス、高橋はミスターのあだ名を冠されている。

服装とか外見にこだわる性格と小野寺の「でら」を掛け合わせてデラックスになり、高橋は奇妙な存在感をかもしだしているところからミスターとなったようだ。が、これはどうでもいい。

この二人はエロスケベに比べれば、まだ他人の発言に耳を傾けることができる連中ではある。

「……たまたま、住んでるところが近かったんだよ。で、通学路に他校のアホどもがうろついているから護衛してやっただけだい。妙な

誤解をするな」

するとデラックス、ため息をつきつき

「なんだソリヤ？　ずいぶんとまあ、うらやましいハナシだなア、おい。確かお前んトコ、キレイなおねーちゃんが住みついてんだろ？　二刀流……じゃなくって両手に花かよ」

ある意味「二刀流」ですがね。

キヤナとメイアが揃えば向かうところ敵無しだもの。

とはいっても、別にメイちゃんと何かあるワケではない。

そりゃまあ、成り行きで裸を見てしまったけれども。

「とにかくだな、お前等が妄想しているような事実は一切、ない。だから、学校中にヘンな噂を流さないでおいてくれ。ウソ八百あれこればらまかれると、めんどくさくてしゃーないんだよ」
「じゃあ仮に、だぞ？　今のお前の発言を天海が聞いても、彼女にはどういふ影響もないということでもいいんだな？」

ミスターのこの念押し、微妙な含みがある。

要は、校内（とは限らないが）の野郎どもがメイちゃんにモーションをかけたとしても、あと腐れはないだろうな、と質問しているようなものだ。

もしくは「メイちゃんはフリーなのか？」という意味でもある。
俺にとっちゃ知ったコトではないが、みんなは肝心な事実を知らない。

メイちゃんは魔女。

ヘタにちよっかいを出したが最後、アンコーの連中よろしくコゲてそれまでになること請け合い。

ま、そうなったところで自業自得。

キレイな花にはトゲがあると知れ。……いや、有刺鉄線か？

「んだ。一切影響はない」

即答した途端、二人の目が「きらーん」と一閃したのを、俺は見逃さなかった。

あれま。

密かに狙ってるのね。

どうなっても知らないよ。

二時間目が終わった休み時間に入ってすぐのこと。
トイレに行こうと立ち上がった時、急に校内の電気が一斉に消えた。

「あ、あれ？ 停電？」

「工事とかやってんじゃないの？」

みんな、めいめい好き勝手に憶測を並べている。

が、俺は一人青くなった。

こんなタイミングで停電が起きるとすれば、原因はアレしか考えられない。

（やりやがった……）

慌てて教室を飛び出した。

まずは六組の人間にメイちゃんの居所を尋ねまくり、どうやら別棟に行ったようだとの情報を得た。

目撃した人間の話では、三組の男子がやってきて連れ出したらしい。

「サンキュー！ 助かった」

礼を言いつつ駆け出そうとすると、六組の女性陣がニヤニヤしながら

「なあに？ 風間君、明ちゃんの居場所なんか訊いてどうするの？
もしかして、告白？」

「だよねー。明ちゃん、すごくカワイイし」

「早く見つけた方がよくない？ さっきバドミントン部の佐藤君が
誘って連れていっちゃったから、先に告白されちゃうよ？」

……たわけ。

物を尋ねた相手が悪かったわ。

「違う。断じて違う！ コトは人命に関わるんだ！」

「は？ 人命？ 何それ？」

ワケがわからないといった力オをしている女子連中を放っておいて、俺は別棟へと急いだ。

イーペーの校舎は客に出すときのようなかんみに本棟と別棟が
並んで建っていて、渡り廊下でつながっている。本棟は普通の教室
があり、別棟は美術室とか音楽室、それとか化学実験室みたいな特
別教室が入っている。

だから、そういった授業がない時はあまり生徒達がうるつかない
から、絶好の告白スポットとして（イーペーでは）有名なワケで。
本棟から渡り廊下を経由して別棟に行き、メイちゃんの姿を探し
回った。

四階から順番に下へ向かって搜索していき、一階までやってきた
俺。

階段を段飛ばしで飛び降り、廊下の角を曲がった時だった。

「……………」

果たして　メイちゃんはいた。

足元に、一人の男子が倒れている。

三組の佐藤たらいいう野郎。

三暗刻の奴らを除けば、メイちゃんに言い寄ろうとして蹴散らされた最初の犠牲者。

ってか、恐らくこいつは彼女に強引な接近を試みたのだらう。

さもなくば、メイちゃんの魔法が炸裂するハズがない。

バカなヤツ。

哀れな佐藤、身体中のあちこちからぷすぷす、と煙を上げながら、小刻みにぴくぴく痙攣している。

一瞬、重傷でも負った（正しくは負わされた）かと背筋が冷たくなったが

「し、し、し、し、しび……………れた……………」

よほどビリビリやられたのか、うわごとのように「しびれた」を繰り返してやがる。

どうやら、殺されずに済んだようだ。

軽くこんがり程度で許してもらったか。

ホッとしかけている俺の方へ、メイちゃんがゆっくりと振り向いた。

やってきたのが俺だということに気が付くと、ほんわかと微笑みを浮かべ

「まあ！　風間くん！　私のことが心配できてくれたの？　ありがとう！　私は大丈夫よ」

「いや……そうじゃなくて……」

足元に倒れている野郎のコトを心配してたんだよ。

それからというもの。

休み時間が訪れる度に学校中が停電になった。

教師達は校舎の電気系設備の故障を疑って業者を呼んだようだが……根本的な問題の解決につながるハズがない。なにせ全て魔法のせいなのだから。

俺はというと、停電が起こるとメイちゃんを探して学校中を駆けずり回るハメになっていた。

恐らく大丈夫だとは思いつつ、万が一彼女が手加減を忘れてしまっていたらえらいコトだ。

人類史上初の「魔女による殺人事件」発生。

マジでシャレにならん。

それだけは避けたい……。

そんな俺の気苦労を知ってか知らずか、メイアは涼しい顔をして

「やだ、風間くんたら！ そんなに心配しなくても大丈夫だよお」

心配させてるのは誰だよ。

ともかくも、犠牲者になった連中の命に別状がないのは何よりだが……。

しかし。

下心丸出しの野郎どもをわざわざ気遣った行動のつもりが、いつの間にかあらぬ噂になってしまっていた。

「ねえねえ、二組の風間君、天海さんのことを追いかけているみたいよ」

「あ、あたしそれ見た！ すっごい必死な力オして『明はどこだ？』とか訊き回ってた」

燎原に火を放ったようにして、噂はあっという間に全校に広がった。

勘弁してくれ。

なあにが悲しくて、メイちゃんの尻を追いかけて回さねばならんだ！

事実無根だ、事実無根！

いいや、これはもう名誉毀損だろう！ 裁判員の皆さまカムヒヤ

ー！

ところが。

「ねえ天海さん、風間君って、実際どうなのよ？ ケンカだけはすっごい強いケドさ」

クラスの女子達からそう質問されたメイちゃんは、フルスマイルで即答したらしい。

「うん、風間クンのことは好きよ。私のこと、助けてくれたし」

おーい！

なんだその誤解を招くような言い方は！

ってか、すでに誤解招きまくりだし！

俺は慌てて打ち消し工作に乗り出したが、人の口に戸は立てられないモンじゃない。

彼女のコメントはどこかで曲解され、即刻「風間と天海は付き合っている」という情報に変化して校内を駆けめぐった。

その途端、

「風間ア！ 貴様、どうやって明ちゃんを落とした！？」

「俺は絶対に認めんぞオ！ 天海の清純を汚しやがつて！」

「全校男子の前で土下座して詫びろ！ さもなくば死ね！ 死刑だ！」

たちまち俺の元に殺到した野郎ども。

どいつもこいつも目が血走り、全身から禍々しい殺意と怨念と呪いが漂っている。

ってか、何で「死ね」とまで罵倒されねばならんのだ？

「だーかーらー、知らんといつとろーが！ 俺はメイちゃ……ああいやいや、天海に付き合ってくれといったこともなければ、付き合ってくださいと言われた覚えもないっ！ これは謀略だ！ 罠だ！ 貴様ら、この清廉潔白健全青少年な俺のことより根も葉もない噂を信じるのかっ！？」

「おお、噂を信じるわ！ お前ならやりかねん！ このド淫乱男め！」

淫乱で悪かったな。

どうせ俺はキャナとエッチしましたよ！

おねーさまとカラダを一つに合わせた甘美なひとときは死ぬまで忘れないわ！

それがどーした！？

……じゃなくって。

ダメだこりゃ。

誰も俺の無実を信じちゃくれねエ。

で、六時間目。

ぐったりして机に突っ伏している俺に、

「……なあ孝四郎、いいのかい？ 君んトコ、キャナさんがいるん

「じゃなかったっけ？」

エクスカリバーが心配そうに尋ねてきた。

「知るか。俺は何もしとらんっーの……」

斜め前では、エロスケベが放心状態で固まっている。

……コゲくさい。

ヤツもまた、犠牲者の一人になってしまった。

よりによって、言い寄っただけでなく、畏れ多くも彼女のG級バストに手を触れようとしたとかしないとか。

さすがに身の危険を感じたメイちゃんの電撃、やや強め。

あれ？

確かエロスケベのヤツ、女の魅力は尻と脚だとか言っただけでなかったっけ？

そうして不条理な一日は終わり、俺は背中に強大な殺気を感じながら学校をあとにした。

結局、俺に対する誤解は晴れせずじまい。

何でって

「今日はありがと、風間くん！ ホント、優しいのね！」

ニコニコ顔のメイちゃん。

さっさと逃げだそうとした俺を待ち伏せていた彼女、後ろにぴったりとくっついてきやがった。

これはもう、致命的。

もはやどういう言い逃れも通用するまい。

全校の男子を（何一つ悪くはないのだが）完全に敵に回した俺。

力なくとぼとぼと歩いていると、

「疲れてるみたいね？ 大丈夫？」

メイちゃんが声をかけてきた。

誰のせいだと思ってるんだ。

とはいえ、あからさまに「お前のせいじゃ、ボケー！」とか、
口が裂けても言えないから

「なんだかさあ、俺とメイちゃんが付き合ってるのかってみんな思いこんでるんだよ。誰が広めたかは知らんけど、どいつもこいつも催眠にかけられたみたいに」

そこまで言い掛けて、俺はハッと気付いた。

「そうだ！ メイちゃん、頼みがあるんだけど」

「私に？ うん、できることならいいよ」

何のコトはない。

メイちゃんの「広域催眠」を全校生徒に影響させて、俺とメイちゃんとは何でもないって思いこませればいいだけのことだ。

どうしてそんな簡単な事実に気が付かなかったんだ。

が、俺の話を聞き終わった彼女は事も無げに

「ダメよ」

「いつ！？ なっ、なんでエ！？」

「広域催眠は、重ねて影響させることができないのよ。一度「魔効解除」しなくちゃ。……でも、解除しちゃったら私、学校に通えなくなっちゃうし、お婆さんの家にいられなくなっちゃう。だからダメなの。ごめんね？」

「……」

それからというもの。

しばらくの間、俺は学校中の野郎連中から白眼視されつつ、肩身の狭い思いをしながら通学することを余儀なくされたのだった。

皮肉なことに、唯一温かい目で俺を見てくれたは、あのエロスケベの野郎だったのだが

「コウ、お前もさぞかし大変だろう。だけど、あの凶暴苛烈な電撃女の魔の手から校内の男子を救えるのはコウ、お前しかない。どうか上手く彼女を宥めて、俺達がいとも巨大な胸と天使の微笑が見られるように頑張ってくれ」

……ん？

なんだかおかしな励まし方をされているような気がするぞ。

ってかエロスケベ、いつから巨乳派に転向しやがったんだ？

強い電撃を食らったせいで脳細胞の働きがおかしくなっちゃったのだろうか。

ま、こいつの脳みそは元から腐ってるケド。

ちなみに。

メイちゃん騒動が巻き起こった日の帰り、肉屋に立ち寄ると

「ああ、孝四郎君。とつといたよ。頼まれたのはこれだったよね？」

そう言っておばちゃんは、揚げたての鶏唐を差し出してくれた。

あーまあ……確かに、鶏の肉ではあるんだけど……ねえ。

キヤナが喜んで食べたからいつか。

その17 いつか、二人で

梅雨。

開け放たれた窓から湿った匂いが部屋の中へ舞い込んでくる。

外の音がモロ聞こえだからあんまり盛大に開けておきたくはないのだが、そうしないとこのボロアパートの一室は蒸し風呂を通り越してサウナ状態になりかねない。

明日は月曜日。週明け早々数学のテストがある。

せつかくの休日だというのに、勉強を余儀なくされるとはこれいかに。

最初はどうでもよかったのだが、エクスカリバーが親切にノートをコピーし、わかりやすいよう赤で要点まで書き入れて渡してくれたから放置するワケにいかない。

一度軽く目を通すくらいにしておこうと思っていたら、これが案外わかりやすい。

エクスカリバーのヤツ、すごい才能だな。

教科書とか参考書を出版する会社に入れば出世とかできるかも知れない。

それはともかく、次々わかっていくものだから、気が付けば本格的に勉強を始めてしまっていた。

珍しく（これが雨の原因かも）カリカリやっている俺の傍で、暑さにうだつたキャナがゴロゴロ。

まわりつくような不快さがやりきれないようで、メイちゃんに再生転換してもらった服なんかそっちのけの下着姿。

彼女のそういうあられもない格好、もう慣れちゃったけど。

「……ねえ、こーちゃん」

彼女はしとんと降り続く雨粒をぼーっと眺めていたが、つと口

を開き

「人間の世界って、暑いよねえ。あたしがこっちにきた頃は、ちょうど良かったのに」

そんなコトを言った。

俺はエクスカリバーノートに目を落としたまま

「人間の世界全部が暑いワケじゃねエよ。地球ってのは上半分と下半分で気候が真逆なんだ。だから、今この瞬間に凍えてる国もあるってこった。季節が進むと、それが逆転するんだ。半年経てば今度は寒くなる。そんな格好じゃとても過ごせないぜ？」

「へえ。こーちゃんって、物知りなのねえ。こうやってずっと一緒に暮らしていたら、あたしもアタマ良くなるかしら？ うふふ」

何言ってやがる。

魔界人が誰も触りたがらないくらい難解な古代魔術の法則すらさらっと解析してしまうほどの頭脳の持ち主だろうに。

他愛もないハナシだから大して相手にならず、数学の問題を解くことに集中していた。

が、そこでふと湧いてきた疑問がある。

「魔界ってのは、四季の変化とかないのか？」

訊いてみると、キャナは身体全体で「ころん」と転がって俺の方を向き

「暑くなったり寒くなったりすることはないわね。雨が降ったり、風が吹いたりはするケド。それから、空もあるし海もある。でも、こっちの世界みたいに青くはないの。どよーんって、ヘンな色。だ

から、こっちのキレイな青色の空を見た時はすごく驚いたわあ。
あ、でも」

俺のＴシャツの裾を両手でくいくいと子供みたいに引っ張った。

「……まだ、海を見てない」

ホント、無邪気。

最初はツンツン、あるいはおどろおどろしいオーラ全開のコワイおねーさまだったのに、少しづつトゲがとれてきて、今じゃ大体こんなカンジ。

メイちゃんを飲み込もうとした魔神を追い払って以来魔界からの追っ手も来ないから、マジモードのキャナなんか久しく見ていない人間の年齢に合わせてみても間違いなく俺より年上なんだろうけど、とにかく甘えてくる彼女。

学校から帰ってくると

「おなか減ったー！」

とか言いながらテーブルの前でメシが出来上がるのを待ってるし、朝は朝でいつも遅起きのクセに俺が学校へ行こうとすると

「早く帰ってきてよお。キャナ、一人でさびしいんだからあ」

ってじゃれついてくる。

そういうところは、なんか子犬とか子猫みたい。

ただ カワイイよな、やっぱり。

俺、今までずっと「自分自分」でやってきたから、誰かに甘えられたコトなんてなかったし。

かと思えば、時々

「ねえねえこーちゃん。男のコが生まれたら、なんて名前にする？」

とか、こつちがちよつとビビるような事を平気で口走ったりするけれども。

俺はまだ法律上結婚できる歳じゃないんだけどね。

おじさんとかおばさんにも紹介してないし。二人は俺がこんなおねーさまと一つ屋根の下で暮らしているなんて、夢にも思っちゃいないだろう。知ったら、どういうリアクションをとるんだろうか。

それ以前に、魔女と結婚って……できるのか？

キヤナの本籍(?)は魔界だろうし、国籍(という概念自体ないだろう)だって不明。婚姻届なんか書きようもないよな。彼女がこつちの世界で暮らそうと思ったら、一生内縁状態しかないというところか。

まあ、それは今考えなくてもいい。だけど。

もし、このまま何事もなく平穏無事に暮らしていけるとして、二年経てばそういうことにもなるかも知れないんだよな。今のところ、その可能性はきわめて高いのだが。

平穏無事に済まない要因があるとすれば、それは 魔神。

魔界に消えたあいつがどういうことになっているのかは知る由もないが、仮に魔界からこつちの世界へ転移してくるようなことでもあれば、人間世界はタダじゃ済まない。

下手すりゃ滅亡だ。

まあ、そこはキヤナがコツコツ魔封陣の研究とかしてくれてるし、何とかかなりそうな気がしなくもないんだけど。

願わくは、俺達の前に姿を現さないでいただきたい。

あとは魔界衆。

魔神の邪気によって精神を狂わされたメイアがある程度メチャクチャにってしまったと聞いたが、しかし潰滅には至っていないらしい。

い。トップにいた魔界府八術師は彼女の手によって討たれたものの、難を逃れた魔界府所属の連中が虎視眈々とキャナとメイアと狙っていることも想定される。

そうであるとすれば、戦いはまだ終わっていないということになる。

魔界の未来を左右するといわれている古代魔術、魔封陣、そして犠魂陣。

キャナやメイア、それに仲間である魔族達がこれらを上手くマスターして魔界府の暴走を抑えてくれればそれでよし、さもなくば、これからも延々と混乱が続いていく。当然、キャナに安息の時や安住の地はないという話になってきてしまう。

うーん。

まだまだ、気の休まるタイミングではないようだ。

「こーちゃん！ こーちゃんってば！」

「……あ？ 何？」

いつの間にやら考え事の方に意識を持っていかれていて、勉強に身が入っていなかった。

キャナが呼ぶ声ではっと我に返った俺。

彼女はひよいと起き上がり

「雨、やっと上がったみたいよ。でも、また降るのかしら？」

窓から首を出して空を見上げるようにした。

なるほど、雨でけづっていた遠くの景色がくっきりしている。

空一面を埋め尽くしている厚い雲のあちこちにヒビが入るようにして薄くなりかけているのが見える。

この分だと、夜までに晴れていきそうだ。

時計に目をやれば五時を少し過ぎている。

そろそろ、晩メシの支度をしなければ。テストの勉強もひと段落したことだし。エクスカリバーのおかげで、明日はそこそこいけそうなのがする。

俺はよっこらしよ、と立ち上がって冷蔵庫を開けてみた。

……見事に何もない。

これは買い物に出かける必要があるな。

「キヤナ、買い物に行つて来る。そんなにかからないで帰ると思うけど」

そう告げると、彼女はパツと顔を明るくして

「あ！ あたしも行くう！ たまには外を歩いてみたいの」

「ああ。じゃ、一緒に行くか」

「うん」

うさぎのようにぴょんと跳ね起きて俺の傍へ寄つて来た。

「じゃ、いこいこー」

「ちよつと待て。……出かける前に、ちゃんと服を着ろ」

ボロアパートを出てぶらぶら歩いていく俺達。

雨雲は消えていきつつある。

雲間からところどころ日が差し始め、まるでスポットライトのよう。

暗く重く湿っていた街がにわかにも明るくなっていくようだ。

「魔法で空飛んでばっかだったケド、歩くのもいいわね。見えてくる景色が全然違うみたい」

雨上がりの空気を目一杯吸い込みながら、気分良さそうに言ったキヤナ。

薄手の白いノースリーブにショートパンツ姿。

こうして見れば、優しそうでキレイなおねえさん。

見るものがみんな新鮮なようで、あっちへ足を向けたりこっちへ寄って行ってみたりしている。軽くはしゃいでいるみたいにも見える。

俺は彼女のペースに合わせて歩いていたが

「そこから車の通りが多くなるからな。うつかり飛び出したらひかれるぞ」

「だーいじょうぶ！ 魔法でぶっ飛ばすから問題ないない！」

それはヤメましようね。

警察のご厄介になってしまいますから。

少し行けば車道とぶつかる。

大きな川に沿ってひかれた道路。

それを横切って川べりへ降りれば、長い遊歩道がある。この前、キヤナを追ってきた刺客とかちあった場所がその近くだ。

せっかくだから、そこを歩いて行くことにした。排ガスくさい歩道よりよほどいい。

今日はまさか、魔界衆の連中が現れたりすることはないだろう。

目指す商店街は西の方角。

右手に川の流れを眺めながら遊歩道を歩いて行くと、ちょうど夕陽が西の空を赤く染め上げていた。

その光が川面に降り注いでキラキラと反射し、見事に美しい。

「わあ、とってもキレイね、こーちゃん！ こんな景色、魔界じゃ見られないわあ！」

心を惹かれたらしく、キヤナがぱたと川の傍まで駆けて行った。

彼女のすらりとした影が、のっぺりしたアスファルトに長く伸びている。

俺はのんびりとその後を追いつつ

「……魔界にや、夕陽はないのか？」

「ない。気がつけば夜だし、気がつけば朝だもの。ホント、殺伐とした世界よ、あそこは。だから、いつまでも悲惨な殺し合いが続いている」

ちよつと区切って、こう続けた。

「……できることならもう、帰りたくないわ。ここでずっと、暮らしていたい」

キヤナの斜め後ろに立った俺。

夕陽を浴びた彼女の横顔は、ぞつとするほど美しかった。

どこか、さびしげな陰が感じられなくもない。

そんなキヤナの姿をじつと見つめながら俺は、胸の奥が唐突に切なくなった。

そう。

今の彼女はまるで　このまま消え入ってしまいそうなかほど細かったから。

本当に、本当に、いつまでも一緒にいることはできるのだろうか。残念ながら、何の保証もない。

すごく心細い。

そう思ったら、無性に悲しい気持ちになってしまう。

せっかく二人で、こんなにも綺麗な景色を眺めているというのに。

今この瞬間だけ切り取ったようにして、時間が停まってしまえばいい。

とりとめもないことを考えながらぼんやりとキヤナに見とれていると、急に彼女が振り向き

「ねえねえ、こーちゃん。この川って、どこまで流れているの？」

いきなりそんな質問をぶつけてきた。

「は？ この川？」

「うん」

「この川は確か……下流で他の川と合流して、最終的には海に流れ着いているハズだな」

淡々と記憶の中にある事実だけを答えたつもりだったが、キヤナは

「じゃあじゃあ、この川に沿ってずっと行けば、海を見ることができのね？」

嬉しそうに言った。

まあ、そういうことになるかな。

あ、そうか。

俺はやっと、彼女の質問の意図を知った。

「ああ、だな。キヤナさつき、海を見たいって、言ってたもんな」
「そうそう！ この世界の、広くて大きくて青い青い海を、ちゃんとこの目で見たいの！ こーちゃんと二人で！ 見えるよね？」
「……」

なぜか、泣きそうになった。

百年間、生きることだけに必死だったキヤナ。

そんな彼女のささやかな願いというのは、俺と一緒に海を見ることが。

何て表現したらいいんだろう。

想像を絶するような苦労の代償が、それでいいのか？

もつともつと、誰よりも大きな幸福を得る権利があるかも知れないのに。

でも、彼女はハナからそんなものを望んじやいない。

本当に苦難を味わってきたからこそ、ささやかなことを大きな幸福だつて、感じるができる。

それを真の幸福っていうんじゃないだろうか。

キヤナにとつての真の幸福が、必ず訪れますように。

違うな。

俺が、何とかしてやらなくちゃ。

でないと、キヤナは何のために生きているのかわからないじゃないか。

彼女に幸せをもたらすのが、俺の役割。

そう信じたい。

心の底から。

「……見ようぜ、キヤナ。二人で、でっかくて青い海を、さ」

大きく頷いてやった。

するとキヤナ、ぴつたりと傍に寄り添ってきて俺の腕をしっかりと抱いた。

「キヤナはあ、こーちゃんと、ずーっと一緒に生きていくの。だから、たーくさん、何度も何度も、海見れるよ。絶対に！」

「そうだな。飽きてしまつて、もう見たくないってくらい、見ようぜ」

「うん！」

それからしばらくの間、俺達は沈みゆく夕陽を眺めていた。
彼女の言う通りだ。

一緒にいようって、強く強く願うこと。

そうすればきっと、彼女を幸せにしてあげられるはず。
魂だけじゃなくて 幸せも分かち合おう。

しかし。

俺もキヤナも予想だになかった早さで、突然そいつはやってきた。

二人にとって、最凶最悪の刺客。

その18 きっかけ

キャナと二人で買い物に出かけ、キレイな夕陽を眺めてから数日後のこと。

深夜、窓の外で突然白い光が。

部屋中を照らし出すような激しいフラッシュに、寝ていた筈の俺も目を覚まされた。

「……………」

ほんの一瞬で止んだきり、そのあとは何も起こらない。
カミナリか？

寝ぼけた頭で考えたが、眠気に圧されてすぐにどうでも良くなった。

再び眠りにつこうとした俺。

すると、隣で寝ていたキャナが急にむくりと起き上がった。

じつと窓の外の闇を見やっている。

そうして、何か感じるものがあつたのか、いそいそと立ち上がるなり玄関から外へ出て行った。

（キャナ……………？ こんな時間に、どこ行くつもりなんだろ……………？）

ふと疑問に思ったが、すでに俺の九十九パーセントは眠気に支配されている。

ほどなく、夢の世界へと落ちてしまった。

翌朝。

「いつてきまーす……」

学校へ向かうべく、いつものようにボロアパートを出た。
夜中に一度ヘンなタイミングで目を覚ましてしまったせいか、中途半端な眠さが残っている。

（夕べのあれ、何だったんだろ……？）

夢じゃないのはわかっている。

キヤナがそろりと出て行ったのも記憶にある。

いつ戻ってきたのか、朝にはちゃんと横で寝こけていた。

魔界からの追っ手が現れたと思って確かめに行ったのかも知れない。

尋常な量の光じゃなかったし、あるいはそういう可能性もあるだろうな。

ま、彼女が無事に帰ってきていつも通り朝寝しているから、別にいいけれども。

俺はそう思い直しつつ、ふと階段の下を見やった。

……いつものエンジェルスマイルがない。

じゃなくって、メイちゃんがない。

別に頼んでそうしてもらったワケではないが、ここで合流して登校するのが俺とメイちゃんの日課になっていた。だから、ちよつとヘンに思ったワケである。

ま、いつか。どうせ学校で会っただろうし。

通りへ出て歩き出すと、すぐ先に掃き掃除をしている婆さんがいる。

カネ婆だ。

「おばーちゃん、おはようございます」

「あら風間君、おはよう」

カネ婆は手を止めて俺を見た。

そのホウキ、百円シヨップで売っているヤツだな。

掃けども掃けどもゴミが集まらないという、まったくもって用をなさないシロモノである。

それはまあ、ホントどうでもいいのだが。

「おばーちゃん、メイちゃんはもう行つたの？」

何気なく尋ねてみた。

すると、カネ婆は俺の顔をじっと見てから軽く首を傾げ

「……メイさん？ あそこの、あれ、三丁目の角の花屋の娘さんかい？」

ホウキをあつちの方角へ水平に向けた。

……？

じゃなくってさ。

三丁目に花屋があるのは知ってるけど、そこの娘の名前までは知らないなあ。

「あ、あの、メイちゃんですよ、メイちゃん。花屋の娘さんじゃないくって」

「だから、花屋さんトコのコでしょ？ あのコ、メイちゃんっていうっけさ」

おかしな事を言う、といった顔つきのカネ婆。ばーちゃんの語尾もヘンだけど。

あ、あれ？

カネ婆の認識の中に、メイちゃんが存在がないっぽい。

まさかメイちゃん、カネ婆の元を離れて花屋に鞍替えしたワケじゃないだろうな？

それはないよな。

花屋に（ホントに）娘さんがいるのは何となく知っていたし。

どーなっただ？

これっでもしかして、広域催眠が解除されているのか？

「あ、ああ、そ、そうだね。……じゃ、行つてきます」

「はい、行つてらっしゃい。今週の土曜日は、西町市場で大売出しだからね！」

お得な情報ありがとうございます。

つてか、今それはおいといて。

メイちゃん、どういうつもりなんだ？

魔界に帰つたのだろうか。

だけど、そんな魔力はないハズだし、それにキヤナは何も言っていない。

とりあえず 学校へ行ってみよう。

確かめるのはそれからだ。

俺は足を速めた。

……肉屋のおばちゃんへの挨拶と、他校生の撃退だけはいつも通りに実行しつつ。

「メイちゃん？ 誰、それ？」

「誰それっ、エロスケベ、お前……」

イーペーに着くなり朝練していたエロスケベをとっつかまえ、開口一番メイちゃんを見ていないか訊いてみた俺。

すると、エロスケベもまた眉をしかめて訊き返してきやがった。

こいつの記憶からも消滅している。

「あ、いや、なんでもない。……邪魔したな」

それから俺は、会う人会う人にメイちゃんのことを尋ねてみたが。

エクスカリバーもデラックスもミスターも、六組の女子も奈々子ちゃんも、誰も「天海明」の名前、どこかそんな人は知らないと言った。

奈々子ちゃんは人がいいから

「そのコ、孝四郎クンの親戚？ この学校に転入してくる予定なの？ 今日手続きにくるハズが、来ていないとか？」

「ご丁寧に色々事情を確認しようとしてくれた。

だけど先生、そういう事実はないっす。お手数かけました。

（うーむ……）

自分の席に座り、無愛想な面つきで考え込んでいる俺。

これはもう、間違いない。

あれだけ校内を騒がせたというのに、誰の記憶の中にもその存在がないということは。

（確実に広域催眠の魔法が解除されてる。だけど、なんだってこのタイミングで……？）

昨日までは、間違いなくイーペーの生徒として溶け込んでいたメイちゃん。

一緒に登校して一緒に昼メシを食い、一緒に下校して……ああ、

なんか良くない流れだけど。

ともかく、何の問題もなかったのだ。

そうすると、思い当たるのは夜中のあれしかない。

突然街中を照らし出した例の白い光。

ぐうぐう寝ていたキャナが反応した以上、メイちゃんもまた何か感じたとしてもおかしくない。

こうなった以上、帰宅したらキャナに聞いてみるしかない。

今の俺には、メイちゃんの居場所がわからないし。

「　　ざま！　　おい、風間！　　大丈夫か？」

「……へ？」

考え事に没頭していた俺は、名前を呼ぶ声でハッと我に返った。

現在、三時間目の授業中。現国。

チョークを持つ手を止め、英世が俺の方を見ている。

もち、あだ名。

髪の毛のカンジが千円札の英世さんのところから、英世と命名されたのだ。

ホント、イーペーの連中はあだ名をつけるのが好きだな。あだ名甲子園、とかあったら無難に優勝狙えるんじゃないだろうか。

「あ、はい、すみません！　教科書どっか、読みますか？」

「別に教科書は読まんでいい。どうしても何か読みたいなら、空気を読め！」

どっ。

教室中に爆笑が起こった。

おっとお。

こりゃ、英世に一本とられちゃった。

なんだかんだで一日が終わり、俺は晚メシの買い物しつつ家路を急いだ。

「ただいま」

ボロアパートに戻ると、部屋の中はもぬけのから。キヤナがいない。

「……？」

ふとテーブルに目をやると、彼女が書き残していったらしい置き手紙がある。

『ちよつとでかけるね。やるにはかえるよ。きゃな』

下手くそな字で、そう書かれてあった。

キヤナは最近、日本語を覚えようとしていた。

だから、まだ全部ひらがな。

魔法の効果で日常の意思疎通は普通にできるものの、文字だけはそつもないらしい。

で、ずつとこつちで暮らすとなれば困るから、とか言って学習なんか始めたのだ。

ちよつとでかけるって、キヤナのヤツ、一体どこへ行ったのだろう。

もしかして、メイちゃんのところか？

まあ、いい。

帰ってきたら、色々訊いてみるとしよう。

俺は晚メシの支度にとりかかった。

ところが。

晩メシが出来上がり、NHKで七時のニュースが流れ始めてもキヤナは帰ってこない。

さすがに腹が減ったものの、晩メシは彼女と一緒に食うことにしている。

勝手に先に食ったら、間違ひなくだこねるだろうし。

チャンネルを切り替え、バラエティ番組を観て空腹に耐えている俺。

結局、彼女が戻ってきたのは、夜も十一時を過ぎてからだっ
た。

眠気が食欲を軽く凌駕してしまい、転がってうとうとしていると

「ごめんね、こーちゃん。すっかり遅くなっちゃって」

ギイツとドアが開き、キヤナが入ってきた。

「……お、おかえり。遅かったな。メシ、できてるぞ」

「あ、うん。ありがとう……」

何だか、元気がないみたいだ。

視線が下を向きっぱなし。

俺は冷えた味噌汁を温めなおし、ご飯をよそいながら

「なあ、キヤナ。メイちゃん、俺の学校の連中とかに広域催眠かけてただろ？ どうも彼女、あれを解いたらしいんだ。今日学校に行ったら、誰の記憶にもメイちゃんが存在がなくなってるさ。何か当たらないか？」

訊いた。

するとキヤナは一瞬「えっ」という困惑の表情を浮かべたが、すぐに消しつ

「あ、あたし、二、三日メシアに会ってないんだ。だから、よくわからないんだよね……」

「ふーん、そうかい」

強いて突っ込んだりせず、短く相槌をうつてやった。

メイちゃんの行方、キヤナも知らないのか。ちよつと心配だな。で、遅い晩メシをそもそと食い始めた俺とキヤナ。

「……」

今日の英世発言じゃないが、何だか空気がヘン。

いつもは楽しそうにあれこれ話題を振ってくるキヤナが、神妙な面持ちで淡々とメシを口に運んでいる。どうも、じつと何か考え事をしているように見えなくもない。

「……なあ、キヤナ」

「へ？ あ、うん？ どーかした？」

「昨日の夜遅い時間のことなんだけどさ。何か、ヘンなコト起きてなかった？」

「ヘンなコト？」

俺は白い光の一件を話したあと、ちよつと区切ってから

「……でさ、キヤナ、出かけて行かなかった？ 何となく、気配でわかったんだけど」

ずずつと味噌汁をすすった。

正面きつて問い詰めるのはなんかヤだから、さりげなさを装っための軽い芝居。

すると、キヤナは微笑して

「あ、うん。黙って出かけたりして、ゴメンね。　　実は、魔力の現出を感じたのよ。メイアじゃない、なんかこう、別の人の。だから、また魔界から追っ手でも来たのかと思って、探しに行ってみたのね。……ほら、メイアの時みたいに、人間の中に紛れ込まれてしまったら厄介じゃない？　だから、見失わないように、と思って」「で？　何か、わかったのか？」

「それが、よくわからないのよ。だから、今もあちこち調べて回ってたんだけど……何だったのかしらね、夕べのヤツ。魔界と行き来ができなくなっちゃってるから、向こうの動きがわからないってのは不便だわあ。落ち着いて暮らせないじゃないね？」

情けなさそうな顔をしている。

どことなくぎこちないけど、彼女がそう言うのだから、信じるしかない。

それにしても、魔界で何が起こっているのかわからないってのは、確かに不安なことだ。

例えば、あつちで魔神が強大な力を身につけて魔界人達を滅ぼし、その勢いでまた人間世界へやってきたりしたら、大変なことになる。魔界衆にしたって、ヘンな魔法とか編み出してキヤナに襲い掛かってきたりしたら、俺達はおちおち普通に生活していられなくなってしまう。下手すりゃ、学校の人などとかおじさんおばさん、この街の人、もっともっと多くの人達に迷惑がかかるんだよな。

魔女と暮らすのって、結構神経が磨り減るかも。

ああいやいや、キヤナと一緒にいるのがイヤになったってワケじゃない。

ただ、落ち着いて暮らすにはあまりにも状況が不安定過ぎるってこった。

「ま、何かあったらすぐ相談してくれよ。メイちゃんの情報も気になるし」

「あのコなら、そうそう心配は要らないと思うケドね。……ってか、こーちゃん」

キヤナの目つきがきゅつと鋭くなった。

「そんなに、メイアのコトが心配？ さっきから、メイちゃんメイちゃんって……」

「だつ、違つつての！ いきなり姿をくramしたりするから、またヘンなコトになってんじゃないかって、不安になっただけだよ。そうやって妙な疑いをかけるなよ」

「きやはは、うそうそ。ちよつとからかってみたくなっただけ」

やつと、声を上げて笑ったな。

思い返せば今日は朝からずっと、楽しそうな表情のキヤナを見ていなかった。

ま、ぐずぐず考え込んでいてもしょうがねエ。

ケンカだつてそう。

相手の数とか強さを気にしていたら、いつも逃げるしか手がなくなつちまう。

作戦を決めたら、あとは無我夢中で突っ込んでいくだけ。

そうすれば、大体は何とかなる。

何とかなる……か。

この微妙にイヤーな空気、早く何とかなつてくれないかな。

次の日。

俺はイーペーまでの通学路を全力ダッシュしていた。

原因は寝坊。

夕べ、ワケのわからないもやもやが脳みその中で渦巻いてしまつて、なかなか寝付けなかったのだ。

晩メシがすごく遅かったから、体内時計が誤作動したのかも知れないが。

また便所掃除の刑に処されるのはゴメンだ。

あと五分で何とか、イーペーの門をくぐってしまいたい。

魔の信号を無理矢理突き抜け、繁華街を駆け抜けて行く。

目の前に、鉄道のガードが見えてきた。

これを抜けると、間もなく遅刻回避安全圏になる。イーペーまでは目と鼻の先。

緑色に塗られたガードの下へ飛び込むと、一気に視界が暗くなった。

上には二つの路線が上下で走っているから、線路は四本敷かれていますということになる。だから、ガードをくぐりきるまでには二十メートル以上ある。

と、行く手に誰か立っている。

それほど大きくない背丈に、細い身体。女の子らしい。

誰か知っているヤツかと思って、よく見てみれば

「……風間クン。私よ」

なんと、そのコはメイちゃんだった。

制服なんか着ちゃいない。

肩から先がなくて、胸元が妙に開けたその衣装は……魔女のコスチューム。長い髪はくるとまとめてアップにしてある。やたらと大人っぽくて、何だかメイちゃんじゃないみたいだ。

気付いた俺は、慌てて立ち止まり

「メイちゃん！？ 急に、どうしたんだよ？ いきなりいなくなるから俺、探し回ったんだぜ？」

「まあ！ 探してくれたんだ。私、嬉しいかも。ごめんね、突然消えたりして」

ふわっと微笑みながら、ちょっと首を傾げて見せた。

が、すぐに表情を無に戻したメイちゃんは、俺の傍まで歩み寄ってきてると

「……キヤナ、何か言っ てなかった？ 私が学校からいなくなったワケのこと」

「いいや、何も……」

待て待て。

何だ、それは？

つてか、キヤナは昨日、確かに「メイアと数日会ってない」とか言ってたぞ。

今のメイちゃんの台詞だと、ごく最近顔を合わせていて、しかもメイちゃんが学校から消えた理由まで知っているような言い方じゃないか。

キヤナ、もしかして……俺にウソついた？

隠し事をしているのか？

いつまでも一緒に暮らしていたって、言っ てたじゃないか。

それなのに、舌の根も乾かないうちに心変わりをしちまったとでも？

冗談抜きで彼女を信じきっていた俺にすれば、青天の霹靂。

同じ人間だったらそう簡単に信頼してなかったかもしれないけど、彼女は魔界に生まれ育った魔女。俺達とは何もかも違う環境で生きてきた。生死紙一重を潜り抜けてきているから、掛け値なしに信じる気持ちになった。

それなのに……！

いや、悪いのは俺のほうか？

信じた俺にも責任の一端はあるのだろう。

ってか、今現在一体何が起こっている！？　キャナもメイちゃんもどうしちまったんだ！？

そんな俺の心の焦りを見抜いたかのように、メイちゃんは染み入るような優しい笑みを浮かべて

「あのね、風間クン。キャナは、あなたのコトが誰よりも好きだし、愛しているのよ。だから、つまらない詮索をして彼女を疑ったりしちゃダメよ？　キャナ、ああ見えてもとっても心が弱くてキズつきやすいの。風間クンに嫌われたりしたら、きつと生きていけなくなるかもね」

それだけを言って、さつと身を翻した。

勘弁してくれよ！

俺、何一つ大事なコトを知らされていないのに！

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！　それだけじゃ、何がなんだかさっぱりわからねエ！　ちゃんと教えてくれよ！　魔界で、何かあったのか？」

ガード下に、俺のひととき大きな声がわんわんとこだましていく。立ち去りかけたメイちゃんが、ちらりと振り返った。

そして、口を開きかけた途端

ブアアン！　ゴゴゴゴン、ゴゴゴゴン、ゴゴゴゴン……

タイミングの悪いことに、上を電車が通過して行った。

何秒間が続く轟音の中、俺は彼女の形のいい唇の動きだけをじっと見つめている。

そうして再び静けさが戻ってきたその時にはもう　メイちゃん

の姿はなかった。

一人、その場に呆然と立ち尽くしている俺。

目に見えなかった形のない不安が、ようやく俺の胸中ではっきりとした形をとって現れようとしていた。

その19 悲しい時間

夜中、ふと目が覚めた。

ゆっくりと目だけを動かして隣を見やれば キヤナがすやすやと眠っている。

今晩は今のところ、何も無いようだ。

ささやかに安心した俺は、もう一度眠りの世界に落ちようと思った。

ところが、ふっと考えてしまった瞬間、もうダメだった。

……寝付けない。

今朝、メイちゃんが残っていた言葉が、頭の中でずっとエンドレスリピートしている。

電車が通過する轟音がやかましかったが、俺の耳には確かにメイちゃんの言葉が届いていた。

『キヤナが風間クンに何も伝えていないとしても、それはキヤナが風間クンのことを思っているからよ。事実がもたらされていないことを理由に、愛する人を疑うのは間違っている』

そうして、メイちゃんはコンマ数秒間、あのエンジェルスマイルを見せて

『私が風間クンに会うのは、きっとこれが最後になると思う。いろいろ、ありがとう。楽しかったよ』

言い残し、彼女はすっと転移して姿を消した。

「待てよ！ メイちゃん、一つだけ教えてくれ！ キヤナは……い

なくなってしまうのか!？」

叫んだが、遅かった。

もう、彼女の影も形もない。

まったく、イミがわからねエ。

どうして最後にならなきゃいけないんだよ？

それ以上に引っかかるのは、キヤナの気持ちについて俺につきつけられたメイちゃんの言葉。

事実がもたらされないことを理由に愛する人を疑うのは間違っている。

確かに、そうかも知らん。

ケド、それって建前じゃねエか。

事実が隠されてしまうから、人は人を疑ってしまう。

事実を隠そうとするのが愛あるゆえだったとしても、俺は 納得できない。

本当に好き合っているなら、ちゃんとあるがままを伝えるのがスジってモンじゃないだろうか。

例えその先に、悲しい結末しかなかったとしても。

そういうイミにおいて、昨日のキヤナの態度は俺にとって ウソをついた、としか受け取れない。

彼女は俺のことを氣遣っているつもりかも知れないけど、それって汚い見方をすれば「非力な人間だから頼ることはできない」っていうコトになるんじゃないのか？

ま、そんな風に考えてしまうのは止そうと思う。

キヤナはそんな女性じゃない。

俺のコトを好きでいてくれていることに間違いはないと信じるから。

ただ、今日のことがあつて俺の中で一つだけはつきりした。

いずれキヤナは……俺の前から去って行く。

メイちゃんがああいう含みを残していなくなった以上、それはキ

ヤナにも関係していると思ってい。そうでなけりや、彼女があんな言い方をするハズがないんだよな。仮にメイちゃん一人が姿を消すのであれば、もっと違う表現をしていただろう。

どう考えてみても、暗い結論にしかたどり着けない。

敵対していたメイちゃんが俺達と仲良くなつて、バタバタながらも楽しい日常がやってきたハズだった。

それが永遠に続く保証なんてどこにもなかったけど、魔界中を震撼させてやまない魔女が二人も揃っているんだから、どんな強敵がやってきたってどうにかなると信じていた。

だけど、あくまでも俺の願望に過ぎなかったってワケで。

この数日の間に、何かが起こった。

俺とキャナの絆にヒビを入れてしまふような、とんでもない何事かが。

人間の俺には推測もつかないが、一つだけ思い当たるフシがある。

魔界のこと。

こっちの世界で具現化した魔神は勝手に魔界へ帰って行ってくれたが、キャナやメイちゃんとは心の中では気にしていた。で、最近、魔神が魔界で活動し始めたという話をどういうルートか知らないが耳にし、人間の世界から去ろうと考えた。

間違いない。

二人とも、本来は向こうの世界の者。

どれだけ迫害されて苦しい思いをしたっていつても、やっぱり心の奥底では忘れるコトができないのかもしれない。魔族と人間って違いはあっても、どっちも同じく心を持った存在。自分の生まれ育った世界が気にならないワケがないよな。ましてや、存亡がかかった危機に瀕しているとすれば。

そうして今日、メイちゃんは俺に別れを告げにやってきた。

とすれば、そう遠くない未来、キャナもまた。

一緒に行きたい気持ちはあるけど、ついて行つたところで俺に何ができるだろう？

神速鉄拳があつたつて、あの強大な破壊力をもった魔法の前じゃクズ以下。

逆にキヤナは俺を守ろうとして大変な思いをするに違いない。そのためにキヤナ、あるいはメイちゃんにもしものことがあつたらどうすることもできないよな。

となると、俺の選択肢は一つしかないワケで。

聡明な彼女のことだから、きっとそういうシミュレーションはとつくの昔にされているだろう。

だから、キヤナは俺と別れて魔界へ帰る決心を固めつつある。

これから始まる（すでに始まっている？）魔界のごたごたに、俺を巻き込まないようにするために。

気持ちは嬉しいけど、感情として納得なんかできやしない。

メイちゃんの言葉を素直に受け取れないのは、そういうことだ。考えたくない。

イヤだ。

せつかく、二人で楽しく暮らせるようになったつていうのに！

けど一方で、俺の胸のどこか片隅には……キヤナのが好きだからこそ、彼女の気持ちを無視するようなコトはできないつて、思っている自分がいなくもない。

俺がそうされたら苦しいし。

もともと、人間とそれ以外の存在がいつまでも一緒に生きていける筈がなかったんだよな。

そう思いこむしかない。

思いこむしかないんだけど。

その前に願うことは　どうか、キヤナが魔界へ戻るとか言い出す日がずつときませんように。

もしくは、そういう俺の想像が全て杞憂でありますように。

寝返りを打つフリをして彼女に背を向けつつ、必死で祈っている俺。

思わず、涙が出そうになった。

祈り続けているうちに、いつの間にか眠りに落ちていた。

それから三日経った。

あれ以来、キヤナは出かける素振りも見せずずっと部屋にいる。

ただし気がつけば、俺達の間から会話というものが消滅していた。

朝、俺が学校に行く時彼女は寝ているから、一日の最初に交わす言葉は

「……ただいま」

「おかえりなさい」

で、俺がメシをつくる。

「……できたぞ」

「ありがとう」

黙々と食う。

そして俺は茶碗を洗ったあと、宿題を片付けたりテレビを観たりする。

夜も遅い、という頃になると

「おやすみ」

「おやすみなさい」

……なんだこれは。

離婚寸前の夫婦みたいなモンじゃないか。

どうしてこんな状態にならなきゃいけないんだ。

キヤナがずっと暗い顔して考え込んでいるから？
違う。

そうじゃなくて、俺がヘンなことを考えてヘンなわだかまりをこしらえて、彼女に話しかけることができなくなってしまっていたからだ。

思えば、俺達の絆を裂きにやってくるホントの意味での刺客って、何も魔界からやってくるヤツなんかじゃない。

相手に対して素直になれない、自分の心。心の弱さ。

そいつにすっかり毒されてしまった以上、あとは消滅していく二人の時間を黙って見守るだけ。

情けねエ。

情けなくてだらしがねエけど、雨に打たれている小鳥のように、どうすることもできない俺。

いつしか俺は、キヤナとの間にどでかくて分厚い壁を築いてしまっていた。

キヤナは時々何か言いたげに顔を上げるものの、何も話せないまま、また悲しそうに俯いてしまう。

もしかしたら、俺に全てを打ち明けようとしてくれたのかも知れない。きつと、そうだ。

でも、今の俺に耳を傾ける勇氣はない。

聞いてしまったら、その時が本当に二人が終わる時。

違うかも知れない。

でも、そうとしか思えない。

だから、聞くつもりにはなれなかった。

ごめん。

ほんつとーに、ごめん。

俺なんかのところに来たばかりに。

辛い思いをさせちゃっている。

思い返してみれば俺、今まで強がっていただけだった。

自分が傷つくことが怖くて、自分が傷つかないように拳でガードしていただけ。

突っ張ってさえいれば、どうにかなると思っていた。

でも、それは大間違い。

周囲から自分目掛けて飛んでくる色んな何かを無理矢理シャットアウトしているに過ぎないんだよな。

そういうことをしていても、いつまでたっても自分は強くなれない。

結局、心というこの厄介な代物の本性はドM。

キズつくことでしか強くならないらしい。

しかし、人は誰も心がキズつくことを極端に恐れる。

俺がその典型だ。

そんなんだから、六月の空模様と一緒に、ボロアパートの一室も常にどよん状態。

俺はキヤナから逃げていたい一心で、学校からの帰りをわざと遅くするようになっていた。

部活も委員会活動もやっていない俺は、毎日下校途中にあるファーストフード店に寄り、窓際のカウンター席に座って読書で時間を潰しはじめた。

そんなある日のこと。

「こんなトコで何読んでんの、孝四郎？　まさか、テスト勉強かい？」

背後から声をかけられた。

ガリ勉エクスカリバー！

珍しいヤツがきた。

「お？　聖剣君か。お前こそ、何やってんだよ？　さっさと帰ってお勉強じゃないのか？」

ちよつとからかい気味に訊いてみると、彼は俺の隣の席に腰掛けながら

「僕だって、たまには息を抜きたい時もあるよ」

顔に疲れた感が漂っている。

肉体的な疲労感、じゃなくて「何となく疲れちゃいました感」というヤツだ。

エクスカリバーはコーラを一口飲み、先を続けた。

「僕はずっと塾に通ってるんだ。で、この前模試があって昨日結果を返されたんだけど、今のままじゃ第一志望の大学は難しいって塾の教師に言われちゃってさ。……一生懸命にやっているのに、それを全否定されるようなことを言われちゃ、モチベーションダダ下がりってモンだよ。ホントは今日も授業があるんだけど、休んでやった。小学校じゃないから、一日二日休んだところで親にはバレないしね」

「そいつは大変だな。ケド俺、エクスカリバーには明確に目指しているものが見えていて、いつつもうらやましいと思ってるけどな。俺みたいな五里霧中？ 暗中模索？ どっちでもいいが、これってすっげー不安なコトだし。第一、高校卒業したところでどうしたらいいか、まったくわかってないんだぜ？」

それぞれ不安を抱えているせいか、エクスカリバーも俺も珍しく長口舌に及んでいる。

そっぴや、こいつとゆっくり語らったコトなんて、今まで一度もなかったな。

彼はさらに、親とも上手くいっていない家庭事情なんかも話してくれたあと、こんなことを言った。

「将来のコトなんて、決めて進めばいいだけのことさ。だけど、自分自身がこうあるうって思ってみても、なかなかそうなれるモンじ

やないって。自分が自分でいることは、大学に入るコトよりもずっと難しいと思うね。だから正直、孝四郎がうらやましいと思っていたよ。周りがどうだろうと、自分を貫くタイプ。僕もそうなりたいて、最近すごく思う」

うんうんと聞いてやっている俺。

気持ちをストレートに喋っているエクスカリバーは、さっきよりも表情が活き活きしてきたようだ。

心の中のもやもやは、押し潰されそうなくらいでかいと思ってビびっけていても、表に出してみればいかにちっちゃいものか、すぐわかる。

不安や悩みをどんどんでかくしてしまうのは誰でもない、自分のせいだ。

今の俺とエクスカリバーがそう。

お互いに自分の不安を隠さずぶちまけた。

だからって都合よく解決なんかしないけど、重たいまま抱え続けていくのと軽くしておくのとじゃ全然イミが違ってくる。

「んなコトあねエよ。そいつはエクスカリバー君の買いかぶりだ」

とは返したものの。

ちよつとだけ、嬉しかった。

エクスカリバーのヤツ、秘かに俺のコトをそんな風に見てくれたのか。

だけど、今の俺は君が思っているほど強くはないよ。

好きな人の気持ちも大切にできない、愚かな野郎。

今エクスカリバーとしているように、キヤナに対しても思っていることを素直に話し合えたら、すごく楽になるのに。

でも、その先にあるものが怖くて 素直になることができない。だから、心の中に溜まったもやもやが腐り始めている。

自分でわかる。

今日、こうしてエクスカリバーと話ができたことは、辛うじて飲んだ痛み止めみたいなものかも知れない。

「俺にや親もいなりや、相談できる大人もろくにいないしな。そういうヤツは、自分を信奉するしか手がねエのさ。だけど、それはすぐおっかないことだ。曲がった自分を信奉したら、全部曲がっちまうんだからな。で、今まで読みもしなかった本とか読んでみることにした。本ってのは、誰かの意見だ。誰かの意見を読んで賛成したり腹立てたりしてりや、ちよつとはいい刺激になるんじゃないかと思ってるね」

「へえ！　そういう動機は大事だね。親とかが読めってうるさく言うのは間違っているよ。本人がその気になって読んだ時に、初めて本の重要性がわかると思うんだ。で、何読んでるの？」

俺はアイスコーヒーのストローをくわえつつ、手にしていた文庫本の表紙をエクスカリバーに示してやった。

神々しい巨大ロボットと、一組の少年少女のイラストが描かれている。

「神宮寺飛鳥って人が書いた『霹靂のレーヴァテイン』っていうんだ。絶望的な状況の中でも、主人公とヒロインががむしゃらに戦い続けるってハナシ。ちよつと哀しいカンジがするけど、俺もそうなりたくないあって、思うワケ。つまり、君が俺に対して抱いている憧れは、俺にとっても憧れであるワケなのだよ、エクスカリバー君」

わかったような、わからんような説明。

が、珍しく哲学チックな台詞を吐いた俺を、目を丸くして見つめながら

「へえ！ 孝四郎でもそんななんだ！ ……驚いたよ。ねちねちと自分の是非を論じるような晦渋さなんか持ち合わせていない人だと思っていたのに」

「だから、そいつはお前の買い被りだったの。バカはバカなりの悩みてモンがあつて、ねちねちと自分の是非とやらを必死に考えてみたりするワケだ。で、バカなりの憧れを抱く。この小説はいいよ。俺みたいなのヤツにもすぐわかりやすいし」

「それ、僕も読んでみるかなあ。受験勉強のいい息抜きになりそうだし。……霹靂のレー、レー、なんだっけ？」

「霹靂のレーヴァテイン。神宮寺飛鳥。小なる文庫だよ」

自分の是非を論じる晦渋さ、か。

俺も、自分の中にンな厄介なものなんかありやしねエって、ずっと信じていた。

自分が自分であり続けるだけのことだと思っていた。だけど、そんな信念なんかクソくらえだ。

この世の中に、自分くらい頼りにならん存在もない。

今はそう痛感しているよ。

人間が生きていくためには、絶対に誰かの支えがいる。

心の強さはもちろんだけど、その強さを維持していくために、傍にいてくれる人の存在が。

キャナ。

頼むから……行かないでくれ。

今、いなくなれたら俺、どうしていいのかわからないんだ。

俺の帰宅拒否は、それからも続いた。

キャナと一緒にいることが怖かったから。

いや、キャナと一緒にいれば、いつか別れを告げられそうぞ恐ろしかったからだ。

しかし　いつまでもそうしてられるハズがなかった。

どれだけ俺が現実から目を背けて逃げまくったところで、その現実
は冷厳に進行していくワケで。

放置しておいた虫歯と同じように、逃げたら逃げた分だけ、その
代償はとてつもなく大きなものとなる。

そうしてとうとう、俺がそのツケを背負わねばならない日はやっ
てきた。

その19 悲しい時間（後書き）

註）文中に登場している作品は実際に存在するもので、作者様のご了解をいただいた上で登場させていただきました。

その20 さよならの雨

その日は昼すぎから雨が降り出した。
かなり強い雨。

朝は晴れていたから、傘なんか持ち歩いていない。

俺はパンツまですぶ濡れになって帰宅した。

濡れた理由は他にもある。

このどしゃ降りだっていうのに、よりによって生高と雲高の連中
が立て続けに待ち伏せしてやがったのだ。

タイミングが悪い。

よりによって俺の虫の居所は相当、というより激悪だった。

学校でホームルームがあり、期末テスト後に実施されるクラス対
抗球技大会の話し合いがあった。

今年は大会の目玉の一つとして「仮装ソフトボール」なる奇特的な
種目がある。

各クラス三名づつ選手を選抜して、一年から三年までの一組なら
一組だけの合計九名のチームを構成する。そしてトーナメント方式
で優勝を目指すという企画らしい。

完全ブルーモードの俺は話し合いに溶け込む意欲もなく、沈黙を
守っていたワケなのだが……。

「じゃあ、我がクラスの仮装テーマを決めたいと思います。……誰
か、アイデアないですか!？」

討議の司会進行役・高血圧 本名阿部雄太、常時ハイテンショ
ンであるところから命名 が意見を求めると、

「はいはいっ！ オカマの格好がいい！ ぜってエ、ウケるって!」

速攻拳手するなり血迷った発言をしたバカがいる。

デラックスの野郎。

今どきオカマなんて珍しくもないだろうに。

思ったが、その方が学校中の意表を衝けるとでも考えたのか、意外にもあちこちから賛同の声が上がり始めた。

「さんせー。わかりやすい」

「俺はいいと思いつす。……でも、女性の皆さまは？」

「それつてえ、男子が責任もってやってくれるつてコトでしょ？
だつたら女のコはみんな賛成でーす」

高田正美という発言力のある女子が一言言つた途端、女子達が一斉に頷いた。

が、何事も慎重第一主義のメガネっ子・三波恵子が立ち上がり

「待つて。ノリだけでヘンな決定しちゃつたら、先生に迷惑がかかるわ。奈々子先生はどうなんですか？」

「みんなが決めたコトなら、別に先生は反対しないわ。でも、それ……誰がやるのかしら？」

くすくす笑いながら訊いた奈々子ちゃん。

ぶつちやけ、賛成の意向。

なものだからみんな、その話題で盛り上がり始めた。

「エロスケベ、お前いけ！　今までに手を出した全校女子生徒への罪滅ぼしだ！」

「ええっ、俺！？　冗談は吉田兼好。ほかの誰かにやって星一徹！」

「つまんねー！　オヤジギャグかました罰として、お前に決定！」

と、誰かが叫んだ。

「おー！ それ案外、風間がよくねエ？ その無愛想なツラでオカマやったら、意外と美人に化けるかも」

突然のフリ。

頬杖をついて窓の外の雨を眺めていた俺は、面食らった。

「は？ 俺が何だって？」

「あれえ？ お前、聞いてなかったのか？ クラス代表でオカマの仮装、風間がノミネート。……おっと、みんな賛成だからな。黙って引き受けてくれるよな？」

「断る。んな多数決のやり方があるか」

「今の風間の発言は承諾ってコトでいいかな、みんな？」

どつと笑いが起こった。

手を叩いて可笑しがっているヤツもいる。

よりによって、奈々子ちゃんまで笑っているし……。

キヤナの件があつて俺の機嫌、たださえ激悪だったのに。担任までが悪乗りしているこの不条理さに、俺の忍耐はコンマ数秒で一気にレッドゾーンを振り切った。

ガンッ

その一撃で、途端にクラスは静まり返った。

ブチ切れた俺が、思いつきり机を蹴り飛ばしたのだ。

「……やりたきゃ、やりたいヤツがやりやがれ。他人を笑い者することが、そんなに楽しいか？ あア？」

その後のことは知らない。

そのまま俺はカバンを担いで教室を後にしたから。

「ちょ、ちよつと待って！ 孝四郎くん！ ごめんね！ 私、悪かった！ 謝るから！」

奈々子ちゃんが追いかけてきたものの、振り向きもしなかった。今さら、戻るかよ。

あなたも所詮はその程度の教師でしたか。

そういうはらわたが煮えくり返るようなやりきれなさを抱いていた矢先だったから、行く手に生高やタバコの連中が見えた途端、俺は思わず腹いせの矛先を向けてしまった。

「風間ア！ 今日という今日は、ケリつけさせ ！？」

俺らしくもない。

相手がかかってくるのを待たず、こっちから踏み込んでいた。

気がつけば生高の連中全員、濡れたアスファルトの上に転がっている。

今日の鉄拳にはいつになく怨念がこもっていたから、一人や二人は無事じゃ済まないだろう。レントゲンのお世話になるかも知れない。

キレている俺は連中を放置したままその場を立ち去った。ところが。

「 待てや、風間」

頭の上にカバンを乗せてダッシュしていく俺の前を塞いだ人数が。雲高ご一行四名様。

ちっ。クソ野郎どもが……！

舌打せずにはいられなかった。

すでに制服はたっぷり雨を吸っていて湿っぽく、不快なことこの上ない。

さっさと帰って風呂入って着替えたいってのに。
ホームルームでの出来事やらさっきの生高連中の一件で俺のムカつきメーターは再びぐーんと高まった。

「この前、お前、うちのヤツらを潰してくれたよな？ 忘れたとは言わせねエ」

「ああ、そうだったな。前にてめえら潰したあの日も」

俺のカバンが宙を舞った。

「……雨だったわ」

五分後。

雲高の四人は地べたに転がっていた。

右の頬骨を押さえて呻いているのが一人いる。当たり所が悪かったようだ。

が、俺は構わずに帰った。

ケンカを売ってきたのは雲高のほう。

いちいち戦闘後のケアなんかやってられない。痛けりや自分で病院まで行くがiiiiってこった。

そうして俺はボロアパートに戻ったのだが

「おかえり……って、こーちゃん！ ずぶ濡れじゃない！ カゼ、引いちゃうよ！」

玄関ドアを開けるなり、心配そうに駆け寄ってきたキャナ。

が、俺は彼女をスルーして部屋に上がりこみ、テーブルの上にコンビニ弁当をどさりと放りだした。

食欲がなかったから、今日はメシを作る気なんかさらさらなかった。

それで、キヤナにはコンビ二弁当。

こついうのは意外に高くつくものだ。

そうして、黙って濡れた服を着替えていると、

「……ねえこーちゃん。もしかしてあたしのこと、なにか怒ってる？」

俺の背中に向かつて、キヤナが話しかけてきた。

シカトされたこと、気にしているらしい。

ちよつと可哀相だったろうか。

だけど俺、ここ数日間のムカつきが収まらない。

クラスのヤツに生高や雲高の連中も連中なら、キヤナもキヤナだ。こそこそと隠し事をしているクセに、何がしおらしく「怒ってる？」だよ。

ふざけるのもたいがいにしろ。

と、口先までぶちまけかかっているのをぐつと飲み下し

「……いや、別に」

「だったら、いいんだけど……」

畳の上にぺたりと座ってうな垂れてしまった。

また黙ってしょんぼりかよ。

勝手にしろ。

いつも通りそのまま黙ってしまうのかと思ったが、案に相違した。キヤナはおずおずとした感じながらも

「……あのね、こーちゃん。実はね、あたし、聞いて欲しいことがあるの」

切り出した。

俺は着替えの手を止めない。

背中から「聞いてるから勝手に喋れ」的なオーラを発しているとキヤナはぼつりと

「魔界が大変なコトになっているらしいの……」

きた。

やっぱり、か。

「魔界から魔族のコが飛ばされてきて、メイアに助けを求めたってあの魔神が次々と魔界人の魂をくらって、思ったよりもすごい勢いで進化し続けているから、って……」

「……」

「こーちゃんとは、ずっと一緒に暮らしていきたいし、あたし、そのつもりでいた。でも、元はといえば、魔神を呼び覚ますきっかけを作ったのはあたしとメイア。魔界が滅んでも関係ないかなって思っていたケド、魔界にはあたし達と同族の魔族がいる。その人達が苦しめられて、滅ばされていくのを黙ってみていられない。それで実はメイアと相談したんだけど」

言いづらそうにしているキヤナ。

が、意を決したようにぐいっとな顔を上げると

「……ケリ、つけようって。あたし達の不始末は、あたし達の手で」

なんか、瞬時に俺の周囲の何もかも真っ白く見えた。聞きたくなかったのに。

この日がこないようにって、祈るような気持ちでいたのに。

やっぱり、こうなってしまったか。

何て答えたらいいのか、迷った。

頭の中と胸の中でぐるぐるやっている間、部屋の中には雨の音だけが聞こえている。

やがて。

俺のささいな苛立ちの感情が一拳に膨張して、本音の気持ちを凌駕した。

「……行きやいいじゃねエか」

「え……？ 行けばって、こーちゃん……」

何を言っている、俺！

でも、腹立ち紛れに口をついて出た怒りのスプラッシュは、どうにも止めようがなかった。

「どうせ、魔界が大事なんだろう？ 行けよ。俺がどう思ってるかなんて知らないクセに！ メイアと二人で結論決めちまってから言われたって、納得できるワケねエだろ！ それにお前、ウソついたじやねエか。隠れてメイアと会ってたのに、会ってないって。何でも二人で相談しようって言ったのに、それをあっさり破ったのはお前だろ、キャナ！」

急にキレた口調で言ったものだから、キャナはさすがのように

「黙っていたのはゴメン！ 本当に、ごめんね！ でも、絶対にこーちゃんを巻き添えにすることはできなかったの。魔界の問題だもの。……それは、何度も打ち明けようとは思ってたわ。だけど、言ってしまったらこーちゃんが悲しむし、だからどうしていいかわからなくて」

「いいよ、今さら。どのみち俺達是一緒には生きていけない。そー

いうコトだろ？ もう諦めたから、いい。あとはお前の好きにしろよ。そんなに魔界が大事なら、さつさと戻れば？」

突き放した俺の言い方に、キヤナは一瞬呆然としかけた。
しかし、すぐに満面に必死な誠意をみなぎらせて

「そうじゃないってば！ ……ねえ、聞いて！ あたし、絶対に戻ってくるよ！ 魔神を封じ込めて、またこーちゃんの元に、絶対帰ってくるから！ 約束する！ だから」

言葉がそこで途切れ、ぐすつ、ぐすつと鼻をすする音がした。

「そんなコト、言わないで！ お願いだからあたしのコト、嫌いにならないでよ……お願いだから……」

キヤナの声は泣いていた。

あの出会った日以来。

魂をくれてやるっていう俺の気持ちの本気であることを知った彼女、泣いていたっけ。

なのに、今はもう、こんなことで彼女を泣かせてしまった。

こんなに気持ちのぐらつきが大きな女性だっただろうか。

一度言い出したらテコでも動かない、というカンジだったキヤナが、俺に背中を向けられたくらいでぐすぐす泣きじゃくるなんて。

「……行け」

「え……？」

「さつさと、行け。それでこれからは、魔界で暮らせよ。こつちの世界には、帰ってこなくていい。お前の顔、もう、見たくないんだ」

言っちゃった。

口が裂けても言うべきでなかった台詞を。

そのまま、頑固親父のように背を向けて座り込んだ俺。
悲しい。悲しすぎる。

何がって……俺、何を言っているんだよ？

何ですねてんの？

何をそんなにふてくされてんの？

何で……キヤナに当たり散らしてんの？

自分で自分がわからねエ。

「こーちゃん……」

絶句しているキヤナ。

とりつくシマもない俺のこと、どう思っているんだろう。

それからしばらく、部屋の中には彼女の嗚咽する声だけが響いて
いた。

ぐしゅぐしゅと鼻をすすっている。

俺は背をむけたまま、身じろぎもしない。

やがて背後で、彼女がのろのろと着替える気配がした。

このタイミングでキヤナが着替える服はあれしかない。

魔界から転移してきた時に着ていた、黒い衣装。

魂を分けてやったあの日のあと、キレイに洗濯をしてとっておい
た。

キヤナの魔女としての晴れ着だから、と思っていたけれども……

まさか、またこれを着る日があるなんて思っていなかった。

着替え終わってから、彼女は立ったまま俺の背中をじっと見てい
るようだった。

が、やがて ギイツ、と、玄関ドアのきしむ音がして

「……ウソついて、ごめんね。あたし、悪かった。こーちゃんが怒

るのも当たり前だよね。これ以上こーちゃんに迷惑かけないようにあかし、行くから。もう魔界から魔界衆とか、来るコトはないと思う」

ああ、行くのか。

そう思ったら、胸の中がぐわつと揺れ動いた。

振り返りたい。

振り返ってやりたい。

最後に仲直りしたいし、抱き締めたいけど……ここで仲直りしたところで、彼女は行ってしまう。

どのみち別れなくちゃならないのに、仲直りしたら余計に辛くなるだけじゃねエか。

そして。

キャナはまた涙声になって

「それから……魂、ありがとう。あかし、一生大事にするね?」

それが、彼女の最後の言葉だった。

パタン……

玄関のドアが静かに閉められた。

出会ったあの日のように降りしきる雨の中を、キャナは 行っ
てしまった。

もう、会うことはない。

二度と。

そう思ったら、苦しくて苦しくて、どうにもならない。

何か、無性に泣きたくなってきた。

大声で、思いつきり。

だけど。

あれ？

俺、最後にちゃんとキヤナの顔を見たのはいつだっけ？

その時、どんな顔してたっけ？

……思い出せない。

記憶の片っ端からキヤナの面影が消えてしまっていたような気がして、ただどそれを冷静に考えている俺。そういうあやふやな心情のまま、泣けるワケがない。

もしかしたら、ここふた月ばかりこの部屋で一緒に暮らしていたキヤナという女性、幻だったのだろうか。幻だったなら、俺にとつてどれほど救いだっただかわからない。

「……」

恐る恐る、振り返ってみた。

誰もいなくなった部屋の中。

テーブルの上に放り出されたままのコンビニ弁当が目に入った。

あれは……キヤナのために買ってきたもの。

そっか。

そうなんだよな。

キヤナはいたんだ。ついさっきまで、確かに、ここに。

あのコンビニ弁当、俺には 食えない。

食ったら、彼女との絆や思い出を失ってしまいそう。ほんのわずかな間だったってのに、こんなにも重たいものになっていたなんて、気がつかなかった。いや、目を背けてきた俺。

いなくなつて、ようやくわかったよ。

キヤナがどれだけ大切な人だったかについていうことに。

でも、後を追うことはできない。彼女には、これからやらなければならぬことがある。

快く送り出してやらなくちゃいけなかったのに。

何もかも……ぶち壊しちまった。

やっと目の前がぼやけてきた。

こんな別れ方しかできなかった俺、クズ。

男の風上にもおけないクズ野郎。

ごめん。本当に、ごめん。一人ぼっちで辛い思いをさせた挙げ句、
追い出してしまうなんて。

最後に言えなかった一言、そつと胸中で呟くしかない。

さよなら、キヤナ。

絶対に、死ぬなよ。

どんな手段を使ったって、魔界人皆殺しにしたっていいから……
生き延びてくれよ。

その晩、俺は思い出したように涙を流しては、何もできなかった
自分に後悔ばかりしていた。

夜半になっても、雨足は衰えなかった。

その20 さよならの雨（後書き）

次話掲載は10/25です。

まだ最終話ではありません。

その21 再生の日（前編）

そつと鏡をのぞいて見た。

目の下にはくつきりとしたクマ、頬はいささかこけているような気がする。髪の毛もボサボサだし、野人かと思まがうような相貌だ。ほとんど飲まず食わずでいたから、そうもなるか。

俺は大きな溜息を一つつくと、靴を履いて玄関を出ようとした。

「いつてきま……」

そうだった。

もう、誰もいやしないんだ。

キャナが去ってから五日。

ようやく俺は、外に出るつもりになった。

彼女がいなくなったのもさることながら、ああいう追い出し方をしてしまった自分が死にたくなるほど嫌で、後悔の気持ち湧き起こつてきては部屋の中をゴロゴロ転げまわって泣いていた。

だけど……どうしようもねえ。

過ぎ去っていった時間も、そしてキャナももう戻ってくることはない。

死にたくなつたつてどうせ死ねやしないんだし、どんなに自分にムカつこうが齒ア食いしばつててめエの足で立ち上がって歩くよりしゃーねえんだ。誰のせいでもない。

ようやくそんなことを思えるようになったのが昨日の夕方のこと。ふと窓の外を見れば、綺麗な夕焼け空が広がっていた。

ああ。

そういや、いつだったかキャナと一緒に眺めながら言つたっけ。いつか二人で海を見に行こう、って。

叶わなくしちまつたのは俺だ。

思ったら、悔しくなってきたてまた泣いた。

でも、それで終わりにしようと思った。

ついでに、誓った。

二度と、こんな後悔なんかしてたまるか。将来、自分の大切な人に出会うことができたなら、どんなコトがあつたって、その人のこと、その人の気持ちを守りきってやる。

ありがとう、キャナ。

魂半分くれてやったお礼に、大事なことを俺に教えてくれたんだよな。

自分の心に素直に向き合って思いつきり悔しがったら、ちよつとだけ感謝する気持ちになれた。

ただ……正直なところ、何の未練もなくすっかり割り切れたかどうか、自信はない。

ないけど、人はその時点の気持ちをベースにして生きていくしかないんだ。

もしふと思ひ出して悲しくなったら、そのときはまた泣くだろう。どんなに悔しくても、メシを食って寝て、何度も何度もそれを繰り返して立ち上がったっていくものだ。

悔しい時の気持ちは嫌っていうほど身に沁みるけど、立ち上がっていく過程の自分なんて自分にはまったくわからない。だから、諦めちゃいけない。人が自分で気がつかない回復力を強さって呼ぶんだ。

って思ったら、まだ歩いて行けるような気がした。

そうして俺は、次の日を迎えるためにさっさと眠った。

朝、いつもより早く起床。

がっちりメシを食い、きちんと身支度をしたものの、ここ五日間の心の揺れ動きっぷりが全部力才に表れちまつてるみたいで、カッコ悪いったらない。

まあ、いっか。

そのうちなおるだろ。

思いつつボロアパートを出てから、近くのゴミステーションに大きなゴミ袋を放り込んでいると

「あら、おはよう。今日はいつもより早いよね？」

カネ婆見参。

ゴミバケツを抱えてひよこひよこやってくる。

「あー、それ持つよ、おばーちゃん。言ってくればいいのに」
「いつも済まないねえ、風間君。助かるよ」

今日はなんか自然に身体が動いた。

俺の心、少しは立ち直れているんだろうか。

これが例えば、もしかしたらまた会えるかもしれないなんて状況だったら、うじうじと引き摺ってしまっていただろう。だけど、キヤナにはもう二度と会えない。どう頑張ってみても、魔界と行き来することなんか不可能なんだから。

二度と、という言葉はセンチ入ってて気持ちよくねエが、反面割り切るのにはちょうどいい。

もともと俺は一人。

だからってカッコなんかどこにもつかないけど、自分の中でそうツツパってみたっていいじゃないか。

俺は俺。

誰が傍にいうといまいと、俺は俺の足で歩いて行かなくちゃならないから。

カネ婆のゴミバケツをゴミステーションまで運んでやった俺は

「じゃーね、おばーちゃん。行って来ます」

「はい、いつてらっしゃい。　ああ、そうそう。帰りに寄りなさい。タマゴーパックとお肉、あげるから。特売で買ってきたんだけ

ど、あたし一人じゃ多くてねえ」

お？ ラッキー！

人には親切にしておくもんだ。

「ありがと！ 夕方に寄るよ！」

何となく、気分がいいな。

足取りが軽いカンジだ。

ちよつと嬉しくなつてどんどん道を歩いて行く俺。

今日は天気もいい。

早めの登校だから、時間にも余裕がある。

いつもの景色も、何だか違って見えるような気がするな。

幸いにして魔の信号でひっかかることもなく登校はスムーズに進み（フツーはそういうものだが）、ぶらぶらとイーペー近くにある鉄道ガードのところまでやってきた。

最後にメイちゃんと会った、あの鉄橋。

彼女も、なんだかんだでいいコだったしな。

キヤナと二人で協力して、何とか生き延びて欲しいものだ。

そんなことを考えながらふと見上げると、たまたま珍しい車両が通りかかった。

俺は鉄道になんら興味はないが、いつもと違つのでぼへーっと眺めながらガード下をくぐろうとしていると

「やめて！ お願いだから！」

女の子の悲鳴が。

行く手を見やれば、ガード下の暗がりには小さな人だかりがある。高校生。

一人を、数人で取り囲んでボコっている。

よく見てみるとボコられている男子と叫んでいる女の子はイーペーの生徒で、囲んでいる連中はセッター 東掛七星高校、またの名をタバコー のブレザーを身に着けていた。江香たらいურიダーはいないようだ。

ふーん。

俺は立ち止まって、イーペー生がどつかれている様子をしげしげと眺めている。

あの様子だと、一年生っぽい。

騒いでいる女の子は付き合っているカノジヨで、一緒に登校してきたところをセッターの奴らに絡まれたものとみた。

ちよつと気になったのは、女の子がカバンを二つ抱えていること。こいつは、アレだ。

ボコられているヤツはカノジヨの手前、逃げずに向かつていったのだろう。

心意気は認めるが、一人で立ち向かって勝てる相手じゃないって冷静に判断できなかった。面子優先で無茶をこいたところ、あの有り様だ。

イーペーの生徒は勉強の偏差値こそ高いかも知れないが、ケンカの偏差値は至って低い。その点、セッターは市内でも三本の指に入る強さを誇っている。

バカだな。飛んで火に入る夏のなんちゃら。

そついや、もう夏だな。そろそろ、夏服に替えないと。

…… ああつと、それはまあ、おいといて。

売ったケンカに負けるようなヤツなんかほっときいいのだが、カッコつけながらやられている一年ボーズも哀れだし、今後セッターのバカどもに朝っぱらからこのあたりをチョロチョロされるのも鬱陶しい。調子に乗せると、行動テリトリーを広げようとするからな。

せつかく、魔の信号を無事に通過したっていうのに。
ま、しゃーないか。

俺はつかつかと早足で連中の方へ歩み寄って行く。

女の子もセッターのヤツらも、ボコられている一年生は当然、俺の存在に気がつかない。

あと十メートル、というところで俺はカバンを放り出すや否や、地を蹴った。

猛然と接近してくる俺に最初に気付いたのは女の子だった。

「あつ、あのっ！」

何か呼びかけてきた彼女の傍を駆け抜け、集団目掛けて一直線に突っ込んでいく。

ガード下に響きわたった足音でようやく連中も俺の姿を認めたが、その時にはもう間合いは詰めきっている。

「うわっ！　かつ、かざ　ぶべっ！」
「ぼっ！」

一足飛びに接近するなり間髪を容れず俺の両拳が宙を切り裂き、手前側にいた二人の顔面に吸い込まれていた。

ダッシュからの神速鉄拳ダブルヒット。名付けて「両面待ち」。
これをお見舞いされて耐えられるのは、タチシヨンの山田しかない。

二人は景気良く歩道の上を転がっていったが、吹っ飛んだ野郎に興味はない。

奥にいた二人の間を割るようにして向こう側へ突き抜けた俺は、足を踏ん張ってブレーキをかけた。

繰り出された拳は瞬時に戻して脇腹へ溜めている。
と。

振り返りざまゼ口距離両面待ちが炸裂。

「がつ！」
「べっ！」

今度は反対側へ派手にすっ飛んでいきやがった。

ヤツらは女の子の足許に転がっていったまま、起き上がりもしない。……まあ、ムリか。

四人を沈めるのに一分とかかかっていない早業に

「あ……」

女の子、ぼーぜん。

コンクリートの壁に押し付けられるようにしてどつかれていたカレシの方は、力尽きたようにずるずると地面に沈み込んでいった。

カオに多少のアザとキズがある。鼻血片方、唇がちよつと切れ、かまあ、よく堪えた方だな。

不意打ちっちゃ不意打ちだが、一人相手に四人で取り囲むようなヤツらには、これで十分だ。

四人が戦闘不能であることを確認した俺は、元来た方向へ戻ってゆつくりとカバンを拾い上げながら

「……できもしねエケンカなんざ、売るんじゃないやねエ。ヤバいときや、さっさと逃げな」

女の子と、それに聞いてるか聞いてないかわからないカレシに言ってやると、そのまま立ち去りかけた。

が、それだけじゃカレシの面目が立たないってモンだ。
思inaおした俺はつと足を停め

「俺でも、そうする」

一時間目の授業が終わった時だった。

教室のドアがからっと開き、奈々子ちゃんが顔を出した。

「孝四郎くん！ ちょっと、いいかしら？」

「あい」

返事をして席を立った。

用件について、察しはついている。

この前、生高と雲高の連中をぶっ飛ばした件だろう。あと、もしかすると今朝のことも。

奈々子ちゃんに連れられて面談室に行くと、ナウマン象 教頭
のことだが が待っていた。

これはもう、見てくれそのまんまで命名されたのだが、それほど
うでもいい。

「……風間君、この間、生瀬高校の生徒と雲井高校の生徒と、乱闘
したそうだね？」

ナウマン象が難しい顔でそう切り出した。

原始人はこんなヤツを倒して食っていたのか。俺なら食わないケ
ド。

「しました」

「生瀬高校の生徒が二人、雲井高校の生徒が三人、それぞれ病院で
手当てを受けたと、連絡があつた。幸い、骨折とかはなくて、打撲
程度で済んだらしい」

そりゃ、ラッキーだったな。俺は思った。

あの日の俺の拳には、名状し難い怨念がこもっていたから、下手

すりや入院モノだったかも知れない。

打撲なんかで済んだつてのは、俺もまだまだ拳に磨きが……じゃなくつて、まあ良かったのか。

なんてコトを考えていると、ナウマン象の隣に座っている奈々子ちゃんが心配そうに

「事情を聞いたら孝四郎くん、待ち伏せされてたみたいだけど、このことに間違いはないかしら？」

「ありません。道を塞がれてましたし、相手は俺を襲うつもりでした。だからやむなく応戦したまでです」

「応戦つて……！ いいかね、風間君。どういふ事情があるうと、暴力という手段に訴えるのは」

ナウマン象が説教めいたことを言い始めたが、奈々子ちゃんはそれをまあまあと制しつつ

「今回のことは相手の非が大きいと認められるし、それに孝四郎くんにやられた生徒達、橘商業とかにもちよつかいを出していたみたいで結構問題になっていたらしいのよね。だから、今回の一件は生瀬高校と雲井高校とも話をして何とか収めるつもりだけど、もし、また同じようなことがあつたら……」

「停学、ですか？」

先回りして訊いてみると

「そうだな。いかに相手に非があるとはいっても、ケガをさせてしまえばどうにもならない。我が校としても、一定の規律と秩序は守らなければならないんだよ。で、あるから風間君、今後は」

「……ケガをさせなきゃいいんですね？」

「そうじゃないだろうー！」

パオーン！ とナウマン象が咆えた。

おお、こわ。

あれ？

ナウマン象って、パオーンって鳴いたんだろうか。

「ああ、めんどくさ……」

ようやくナウマン象から解放されて教室に戻ってくると、入り口ドアの前に見慣れない顔が立っている。顔中、べたべたと湿布やら絆創膏だらけ。

ああ。

こいつ、朝ボコられていた一年ボーズだな。

ヤツは俺の姿を目にすると、おずおずと近寄ってきて

「さ、さっきはありがとう……ごさいました……」

ぎこちなく頭を下げた。

わざわざ礼を言いにやってきたのはまあよしとするが、こっちとしてはいろいろ話しておきたいことがある。

俺はちらと教室内の時計に目をやってから

「……ちよっと、あつちで話そうか。ここじゃカッコ悪いだろ？
そのツラ晒してたらよ」

本棟と別棟の渡り廊下に設けられた自動販売機コーナーの前。

廊下の向こうから生徒達の騒ぐ声が聞こえてくるが、このスペースには俺と一年男子のほか誰もいない。

俺は彼のために紙パックのコーヒ―牛乳を買って渡してやったが「ありがとうございます。ただ、僕はあまりコーヒ―が得意じゃなくて……」

めんどくせエヤツだな。

股間に毛の生えてない小学生じゃあるまいし、コーヒ―くらいガマンして飲めよ。

しかもこれ、ごく丁寧に牛乳で割ってあんだぜ？

「んじゃ、何がいいんだ？」

「では、バナナ牛乳を……」

何が良くてそつたらゲテモノなんか飲むんだ？

まあ、飲みたいというなら止めないけどさ。ってか、どっちも牛乳系に変わらないだろうがよ。

俺達は並んで壁に寄りかかり、牛乳系な飲み物をすすっている。

「ところで、君の名前を訊いてなかったんだけど」

横顔に向かって話しかけた。

今は顔中キズだらけだが、見てくれは悪くない。しゅつとしたスマート顔で、体型も同様。

女の子の一人や二人から好かれてもまあ、それはうなずけるものがある。

「はい、僕は一年四組の五木弘芳といいます。今日は、ありがとうございます」

「ところでさア、ヒロシ」

「……ひろよし、なんですけど」

「一字違いなんだし、同じ五木だから別にいいだろう。こまけエコト言っな」

俺はそう言って彼を強引に「ヒロシ」にしてしまうと

「君、何だってセッターの連中にボコられてたの？」

ストレートに訊いてみた。

案の定、ヒロシはちよつと嫌な顔をして

「夏美ちゃんと一緒に歩いていたら、絡まれたんですよ。逃げようと思っただんですけど、しつこかったんで、つい、その……」

「相手になった、と」

「はい……」

ヒロシ、ウソはついていないと思う。

ただ、今の発言がすべてではないと、俺はにらんでいる。

「ヒロシさ」

「だから、ひろよし、ですってば」

「いんだよ、ヒロシで。……それだけか？」

彼の頭の上には、明らかに「？」が点滅している。

俺の質問の意図がよくわからなかったらしい。

不可解な顔をしているヒロシのために、俺は補足しなければならなかった。

「わからないなら直球ど真ん中に訊くケド……その、なんたらちや

んの前でカッコつけたいって、思う気持ちがなかったって、言い切れるか？」

質問の効果はてきめんで、急にヒロシは不愉快そうに眉をしかめ

「ど、どうしてそんなコトを訊くんですか！？　べ、別に関係ないじゃないですか！」

「なくねエよ。俺はお前を助けるためにやむなくセッターの連中を潰したけど、あいつらはそのへんを歩いている他校生を見境なくボコるようなヤツらじゃねエ。女の子をからかったりするケドな。だけどボコられたってコトはヒロシ、お前」

俺は目を鋭く細めてヒロシを見た。

「……自分から手エ出したんだろ？　カノジヨの手前」
「……」

ヤツは俺の視線を真っ向から受けられず、つと目を反らしてしまつた。

返事がないが「そうだ」と認めているようなものだ。

そんなこつたろうと思つた。

セッターの制服はブレザーだから、パツと見で「くみやすし」と勘違いするヤツがまれにいる。が、市内のありとあらゆる中学校の「そこそこワル」が集まっているから、腕っ節だけは折り紙付き。中途半端にケンカを売ろうモノなら、返り討ち必定というヤツだ。ヒロシもそうだけど。

ただ、一番の問題は、この野郎のプライドがややゝサイズに出来ているらしいということだ。

カノジヨの前で見栄を張ってケンカをふっかけたのもそうだし、今こうして俺にその非を鳴らされるなり、不服そうに黙ってしまっ

たのもそう。

俺達の年頃はみんなカツコつけたくなる。それは仕方がない。だけど当然のことながら、そんなものは紙切れと一緒にだ。

いや、紙切れ以下。紙なら指をちよつと切れるけど、プライドでは指の皮一枚切れない。

プライドに形を与えるもの、それはそいつの実力あるのみだ。

実力に適わないプライドを築いてしまうと、必ずそのしつぺ返しをくう。ケンカでは百パー鉄則。

ま、こいつは今日、自分の取るに足らないプライドのために痛い目に遭ったワケで。

ちつとは懲りてるだろう。

同じ学校の生徒として多少慰めの気持ちもなくはない俺。

「……悪いコトは言わねエから、もう無茶な手出しすんじゃないよ。次あいつらにケンカ売ったらヒロシ、ただじゃ済まないぞ。病院のセンセと仲良くせにやならんぜ？」

穏やかにわかるように、諭してやったつもりだった。
ところが。

「ほつといてくださいよ！ 助けてもらったことにはお礼をいいますけど、そんな情けないヤツみたいな言い方される言われはないです！」

おやおや。

逆ギレですか。

「待てや。誰もお前のコトを情けないなんて言った覚えはないぜ？ 無茶なケンカを売るなど言ったんだ。ヘンな受け取り方してんじやねエよ」

「だって、そうじゃないですか！ お前は弱いから引っ込んでろ、みたいな言い方して」

俺は持て余しかけていた。

なんとまあ、想像力の豊かなコだこと。

「どうやったら「無茶なケンカするな」「お前は弱い、すっこんでろ」になるんだろう？」

市内最バカの生高のヤツらだって、もうちょっと道理の通った考え方をするだろうに。

「こつこつヤツにはどういふ風に言ったら納得できるんだ？」

「可愛らしいと思って抱いた子犬がブサイクだった、みたいな顔をしている俺に、ヒロシは」

「僕だって、その気になれば夏美ちゃんを守れるんです。今日は相手の数が多かったからやられちゃったけど、そうじゃなかったら」

「あー。」

「ダメだこりゃ。」

勢いで口走っていいことと悪いことがある。

「こつこつヤツは、必ず同じコトを繰り返す。で、ボコられる。病院送り。」

「そう思った俺は咄嗟に、ヒロシの胸ぐらをつかんでいた。」

「……死にてエのか、てめエはよ」

瞬時に他校生との戦闘モードばりな殺気を発しつつ

「守るなんて簡単に言っけどな、んな簡単なコトじゃねエんだ。くだらんプライドにこだわる前に、まずはてめエの身の程を知れよ、」

タコ！ お前が余計な真似すれば、このガッコーの連中がみんな迷惑すんだぞ！ わかってんのか？」

低い声で脅しつけてやった。

俺の脳裏に、キヤナの姿がある。

自分の拳に自信をもっていた俺は、例え魔法使いが相手だろうと、彼女のことを守れそうな気がしていた。

でも、それは夢でしかなかったワケで。

逆にキヤナは、こっちの世界に魔神が侵略してくることのないように、その本音は、俺がこれ以上魔界の戦いに巻き込まれないように、命を賭して魔界へ戻っていった。そんな彼女の気持ちを受け止めてやれなかっただけに、今のヒロシの姿は自分を見るようでイヤだった。調子に乗っていた、何週間か前の俺と同じ。

ヒロシと自分がかぶって見えただけに、心の底では俺も冷静さを欠いてしまっていたかもしれない。

ほとんどぶん殴りかねない勢いで迫ったものだから

「……………」

ヒロシはビビった顔をしてから、少しづつ泣きそうになっていた。

それでもヤツはキツと俺を睨み返すと、胸倉をとっている手を「ばしーん」と振りほどき

「ほっといてください！ 僕の気持ちなんて、風間さんにわかってたまるか！」

背中を向け、走って行ってしまった。

「……………」

ヒロシの姿が廊下の角を曲がって消えていくのを黙って眺めている俺。

くしゃつとコーヒー牛乳のパックを握りつぶした。

あんまし、いい気持ちがない。

ヒロシにじゃなくて、自分に。

俺に対する俺の苛立ちを、ヤツにぶつけたような格好になってしまった気がしたからだ。

それはまあ、思い込み過ぎかもしれないが。

あのヒロシ、ちょっと心配。

(バカな真似しなきゃいいけどねえ……)

内心で呟きつつ、ふと思った。

夏美たらしいカノジョ、そこまでして惚れるような女なのだろうか？

どうもよくわからん。

授業が始まりそうなので俺も教室へ戻ろうとすると、廊下でばったりと男子便所に出くわした。

ヤツは俺を見るなり「ニカツ」と笑って胸筋をぴくぴくさせながら

「風間ア！ 乱闘の件、不問に付すように校長にくれぐれも頼んでおいたからな！ 大丈夫だ！」

やけに自信たっぷり言い切った。

校長、この野郎に何か弱みでも握られているのだろうか。

「は、はあ……ありがとうございます……」

別に助けてくれなんて一言も頼んでないけど。

それはそれとして、俺のためにしてくれたことだから一応礼を言
っておいた。
が。

男子便所の話には続きがあった。

「……で、その代わりといっちゃなんだが、今日から一ヶ月間便所
掃除。便所をキレイに磨いて、ついでに心も磨け！ この俺みたい
に、清々しい青春を送れよ！ はははは」
「……………」

その21 再生の日（前編）（後書き）

お気に入り登録してくださった方、またお目通しくださった方、本当にありがとうございます！
今週は金曜日まで毎日掲載します。

その22 再生の日（後編）

（まったくよオ、何で俺が……）

放課後。

心の中でぶつぶつ言いながら、モップで便所の床をこしこしやっている俺。

せっかく前向きに立ち直っていこうと決意したその日に便所掃除かよ。

しかも一ヶ月ときた。

ってか、もう七月だから、夏休みにかかっちゃうじゃないか。

夏休みも便所掃除に出て来いってコトなのか？

……ありえん。

あとで男子便所（ややこしいが、田中のコトだ）に確認しておかなければ。

まあ、ボロアパートにいたところで暑いだけだしするコトないし、それが世のため人のためになるなら強いて拒否ったりしないけど。

現在、まだ四階。

先は長いぞ。頑張れ俺！ 負けるな俺！

帰ったらカネ婆がタマゴパックと肉をくれるぞ！

みみっちいっちゃその通りだが、俺はそれを楽しみに便所の床をこすり続けた。

期末テストが近いせいか、一年生フロアはほとんど人気がない。入学してから初の本格的なテストだから、みんな気合いを入れて勉強しようとしているのだろう。

そっぴや俺、一年生の時ってどうしてたっけ？

テスト勉強そっちのけで並み居る他校の不良をばったばったと沈めていたような気がする。

今回は心を入れ替えて、ちゃんと勉強することにしよう。

エクスカリバーも色々協力してくれていることだし。テストが終わったら『霹靂のレーヴァテイン三巻』貸してやろうかな。などとあれこれ考えながら作業を進めていると

「でさあ、手も足も出せないの。ダッサくない？」

廊下の方から、女の子の声が聞こえてきた。
まだ居残りしていたのがいるらしい。

「あれだよな、今どきそれがカッコいいと思ってるのかな？ 昔の青春ドラマじゃないんだから、さ。俺ならさっさと逃げるけどね」

なるほど。

相手は男か。

そりゃあ、居残りするワケだ。

ってか、なんかこっちに近づいてきてるな。

「結局さあ、たまたま二年の風間先輩が通りかかってえ、あつという間にやつつけちゃったの。すごかったあ、あれ！ 四人をやつづけるのにたった十秒だよ！ 噂には聞いてたけど、目の前で見たらやつぱすごいよね。あたし、マジでばーぜんだもん」

「マジ！？ なんか、さっき聞いたんだけど、風間先輩、確か先週も十五人くらい相手にして十人を病院送りにしたらしいぜ？ で、校長に呼ばれて停学寸前だったって」

……ん？

俺のハナシか？

間違いないな。二年に風間は俺しかいない。

噂は別に構わないけど、話がなんだかとてもない方向に脚色されてねエ？

まず「十秒で四人」はありえんだろ。少なくとも二十秒はかかってると思うぞ。

それに「十五人相手に十人病院送り」って……。

俺は某幕末マンガの無敵な剣客か！

一度に十五人も相手にしたら、無難にこっちが即死だよ。

ってか、ハナシの内容から察するに、女の子の方はもしかして

「っーか、ヒロもバカだよな。あのあと保健室でさ、泣きそうなカオして『ゴメン、本当にゴメン』とかっていきなり謝ってきたの何が？　って訊いたら『夏美ちゃんのコト、守ってあげられなかった』だつてさ！　マジ笑いそうになっちゃった！　あんまりバカだからあたし、言っちゃったの。　そうだよ。あんなチンピラくさい不良の三人や四人、風間先輩みたいにやつつけて欲しかったな、って」

夏美とかいう、ヒロシと付き合っている女だ。

しかし、なんかくくでもないヤツだな。

てめーのことを守ろうとしてボコられた彼氏のコト、バカ呼ばわりしてやがる。

俺のイヤーな予感、的中。

ヒロシが熱上げてカラダ張るような値、これっぽっちもないじゃないかよ。

見た目には清纯派っぽくて浮ついた感じのしないコだったと思っただけ。

やっぱ、人は見てくれで判断できないものだ。

しかも黙って聞いていればこの女、さらっとんでもないコトを口走りやがった。

「さっきもさあ、一緒に帰ろうって言うてきたから、ダッサい男と歩くのはイヤだって断ったの。そうしたら、どうすればいい？」と

か訊くからあたし、束掛七星の不良にやり返してきたらいいよ、って言ってやった。そしたらさああいつ、顔色変えて走って行っちゃった」

……！？

今、何と？

セッターの連中に仕返ししてこい、だと？

聞き捨てならねエな。

「それ、ヤバくない？ 五木、マジで行っちゃったんじゃないの？」

男子の方は軽く焦ったらしい。

「げっ」って感じの声で言ったが、夏美は事も無げに

「いいんじゃない？ ヒロがやりたいって言うんなら。 なんだかさあ、二時間目の前に風間先輩にお礼言いに行ったんだけど、お前も手エ出すなみたいなコト言われたらしくて。 本人的には納得いかなかったらしいよ。 だから、いいって！ もっかい痛い目みた方が目が覚めるんじゃない？」

「 お前、もう一回言ってみやがれ」

たまらず飛び出した俺。

会話に出していた人間の姿がいきなり目の前に現れたものだから、夏美と男子はぎょっとしたように立ち止まった。

「かつ、風間先輩。 さ、さっきは、どうも……」

夏美はおどおどと礼にもならない礼を口にした。
完全に目が泳いでいる。

そういうナメた態度が、俺の怒りに火をつけた。

「なアにがどうもだ、コラ！ もっぺん抜かしてみやがれつつてんだよ！」

夏美の胸倉をつかんだ。

俺のえらい剣幕にまずビビったのは、彼女よりも一緒にいた男子の方だった。

「せ、先輩！ 落ち着いてくださいよ！ 夏美ちゃん、女の子なんだし……」

慌ててとりなそうとしているが、もう遅い。
マジギレした俺は夏美をがくがくと揺さぶりながら

「バカか、てめエ！ 男だろうが女だろうが、言っている事と悪い事の区別ってモンがあんだろうがよ！ あのヒロシ、こいつの目の前でダツサイ真似こいちゃったって、すげえヘコんでたんだぞ！ それを何だと？ わざわざ煽り立てるようなコト言いやがって……」

普通のコならここまでキレられれば泣き出しそうなものだが、夏美は違った。

露骨に不服そうな力才をしてふてぶてしく

「あたし、別にやり返して来いって煽ったワケじゃないですから。仕返しに行ったとしても、それはヒロシが勝手にやったコトです」

そこで止せばよかったが、この女は続けて

「ってか、あたしとヒロシのコト、別に風間先輩にはカンケーないハナシじゃないですか。あいつを助けてもらったのは感謝しますケド、

そうやってあんまりクビ突っ込まないでもらえます?」

カチン。

俺の中の煮えたぎるマグマ、大爆発。

「……寝言抜かしてンじゃねエぞ、コラ!」

あふれ出した怒りはもう止められない。

夏美の胸倉をつかんだまま力任せに引き寄せるなり、傍らの壁に「ドン」と押し付けた俺。

女の子に対してありえない行為。暴力。それはわかっている。だけど、こいつだけは……腹の底から許せねエ。

「あのバカ野郎はな、お前のコトが好きだから無茶こいてんだぞ! それを何だと? あたしは知りませんだア!? 自分勝手もいい加減にしろよ、このクソ女!」

人気のない廊下に俺の声がわんわんとこだましていく。

全力で怒鳴っちまった。

男子の方はもう、ぼーぜん。

壁に叩きつけられた夏美は一瞬目を大きく見開いたが、続けざま真っ向から飛んできた俺のプレッシャーを受けきるだけの度胸はなかったらしい。

見る見るその目に涙が溜まっていく。

「ひつく、ひつく、ふえ……」

けっ。

所詮、口先だけのバカかよ。

ヒロシといい夏美といい、どうしてここまでてめエのプライドお

大事に考えられるんだろう。

全部まずい方向に働いてしまっているってのが、なぜわからない！？

俺もそうだったものな。

くっだらな面子と感情に振り回されてしまったから、大事な人に悲しい思いをさせたまま別れてしまわなければならなかった。

んなコトはあっちゃならないんだ。

絶対に。

が、ヒロシの野郎も、結局はそこにハマッたまま抜け出せずに夏美に踊らされてしまった。

夏美も夏美で、自分の言う通りに踊るヒロシを面白がって見ていたワケだ。

くっだらなヤツら。

こつたら後輩どもに手を貸してやるんじゃないかった。

セッターの連中を四人もぶっ飛ばしてしまったっていうのにって、おい！

ハッとなった。

夏美をシメている場合じゃねエ！

ヒロシのヤツ、本気でセッターのヤツらをやり返しに……！

「おい、夏美イ！ ヒロシ、ほんつとに、セッターのヤツらを潰しに行ったんだな！？」

ほとんど泣きながら、彼女は何度もがくと首を振って見せた。

「……ちっ！」

夏美をつかんでいる手を放し、俺は廊下を駆け出した。

今朝、俺はセッターの四人をぶちのめしている。

連中はただでさえそのコトを根に持っているというのに、追つか

けでヒロシみたいなザコが挑んでいたりしたら、結果はどうなるか火を見るより明らかだ。

間に合えばよし、さもなくば……。

階段を一気に飛び降り飛び降りして一階までたどり着いた俺は、玄関で靴を履き替えて表に飛び出そうとしていると

「……お！ 風間ア！ 便所掃除の方は、どうだ？ 終わったのか？」

男子便所（＝田中）。

まずいヤツに会っちゃった。

「あーセンセ、とりあえず（四階だけは）OKっす！」

カッコ内は省略。

すると、男子便所はニツと白い歯を見せて

「よしよし！ そうやって頑張っていれば、先生達の心証も悪くはならんからな！ 明日も頼むぞオ！ はははは」

「あ、はあ、はい……。そいじゃ、失礼しまっす！」

あとも見ずに駆け出した。

悪い、男子便所。

もしかしたら俺……このあと、あんたと奈々子ちゃんの好意に口をかけてしまうかも知れない。

でも、そうなったとしても勘弁。

俺は俺のスジを通すつもりだから。

セッターのワルどもがうろつきそうな場所にいくつか心当たりが

ある。

一つは、最寄り駅の駅前商店街にあるだっ広いゲーセン。置いてあるゲームは全部古い。

もう一つは、一つ先の駅から徒歩五分のファミレス。バイトのウェイトレスが千井（ちい）女子高等学校のキレイなコ達ばかり揃ってるってんで、セッターの野郎どもがしつこく入り浸っている。

ちなみに千井女子は基本的にアホな女ばかりが通っていることから「痴女」という、不名誉な呼ばれ方をしている。妊娠・中絶騒ぎが絶えないから、あるイミ当たっているケド。

が、その二箇所は後回し。

ヒロシがセッターの連中の行動パターンについてそこまで把握しているとは思えない。

彼が向かったとすれば、イーペーとセッターの間にあつて、セッターの連中と遭遇しそうな場所。

その地点を頭の中であれこれ推測しつつ、俺は走っている。

ただ、中学と違って高校生の通学範囲はやたらと広いから、ピンポイントで狙ってもかち会うことは難しいだろう。ちよいと厄介かもしれない。

イーペーからもっとも近い公園とか繁華街を探してみたが、ヒロシらしきヤツの姿を発見することはできなかった。

（あんにやるー、ドコを狙って行きやがった？ まさか、盛り場ンなってるゲーセンかファミレスに一人で乗り込んだりしてないだろうな？）

ヘンな場所に足を踏み入れて袋叩きに遭わされたりしてなきやいいが。

イヤな想像が脳裏をよぎる。

ここは一つ、セッターのテリトリーまで突っ込んで探した方がいいかもしれない。

思いつつ、俺は片側二車線の車道がある、大きくてごつつい鉄橋のところまでやってきた。名前がつけられていたが、忘れた。

キヤナと夕陽を見にきた、あの川にかかっている橋。息を弾ませてその橋を渡ろうとした時だった。

ふと見下ろした川べりのサイクリングロードの脇、草むらに転がっている学生服姿が俺の目に飛び込んできた。

イーペーの制服。

間違いない。

土手から川べりへと降りて近寄って行くと　果たして、ヒロシが横たわっていた。

ズタボロ。

一見、死体のようだ。

とてもケンカに勝った者の姿じゃない。

このバカ、見事なまでの返り討ちをくらったらしい。

間に合わなかった。

「……おい、ヒロシ！　生きてんのか、コラ！」

傍に屈んで声をかけてみたが、返事はなかった。

髪の毛がぐしゃぐしゃで、額やこめかみが切れている。これは得物でやられたと見ていい。

顔全体は原型がわからないくらいえらく晴れ上がり、噴き出した鼻血が口元からノドのあたりまで真っ赤に染め上げている。前歯だって、何本かはイツてるだろう。ふと制服の袖から出ている手を見れば、あり得ない紫色に変色。何本か指の太さがおかしな事になっているのは……折れたのか、折られたのか。

制服の上からじゃわからないが、この分だとあばらの具合も怪しい。

本当に病院送り、か。

あれだけ忠告したのに。

こいつが学校を飛び出してからそれほど長い時間が経っていない
と思ったが、そうだとすればこのやられ方からわかるのは セッ
ターのヤツら、かなりの人数で寄ってたかってヒロシを潰した。
なにがどうしてそうなったのかはわからないが、あまりにも無残
過ぎる。

たかがこつたらザコ相手に、なんでここまでやらなきゃならん
だ。これはもう、ケンカというようなモノじゃない。リンチじゃね
エかよ。ケンカってのは、対等な条件でやり合うモンだ。

身の程をわきまえなかったヒロシもヒロシだから、ストレートに
怒りは湧いてこなかったけれども。

ケガの状態がひどくて手の施しようがないから、黙ってヒロシの
傍にしゃがんでいる俺。

キズだらけのヤツを眺めていたら、このあと自分のすべきことが
わかったような気がした。

男子便所に奈々子ちゃんにナウマン象。

申し訳ない。

たった今から俺は 自分が正しいと信じた行動をとる。

その前に、このバカな負傷者を病院へ連れていかねばならない。

つつても俺、ケータイをもってないんだよな。

誰かいなかと辺りを見回してみた。

運よく、イーペーの男子生徒二人連れが通りかかった。

何年生だかよくわからないが、俺は咄嗟に

「おい！ お前ら！」

大声で呼びつけてやったら、二人ははっとしたようにこつちを見
た。

ちよつとたじろいでいる。

が、俺が同じ学校の人間だとわかったためか、慌ててこつちに駆
け寄ってきた。

俺はどっちのヤツの顔も知らなかったが、片方は俺のことを知っていたらしく

「あつ！ 風間先輩！」

声を上げた。

なんだ、一年生か。

図体でかいから、三年生かと思った。

すると、もう片方の男子は「えっ！」という顔をして

「風間先輩！？ あの、神速鉄拳の……？」

「ああそうだ、俺は二年の風間だ。でも、こいつは俺がやったんじゃないぜ？ セッターの連中にやられたんだ。お前ら、悪いけ

ど救急車呼んで、こいつを病院まで頼む。……ケータイ、持つてるか？」

「は、はいっ！」

「じゃ、救急車呼ぶついでに、イーペーにも連絡してくれ。こいつは五木ヒロシ、じゃなかった弘芳ってんだ。確か一年四組だったと思う」

手短かに必要な処置を命じてから駆け出そうとすると

「あつ、あの……俺、イーペーの職員室の番号、知らなくて……」

「んなもの、ケータイサイトで調べりゃ出てくるだろ！ ぐずぐずしてたらこのボーズ、くたばるかも知らんぞ！ さっさとやれ！

通話料が欲しけりや今度二年二組まで取りに来い！」

「はっ、はいっ！ わかりました、風間先輩！」

「……よし。んじゃ、あとは頼んだぞ」

立ち去りかけたが、一年生は不思議そうな顔をして

「あの……風間先輩、どこ行くんです？」

俺が二人に全部押しつけてとんずらしようとしている、とでも思ったのか、どうか。

んなコトしねエって。

「俺か？　こいつをやった連中を探して借りを返してくる」

ポツケに手を突っ込んで道のと真ん中をのし歩いていく俺。
まるで任侠映画かヤンキードラマの主人公。ドスも木刀も持っていないケド。

向こうから何度かセッターの生徒がやってきたが、みんな「あ、やべー！」的に俺を避けていく。

だろうな。

行く手を塞ぐヤツは皆殺し、くらいの殺気全開だし。

実際、相手になろうとするヤツがいれば問答無用でぶちのめしてやるつもりだった。が、俺が修羅か般若みたいな形相になっているものだから、近寄ることすら恐れているようだ。

それでいい。

無用の鉄拳は振るいたくない。

こんなコトさえなければ、神速鉄拳は今後行使しないでおこうと思っていた。俺のために駆けずり回ってくれている奈々子ちゃんとか男子便所にすっごく申し訳ない気持ちになっていたから。

が、そうもいかなかった。

殺されかけたヒロシなんぞ知ったコトではないが、放っておけば今後イーペーがセッターに脅かされることになる。

それも面白くない。

正直イーペー自体、ちょっと勉強がお出来になるお子様の集まりで、根性のあるヤツは数えるほどもいない。ヒロシや夏美がそのいい例だ。全力で守りたくなるような学校じゃない。生高だのセツターにメタメタにされたとしても、そいつはためーらの責任つてものだ。学校のお勉強じゃ自分の身は守れない。

だけど。

ほんのささやかでも守る価値　エクスカリバーとかエロスケベとか、その他もろもろ　がそこにあるんなら、全力を出すべきだ。キヤナはそうだった。

本当は魔界なんかどうでもいいってのに、自分達の責任だからって行っちまいやがって。

でも……それはすごく大事なことだ。

小さいコトだからって手を抜いたり知らんぷりしていれば、必ず大きな後悔がやってくる。

例え無駄な労力を費やしたとしても、全力でやれば「やりきった自分」っていう結果が残る。

ま、俺が今からやろうとしているのは所詮はケンカだし、そういう理屈付けなんて全くイミないけどな。

それでもいい。

くっだらないモンのためにバカみたいに必死こく。

だから面白いんじゃないか。

その意味においては、ヒロシだってちょっと頑張ったかも知れない。

ヤツがただ逃げて、逃げ切れなくてつかまってボコられただけだったら、俺もここまでしようとは思わなかっただろうし。

「……ここだな」

小さな商店街の一角、ボロっちい商店ビルの前で足を停めた俺。見上げれば「ゲームセンター　ピーポー」なる、昭和初期みたい

な看板が。

江ノ島のスマートボール場じゃあるまいし、今どきこういうゲーセンなんて見つける方が難しいだろう。

ってか「ピーポー」って、誰のセンスだよ。

救急車かつ！　ってツツコミを入れたくなるが、それはおいといで。

多分、セッターの連中はこの中にいる。

ヒロシを短時間でボコボコにしたという状況から推測できるのは、大人数でやったということ。

あの場合からずらかった後ぞろぞろやって来るとすれば、ここ以外には考えられない。

痴女のファミレス（イヤな表現だ）は連中が一度大勢で入店して大騒ぎをしてかして以来、警察からしつこく監視されている。そんなこともあったから、まずこっちへやって来たのだ。

一歩踏み出すと、古びた自動ドアががくがくと開いた。

俺はそのまま中へ入らず、店内を見回した。

ピーテロテロテッテラテッティー……いろんなゲーム機の音がごちゃ混ぜになって、開いた入り口から一気に漏れ出してきてうるさいっतरらない。

ボロいくせにやたらと広いゲーセンだから、踏み込んだ方がいいのかと思っていると　あっさり、ヤツらがいた。

江香ほか、セッターの連中多数。

仲間がやっている格ゲーの様子を面白そうに横から覗き込んでいた江香。

ふと、入り口に仁王立ちしている俺の姿に気が付くと「あ！」みたいな顔をして

「お、おい！　あいつだ！　イーペーの風間が来てるって！」

叫んだ。

「何イ！？ 風間！？」

ほかのヤツらも一斉にこっちを見た。

気付いてくれたなら、話は早い。

俺は無言で親指を立ててあっちの方角を指し示した。

表に出やがれ、ツラ貸せや、のサイン。

案の定、セッターの連中が色めき立ちながらこっちへやってきた。
俺が一人だと思って、数を頼んでいる。

…… かった。

内心でほくそえんでいる俺。

懷に武器を隠したりとかそういう卑怯な真似はしないが、勝つための戦術を用いるくらいはアリだと思っている。

俺は先に立って歩き出した。

五分後。

ピーポーからほど近い位置にある児童小公園。

あまり広くないスペースの中に、小さいお子ちゃま達の遊具とか砂場がいくつか点在している。

その中央まで進んだ俺は、くるりと振り返った。

ちよつと遅れて、あとからぞろぞろとやってきたセッターのヤツら。

やがて、鶴翼の陣形的に（これは言い過ぎ。ただの半円状だけど）俺を取り囲んだ。

十五歩程度の間合いがある。

一番遠い立ち位置に江香、そしてその隣に…… いかにも顔つきの悪いのが一匹。

向こうの体勢が整ったとみた俺は、そろりと目だけを動かして人数をかぞえた。

一人、二人、三人、四人…… 全部で十五人、か。
奇遇だな。

誰が流したか知らない噂の通りだよ。

しかしまあ、ブレザーってのはどうも締まりが悪いな。

中途半端に群れている中学生のようにしか見えないのだが。

「……おい、風間。今朝はうちの二年、ボコってくれたんだよな？」

顔つきの悪いヤツが口を開いた。

他の連中は髪を伸ばしたり染めていて今どきな若者風だが、そいつだけは短髪。

ヤツは俺の名前を知っているようだが、俺は相手の名前を知らなかった。

「お前、誰？」

「なアにイ、てめエ！？ 佐々木さんのコト、知らねエの！？ お前、バカじゃね でっ！」

何を思ったか、大声でリーダーのPRを始めた江香。

が、佐々木たらしい男はヤツの後頭部を「ペーン」と一撃して

「騒ぐな、ボケ。おめエらがそうだから、あいつ一人にやられんだよ」

「すつ、すんません……」

ぺこぺこしている江香。

前々から思っていたけど、本当にアホだ。

俺は佐々木に向かって

「……おい、小次郎」

「あア？ 誰が小次郎じゃい！ 俺の名前は昭正だ」

「佐々木だから小次郎でいいだろうが。……うちの一年をボコった

のは、ここにいる連中か？」

訊いてみた。

すると小次郎はニヤツと笑って

「だったら、どうする？」

……了解。

それがわかれば十分だ。

「なア、小次郎」

「だから、昭正だっつってんだろーが！ のめすぞ、てめエ！」

やけに小次郎を嫌がるな。

何か不愉快な思い出でもあるのだろうか。

ヤツは「イラッ」ときているようだ。

俺は構わずに

「お前、知ってるか？ イーペー生の間で広まっている噂。なんでも、俺が他校生十五人を一人でぶちのめしたとかいうコトになっとるらしい。何がどうなってそうなった、ってカンジでワケわからないのだが」

「てめーのガッコーの噂なんか知らねエよ、カス！」

「まあ、聞けって。 ちょうどここに十五人びったり、いるよな？」

言いつつ、ギラリとすごい目つきで佐々木に一瞥をくれてやった。

「……噂、真実にしてやるわ」

「じゃあこれね。余りで申し訳ないけど、良かったら使ってちょうだい」

「いやーすいませんねえ。すつごく助かります！」

約束通りカネ婆の家に寄ると、想定した以上の品々を賜った。

でっかいレジ袋の中に、タマゴと豚肉のほか魚とか夏みかんとか、なんかメチャクチャ入ってるし。

しつかりお礼を言つて玄關を出ようとすると

「ああ、それから風間君」

「はい？」

「ゴミステーションの大きな袋、風間君が出したのじゃない？業者の人がね、これじゃ回収できないからって置いていつてるのよ。持って帰って、もう一度仕分けし直した方がよさそうよ」

「あれま。そいつはすいませんでした……」

ゴミステーションの前に立った俺。

確かに、朝俺が出した大きなゴミ袋だけがぽつんと残されている。特別なゴミの詰まった袋。

キヤナが残していった服とか、彼女があれこれ研究していた魔法のメモとか。

全部、一気に処分しようと思ったのに。

……帰ってきちゃったのか。

途方に暮れた俺。

しばらくその場に佇んだまま、電柱の足元に置かれたゴミ袋を眺めていたが

「……ぶっ！」

自分でもよくわからないけど、腹の底から可笑しみが込み上げてきた。

しゃーねエな。

きつと、物にキヤナの念が宿っていて、ボロアパートに帰ってき
たかったんだろ。

だからゴミ収集業者の人、持って行けなかったんじゃないだろう
か。

そんな気がした。

そこまでして俺のところに行ったのかい。

ごめんな。

捨てようとしたりして。

朝はキレイさっぱり決別してやれと思ってゴミに出したけど、今
はそこまで思い詰めなくらいの余裕が心にある。

俺はついさっき、セッターの十五人を完膚なきまでにぶちの
めした。

確かに相手は大人数だったが、多けりやいってモンじゃない。

小公園の遊具を盾代わりに使いながら、相手を分散させて潰して
いく戦術に出た俺。

作戦は成功。

ってか、一番最初に佐々木を潰してやったから、セッターの連中
はいきなり戦意を喪失しちゃったんだけど。

それからは残敵掃討。腰の抜けたザコ相手に手こずるような俺じ
やない。

バタバタとなぎ倒してやったが、何人かは病院送りになったハズ。
今日教頭の前で自粛を誓ったばかりの俺がこういうコトをすれば
どうなるのか、わかりすぎるくらいわかりきっていた。

停学。

だけど、何の後悔もしていない。

ってか、逆にすっきりした気分だ。

完全勝利だったから？

ヒロシの仇を討ってやったから？

……どっちも違うね。

停学なんてリスクにビビることなく、自分が信じた正義を貫くことができたから。

愛想尽かした男のプライドを弄んで他校生とケンカをさせた性悪女。

そしてその女にカッコつけて見せたかったばかりにそれに乗せられ、ボコられた挙げ句病院に送られたバカ一年生。

どっちも救えない。

救えないから、筋を通すってのがどういうコトなのか、ヤツらに見せ付けておいてやりたかった。

が、二人がそれに気付こうと気付くまいと、知ったコトじゃない。今日ヒロシを潰したセッターの連中は、放っておけば調子に乗ってイーペーの生徒達によくないちよっかいをかけてくるようになるのは火を見るより明らか。だから、俺の行動は結果的にはイーペーのためにならなくもない。

ま、俺のためにカラダ張って敵だらけの魔界に飛び込んでいったキヤナはもつともつとすごいよな。

それを考えりゃ、停学処分なんて屁でもない。

やりたきゃ勝手にやりゃいいさ。

(……帰ろう、キヤナ。あんな部屋でよけりゃ、さ)

よっころしよ、とサンタクロースのようにゴミ袋を担ぎ上げ、ボロアパート目指して歩き出した俺。

ふと見上げた空は、キレイな茜色に染まっていた。

キヤナ。

俺、ちよっとはお前に近づくとコトができたんだろうか。

その後。

結局、俺は停学処分をくらった。

セッター軍団十五人を叩きのめした翌日、朝一で面談室に呼ばれるなりナウマン象は何度も「パオーン！」と咆えた。

奈々子ちゃんはおろおろしているし、男子便所は

「はははは……」

いつもの笑い声が乾いている。

俺は教師達の狼狽えぶりが面白くて、ぼへーっと眺めていた。

奈々子ちゃんとか男子便所には、確かに申し訳ないと思う。

だけど。

俺は自分の振るった鉄拳は正しかったと信じている。

黙っていたら、セッターのヤツらは間違いなく調子に乗っていただろう。

だから、何も悔いるコトなんかない。

停学なんか最初から覚悟の上だし。

学校とのめんどくさいもろもろがあつて、それから二日後。

俺はふらっとヒロシを見舞いに行ってみた。

お金持ちのご家庭なのか、病室は個室をあてがわれていた。

頭から顔から、包帯だのなんだのづくめでミイラ男状態のヒロシ。

彼はベッドの上に乗体を起こしていたが、俺が入って行ってもこちらを見向きもしない。

病室のドアを閉めてから、入り口のところに黙って立っていると

「……話、聞きました」

小さな声でヤツは言った。

続けて

「僕は、頼んでませんから。誤解しないでください」

こいつ、自分のために俺が停学くらったと言われるのが嫌みたいだ。

もとよりそれを言うつもりはない。

俺はニヤニヤしながら

「たりめエだ。お前のためにやったんじゃねエよ。お前こそ、誤解してんじゃねエ」

即答してやると、ヒロシは初めて表情を動かした。
顔に驚きがある。

「じゃあ、何で……？」

「……やられっぱなしだと、イーペーの恥だから。それだけのコトさ」

「……」

何とも言えない表情で俯きやがった。

やっと、事の重大さに気が付いたらしい。

わかったか。

お前一人やられて済むようなハナシじゃなかったんだっつーの。

軽拳妄動しやがって。

……お？

今、難しい四文字熟語を使った？ 俺。

別に、こいつの感謝の言葉なんか期待ゼロだし、聞きたくもない。
それよか昨日、駅前ではったりとタチシヨンの山田に会ったのだが

「風間。また、お前に借りが出来たな。うちの学校じゃ、お前は英雄になつてゐる」

そんな表現で感謝してくれた。

結果論ではあつても、俺の決断と行動を素直に喜んでくれているヤツらがいる。

ほかに何を望む必要がある？

今日ここへやってきたのは、単にヒロシのケガの具合を見ようと思つただけだ。

とりあえず生きているみたいだし、これ以上用はない。

そのまま病室を出ようと思つたが、もう一つだけ、ヒロシに伝え忘れていたことを思い出した。

「……お前、夏美たらしい女のコト、まだ好きなの？」

「べ、別に関係ないじゃないですか！」

「そりゃそーだ。だけど……」

自分を賭けてもいい女なんて、そうそういるモンじゃないぜ。

そう言つてやろつかと思つたけど、ストレート過ぎるから止めておいた。

代わりに

「うちのガッコーの女子達はみんな、暴力に訴えない人が好きなんだと」

「え……？」

ヤツのリアクションを確認することなく、俺は病院を後にした。退院したら、夏美に訊いてみな。

カッコつけて他校生と乱闘こくのは時代遅れなんだとさ。

……あれ？

ってコトは、俺も時代遅れ？

だとしても別にいいや。

こういう俺が俺だから。

外は日差しが強い。

今日も暑くなった。

カキ氷でも買って帰ろうかな。いや、氷とシロップにしよう。自分で作ればいくらでも食える。

気が付けば季節は、夏本番を迎えようとしていた。

その22 再生の日（後編）（後書き）

おまけ

奈々子「おはよう、孝四郎くん！ ちゃんと、大人しくしてた？」

孝四郎「おはよ、センセ。大丈夫、ケガさせてないって」

奈々子「……！？」

次話から怒涛の新展開！

その23 変わりゆく季節

時間は少し先へと進む。

季節は変わり、夏が終わって秋がめぐってきた。

ようやく俺も、自分の生活ペースに戻れたような気がする。

今思えば、短い期間とはいえ魔女と暮らしていたなんて、夢を見ていたようだ。

でも、あれは夢でも何でもなくて、キヤナという一人の女性は確かにこの部屋にいた。

彼女が使っていた服とかメモの類、ダンボール箱に納まって押し入れの中でひっそりと眠っている。いつまで残しておいていいものやらわからないが、これはいつか俺が……人間の女性と恋愛をして結婚する時がきたらお別れすることになっている。

キヤナ。

今、彼女はこうしているのだろう。

魔神とか魔界衆の手にかかったりしていないことを祈るしかない。

俺が好きになった女性だから。

いつまでも、無事でいて欲しい。

それはともかく、俺自身もまたうかうかしてられない。

年が明けて春がくれば、とうとう三年生。高校生活最後の一年がやってくる。

エクスカリバーや奈々子ちゃん達の助けを借りて少しずつ勉強に精を出すようにはしているものの、かといって進路は未定のまま。

夏休みにおじさんやおばさんの家に戻って相談したならば

「全部が全部はどうにもしてやれないが、大学へ進みたいなら出来る限り応援はする。だから、遠慮することはない」

と言ってくれた。

ありがたい。

だけど、大学へ行くだけの金銭的な目処も立たねば、学力面での目処も立たない。

就職というセンもちらと考えたが、俺みたいな中途半端な高卒を雇ってくれるような会社がこの世界にあるとは思えなかった。バイトじゃなくて社員として働かなくちゃこの先食っていけないけど、今の俺じゃバイト待遇が関の山。

はてさて、どうしたものやら。

いい思案も浮かばぬまま、気が付けば十一月も半ばを過ぎていた。そんなとある休日のことだった。

黄色く色付いた銀杏の葉が舞い散って、アスファルトの上を埋め尽くしている。

すっかり秋も深まった。

人通りの多い休日の駅前。

行き交う人達の向こう側に、一人立っている女の子の姿が見える。ダッシュで彼女に駆け寄って行くと

「……あ！ 孝四郎くん！ こっちこっち！」

俺の姿に気付くと、手を振って見せた。

「ごめんごめん！ 待っただろ？ 遅刻しちゃった。面目ない」

「ううん、待ってないよ？ 私、ちよつと買い物してからきたの」

ふわつと微笑んだ加奈子ちゃん。

濃やかな気遣いのできるコ。

バイト先で知り合った。

明日香女子高等学校の二年生。ちなみにこの女子校、巷では「明

日ジョー」とよばれている。

「さて、どこ行こう？ 俺、ノープランできちまった」

「いいよ、別に。今日はお互いシフトもないし、ゆっくりお茶でもしましょ？」

「おお、了解。そうしよう」

さよならも言えないままキヤナと別れてからもう、四ヶ月。
しばらくは何も手につかなかった。

あんな別れ方しかできない自分が嫌で、死にたいくらい後悔する日が続いた。

が、いつまでもそうしているワケにもいかない。

俺は俺、どうしてもこの世界で生きていかなくちやならないんだ。
七月の初め、イーペーを守るために停学覚悟で他校生をぶっ飛ばし、やっぱり停学をくらったりした俺。が、そういう無茶だけで自分を大きく変えられるハズがない。人生はドラマと違う。

何か、何かをしなければ。

くだらない俺を変えるために、新しい何かを。

悩んではみたが、これといって思いつかないまま夏休みになった。
そんなある日、特売セールをやっている街中のスーパーへ出かけた俺は入口前の張り紙に目をとめた。

アルバイト募集。

そのスーパーは珍しく深夜まで営業していて、募集しているのは深夜の時間帯に働けるスタッフだった。

夜遅くなら学校が終わってから通えるし、ついでに深夜帯だから時給もいい。

……これ、いいかもしれない。

そう考えた俺は、入店するなりまっすぐ事務所へ直行した。

すぐに威勢のいい中年のオッサンがやってきて、店長の井伊だとでかい声で名乗った。

何となく、直弼的なオーラがなくもない。

面接されるだろうと思っていたのだが、彼は細かい質問などは一切せず

「夜遅いけど、本当にきてくれるかい？　きてくれるんなら、うちは大助かりなんだけど」

「構いません。正直、生活も苦しいんで、雇っていただけるとは助かります」

「じゃ、決まりだ！　よろしく頼むよ！」

以上。

あっさりしすぎ。

つか、名前とか学校名くらい訊けよ。

二、三日して、最初の出番日。

出勤すると、直弼が一人の女の子を呼び寄せた。

「君と同じ品出し担当の桜庭加奈子ちゃんだ。仕事のやり方は、彼女から教わってくれ」

「桜庭です。よろしく願いしまーす」

ぺこりと頭を下げたショートカットのそのコは、物腰が柔らかくておっとりとした印象。

特別美人とかナイスバディではないが、一緒にいると癒やされそう。

柄にもなく俺、ちょっと照れた。

「かつ、風間、孝四郎です。よ、よろしくお願いします……」
「はい」

その日から加奈子ちゃんと俺は、ほとんど同じシフトだった。

聞けば、二人か三人でやる業務をずっと一人でやっていたのだという。

直弼、鬼だな。

こんな素直でいいコを酷使してたら桜田門の前で襲われるぞ。

俺がそのことを少し言っていると、彼女はふわっと微笑んで

「うん、でも、うちのお父さんの仕事が減っちゃって、収入が大変な時なの。私、進学したいから、少しでも自分で働いてお金貯めようと思っていたところだし……だから、そうでもないよ?」

深夜ということで、夕方みたいに混まないから会話をしながら仕事を余裕がある。

この時間帯にやってくるのは夜のお仕事系な人たちばかり。だからこのスーパーは酒類も取り扱っている。

加奈子ちゃんの家は、とても家族の仲がいいらしい。

両親と弟と、四大家族。

その弟が来年高校受験＆進学ということで、なおさら家計が大変なようだ。

加奈子ちゃんは商品棚にカレールーを並べながら

「うちの弟ね、充ていうの。私よりも勉強も出来るし、スポーツ万能なんだ。で、第一志望が一平北なのよ。合格したら、孝四郎クンの後輩になるんだあ。……充のこと、よろしくね?」

嬉しそうに言った。

洗い立てのシーツのようにまっさらで柔らかな性格の加奈子ちゃん。

学校ではぶっきらぼうな俺も、彼女の前ではどういうワケか真っ直ぐ健全な青少年に変化せざるを得なかった。エロスケベやデラックス、ミスターが今の俺を見たら腹を抱えて爆笑するだろう。

「あ、あア。俺に何がしてやれるかわからないけど、もしそうになったら……ねえ。はは」

勤務は深夜帯だから、終わる時間は常に同じ。

ある時、加奈子ちゃんがいつも徒歩で帰宅しているという事実を知った。

「へ？ 家の人、迎えにきてくれたりとかはないの？」

「だって、帰るのって十二時を過ぎちゃうでしょう？ お父さんは仕事で疲れて帰ってきているから、せめて家ではゆっくりさせてあげたいの。私の家のあたりってそんなに暗くないし、だから大丈夫」

それはいかん。

いつ、どこに変態が潜んでいるかわからないじゃないか。……変態とは限らないけど。

帰る方向が同じという事情もあり、以来俺は彼女を安全圏まで送ってあげるようになった。

「え？ いいよ、そんな！ 夜遅いんだし、孝四郎くんも次の日学校なんだから！」

最初、加奈子ちゃんはそう言って断ってきたが、彼女の身を案ずる俺としては引き下がれない。

強いてエスコート……ならぬ警護してあげていると

「風間君、ね？ いつもうちの加奈子がすみません。ホント、ありがとうございます！」

ある晩、作業に手間をくっていつもより退社時間が遅くなったの

できつちり自宅まで送っていつてあげたらば、お母さんが挨拶に出てきて驚いた。

加奈子ちゃんみたいに物腰が低くて穏やかそうなお母さん。何だか、わかるような気がする。

この母にして娘あり、ってなカンジ。

「あ、風間です。いつもお世話になってます」

俺も丁寧に挨拶をしてから家路についたのだが　どうもこれのために、桜庭一家は俺に対して非常な好意を抱いてくれたらしい。それからほどなく、あるうことが夕食によばれてしまった。

高校に入って一人暮らしを始めて以来、家族団らんの空気なんてまるでご無沙汰の俺。

全校生徒の前で作文を読まされる小学生のように緊張した。

自分のじゃない人の手料理を食べるのもホント久しぶりだった。ただ、緊張しすぎて味がわからない。

初めて会った父親という方は、広告関係の会社でデザインを担当しているのだという。

これまた言葉遣いが丁寧に、見るからにきちんとした親父さん。

「いやあ、風間君みたいにしっかりした高校生、今どき珍しいねえ。こういう人が近くにいてくれれば、本当に安心できるよ。　うちの加奈子を、よろしく頼みます」

あ……え？

まあ、一種の社交辞令だよな、ははは……。

よろしく頼みますだなんて言われても、プロポーズしてきたんじゃないんだから。

しかし、この一言はさり気なく重い。

桜庭家の俺に対する信用が思いつき凝縮されているからだ。

ビビってしまった俺は無意識のうちにとんかつを味噌汁に浸してから食おうとしてしまい

「それって、美味しいんですか？」

中学生の弟さんのツツコミでハッと我に返った。

これがホントのみそカツ……ああ、ウソです。

姉に似て、彼もマジメで頑張り屋さん系。俺とは真逆で、反抗期というものを母親の腹の中に忘れて生まれてきたんじゃないかというくらい明るい。姉弟仲がいいのもわかる。

そういうこともあって何となく、加奈子ちゃんと二人で出かけた。りする機会が次第に増えていった。

「ご両親公認である以上、苦情を言う人間は誰一人いない。

といっても「お付き合いしましょう」「なんていう取り交わしがあつたワケじゃない。

だから、この関係は相当微妙なモノがあるのだが。

「ねえ、色取通りに新しくスターバックスができたみたい。そこにしない？」

「よし。そうしよう」

加奈子ちゃんの提案には基本的にも何でも賛成の俺。

先に立って歩き出そうとすると

「あ！ 待って、孝四郎くん！」

「お？」

「今日、何の日か覚えてる……？」

「あ？ 何かあったっけ？」

今日？

何かあつたつけ？

……思いだせん。

十一月二十二日だから「いい夫婦」の日？

わからずに首を傾げていると、加奈子ちゃんは仕方がなさそうに笑いながら

「やだ、孝四郎クン！ いちばん大切なコトを忘れちゃってるのぉ？ ……はい、これ！」

袋からグレーのふかふかした真新しいマフラーを取り出すと、俺の首に巻いてくれた。

すぐ目の前を、加奈子ちゃんの小さな頭がせわしなく動いていく。俺は彼女にされるがまま、マフラーを巻かれながら突っ立っている。

丁寧に巻き終えてから一歩後ろに下がり、俺の顔の前で「ぱんっ！」と手を叩いた加奈子ちゃん。

「今日、孝四郎クンの誕生日じゃない！ 自分の誕生日を忘れる人がいるかしら？」

くすくす笑っている。

おお！

そっぴや、そうだった。

俺も今日で十七歳か。

もう、十七年も生きてしまったか。年は取りたくないものだ……じゃなくって！

加奈子ちゃんからのプレゼント！？

「ごめんね、手編みじゃなくて。挑戦してみたんだけど、不器用だから失敗しちゃった。それで仕方なく買うことにしたんだけど、お

母さんに怒られたの。ちゃんと前々から準備しないからでしょう、って」

そう言っただけで彼女は恥ずかしそうにうつむいた。

俺、仰天。

てっ、手編みにしようとしたとお！？

「いやいやいやいやいや、とんでもない！ 何をおっしゃるシンデレラ！ 手摘みなんで、こんな俺ごときには百年早いよ！ それよりも、これ、これ……」

「やだ、孝四郎クンてば。手摘みはお茶でしょ？ 今日なんだからヘンよ？ どうしちゃったの？」

あ、いえ、すみません。

生まれて初めて誕生日に女の子からプレゼントもらったもんで、思わず動揺してしまいました。

ここ最近の俺、どうも俺らしくない。

加奈子ちゃんと一緒に過ごす時間が多くなってから、少しずつ彼女の「ふわっ」とした雰囲気の影響を受けてきているようだ。ついこの前もエクスカリバーに

「孝四郎、最近穏やかだね。番長的な感じがすっかりなりを潜めてるけど……なんかあったの？」

訊かれてしまった。

そうか、これまでの俺は番長みたいに近づきにくいオーラを発していたのだな。そういうものは体臭みたいに自分じゃわからないものだ。

実際、夏以降神速鉄拳の炸裂ゼロ日は記録を更新中だった。別に悪いコトじゃあないと思う。

このおかげで、停学以来最悪だった教師達の印象も微妙に好転してきているようで

「このところ、よく自制しているようだな。誠によろしい」

廊下でかち合ったナウマン象からいきなりそんなコトを言われた。相変わらず生高とか雲高とかセッターのヤツらはちよろちよろとうっさかったんだけども。

しかし、加奈子ちゃんの笑顔を思い出すと、どうも手を出す気にはなれなかった。

そういう俺からはヘンな空気がするらしく、他校生どもは気味悪がって近寄ってこないのだ。

なんか、それもヤだな。

まるで全身クサイヤツみたいじゃないか。

そっぴやエロスケベ、えらく汗くさいとかでめつきり女の子にモテなくなったらしい。本人は練習の度に着用するユニフォーム原因説を力説しとるが、どうだかな。エロチック艦隊の旗艦もついに撃沈される時がきたらしい。

とまあそれはそれとしても、俺と俺を取り巻く環境はかなり変化してきていた。

今日は二人ともバイトが休みということもあり、お茶をして映画を観てあちこち店をみて回るといふ実にのんびりな時間を過ごした。俺は加奈子ちゃんの気持ちがかもったマフラーが嬉しくて、それを首に巻いているだけでなんともいえない幸福感を味わっていたのだけれども。

「じゃあ、また明日ね。メール、するから!」

「うん。暗いから帰り道、気をつけて」

彼女を見送ると、俺も自宅に戻るべく歩き始めた。

ケータイ。

バイトを始めてからひと月ちょっとして、手に入れることができた。

バイトによって加奈子ちゃんとお知り合いになれたことに加え、俺の財政事情はかなり好転したからだ。給料だけでなく、残って捨てる惣菜とかこっそりくれたりするから、かなり食費を抑えられているということもある。

ほかに無駄遣いとかしてないし、最小限の通話とメールにとどめれば何の問題もない。ひと昔前とは違って、登録した番号なら通話料は屁みたいなものだし。いい時代だ。

おっつけ、加奈子ちゃんからメールがくるだろう。

彼女は自宅に着くと、まるで子供が親に連絡するように

『今、帰ってきたよ。孝四郎クンも着いた？』

とか、メールをくれるのだ。

男一人暮らしにとって、これがどれほどの癒しになることか。

俺は足取りも軽く、住宅街の道をてくてくと歩いて行く。

そうして、ボロアパート近くの小公園までやってきた時だった。

キヤナと出会った、あの公園。

まだそれほど遅い時間ではなかったが、辺りは結構暗くなっている。

と、公園の入口からぬつとでかい人影が不意に現れた。

「……風間、孝四郎君だね？」

「……！？」

その24 オッサンは語る

なんだこのオッサン？

見るからにアヤシイ。

俺は返事をせず、一步飛び退ると胡乱くさげにヤツを見た。
ぬばーつとでかい。

率直に表現すれば、そういう形容の仕方になる。

長く伸ばした髪の毛を後ろで束ね、顔の下半分はヒゲぼうぶう。
レンズの大きな角形メガネをかけていて、その下には切れ長の鋭い
目。よく見ればハンサムな顔立ちで、ジェントルメンな雰囲気がある。

どっかのアニメにこういうキャラがいたような……？

俺よりも背丈が大分あるこのオッサン、上から見下ろすようにじつとこちらに視線をむけている。

動物みたいに全身警戒モードの俺。

いざとなったら、逃げた方がいいかもしれない。この身長差なら、
どう計算しても格闘は不利だ。

対峙する姿勢のまま、沈黙を守っていると

「……風間、孝四郎君、だよな？」

「……」

語尾がちよつとフレンドリーに変化した。

それでも返事をしない俺。

すると、オッサンは少し困ったような表情になって

「私のことを怪しいと思っているなら、誤解だよ。ゼーんぜん、怪しくないからね」自分の顔を指し「ほら、親しみやすい力オ、してるだろ？」

思わず殴ってしまいそうになった。

RPGの冒険者ばりにごつい顔してるくせに、なあにが「親しみやすい顔」だ。

目を開けたまま寝言を言うヤツがあるか。

ますますアヤシイ。

さつさと逃げて警察に通報してやろうか。

そんなことを考えていると、オッサンはふうっと大きくため息をつき

「……いや、用向きから話した方が、信用してもらえそうだ。用件を言おう」

と、前置きしてから、彼はとんでもない台詞を吐いてくれた。

「明日、キャナが処刑される」

「……!？」

一瞬、俺の足許から世界中がぐわんと揺れ動いたような感じがした。

キャナが処刑……だと!？

「お、オッサン、誰なんだよ？ 魔界からきたんだろ？ あんたも魔界衆のヤツなのか？」

「私の名はシユウ。魔族、と名乗りたいところだが、残念なことに彼等ほどの魔力は持っていない。ま、魔族の支援者、とでも言っておこうか。魔法の研究にかけては、ちよいと自信があるもんでね」
「んなことはどうでもいい！」

焦るあまり、思わず怒鳴ってしまった。

「なんで！？　なんでキヤナが処刑されなくちゃならないんだよ！
？　あんた、わざわざそれを言うためにこっちへきたのか！？」
「まあまあ、まずはクールダウンしようぜ？　それを言うただけ
に、わざわざ転移なんて危険を冒したりしないってば」

詰め寄らんばかりに血相を変えている俺を、両手で「どうどう
と制しつつ、シユウなるオッサンはちらと背後を見やり

「そこに座って話そうか。事を起こそうにも、まずは事情を知らな
いとどうにもならんだろ？」

口元にニヤリと笑いを浮かべた。
不敵なまでの余裕さ加減がかなり不審だったが、そのためにヤツ
の話を聞こうという気になった。
こいつの目的って、恐らく　。

暗い公園のベンチに並んで座っている俺とシユウ。
俺はまず、会ったこともないのに何故俺のことがわかったのかを
訊いてみた。
すると

「キヤナと同じ魂、それに魔力の波長を感じたんだよ。風間孝四郎
君という名前はメイアから聞いていたし、それで間違いないと思っ
たんだな。……これで少しは納得してくれるかな？　ああ、キヤナ
とメイアに知り合いたいきさつは、これから話すよ」

そうだった。

キヤナと俺、同じ魂を分け合ってるんだものな。

いいだろう。

頷いてやると、シュウは魔界であつた出来事を簡潔に説明してくれた。

俺は黙ってヤツの言う事に耳を傾けている。

俺と別れ、メイアと共に魔界へ戻ったキヤナ。

どうやって転移魔術を使ったのか？

急を告げにやってきた魔族のコが「魔含石」なる、魔力を豊富に含んだ宝石を持ってきていたから、それを使って帰ることができたらしい。

そうして魔界に着いた二人を待ち構えていたのは　大勢の魔界衆だつた。

彼等は捕らえた魔族のコをメイアとキヤナの元へ送り込んでウソの話をさせ、彼女らが魔界へ戻ってくるように仕向けたのだ。

魔神が猛威を振るつていて魔界が滅亡の危機に瀕している、と。

が、実際には　魔神はどういう行動も起こしてはいなかった。モヤモヤとくすぶつたまま、具現化した身体の安定を待っているらしい。……これはシュウの説明。

ハメられたことを知った二人は死を決して魔界衆の大群に戦いを挑む。

が、かつては彼女達の足許にも及ばなかった筈の魔界人たちは、なぜか強力な魔術を自在に操れるようになっていた。キヤナはメイアを逃がそうとするがメイアは拒否し、二人は抱き合い心中する覚悟を決める。

ところが、そんな二人を救つたのはウソの話をして二人を魔界に連れ戻す役割を果たした少女だつた。

彼女は我が命と引き換えに破壊魔法を発動させた。同族を騙して陥れた罪を自ら償おうとしたらしい。

キヤナはそれを止めようとするが、すでに遅く　少女の魂は消滅して果てる。

そんな尊い犠牲を払いながら、二人は血路を切り開いて逃れるこ

とに成功する。

以来、戦っては身を隠し、という気の遠くなるような日々を送り始めたキヤナとメイア。

が、何しろキヤナもメイアも 魂が十分じゃない。

キヤナの魂は俺が分けた半分しかないし、メイアのそれは幾らかを魔神によつて食われてしまっている。

魔力や体力の消耗を回復させる間も与えない魔界衆の襲撃に、少しづつ追い詰められていった。

そんな二人の前に、突如このシュウが現れる。

彼は魔界府から遠く離れたエリアに居を構え、かつて命を助けてやったミナという魔族の少女と共に魔法の研究に余念のない暮らしをしていた。

傷ついた二人を癒やしてやりつつ、シュウは言ったらしい。

「お嬢さん達、人間の世界にいたんだろ？ 悪いコトは言わないから、今すぐでも戻りなよ。魔界衆の追跡は執拗だぜ？ その上、魔神が行動を起こそうものなら命が幾つあっても足りんがな」

すると、途端にキヤナは寂しそうな微笑を浮かべて

「あたしがいると、大切な人が普通に暮らせなくなっちゃうから……。人間の世界には、戻らないわ」

しばらく自分のところでかくまってやろうとシュウは言ったが、彼に迷惑がかかることを恐れた二人は深夜、ひっそりと姿を消した。もし魔界衆に居所を察知されてしまえば、シュウの研究が水の泡になってしまう。シュウが研究を続ける目的、そしてそれが魔界にとつてどういう意味を持つものであるのかキヤナはよく理解していたから、やむなくそういう行動に出たらしい。

が、不安に駆られたシュウは、助手同様に使っている居候のミナ

に頼んで二人を追わせた。

ミナは破壊魔法は苦手だが「化身散開」という、特殊な魔法を使うことができたからだ。

存在をすっかり周囲に同化させ、気配を消し去ってしまうという忍者のような魔法。

数日して、彼女は戻ってきた。

全身に傷を負い、息も絶え絶えなメイアを背中に背負って。

「シュウさん！ 早く、早く手当てをお願いします！ このままじゃ、このままじゃ、メイアさんが死んじゃうよ！」

「……！？」

急いでメイアに回癒魔術を施しつつ（シュウは魔術の研究をして、そんなこともできるようになったらしい）ミナから事情を聞いたシュウ。

彼の元を去ったキャナとメイアは魔界府に戦いを挑むべく魔界の中心部へと乗り込んでいった。

そこで二人は驚愕の事実を知る。

魔界府はメイアによって一度は潰滅寸前に陥ったものの、逆に彼女が持ち込んだ禁忌魔術によって一気に持ち直すことに成功していた。

犠魂陣。

捕えた魔族や魔界人をそこに放り込んで魂を奪って魔力に変換し、魔界衆の連中がそれを我が物にしていたのだ。トップクラスの強さを誇っていた魔女達の魔法が功を奏さなくなっていたのは、そのためだったワケだ。しかも、二人の魂が十分なものでなくなっていたということもある。

責任を感じたメイアは鬼神のように荒れ狂いながら魔界府を潰そうと戦いまくったものの、四方八方から浴びせられた光刃を受けて瀕死となる。

しかも魔界衆は、魔封陣を発動させて彼女を生きたまま捕えようとした。

「メイアーっ!!」

魔封陣の発動直前、そのことに気がついたキャナはメイアを助けるために　魔封陣の呪縛の中へ自ら飛び込んでしまった。

キャナに突き飛ばされたメイアは魔封陣から逃れたものの、傷が深くて立ち上がることもできない。

倒れている彼女の元へ、魔界府の守備団・魔装兵が殺到していく。

（まずいじゃん！　何とかしないと！）

すかさず飛び込んだミナは自分とメイアに化身散開をかけ、その場から行方をくらます。

「シュウさん、ごめんなさい。あたし、キャナさんのコト、助けてあげられなかった……」

涙ながらに詫げるミナ。

泣きじゃくっている彼女の頭をよしよしと撫でてやりながらシュウは

「いや、よくやってくれた。メイアー一人救い出しただけでも大手柄だよ。　どれ、これから先は私に任せてもらおうかね。そろそろ、時がきたようだ」

ミナにメイアの世話を頼み、独り住処を後にした。

そうして彼はまず魔界府のある魔都へ行き、状況を確認しようとした。

キヤナを捕らえることに成功した魔界府では、翌日処刑することに決定し、魔封陣といういわば魔女にとって牢に等しい円陣のウチへ閉じこめたままにした。魔封陣を解除してしまえば、キヤナが自由になってしまうからだ。

そのため、幸いにして残酷な拷問にかけられずに済んだのはあるが……その代わり、魔界衆の連中は魔封陣の中心に巨大な柱を立て、そこにキヤナの両手両足を魔封鎖でつないだ。

「酷いモンだよ。抵抗できないほど弱った若い女を一人、裸に剥いた挙げ句拘束した状態で晒し者にしてるんだからね。毎度のことながら、魔界衆の奴らはどういう教養も気品もない。魔族なんざ、ゴミと一緒にだと思っている」

自分の目で直接確認したシュウ。

心底憤慨した調子で言った。

俺はぞつとした。

キヤナは女性にとって最悪の辱めを受けつつ、殺される瞬間をじっと待っている。

彼女が晒し者にされているなんて……！

「こうなっちまうと、さすが私でも手が出せない。ところが、最初にキヤナとメイアをかくまった時、二人から面白い話を聞いていたのを思い出した。……風間孝四郎君」

「孝四郎でいいよ」

「じゃ孝君、君はキヤナに魂を分けてあげたそうだね？」

「それ、略しすぎだろ。……あの夜、瀕死の彼女に会った。彼女は死ぬつもりだって、言った。でも、俺は死んで欲しくなかったから……魂半分、くれてやった」

「……それだ！」

あ？

何が「それだ！」だよ？

「正直、魔封陣を破ることはたやすすくない。あらゆる魔力を封じてしまうのだからね。だけど、たった一つだけ方法がある。魔力を押さえ込んで安定している魔封陣に、外から同じような質をもった魔力を叩き込んでやれば、魔封陣のバランスは崩壊する。……それが可能なのは、今のところ」

俺の肩をポンと叩いたシュウ。

目が、まっすぐに俺を見ている。

「孝四郎君、君しかないんだ」

キャナを助け出すカギが俺だっていうのか？

それは別にいいけれども、いくつか疑問がなくてもない。

「だけど、俺は魂を分けてやっただけだぜ？ 俺自身に魔力が備わっているわけじゃない。だろ？」

「言い方が正しくなかったな。 魔力を生み出すものはそいつの魂だ。魔力は生成物に過ぎない。だから、キャナと魂を同じくする君の魂なら、魔封陣を破るのにうってつけてワケさ。私の推論に間違いがなければ、キャナを封じている魔封陣の中に孝四郎君が飛び込むだけでいい。そうすれば魔封陣の魔向ベクトルが狂って、あとは一気に吹き飛ばしかない。……どうだろう？ 協力してくれないか？」

シュウの眼差しが柔らかくなった。

ふーん。

よくわかんないけど、少しはわかった。

魔力を押さえ込んだ魔封陣に同じ波長の魔力を発する魂をぶちこんでやれば、魔封陣がワケわからなくなって「ちゅどーん」するってコトだな。

魔族でも魔界人でもないようだが、長年研究しているオッサンが自信たつぷりに言うんだから、それは信じていいかもしれない。

「それはわかった。ただ、訊きたいことはまだある。……俺が魔界に行くってことになるんだろうけど、オッサンと俺と一緒に転移することなんかできんのかよ？ あれって、すっげえ量の魔力が要るんだろ？ オッサン一人飛ばすのだけで手一杯とかじゃないのか？ キヤナだって、こっちに来たときは自分の魂全部魔力につき込んだりしたんだぜ？」

「オッサン連発はやめてくれよ。シュウって呼んで欲しいね」

いちいちツツコミのうるせエオヤジだな。

「ああ、はいはい！ 魔界へ転移するつたって、シュウ一人がやっとなんだろ？ 俺を連れて行くだけの魔力はどーすんだよ？ まさか、あんたの魂を犠牲にするとかじゃないだろうな？」

「そんなコトなら心配ない。かなりの年月がかかったケド、ようやく研究が完成をみたんだ。犠魂陣なんてアブない代物に頼らなくとも、誰でも一定の魔力を得られる画期的な道具をね」

……なんですと？

何か今、さらっとすげエ発明について伺ったような気がしましたが？

「でも、その魔力はどうやってゲットするんだよ？ 魂がないところに魔力は発生しないんだろ？ キヤナだったかが言ってたぜ？」

「その説は間違っちゃいないが、全てを述べてはいない。……誰が、

魂は人の形をした生き物だけに具わっているものだって断言できるね？」

「……！」

そういうコトか。

咄嗟にシュウの言わんとしているところを理解した俺。

「我々の魂を包み込んでいる、大いなるもの。 大気、海、大地、それに火。これらには、確かに目に見える形での魂が具わってはいない。しかし、魂と同等か、それ以上に巨大で、悠久のエネルギーを秘めているとは思わないか？ ……ところが、これらは魔術の具象化イメージとして用いられることはあっても、それそのものを力として活用しようとする者がいなかったといっている。何故か、わかるかい？」

「いや」

「……魔界は、殺し合いの歴史だけを積み重ねてきたからさ。強いといえば、古代魔術の一部にその片鱗が残っているけれども、実用できるまでの域にはない。それで私は醜い殺し合いの場から身を遠ざけ、独り研究に没頭していたワケだ。まあ、その甲斐あって何と可使えるまでに漕ぎ着けたよ」

首から下をぐるりと包んでいるマントの下から、キラリと光る大きな宝石状の石を取り出すと、俺に示して見せた。

「こいつは気流石という。大気の力を吸い込んで、発散する時には魔法と同じような魔力に変換するんだ。今転移してくるのに大分魔力を使っちゃったが、さすが人間世界の大気は質がいいね。あつという間に魔力が回復してきているよ」

そいつはすげえや。

確かにそういうレアアイテムがあれば相当心強いだろう。魔界人とか魔界衆の誰も、自然を味方にする方法なんて考えていないのだから。キヤナを助けられる見込みは、これでぐーんと上がったような気がしなくもない。

だけど、俺の疑問はまだ残っている。

細かいことはともかくとして、シュウに関わる根本的な疑問。

「シュウ、もう一つだけ訊きたい。

あんた、ンなものを発明し

て最終的にどうするつもりなんだ？」

「殺し合いの歴史に終止符を打つ」

速攻で言い切った。

穏やかに、静かに、しかし強い決意が込められているのが伝わってきた。

「メイアが使った犠魂陣じゃないが、全て殺し合いの元々は『より強い魔力を得る』っていう欲望だろう？ 魔界衆ってヤツらは、生贄を仕立てて魂さえつぎ込めば魔力を無限に得て世界を安定させられるってヤバイ妄想からいつまで経っても目を覚まさない」

「じゃあ、たくさんの魔族が殺されたっていうのは……」

「ああ、殺し方はどうあれ、陰で魔界衆は犠牲者の魂を魔力に変換して、そいつを利用している。ヤツらが犠魂陣を手に入れたのは最近のことだが、そんなものがなくても生贄から魂を奪う術はあるかな。こつたら悲惨な行いは絶対に止めさせるしかない。そのため」

びつ、と人差し指を立てて見せ

「何千人に一人っていう強大な魔力を持ったキヤナの力が必要なんだよ。だから、どうしてもキヤナを助けたい。だから、孝四郎君の

協力が不可欠なんだ」

「俺が……魔界の平和のために……？」

「そう。彼女を助けたあと、すべての自然魔術を託して魔界府を制圧させ、ついでに魔神にもお引き取りいただく。だから、彼女は魔女なんかじゃない。魔界に平和をもたらず、いつてみれば『女神』なんだ。……ちよつとハナシが長すぎたかな」

そっか。

キヤナが女神、か。

わかるような気がしなくもない。

本当の彼女は優しくて穏やかで、慈しみにあふれた女性。

「いいよ、協力してやる。俺を魔界に連れて行けよ」

そう答えた俺の胸中、どんな仕切りがされていたのか自分でもよくわからない。

よしんばキヤナを助けたところで、今さら俺達は、もう……。
だけど。

あの日の後悔をチャラにできるチャンスは今しかない。

また二人で暮らすことがないにせよ、彼女のために、俺のできることをする。

それでいいじゃねエか。

ちよつとの期間であつたにせよ、俺が心の底から好きだと思った女性。

彼女が殺されていくのを黙って見過ごすワケにはいかない。

「……オッサン、もう一つだけ訊くケド」

「だから、オッサンはやめてくれよ。これでも若いつもりなんだぜ」

「シユウはなんでそこまでして魔界の安定を望むんだ？ ああ荒れ狂った世界にや、そもそも安定なんて概念を持ち込むこと自体無意

味じゃねエ？」

シュウはつと目を反らし、真っ暗な闇の空へと視線を向けた。
まるで、遠くにある見えない何かを見つめるような表情。

「……そのうち、話してやる。物事には順番があるもんでね」

その25 魔界突入1

とるものも取りあえず、俺は一度ボロアパートに戻った。
公園で待っているかと思っただ、来るといので、シュウが一緒
についてきている。

「ほうほう！　ここが孝四郎君の自宅かね……」

何がいいのか、しきりと感心したように頷き、見回している。
シミだらけの天井に、古びた壁。

そんなに見つめられたらホントに穴が開いちまうかもしれない。

「別に、フツのボロ部屋だよ。変わったところなんて、ないと思
うけど？」

加奈子ちゃんにもらったマフラーを外しながら、俺は言ってやっ
た。

このマフラーだけは大事にしないといけない。

魔界で何があるかわかったモンじゃないし、失くしたりしたら大
変だから置いていこう。

「孝四郎君」

畳の上にどつかと腰を下ろしながら、シュウが俺を呼んだ。

「あい？」

「……お茶、一杯もらえんだろうか？」

ぷつん。

「んな悠長なコト、やつとる場合かーっ！ キヤナが殺されちまったら、どーすんだよ！？ そうでなくても、恥ずかしめられて晒し者にされてるって、言っただじゃねエか、アンタ！ とつと行くぞ！ これから、今すぐ！」

「まあまあ、そうアツくなるなよ。キヤナを封じている魔封陣はとてつもなく大きい。だから、その範囲には誰も近寄れないってこつた。近寄ろうものなら、魔封陣にやられちまうからね。……それに、処刑までにはまだ時間がある。魔封陣を効かせているとはいっても、よほどの腕利きをそろえなきゃ魔女なんか殺せるものじゃあないんだ。だから魔界衆の奴ら、今頃大慌てで人選やってるだろうさ。

それよか」

オッサンにしかできない、人の良さそうな笑みを浮かべ

「今は、俺達こそ落ち着こうぜ。場合によっちゃ、キヤナを助けるだけじゃ済まないからな」

「……何だよ、それ？ どーいうイミだ？」

「言葉を尽くして説明しなくとも、すぐにわかるよ。それより、お茶を……」

なんつーオッサンだ。

いざとなると、ペースを丸ごともっていかれちまう。

……ま、いつか。

今はこのシユウを頼りにするほかないんだ。

思いなおした俺はやかんでお湯を沸かし、お茶を煎れてやった。オプシヨンにしけた醤油せんぺい付き。

「……ああ。んまいなあ。煎茶なんて、久しぶりに飲んだよ」

「それ、ほうじ茶なんだけど……」

煎茶とほうじ茶を間違えるヤツがあるか。
ん？

久しぶりに飲んだ、だと？

「オッサン、魔界に煎茶なんてあるのか？　今、久しぶりって……」

ツツこんでみると、シユウはもう一口美味そうにすすってから

「……そのうち、教えてやる。一つ言っておくけどな、魔界の生活様式だって、こっちの人間世界と結構似てるんだぞ。食い物だって家だって、習慣だって。それから」

言いかけて、ニヤリと笑った。

「……子孫の残し方もな」

んなもの、とつくの昔に知つとるわ。

子孫を残す方法「魂を分けてやる方法、だものな。
俺もお茶を飲みつつ、そのことを少し言つと

「あー……。そういう風に考えちまうのは仕方がないかも知れん。
ただ、必ずしも同じではない」

シユウはもごもごと、そんなことを言った。
しけた煎餅をかじっているのだ。

「あ？　それ、どーいう意味だよ？」

「男と女が身体を重ねれば自動的に魂が分割されるってモンじゃないんだよ。双方がその気にならなきゃ、エッチ……って、今の若い

奴らは言うのか？ ただの生殖行為でしかない。それが今回、孝四郎君とキヤナは見事に魂を分かち合った。と、いうことはつまり」

んぐつ。

咀嚼していた煎餅を飲み下した。

「二人は、ちゃんと魂を共有するつもりだった。これが非常に重要なところで、さ」

二枚目に手を伸ばしてやがる。

よくこんなまずい煎餅を平気で食えるものだ。

「いや、失礼。ハラが減ってたんでね。……で、なんだ。そう、結論から言うが、魂を分け合うっていうのは、方法こそシンプルだが、実際はそうそう簡単なコトじゃない。どこの世界に、自分の命を削って他者に与えようなんて考えられるヤツがいると思う？ 誰だつて、最後は自分の命が惜しいものさ。それを、孝四郎君は敢えてやったワケだ。このことがのちのち、非常に大きな意味をもつ」

かじった二枚目がよほどしけていたようで、固いはずの煎餅が濡れせんのようにしっている。

そりゃまあ、二十日も前にカネ婆がくれたものだからな。

賞味期限なんぞとうの昔に切れているハズ。

シユウ、えらく腹を空かせているらしい。

彼はすごい形相で煎餅を噛みちぎりつつ

「……ずばり言う。私が知る限り、ここ数百年の魔界の歴史において、それをやった者はいない。いないだけに、その行為にはすごく重たい価値があるんだよ。キヤナを助けるという目的においても、かつそれ以上に、魔界に変革をもたらすという一事においても」

「はあ。そうですか……」

不得要領に相槌を打った俺。

そんな風に最大級の贅辞を用いられたところで、俺にはその含みがよくわからない。

魔界の变革？

んなアホな。

俺とキャナがエッチしたくらいで、そったら仰々しいコトになつてたまるか。

ただ、ここ数百年で魂を分け合った者がいないっていうのにはちよつと驚いた。

生き死にが日常茶飯事な魔界なら、それくらいのことはフツに行われるものだ（勝手に）思っていたのだが、逆らしい。

いつ死んでもおかしくないだけに、自分の命を惜しむという理屈なのだろうか。

なんだか、キャナの口からは聞いたことのないハナシが幾つも飛び出してきた。

このシュウとかいうヒゲ面のオッサン、一体何者だ？

ブタのエサにもならないしけた煎餅を美味そうに食っている時点ですでにタダ者でないとは思っていたのだが。

なんだか、哀れになってきた。

ここは一つ、メシ代わりになんか作ってやった方がいいのだろうか。

「シュウ。いま、何か作るよ。だからその煎餅、もう必死に食わなくていいから」

「お？ そつか、済まないなあ。……いや、ここ十日以上ろくに食ってなかったものだから、えらく腹が減って仕方がなかったんだ。せめてお茶でも、と思ったんだが、孝四郎君が煎餅なんか出してくれたものだからつい、手が伸びちゃった。それにしても、煎餅なん

て懐かしいなあ……」

ますます怪しい。

煎餅が懐かしいなんて、まるで日本で暮らしていたみたいない方じゃないか。

煎茶だってそうだ。

魔界に生まれ育ったヤツの口から普通、煎茶とかいう単語が出てくるだろうか。

そう思うと、何となくシュウの顔が日本人のそれに見えてきた。レンズのでかいメガネとヒゲのせいで、顔そのものの原型はよくわからないんだけど。

「ちょっと待ってて。残り物しかないから何ができるかわからないケド、腹の足しにはなると思うから」

十分後。

「うまい！ これはうまい！ いやあ、こんなに美味しいものを食ったのは何年ぶりだろう？ 孝四郎君に出会えて、私はとても幸せだよ！ 心の底から感謝する。ありがとう！」

「あー、まー……。そこまで盛大に感動しなくても……」

複雑な気持ちだよ。

今日は買い物をしてこなかったから、冷蔵庫にはろくなものがないかった。

辛うじて、長ネギが一本。戸棚の中にはけずり節。と、くれば、つくれるのはアレしかない。

そんなワケで俺は「ネギめし」を作って出したワケなんだけど。シュウときたら、世界中の幸福を独占したみたいな顔をして喜んでいる。確かにまあ、ご飯ものだからすきっ腹に食えばそれなりに

満たされる食い物ではある。

俺はわしわしとネギめしをかき込んでいるヤツを眺めていたが、ふと

「……オッサン。キヤナが捕まっている魔界府って、魔界衆がわんさかいるんだよな？　するってえと、簡単に助け出してあっさり帰ってこれるってハナシじゃないんだろ？」

「ああ、救出は決して困難じゃないが、一筋縄ではいかん。それよりも問題は、キヤナを助けたそのあとだ。近所のお宅に回覧板渡して帰ってくるという具合にはいかな」

なんだその例えは。

ってかシユウ、オッサン呼ばわりしたのにツツこんでこなかった。ネギめしに感動しちまって、オッサン扱いのことなんかどうでもよくなっているようだ。

それはそれとして（やったことはないが）他校に殴りこみに行くような気合いと時間が必要になるってこった。もしかすると服とかボロボロになるかもしれないし、場合によってはケガをしてしまう可能性もある。

確かキヤナが言っていたな。魔界はそんなに寒暖の差がないって。万が一に備え俺は、ダメになってもいいシャツとジーンパンに着替え、あと使っていないシーツを背中に隠し持った。これにはちよつとした目的があるんだけど、いざとなれば裂いてケガの手当てなんかにも使えるし。

ケータイとサイフは……置いていこう。

魔界じゃ電波も届かないだろうし、金だって使い道がない。銭形さんみたいに飛び道具にして投げて、魔法使い相手じゃ役に立たないよな。

魔界へ殴りこみに行く準備は万端。

……いや、待った。

炊飯ジャーの中には、まだコメが残っている。

俺もまた、もそもそとネギめしを食い始めた。

腹が減ってはなんとやら、だ。魔界に行つて魔界衆とボコり合いが始まってしまえば、のんきにメシなんか食つてられない。食えるうちに食つておくのがケンカの……って、あれ？　いつの間にか俺、また地が出てきちまつた？

「シュウ、メイちゃんは大丈夫なのか？　まさか、生死の境をさまよつたりしてんじゃ」

「メイちゃん？　誰だい、それは？」

「メエアのコトだよ」

「ああ、メエアなら心配ない。魂が安定しているから、回癒魔術でなんとかなるだろう。ただ、そういうコトだからこちらの戦力にはならない。事実上、魔界衆に立ち向かうのは私と孝四郎君、二人だけだ。よろしく頼むぜ？」

あーうー、俺達だけか……。

そこはかとなない心配が。

まあ、とはいっても魔界衆の親玉を潰さなきゃならないとかいうミッシヨンじゃないし。

目的はたった一つ。

俺が、キヤナを封じている魔封陣の内側に飛び込みさえすればカタはつく。

彼女を解き放ち、完成したシュウの自然魔術を引き継ぐことができれば、あとはなんとかなる。

……らしい。

「さあて、つと」

腹ごしらえを終えたシュウは、つまようじでしーはーやっていた。

やがてそれを放り出すと、ヒゲ面に不敵な笑みを浮かべた。

「孝四郎君の準備も整ったようだし、それじゃ一丁いくとするかい。

……魔界の腐った根性、叩き直してやりに」

「オッサン……つまようじ、ゴミ箱に捨てるよな」

その25 魔界突入1（後書き）

お目通しいいただき、またお気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

オッサン、いかがでしたでしょうか（笑）。

次話11/1に掲載いたします。

その26 魔界突入2

再び暗い公園。

木の枝を拾ってきて、それで地面に円形の魔法陣を描いているシユウ。

直径五メートルほどの円の内側にもう一つ円を描き、円と円の間を何やら魔術文字らしきもので埋めていく。手慣れたもので、描き終えるまでに時間はそれほどかからなかった。

「さて、と。孝四郎君、こっちへ。……ああ、地面の線は消さないように」

「ん」

俺とシユウは魔法陣の中心に立った。

「キヤナから聞いているかも知れないが、魔法というのは魔力を具象化させて用いるのが一般的だが、効力によってはこうした魔法陣なり物に魔力を宿して安定させてやる必要がある。さもないと魔力つてのは不安定だから、四散していつてしまう恐れがあるからね。それだと何の効果も得られない」

「念のため訊くケド、こいつは転移魔術なんだよな？ 時空転移つてヤツ？」

「そうそう。転移にも時空転移と近域転移の二種類があつて、時空転移は膨大な魔力を消費して術者の命を縮めてしまうことから魔界じゃ禁忌扱いになっている。古代魔術の一種だという説もあるが、古代人がこんなモノを編み出していたかどうかなんてアヤシイがね。魔界と人間世界でこうして行き来する者が現れたのなんて、ほんの最近のハナシさ。だから、両世界の均衡が保たれていたともいえる」

なるほど。

シユウが言う通り、もっと早い時代に魔族とかが人間世界に来てたら、歴史とか変わってしまっていたかもしれないよな。そう考えると、世界のバランスはうまく釣り合っていたってこった。

彼は懷から例の氣流石を取り出すと、円陣のど真ん中に置いた。
で、俺の顔を見て

「こつから先のスケジュールについて伝えておくな。まず五分後、転移魔術を発動させ、んで八分後に」

「……んなタイムスケジュールなんか要らんわ。もっとざっくりでいいって」

「お、そうか？　じゃ、このあと、魔界へ飛んでキャナを助け、あとはなりゆきで」

おい。

省略しすぎだよ。

「つか、なりゆき次第とかいう言葉でくくってんじゃねエ。

アバウトすぎてまったくイミがわからんだろーがよ。」

「俺の訊き方が悪かったよ。訊き直すわ。　どうやって、キャナの元までたどり着いたらいいんだ？　まさか、いきなりそこに飛べるってハナシじゃないんだろ？」

「ああ、そういうコトか。転移は二段階。まず時空転移で魔都の周辺に現出してミナと落ち合い、化身散開を施してもらう。そこから近域転移で魔界府のど真ん中に突っ込んでいく。魔封陣は魔界府の建物がある魔界府広場に展開されていて、キャナはそこに拘束されている。魔界府の中に囚われていたら厄介だったが、魔界衆の連中にとってキャナの存在は脅威でしかないから、魔界府広場から動かさなかった。それが俺達にとっちゃ不幸中の幸いだったってことさ。……はい、あと質問は？　孝四郎君」

「ありません」

シュウは大きく一つ頷いて見せると

「よし。じゃあ、行こうか。こいつの魔力を陣に固定して安定させるからな。……私の肩にでもつかまって見ていてくれ」

屈みこんだ。

その背後に立ち、彼の肩に両手をかけた俺。

……いよいよだな。

まさか、こんな日がくるとは思ってもみなかった。

俺が直接、魔界へ乗り込んでいくなんて。

あつちの世界で俺の姿を目にしたらキャナ、どんなリアクションをするだろう。

嫌われてそっぽむかれる？

いや。

彼女はシュウに言った。

人間の世界に逃げ帰るワケにはいかない。あたしの大事な人がいるから　と。

キャナ。

お前、魔界に戻ってから、俺のコトをそんな風に想い続けていてくれたのか。

済まなかった。

あの夜、俺のせいで悲しませてしまった分の借り、今からきっちり返してやるからな。

だから俺がたどり着くまでは絶対に死ぬなよ！

例え魔界衆の五人や十人、ぶっ飛ばそうが殺そうが、お前だけは何があっても助け出す。

二度と後悔しないために！

「魔力が魔法陣に完全に固定された時点で、時空転移は勝手に発動する。だから、何もしないでそのままの状態でいてくれ」

シュウから最後の注意事項。

「……あア、わかつてる。よろしく頼むわ、オッサン」

「だから、シュウって呼んでくれよ。オッサン扱いされるほど俺、そんなに老けてるかなあ……？」

情けなさそうな声を出した。

思わずちよつと笑ってしまったが、俺はすぐに表情を引き締めた。キヤナ、今行くぞ。

シュウは地面の上の気流石に両手を当て、念をこめるようにしている。

やがて。

彼によって描かれた魔法陣の線がすうつとほのかに白く輝き始めた。

光は少しずつその強さを増していき、俺とシュウは下からライトを浴びているような感じになった。

まだ、時空転移は発動しない。それから数分。

いよいよ魔法陣は激しく輝き、光が公園の闇を白く切り裂いている。

ここまでくると、目に痛くて直視できない。

仕方がなく目を閉じた時だった。

「頃はよし、と。行くぜ、魔界」

シュウがそう告げた瞬間　俺は全身を空気の力で持ち上げられるような得体の知れない浮力を感じた。

同時に、溢れんばかりの光がまぶたを突き抜け、眼球が焼き焦げる感覚を覚えた。

太陽を直視した、あの感じ。

どれくらいの間、目を閉じていたのだろう。
不意に、シュウが立ち上がる気配を感じた。

「……よし、着いたぞ。ようこそ、魔界へ。人間でここへ来たのは恐らく君が二人目だよ、孝四郎君」
「……？」

恐る恐る、目を開いてみた。

魔界の第一印象　どす黒い紫。

夜のように何も見えない闇の暗さ、というんじゃない。
なーんか暗くね？　っていう感じの暗さ。

その証拠に、視界は奪われていない。ちょうど、日没間際の照明を点けていない教室、みたいなレベルの暗度かも知れない。

暗さが気になって周囲の観察を怠ってしまったが、気がつけば俺の右も左も足元も、みんな「石」。

どこもかしこも石造りの壁、そして道。

そう、テレビの旅番組とかで映される中世ヨーロッパの街並みと瓜二つ。よくまあこんなに大量の石を、どこから調達してきたのだろう。完璧というのは程遠いものの、表面は多少研磨されている。子供が絵で描く時のように、ホントにネズミ色をしていた。

しげしげと観察している俺に、シュウは

「どうだい、人間世界よりもレトロだろ？　ずっと昔は魔界人の手で山から切り出していたらしいが、今は魔法の技術が発達して」コ

ツコツ、と拳の裏で壁を叩いた。「この程度のものなら、いくらでも生成できるようになった。とはいっても再生転換の応用だから、これよりも質の高いものを構築することは不可能だ。この世界でもっともありふれた物質は石だと思っていいかもしれないね」

そうなんだ。

寿命が長いクセに数千年も殺し合いばかり続けているから、いつまでたっても魔界人は進歩できていないんじゃないだろうか。ふと思った俺。魔法なんていう不思議な力をもっと研究してやれば、素晴らしい世界を築くことができそうなものだけだ。

ところで、俺とシュウが現出したのは、建物と建物の間にある、裏通りみたいな場所。

前と後ろに、細っこい路地が続いている。

暗いのはそういう場所のせいかと思ったが、どうもそうではないらしい。

理由は、見上げてみて知った。

「な、なんだこりゃ……？」

紫。

空が、マジ紫だった。

夕暮れ時の空によく見られるように、赤と濃紺が混ざって何となく紫っぽくなったとかいうレベルじゃない。

婆さんが着る服の色みたいに、ドがつく紫。

目を開けた途端に世界中がパープルのフィルターを通したような色彩で見えたのは空のせいだったらしい。

思わず、ぽかんとしてしまった。

「どうだい、ヘンな空の色だろ？ でも、これが魔界の空なんだ。ちなみに今は夜。そうだな、人間世界の時間でいうなら午前零時前、

ってトコかな。だから真夜中なのさ」

シユウがそう説明してくれた。

これで真夜中？

普通に物が見える分、人間世界の夜よりは明るい。あっちじゃ、墨を流したような闇に包まれるからな。

しかし、真夜中とはいえ、このおぞましい感じは一体どういうコトなんだ。

ホントに魔界の名に相応しい雰囲気じゃないか。

空の色一つで、こんなにも世界の印象って変化するものらしい。

「で、ここってどこ？ 魔都とかいう所か？」

「ああ、魔都だ。ただ、ちよつと外れの方かな。多分、ナムウエの地区じゃないかな？」

「ナムウエ？」

魔都はその中央に魔界府を置いている。

魔界府をぐるりと取り囲むように魔界人達が生活する区域があり、八つのエリアに分割されているという。人間世界でいう北をノム、南がナムス、西をウエン、そして東をイエルというらしい。

今俺達がいるのはナムウエ、つまり南西のエリア。

「じゃあ、今から中央部に行くんだな？ そこにキャナがいる、と」「そうなる。……だけどもあ、待て。恐らくミナが、俺達の気配を察知してここまで来てくれるハズだ。彼女に化身散開をかけてもらってからにしないと、魔界衆の連中に見つかってえらい騒ぎになってしまう」

そいつはめんどい。

だけど……必ずしもそうじゃないといえるのでは？

俺はちよつと考えて

「つてか、その方が、よくね？ 騒ぎを起こせば、そっちに魔界衆の注意を引き付けられるから、案外キヤナの処刑を邪魔することができそうだと思うんだけど」

「まあまあ。ミナの化身散開をナメるなよ？ 効果は抜群、どんなに高位の魔界府術師であろうと、こいつを見抜くのは容易じゃないんだから。魔力の波長を被術者の気配を完全に消してしまうんだからな。それに」

「それに？」

「ミナを紹介したい。外見は孝四郎君よりも若くて、君にとっちゃ妹みたいなコさ。明るくて元気よくて、結構可愛いんだぞ？」

……合コンしにきたワケじゃーよ。

んな情報要らんわ。

俺は、キヤナを助けるためにここへ
思ったその時。

ゴォーン、ゴォーン、ゴォーン……

魔都全体を包み込んでいる深夜の不気味な静寂を破るかのように、重たい鐘の音が鳴り響いた。

どこからともなく流れてきたその音は、魔界の空をゆっくりと流れて街中へと広がっていく。

鐘つてのは何となくクリアで荘厳な響きをイメージしてしまうが、今のはまるで違っていた。

上手くいえないけど、あんまりにも重く沈むような感じで、まったく爽やかじゃない。

と、路地を抜けた先の大きな通りに、次第に大勢の人が動く気配がし始めた。

「あん？　なんだ？　なんか、イベントでもあんのか？」

のんきな俺の台詞とは裏腹に、シュウの顔色が変わっている。

「まずいコトになった。今の鐘、キヤナの処刑開始を告げる合図だ！　処刑を行う時には、あの鐘が鳴らされるんだよ」

「ええっ！？　なんだそりゃ！？　まだ、時間があつたんじゃないのかよ！？」

「早められたに違いない。連中、処刑にかこつけてメイアとミナも引きずり出そうって魂胆かしらんな。魔界府は二人の行方も追っているし」

この際、魔界衆の考えなんかどうだっていい。

このままじゃ、キヤナが……！

その27 魔界突入3

「どっ、どうしようシュウ!?　なんか、手はねエのか!?　ミナちゃんとかいうコはまだかよ!？」

無意識のうちに、俺の方が慌てていた。

が、シュウはすぐに落ち着き払った表情に戻り、額に手を当てて

「まあまあ。ミナに化身散開をかけてもらおうと思ったのは、それが最善策だからだ。最善策が一番いい手段ではあるけれども、必ずそれでなきゃならんっていうものではない」

その通りだ。

……で？

「ミナと合流する暇がないとすれば、やむを得ないな。孝四郎

君

「おう」

「……このまま突っ込むぞ。一刻の猶予もない」

「……はい？」

今なんか、やぶれかぶれな発言が聞こえてきたような気が……。

このまま突っ込む!？」

冗談は吉本興業!

それってとどのつまり、特攻＝自殺行為じゃねエかよ。命が百個あっても足らんわ!

そういうニュアンスの抗議を唱えてみると、シュウはゆっくりと首を横に振って

「気持ちわかる。だが、今はそれしか方法がない。あと十分もしないうちに執行人の術者達が動けないキヤナ目掛けて殺傷魔法を撃つ。そうなれば、全て終わりさ。まあ、こういうのもなんだけど、行くか行かないかは孝四郎君、君の判断に委ねるよ。命の保証ができなくなっただけには、無理強いするのは忍びないからね」

「……」

ちっ。

思わず、舌打ちしてやりたくなった。

シウが俺に俺自身の判断を預けたからじゃない。
最終的にどういふ答えが返ってくるかなんてわかっていているクセに、まるで俺の覚悟の程を試すような言い方をしたからだ。
さっき一応文句だけは口にしてみたけど、どうせ結論は一つしかない。

……後悔したくない。
それだけだ。

「言ってくれるじゃねエか、オッサン。俺の判断に委ねるだあ？
バカ言ってるじゃねエよ。わかりきっているコトをわざとらしく訊くのって、ムカつくんだよ」

「ふふん。じゃあ、質問するまでもない、と？」

「たりめエだ。ぐずぐず言ってるヒマがあったら、とっとと近域魔法の用意でもしやがれ」

売り言葉に対する買い言葉で言っちゃったつもりだったが、シウは笑いもせずパツと手の平を開いて見せ

「……実はもう、用意はできている」

いつの間にやら、気流石みたいな形状をしつつもそれとは違った

色の石が握られていた。

この野郎。

どこまで人をおちよくれば気が済むんだ。

またもやム力ついたが、今はいったん仕舞っておこう。

キヤナの命が風前の灯なんだから。

「しっかりつかまっててくれよ。素人の近域転移だから、キヤナやメイアの瞬間移動のように上手くいかなからな。言ってみれば、コマ送り状態だ。振り落とされたらそれまでだぞ」

魔界の住人がよく「コマ送り」なんて言葉を知っているものだ。ビデオとかいう文明の利器が存在するハズもないだろうに。

「……オッサン」

「なんだろう？」

「キヤナを助け出したら、あんたをぶん殴ってやる。さもなきゃ、そのフザけたメガネがち割んど、てめー」

半分冗談半分本気で言っただけだが、シュウは笑わなかった。

「ま、どのみちそうなるだろうさ。それはそれで、仕方がないコトだと思っっているよ。無事、私が君にぶん殴られてメガネを割ってもらえるよう、祈るよ」

俺に、というよりほとんど独り言のように呟いた。

その意味がよくわからなかったが、考えている余裕はない。

小さな子供が父親にやるように、シュウの胸にしがみついた俺。

「じゃ、行くぞ。多少のイレギュラーは勘弁してくれよ？」

「イレギュラー？ それって」

質問しかけた途端、魔法は発動した。

動体視力を試す映像のように、目の前の景色が瞬時に切り替わっていく。

シュウの言った意味がよくわかった。

ピンポイントで一直線に転移することができないから、途中で現出してはすぐさまその先へ転移する、ということを経り返しているのだ。

転移というこの魔法、人体という質量の大きい物質を連続した空間を飛び越えて一気に違う地点へ移動させるという荒業なだけあって相当に魔力を消費し、かつ高度なテクニックが要求されるらしい。自然から魔力を集める方法を発見したシュウといえども、彼本人に魔力が備わっているわけじゃない。だから、それを上手く一気に集約して一足飛びの転移魔法として発動させることが困難なのだ。

そういう説明を受けてはいないけれども、今までの一連の諸々から推測すれば、そういう結論になる。

簡単にいえば、どんなに便利で身体的能力を楽々補うことができるスポーツ道具が開発されたとしても、元々センスをもっている人もしくは努力してそれなりの技術を身につけた人　プロ選手とかには及ばない、という例えができるだろう。

瞬間的に切り替わっていく目からの情報に脳みそがついていけず、軽く酔いかけた俺。

と、連続転移がいきなり途切れた。

気がつくと、さっきいた路地より何倍もある大きな通りのど真ん中。

俺の網膜一杯に広がった、シャーロックホームズがいた時代のロンドンみたいな光景。

ただ、両側にびっしり並んでいる建物はどれもそれほど高くはなかった。ほとんどは二階建てで、たまに三階がある程度。時代劇に出てくる江戸の街を、全部石造りに置き換えるとこんな風景が出来

上がるのだろうか。街全体の背が低いせいか、あまり文明的というような感じはしない。

どっちかといえば、RPGのアニメーションに出てくる街だ。

剣と鎧を装備したファイターとか、ローブに身を包んだ魔法使いがぞろ歩いてそう。

が 俺とシウウが今直面しているこの状況、そういう心躍らせるファンタジー的要素はゼロ。

俺達の行く手 多分、北側 に目をやれば、不気味な紫の空をバックにそびえ立つ奇怪な尖塔。まるで魔都全体を監視しているかのようなその塔のてっぺんで、例の「処刑の鐘」は鳴っていた。

あれが話に聞く地獄の二丁目一番地「魔界府」らしい。

光の加減なのかどうかよくわからないが、シルエットだけがやけにはつきりと見えるものの、逆光のような具合で建物の見てくれは真っ黒にしか見えない。

そして、そこから届けられる死を呼ぶ鐘の音に吸い寄せられているかのように、街の人々がふらふらと魔界府目指して歩いて行く。その数、休日の歩行者天国並みで、老若男女入り混じっている。

寒いということがないせいか、どの人も比較的薄着。

といえば聞こえはいいが、質素というよりも貧しさのためにそうしている感じ。俺の横を通り過ぎて行った若い夫婦なんか、男は腰だけを隠して上半身ハダカ、妻のほうも胸と腰下にボロみたいな布を巻いただけっていう格好。乞食そのものじゃないか。

なんだこの様相は？

魔界人って、まともに生活が成り立っているのか？

イーペーでもっとも金なしビンボーな俺だって、さすがにハダカで生活はしとらんぞ。

ってか、姿かっこう以上に異様なのは どの人にも生氣というものがある感じられないコト。

瞳に光がなく、病んでいるというよりイッちゃってます。

そんなツラ下げてよたよたとみんな同じ方角へ歩いていく光景は、

ホラー映画そのもの。

映画なら映画だと思って観られるが、これは俺が実際目にしている現実。

思わず、怖気がたった。

「シュウ、これ、これって……」

「ああ、広域催眠さ。魔族の反乱が頻繁になって以来、魔界府は必ず魔都の人々を処刑の場に立ち会わせるようにしている。見せしめと、脅しのためにな。キャナとメィアが暴れてからというもの、特に厳しくなったようだ。今日はそのキャナの処刑だもの、魔界府も気合いが入ってるんだろぅなア……」

大なり小なり魔力をもって生まれる魔界人といえども、魔界府が行使する魔法の影響から逃れることはできないらしい。

ん？

ってコトは

「お、俺達は大丈夫なのか？ 黙っていたら、広域催眠にかけられちまうんじゃない？」

本気で心配になったが、シュウはこともなげに

「こんなもの、とつくのとうに対策済みさ。気にするまでもない。それより……」

大通りの先の方をじっと見つめてから

「魔界府広場の辺りは寄せ集められた魔界人どもでこったがえしているようだ。魔障の影響も強くなってきたから、こっから先は上手く転移できるかどうかからん。仕方がないが一か八か、現出

地点を定めなくて勢いだけで発動させてみるか」

要は邪魔な人々をふっ飛ばしつつ突っ込んでいくという、ひき逃げ上等戦法。

善良（とも言い切れないが）な市民をゴミ扱いにするという点で、どんなひどい独裁者も思いつかなかったであろう最悪な戦術。

このシュウ、涼しい顔してそういう極悪非道な振る舞いに及ぼうとしてやる。

「オッサン！ あんた、アホか！ んなコトやったら一般の皆さまを巻き添えにしちまうだろうし、さもなきゃとんでもないところまで吹っ飛んでいっちゃまうでしょうが！」

「アホとはなんだ。キヤナを助けるには、君が魔封陣の中に飛び込みさえすりゃケリがつく。だから、この際細かいハナシは抜きだ。やるしかない」

「やっぱアホだ！ このクソオヤジ！ あんた研究者でしょうが！」

クソ呼ばわりしたからツツコミが返ってくるかと思ったが、シュウは何も言わなかった。

ヤツは無言で俺の肩に手を回してがしりとつかむなり

「孝四郎君。これが魔界のためであり、彼等魔界人のためでもあるんだ。だから、私は涙を飲んで心を鬼にして、魔界府広場を目指すことだけを考えようと思う」

「だーっ！ アンタのやろうとしているコト、鬼どころの騒ぎじゃねーよ！ 悪魔だ、アクマ！」

俺は力いっぱい罵ってやったが、その時にはもう転移が発動されていた。

魔界衆が魔界府の周辺に張り巡らせている魔障、つまりジャミン

グのような結界の力が作用していて、転移は転移と呼べるようなものじゃない。

ただ魔法の力で推進力を得て、前へ前へと突進しているに過ぎない。

あつという間に、道を一杯に埋め尽くしている人々が目の前に迫ってきたかと思うと

「おおつと!?!」

「どわああつ!」

絶叫しつつ、群集目掛けて突っ込んでいく俺達。

人垣をなぎ倒しふっ飛ばし、暴走して歩道に突っ込んだ乗用車状態。これが人間世界なら警察がやってきて即刻現行犯逮捕されるだろう。

ってか、それ以前の問題として……俺達は車じゃない。

俺もシュウも生身のままだから、人間サンドバッグ状態に陥っている。

腕で頭を庇うのが精一杯。

衝撃が強すぎて腕がもげてしまいそうだ。

しかし魔法の効果は衰えない。

どんどん突き進んでいって、魔界府広場までかなり接近したかと思った時だった。

身体全体にかかっていた魔法による推進力が、ふつつり消えたような感覚がした。

同時に浮力を失った俺の身体は、勢いに任せてすっ飛んでいくしかない。

「……うわっ!　なんだこりゃ」

「

前の方にいた人々を押し倒しつつも、体勢を立て直せない俺は地

面に落つこち、石畳の上を転がっていく。

すぐ傍では、シュウも同じハメになっていた。

ようやく、停止。

痛いとか何とかいう感想ではない。

全身の間接が外れきったようで、生まれたてのヤギとか牛みたい
に力が入らなかった。

バトルアニメのキャラは、いつもこんな目に遭っていたというの
か。

二次元の世界に生まれなくて良かった、俺。

「痛ってエ……。ホント考えなしだな、このヒゲオヤジは」

「君はつくづく失礼だな。そんなにヒゲが嫌いか？ 剃ればいいのか？ 個人的には気に入ってるんだけどな……」

「そーいう問題じゃねっつーの！ 周りを見やがれ！」

そう。

これだけ派手な登場の仕方をしてのけたからには、当然の結果
だ。

気が付けば、俺達はぐりりと取り込まれていた。

どいつもこいつも同じ白いローブ姿。

これって魔界衆！？

さもなくば魔装兵とかいう兵隊みたいな連中。

どのみち、そこの魔界人よりもはるかに強い魔力をもったヤツ
らであることに違いはない。

一斉に魔法なんかぶっ放されたら俺達、速攻でこの世から跡形も
なく消滅しちまう。

顔から血の気が引いていく音が聞こえたような気がする。

ところがシュウときたら

「いやあ、悪い悪い。ちょっとだけ、距離が足らんかった。魔力の

配分を間違えたかな」

「やっちゃった、てへっ！ 的にへらつと笑ってやがる。
百歩譲って女の子だったらまだいい。」

「ヒゲのオッサンにそーいうフザケた真似されると すっげー
力つく！」

「バカ！ アホ！ 死ね！ ヒゲ野郎！」

「ヒゲ野郎とは、ひどい」

「呑気に返してる場合か！ どーすんだよ！？ 囲まれてるじゃね
エか！」

「が、オッサンは涼しい顔のまま、何度もヒゲを撫でている。
ぐいつと背伸びをするようにして通りの先を見やりながら」

「……思ったほど、遠くもないな。すぐ向こうに、キャナがいる。
作戦第一段階は成功、と」

「何を悠長な ムカムカと腹が立ってきたその途端。」

「俺とシュウの目の前で激しいフラッシュが起きた。」

「魔界衆の連中がぶっ放してきた魔法の嵐を、ヤツはなんと片手一
本で受け止めてやがる。」

「おおうつ！？」

「おいおい魔装兵諸君、不意討ちは勘弁してくれよ。こちら、魔
断防壁は使えないんだからさ。代わりとこっちや何だが……」

「ゴォン！」

「シュウの掌中に集約されていた魔力が、突然リバーズした。」

強大なプレッシャーをぶちかまされ、十重二十重に取り囲んでいた魔装兵が一斉に吹っ飛んだ。

海が割れて道が開けたとかいう作り話のように、魔界府広場まで一直線にスペースができていく。

「……自然から抽出された魔力は威力がでかいからねエ。むやみに撃つてこないほうがいいよ。……って、もう遅いか」

ぼりぼりとアタマを掻いてる。

つ、強えエ……このオツサン！

何も説明がなかったから知らずにいたケド、ちゃんとこういう芸当もできたんじゃないかねエかよ。

驚きのあまりフリーズしていると

「行くんだ、孝四郎君！ 突っ込むなら、今のタイミングしかない。もうすぐ、キャナの処刑が執行されちまうぞ」

今までのすつとぼけぶりはどこへやら、かつてなく真剣な眼差しが俺に向けられている。

なんだ。

真面目になりゃ、オトコ前なイイ顔してるじゃねエか。

「承知した。んじゃ、行くぜ？」

すかさず駆け出そうとすると、

「……ちょっと待った」

「あん？」

「私はこのあたりにちよいと小細工をしかける。おっつけ加勢するが……間違っても死ぬなよ？」

何を言つかと思えば。

旅立つ子供を心配する父親みたいな力才しやがって。
でも、ちよつとホツとしたかも。

どうしてだかよくわからないケド 心の底から氣遣つてくれて
るっていう氣がしたから。

「はいよ。あとよろしくっ！」

地を蹴った俺。

シュウにやられた魔装兵達はまだ立ち直っていない。

花道を行くように、その中央を俺は全力で突っ走っていく。

前の方を見やれば、すぐそこから先は開けている。

視界のちょうど真ん中に、なんじゃかんじゃとけつたいな刺繍
の入ったローブをまとった男が俺に背をむけるようにしてお立ち台
(?)の上に立っている。

多分、魔界衆のお偉いさん。

ヤツの命令一過、キャナの処刑が執行されるのだろう。

そしてその男の向こう側、がらんとした空間を挟んで見えている
のは、いかにも今出来な雰囲気のでっかい石柱。柱頭には、大きな
刃を模した彫刻みたいのがくつついている。ただの想像だが、罰と
か裁きとか、そういう概念をイメージしたものなのだろう。センス
がいいとはとても思えない。ああいうものは、見せしめの象徴に決
まっている。

男とお立ち台が間にあるから俺からは見えないが、あれの下の方
に キャナが拘束されていると思ってい。

シュウの仮定に間違いがなければ、無茶して彼女の元までたどり
着く必要はない。

その周囲に展開されている魔封陣の内側に一歩飛び込むだけで、
俺のミッシェンは完了する。

あと、もうちょい！

さすがに息が上がりかけていたが、ここでへばるワケにはいかな
い。

ぶっ倒れるなら、魔封陣の境界「ゴールテープを通過してからだ。

ところが。

もう数メートルという位置で、魔界衆のお偉いさんがちらとこち
らと一瞥するなり

「侵入者を止める！ 魔装兵、何をやっている！」

そう一声するなり、急に俺の行く手に数人の安物ローブども、つ
まり魔装兵達が立ち塞がった。

一瞬迷ったが、もう立ち止まることは許されない。

「そこをどけエ！」

叫びながら体当たり承知で突っ込んだが……魔装兵達は二人、三
人と束になっているから、思ったほど簡単には破れなかった。

俺のタックルをくらったヤツこそよめいたが、ほかのヤツらが
すかさず俺につかみかかってきた。

かわそうとしたが、俺も大きく体勢を崩している。

たちまちねじ伏せられ、石畳の上に力任せに押し付けられてしま
った。

「どけ、この野郎！」

振りほどこうともがいてみるものの、三人がかりじゃ歯が立たな
い。

一人は俺の頭を石畳にめり込まんばかりに押し付けているし、あ
との二人は腕を後ろにねじ上げてがっちりキメている。

肩の間接が外れるかというくらいの激痛。

手加減を知らん連中、といたいところだが、所詮俺は侵入者なワケで。

優しくしてもらおうとする方がどうかしている。

やっぱだめか……！

力が及ばねエ！

万事窮すとはこういうことだ。

「くっそ……この……！」

無理矢理顔を上げると、その先には 彼女の姿があつた。

キヤナ。

魔法で生成された巨大な円柱に、両手両脚を鎖でつながれている。ちようど磔にされたような感じだが、衣服がすっかりボロボロで身体を覆っていないから、ほとんど裸だった。見せしめに、そんな姿で晒されているのだ。

キズだらけの彼女は力なくぐったりとうな垂れていたが、にわか
に正面が騒がしくなったのに気付いたか、顔を上げた。

「……！！！」

俺の姿が目に入ったらしい。

大きく目を見開いて

「んーん！ んーん！（多分、こーちゃん）」

何度も叫ぼうとした。

言葉になっていないのは、口に棒のようなものをくわえさせられ、喋れなかったからだ。

猿ぐつわ。

そこまでするか？ フツ……。
百年以上生きてるかも知れないが、魔界の寿命からすれば若い女性なんだぞ！

「コンのオ！ キヤナを離しやがれ！ 手前エら、自分達のやつて
るコトがわかってんのかよ！」

数ヶ月ぶりの再会が、こんな形になるなんて。

……認めない。

俺は、断じて認めない。

このままキヤナが殺されてしまったら、俺はどのツラ下げて人間の
世界へ帰ればいいんだ。

もがき、叫んでみるものの、俺を取り押さえている力をどうする
ことも出来なかった。

そして お立ち台の男が高々と右腕を上げた。

「執行人！ 構え！」

ヤツの左右には、ずらりとローブ姿の連中が居並んでいる。

半円状にキヤナを取り囲み、各々片腕を差し向けて今にも魔法を
放とうとしている体勢。

処刑の執行人という役割のためか、皆頭までフードですっぽりと
覆い隠していた。

「執行人！ 用意！」

次の号令が魔界府広場に轟き渡った。

と、幾許もなく執行人達の差し上げられた片手に、次々と白い光
が生じていく。

「んーんっ！ んーんっ！ んー、んんんーっ！！」

言葉まで封じられつつも、キヤナは必死の形相で叫ぶことを止めない。

命乞いなんかじゃない。

彼女がそんなことをする女性でないっていうのは、俺がよく知っている。

全部、俺に向けたメッセージ。

もう無理しちゃダメ、すぐに逃げて、っていう。

「おい！ 待て！ 待てよ！ やめろ、貴様らア！ ンなコトが、許されると思ってんのか！」

声を限りに絶叫したが、魔界人どもは誰も耳を貸さない。

「執行人、狙えっ！」

もうダメなのか！？

俺は正直、諦めかけた。

ふと顔を上げると……キヤナの視線は微動だにすることなく、じつと俺に向けられている。

来てくれてありがとう。

そう言っているかのような、優しい眼差し。

もう、叫ぶことはしなかった。

覚悟、決めたんだな。

が。

途端に俺は、心の奥底から、いても立つてもいられなくなった。

このままじゃ、キヤナは……殺される！

腹を括るしかねエ。

こうなりゃ、取り押さえられている腕を引き千切っても、あの

円陣に飛び込んでやる。

あそこにさえたどり着けば、シュウが言うには 魔封陣が暴発し、キヤナの拘束は解かれる。

キヤナさえ助かれれば、あとはどうにかなるだろう。

もしもここで彼女を喪ったならば、俺は一生後悔するに違いない。あの日のことがちらと脳裏を過ぎった。

俺を彼女を追い出すようにして、別れてしまった。

さよならさえ、言ってやれなかった。

本当は俺のところにいたかった筈なのにシャットアウトされ、泣く泣く去っていったキヤナ。

今、守ってやらないで、いつ守ってやるんだ!?

もうあの時の二人には戻れないかも知れないけど、それでもキヤナは助け出してみせる!

やぶれかぶれで後先を忘れた人間様の火事場の馬鹿力、とくと見せ付けてやるうじゃねエか!

今の俺は片割れ魂。略して片タマ。片キンじゃない。黙っていたって、どうせ長生きできないんだし。

「手前エら……調子に乗るのもほどにしとけよ……」

ぐぐぐぐと、少しづつ力任せに身体を起こしていく俺。

「き、貴様! 大人しくしている!」

「……うつせエ、タコ。誰に向かって口利いてやがんだ? あア?」

自分でもよくわからない。

その瞬間、俺は完全にキレていた。

ポーン、と時報が鳴るようにして、頭の中が真っ白くなり

「……どけコラア!!」

突如両拳が唸りを上げ、鋭く宙を切り裂いた。

「がっ！」

「ぶふっ！？」

俺を左右から押さえ込んでいた魔装兵の顔面、思いっきり陥没。
俺様奥義神速鉄拳、名付けて「両面待ち」。

しかし、やつらの顔がぼっこり歪んだ瞬間には、俺はもうその位置にいない。

魔封陣目掛けて、死に物狂いでダッシュしていたからだ。

「こっ、この侵入者め！ 止まれエ！」

別の魔装兵が俺の行く手を遮るべく立ちはだかった。
が、ヤツはすぐにたじろいだ様子を見せた。

恐らく、俺の顔が完全に阿修羅と化していたせいだろう。

「どけつつつてんだア、この野郎！ 邪魔だア！」

「べっ！！」

一撃がどこに入っただけで、知ったコトじゃない。

とにかく、行く手が開きさえすれば、それで良かった。

間合いさえ奪ってしまえばこの魔界人ども、すぐくケン力弱つ。
キヤナをぐるりと取り囲んでいる一角で騒ぎが起こったせいか、
執行人達が何事！？ みたいな顔でこちらを見た。

だけど。

一番驚いたのは誰でもない、キヤナだった。

いきなり荒れ狂いながら突っ込んできた俺の姿を見て驚いたよう

な顔をしたが、すぐに

「んーん、んんんーっ！　んんんんんーっ！」

必死な形相で何かを訴えている。

来ちゃ駄目、とでも言いたかったのかも知れない。

……おせエよ。

ここまで来ちまったし。

俺はすでに、お立ち台の横をすり抜けてしまっている。
慌てたのは、その上にいた魔界衆のお偉いさんだった。

「か、構うな！　執行人、キャナを狙え！」

「させるかあっ！」

と、意識しうる限りの視界が、キラリと白く光ったような気がした。

キャナに向けて執行人達が魔法を発動させたのだ。

もう、脳みそも心も完全に飛んだ。

俺は思い切り地を蹴った。

魔封陣目掛けて、ロケットダンプ。

「んーん！」

ほとんど泣き出しそうに、キャナが唸った。

と、その時。

激しく首を揺り動かしたせいか、横一文字にくわえさせられていた棒が外れた。

「キャナアー！！！」

「こーちゃん！！　こーちゃん！！！」

ただっ広い魔界府の広場に、絶叫する二人の音がハモって響き渡った。

俺とキヤナ。

分かたれた魂が世界を飛び越えて再び寄り添いあったその刹那

ズンッ……

地面が根こそぎ跳ね上がるような衝撃がきた。

間髪を容れずして空間中に満ち溢れた、視界をことごとく奪いさるほどに眩い、純白の閃光。

太陽を直視してしまったみたいに、眼球が耐えられない。

そのせいで俺は、眼前に迫りつつあったキヤナの姿を見失った。

その27 魔界突入3（後書き）

都合により数日お休みさせていただきます。
次話11/8予定でございます。

11/4 予定が変わりまして11/5次話掲載します。すいませ
ん（汗）

その28 魔界突入4

……あ、あれ？

ここってどこだ？

なんか、見渡す限り真っ白だし。何にも見えやしねエ。

それに俺、妙に身体が重い。

どうしてこんなに

「……！？」

ビビった。

俺の両手両脚、鎖につながれてる。

え？ 何？

もしかして俺、魔界衆に捕まった？

それじゃここ、牢獄とかなのか？

にしちゃあ、やたらと眩しいんですけど……。

無駄を承知で両手両脚をガチャガチャやっていると、正面にキラリと閃する光が見えた。

それは見る見る、すごい速さで俺を目掛けて飛んでくる。

ちよつと待て！ 実はもう、処刑台だったのか！？

殺すの、早すぎね？

俺、人間なんだっつーの！

もう少し、色々訊くことなかったの？ 知ってる限りの人間世界PRくらいしてやったのに！ 政治経済社会情勢についてはまったく知らないけど。

光は一直線に向かってきて、ほとんど俺を貫きそうになった。

「う、うわあぁっ……！」

声にならない声で叫んだ俺。
が、しかし。

ほんの数センチ手前で突然光はぴたりと止まった。
そうして一点の大きさしかなかったそれはたちまち大きく膨張を
始め、膨らむだけでなくあつという間に人の形を模していった。
のっぺらとした人形みたいな光のカタマリは次に、あちこちがへ
こんだり飛び出たりしていく。

透明人間の造形師がすぐ傍にいて、俺の目の前で高速で彫刻して
いるような感じ。

何秒とかからずに目鼻立ちや髪型、身体のアインが整っていき、
最後にもう一度凄まじい輝きを放った。

「うわ！」

あまりの眩しさに思わず目をつむると

「こーちゃん！ こーちゃん！ あたしよ、キヤナよ！」

「……！？」

聞き慣れた柔らかな女性の声が、俺の鼓膜に届いてきた。
恐る恐る目を開いてみれば、そこには キヤナがいた。

一糸まとわぬ素裸の彼女の肌は神々しい輝きにあふれていて、あ
の凛々しくも愛らしい相貌には慈愛の笑みが浮かべられている。

間違いなく、キヤナ。

彼女は動けない俺の首にそっと両腕を回すと、自分の唇を俺のそ
れに押し当ててきた。

「キヤ、キヤナ……？」

呼びかけようとしたが、しっとりとした温かい唇でふさがれてい

るから、声が出せない。

その間、彼女はぴったりと身体を密着させてきて、激しく押し付けるようにした。

されるがままになっている俺。

ただ この安らぎは、なんだろう。

風呂あがりに、ふかふかとしたタオルで包み込まれているかのような、心地よさ。

今まで、こんな気持ちになったことがあっただろうか。

朦朧とした頭でふと、そんなことを考えてみたりした。

キヤナは俺の舌、上唇、下唇と吸ってから最後に額にキスをして、ようやく顔を離れた。

そして今一度、にっこりと微笑んで見せて

「……ありがとう、こーちゃん。あたし、もうダメだと思ってた。

死ぬのが怖いとかじゃなかったケド、こーちゃんに悲しい思いをさせたままお別れして、そのまま死んでいくのがすごく悲しかったの」

「だから、あたしを助けに来てくれて、すごく嬉しかった。本当にありがとう、こーちゃん」

それだけ言うと、キヤナは幽霊のようにすうつと後ろへと下がっていき始めた。

「お、おい！ 待てよ！ 待ってくれよ！ ここはどこなんだよ！
？ キヤナは、キヤナはどうなったんだよ！？ おい！」

何がなんだかわからないまま、叫ぼうとした。

が、なぜか声が声にならない。

キヤナはどんどん離れていく。

途中でもう一度だけ、透き通った笑顔になって

「こーちゃん……愛してる！」

「待てよ！ キヤナ！ 行かないでくれ！ 俺の魂、くれてやるから！ キヤナーっ！」

絶叫しながら、俺の意識はそこで途絶えた。

「う……」

不意に、身体中にずしりとした重みがかかってきた。頭の中で、脳みそがわんわんと唸っている。

その響きようがラジオのノイズのように意識に干渉してきて、どうもすつきりしない。脳みそがそんなだから目の前がチ力チ力して視界がやたらとぼやけている。

さっきの白い世界はどうやら夢かなんかだったらしい。

それにしても、妙なリアル感たっぷりだった。

キヤナの感触、笑顔、そして……愛してる、の言葉。

もしかして彼女はあやつってお別れを告げにきたのか？

と、すれば俺 助けることができなかった！？

焦りで心臓が飛び出しそうになった。

辛うじて心臓は飛んでいかなかったが、反射的に身体を起こそうとしていた。

その時だった。

「ああつ！ 良かったあ！ 目、覚めたのね？」

「……！？」

一瞬、何かなんだかわからなくなった。

傍に誰かいるのか？

一気にこじ開けた俺の視界にまず入ってきたのは、一面のどす黒い紫。

その横から、そろーっと、ゆっくりやってきたのは

「……キヤナ！？ キヤナなのか！？ キヤナだよな！？」

思わず連呼していた俺。

間違いない。

夢の中と同じように、ふわっと柔らかな彼女の微笑み。

ただ、その肌のあちこちが傷つき、アザができていた。

俺が叫ぶなり、彼女はたちまちその目に大粒の涙を浮かべて

「もう、二度と会えないかと思ってた。こーちゃんにたくさんいろんなことしてもらって、魂までもらったのに、何もしてあげられないまま、悲しませたまま、死んじゃうんだなって思ってあたし、悲しくて悲しくて……」

俺の頬に、彼女の涙がぽたぽたとこぼれ落ちている。

しかしすぐに、キヤナはにっこりと泣き笑いの顔になると

「でも、こーちゃん、来てくれた。こんなあたしのコト、助けるために、人間の世界からわざわざ……」

あとは、声にならなかった。

瞬間、身体の痛みなんか忘れてしまった俺。

起き上がるなり、がばつと彼女を抱き締めた。

キヤナもまた、俺の首が折れるくらい強く強く抱きついてきて

「ふえええん！」

堰を切ったように泣き出した。

「こーちゃん、こーちゃん、こーちゃん……」

畜生。

俺のバ力野郎。

なんでもっと早く、キヤナのことを……守ってやれなかったんだ！
そのせいで、彼女をこんな目に遭わせてしまった。

苦しかったよな。

辛かったよな。

怖かったよな。

痛かったよな。

それから 悲しかったよな。

「ごめん、ごめんな、キヤナ！ 俺が、俺が、だらしなかったばかりに、こんなコトに……」

「こーちゃん！ こーちゃん！ こーちゃん！ ふええん……」

泣き続けるキヤナの身体を抱き締めたまま、俺もまた涙が止まらなかった。

後悔。

彼女を守ってやれなかった、不甲斐ない俺への後悔。

だけどキヤナはそんな俺を少しも恨んだりすることなく、殺される寸前まで俺のことを思い続けてくれていた。

立ち直ったなんて、ウソ。

あの日から状況が変わったなんて、思い込み。

本当にそうだったら、今こうやってキヤナのことを愛おしく思っ
て抱き締められるワケがない。

今まではただ強がっていただけだ。

心の奥にひた隠して、だけど心の底から求めていたのは、ほかでもない　キヤナのことだった。

もう、絶対に後悔なんかゴメンだ。

例え魔界の果てで二人、殺されたっていい。もし別れてしまわなければならぬくらいなら。

二度と彼女を失うような真似はしない。
固く、固く誓おう。

「こーちゃん、こーちゃん、こーちゃん……」

キヤナ、小さい子供みたいにいつまでも泣きじゃくっている。
そっぴや、メイちゃんが言っていたな。

キヤナ、ああ見えてもとっても心が弱くてキズつきやすいの。風間クンに嫌われたりしたら、きっと生きていけなくなるかもね。

メイちゃんの言う通りだったな。

一人で生きていた頃は冷酷非道な魔女を装っていたかもしれないけど、人間世界にやってきた彼女は安心というものを知った瞬間から心に重大な変化が起きた。

誰かを愛する気持ち、そして愛される気持ち。

俺が気付かずにいたことを、メイちゃんは巧みに勘付いていた。せっかく、ご丁寧に教えてくれたのに、ね。

ま、いつか。

こうしてまためぐり会えて、助けてやることができたんだし。

大切なのは、同じ過ちを繰り返さない決意だ。

そう思ったら、ようやく気持ちが落ち着いてきた俺。

ふと、気がついた。

キヤナの感触が、生まれたままのそれ。

あ、そうか。

彼女はほとんどハダカの状態で拘束されていて、そこから助けた
ばっかりだったんだっけ。

あらかじめシュウからそのことを聞いていたから、俺は抜かりな
く準備してきた。

「……キヤナ？ もう、泣くなよ。とりあえず、これを身体に巻き
な」

「……なあに？」

泣きはらした目で俺を見上げたキヤナ。

俺は背中からごそごそと、隠し持っていたアイテムを取り出した。

真新しいシート。

服なんかかさばるから持って来れなかったけど、これなら何とか
なると思ったのだ。

それを目にした途端、キヤナはまた目をつるつるさせて

「こーちゃん、そんなに、あたしのコト……」

泣きそうになっている。

「泣くのはあとにしょ？ 今はまず、これを……」

シートをばさつと広げると、彼女の胸の辺りで巻いてやった。

そこそこの大きさがあるから、立ち上がったところで彼女の下
の大事な部分もちゃんと隠れるハズ。

「……よし。あとは帰ってから、メイちゃんに何とかしてもら
おうぜ？」

「うん！」

こつくりと頷いたキヤナ。

目に涙を浮かべながらも、嬉しそうに笑った。

純白のシーツに包まれ、笑顔になった彼女はなんだか
がちらと口にしたように、女神に見えなくもなかった。

シュウ

その29 魔界突入5

キヤナと感動の邂逅を果たした俺。

もうダメかというぎりぎりのところを滑りこんだから、感激もひとしおだった。

で、落ち着いてみて気がついたコトが二つある。

「キヤナ、髪……」

別れたあの時と、少し形が変わっていた。

人間世界にやってきた頃はふっさふさのロングで、一見お水のおねーさま風。彼女は寝相がよろしくないから、毎朝起きると三原山になっていたものだ。

が、今は後ろのほうが肩ぐらいまでの長さになっていて、前と横は長く伸ばしたまま前に垂らしている。

うーむ。

がらりと雰囲気が違う。

「あ、これ？ えへへ、気分変えようと思って、切ってもらったの。シユウさんのところにかくまってもらっている時、メイアとミナちゃんに」

そう言っただけで彼女は指で横の方をすきながら、上目で俺を見た。

感想を期待している顔つき。

「前はおねーさまっぽかったのに、見た目の年齢がぐっと下がって可愛らしくなったな。似合ってると思うぜ？」

殺しの褒め言葉じゃない。

率直な感想。

すると、キャナは「きゃっ」と無邪気に喜んで

「そお？ カワイイ？ じゃあじゃあ、今度はあたしも、こーちゃんと一緒にガッコーってところに、行けるかなあ？ えへへ……」

「あーまー、イケそうな気はするけど……」

言いかけて、俺はハツとした。

キャナを助け出した感動が大きすぎて、肝心なコトをすっかり忘れてしまっていた。

人間世界の方にも、それなりの現実というものを残してきていたのだ。

……まあ、そのことはあとで考えるところか。

今は、この状況から何とか抜け出さなくちゃならない。

そう。

気付いたコトの二つ目。

魔封陣に飛び込んだ瞬間に気を失ってしまったから、何が起こったのかまったくわかっていなかったのだが

「それはそうと、キャナ。これ、一体何が起こったっていうんだ……？」

俺達がいる部分だけを残し、魔界府広場は跡形もなくなってしまっている。

大きくえぐれて土がみえていて、まるで大きな隕石が落ちたかのよう。

規模的には、ざっと見てテニスコート何面分。

魔都を圧するように建っている魔界府の建物も、広場側の面がごっそりと持って行かれて無惨なことになっていた。たった今気付いたが、魔界府の建物を構成しているのはやはり石。しかしそれはネ

ズミ色じゃなくて、真っ黒な色だった。石炭じゃあるまいし、何で黒いのだろう。

建物や街の普請はまだいいとしても、問題は大量の人々。

そういう惨々たる状態だったから当然、キヤナを殺そうとしていた魔界衆や魔装兵達、それに詰め掛けていた魔界人達の姿もなかった。魔界衆とか執行人の連中がどうなろうと知ったコトじゃないが、罪もない魔界人達まで巻き込んでしまったとしたら、痛ましい気がする。親子とか夫婦みたいな家族連れがわんさかいたのを、俺は目にしていたから。

だけど、魔界府を許すことはできない。

幼い子供にまで処刑の様子を見せつけようとするなんて。

キヤナは辺りをしげしげと見回し

「あたしもよくわかんない。……けどこれ、シュウさんが考えた作戦でしょ？ 魔封陣の外側から内側と同じ魔力を当ててやれば封じられた魔力が暴走して魔封陣ごと吹っ飛ぶって。それであの人、こーちゃんのコトを呼びに行ったのね。さすがにあたしも、ここまでのことは思いつかなかったわあ……」

しきりに感心している。

「シュウのオッサン、言ってたな。ここ数千年の魔界の歴史の中で、魂を分け合ったヤツは恐らくいないだろうって。それを俺がやったのはすごいことなんだって、絶賛されたよ。つっても、ホントにそうなのかどうか、わかったモンじゃないと思うケドね……」

「きつと、ホントのコトだと思うよ？」

キヤナの視線が、まっすぐに俺をとらえている。

「自分の魂を削ってまでほかの人を助けようなんて、誰にでもでき

るコトじゃないもの。誰だって、自分の魂が惜しいもん。だからあたし、あの時すごく驚いたのよ。こーちゃんってば、フツの顔して堂々と『俺の魂半分やる』とか言っただもの。耳を疑っちゃったわ」

そういうモンかね。

確かに、自分の命を惜しむのは当たり前の人情ではある。

とはいっても、目の前で死にそうな人がいたなら、なんとか助けて放っておくなんて、とても人間の振る舞いじゃない。犬とか鹿みたいな獣だって、傷ついて死にそうな仲間の傍から離れないでいるっていうのに。

まあ、今それをああだこうだ議論しても仕方がない。

ともかくも、キヤナに魂を分けてやったという俺の行為が、予想だにできなかった結果をもたらしたコトだけは確かだよ。シュウの話だけじゃいまいちピンとこなかったが、こうして実際に起きた出来事を目の当たりにしてみると、ふつふつと実感が湧いてくる。

「さて、こつからどうすりゃいいんだろう？ オツサン、あとから加勢するとか言ってたクセにまだこねエし。もしかして、一緒に吹っ飛ばされちまったんじゃないだろうな？ 結構テキトーなオツサンだったし」

ほぼそ言っているのを耳にしたキヤナ、くすくすと笑い出し

「シュウさん、そんなにヤワな人じゃないわよ？ きつと、あたし達が逃げやすいように何か手を打って回っているのよ。心配は要らないと思う。それよりも」

急に、キツと表情を引き締めた。

クレーターの向こう側に、白や黒のローブ姿の連中がわらわらと姿を見せ始めたからだ。

南の街側の方からも、魔界府の建物側からも。

その数、軽く百人以上。

あつという間にぐるりと包囲されてしまった。

「……めんどくさい連中ね。せつかくこーちゃんと再会できたってのに」

完全に魔女の顔に戻っているキャナ。

眼差しも鋭く、周囲の魔界衆を睨みつけている。

そのうち、魔界府側の方から一人の男が進み出てきた。

RPGの王様とか軍隊の偉い人的にごてごてと装飾の施されたローブをまとった、中年のオッサン。

テレビで観たローマ法王、それがロマノフ朝の皇帝みたいな、そんな仰々しい見てくれ。

あんなの着て重くないんだろうか。肩凝るぞ。

俺はふと思ったが、ヤツの好みなんぞ知ったコトではない。

服にどんなモノをくつつけてやがるんだと思ってじろじろ眺めていると

「カロイド・デル・ボーン。魔界府筆頭術師、八賢師の頂点に立つ男よ。メイアが引き起こした騒ぎのどさくさに紛れて魔界府の実権を握ったの。魔族殲滅主義を掲げて、あちこちの魔族を捕らえては処刑する最悪なヤツよ。あたしもメイアも、あいつのために何度も命を落としかけた」

キャナがそつと教えてくれた。

二人にとっては、何回殺しても飽き足らない程憎らしい存在。

いや、魔族みんながそう思っているだろう。

自分達の安定をはかるために、理由にもならない理由を構えては一部の人々を平気で迫害して殺戮する。その手口は決まっている。常に見せしめしかない。

人間の世界でもそうだが、ヘタレが権力を握るとろくなことにならない。ヘタレは所詮、恐怖で人々を服従させることしかできないのだ。

カロイドたらいうあのオッサンも、そういう意味においてヘタレ野郎。

ヘタレなヤツにはどうしたらいいか。
んなコトは最初から決まっている。

鉄拳あるのみだ。

腐った性根は叩き直すに限る。

「……ずいぶんと悪運が強いじゃないか、魔女キャナ・ルーフエル」

カロイドの声が、荒れきった魔界府広場にこだました。

権力者特有の「俺、偉いんだもんねへーん」的にイヤらしい響きのある声。

「人間を利用して上手く生き延びるとは、相も変わらず悪知恵が働く女だ。さすがは魔女、というところかな？」

ほとんどくつつきそうな距離にあるキャナの顔、凄まじい怒りに満ちているのが伝わってくる。

罵声の一つでも浴びせてやりたいだろう。

が、それだとヤツの思うツボだ。

ここは一つ、風間流ケンカ術「ナメた態度で相手を挑発」でもお見舞いしてやるに限る。

俺は手でキャナを制すと

「おーい、オッサン！　ここは広いんだよ！　んなネズミのクソみたいな声で喋られても、こっちにや聞こえねーよ！　もっとでかい声ださんかーい！　男なら腹の底から声出せや！」

のんびりした調子で呼びかけてやった。
すると。

「つくづく悪運の強い女だな、と言ったんだ！　人間を利用して上手く生き延びるとは、悪知恵の働く魔女だよ！　だが、それもここまでだ！　今から、再度お前達の処刑を執行する！」

さつきよりも声のボリュームを上げてきた。
バカなオッサンだ。

最初から全部聞こえてるっつーの。

が、こんなんで承知するような俺じゃない。

「あー！？　だーかーらー、聞こえねーって言うてんだろ！　お前、やる気あんのかー？　あー？　シケた声なんか出しやがって、風邪引いて扁桃腺でも腫れちゃいましたかー？　あア！？」
「きつ、貴様ア……！　私をバカにしているのかッ！？」

遠目にも、カロイドがムツとしたのがよくわかった。
俺はたたみかけるように

「帰れ帰れー！　やる気のねエヤツと喋ってもシマンねエんだよ！　誰か別のヤツ、呼んでこいや！」

生高、雲高、セッターにピース。
こういう間の抜けた俺の挑発に引っかからなかったヤツは今まで一人もいない。

案の定、カロイドたらしい魔界府のお偉いさんももれなく乗ってくれた。

「魔界府筆頭術師のこの私を愚弄しおって！ キヤナもろとも塵あくたに変えてくれるわ！ 地獄で後悔するがいい！」

怒りを露わにしていたキヤナも、さすがに苦笑している。

まさか俺が、魔界府のトップを手玉にとってコケにするとは思わなかったのだろう。

「こーちゃんてばヒドいのね。あんな言い方されたら、誰だって怒るよ？」

「そのつもりだったもの。キヤナじゃなくて、俺がやりかえしてやるから意味がある」

口のケンカなんてものは延々罵り合っていても時間の無駄。

向こうから手を出させるために挑発する、いわばボコリ合いの前哨戦と思えばいい。

そうはいつでも、最後は拳で決着をつける以上、拳に自信がないとどうしようもないんだけど。

俺がカロイドを余裕で挑発できたのは、傍にキヤナがいるからだ。った。

魔法戦に持ち込まれたところで、彼女の实力をもつてすればなんとかなるという計算がベースにあったワケで。

……ところが。

「こーちゃん、実はね……」

「ん？ 何？」

キヤナは仕方がなさそうに笑いつつアタマを掻き掻き

「あたし、まだ魔力が回復しきってないの。一昼夜、強力な魔封陣に押さえ込まれていたから……」

……はい？

今、なんと？

その29 魔界突入5（後書き）

今月中に完結予定です。

あと少しお付き合いいただけますと幸いです。

その30 魔界突入6

「どっつしええええ!! マジでマジでマジでー!?!」

「……うん、マジ」

こっくりとうなづいたキャナ。

その割にはなんだか落ち着いてるじゃねエか。

俺がそっという意味のコトを言うと

「だってこーちゃん、すごく自信たっぷりだから、何か考えがあるのかなあって……」

……やっちゃった。

お互いに頼り合ってただけですかい!

俺の作戦、ぶっちゃけ意味ねエ! いや、モロ裏目!

ためエでドツボ掘っただけのハナシじゃねエかよ。

すでにカロイドのオッサン、マジギレしてるし。いや、させちゃったし。

顔面蒼白でフリーズしていると、キャナがそつと俺にもたれかかってきて

「ま、好きにすればいいわ。こーちゃんと一緒ならあたし、地獄でもどこでも行つてやるわよ」

南の島でバカンス中、的にまったりしてやがる。

ってか、多少ふてつてるような。

あ……諦めてんの?

早すぎね?

土壇場で助かったっていうさっきまでの感動はどこへ放り投げた

！？

キャナを助けにきて間一髪で救出成功と思つたら大逆転、二人で抱き合い心中演じるハメになるとは。

あの近松（＝門左衛門）さんも絶対思いつかないようなちゃぶ台返しな筋書きだよ。

マジでシャレになつてねエ。

「魔界衆！ ヤツらを狙え！ 炎熱魔術で焼き尽くすのだ！ チリひとつも残すな」

カロイドが命令を下すなり、俺達をぐるりと取り囲んでいる魔界衆が一斉にこちらに両手を差し向けた。

……アンタさつき、塵あくたにしてやるって言わんかったか？

ま、塵にされて残ったところで困るんですけどね。

頼みのキャナがパワーダウンしている以上、もはや俺達に打つ手はない。

今度こそ万事休す！？

俺はフツーに焦ったが、キャナは「ふふん」と笑いながら俺の首に両腕を回すと

「あたし、ぜーんぜん怖くないよん。愛するこーちゃんが傍にいてくれるんだもの。……どうせなら、愛し合つたまま死ぬトコ、魔界衆に見せつけてやる？ 魔女と人間だって、こーんなに愛し合えるんだって」

「あ、あんな、キャ」

言い掛けた俺の唇は、キャナのそれによって思いつきりふさがれていた。

完全に悟りを開いた（言い直そう。開き直った、だ）彼女は俺を地面に押し倒し、激しく身体を押しつけてくる。

足を絡めてくるかと思えば口の中に舌が入ってくるし、舌を絡めてくるかと思えば激しく吸ってくる。一方で下半身は超密着。

まったくスキのないおねーさまの愛撫は、どんな麻酔よりも強烈にシビれるものがある。

大坂夏の陣における真田幸村のごとき猛烈な攻めの前に、徳川軍な俺はなすがままにされているよりなかった。なお、この例えにまったく意味などない。

「んっ……んんっ……んっ」

キヤナはもう、官能の世界に浸りきっちまってる。

……なんだこの状態は。

彼女とエッチな行為にふけたまま死んでいくのか、俺？

しかも俺達、魔界衆の連中百人以上に取り囲まれた挙げ句ガン見されてるし。

死ぬ間際に公衆面前エッチって……まだそこまで言ってないけど。男としてカッコ良くない！

ただ、気持ちが悪くないといったらウソになる。

混乱して何言ってるんだろう、俺。

しかし。

大胆きわまるキヤナの捨て鉢な愛撫は、思わぬ効果をもたらした。いきなり眼前で展開されたエロい光景に、何よりビビったのは魔界衆のヤツらだったらしい。

魔法をぶっ放すのも忘れて呆然と見とれている。

「きつ、貴様等！ 早くあの二人を処刑しないかッ！」

慌てて再度号令を発したカロイド。

が、一度度肝を抜かれてしまったからには、そう簡単に魔法に集中できるハズがない。

かの坂本龍馬も言ったものだ。

気を抜かれたヤツがそうそう人を斬れるものではない、と。こつなりやヤケだ。

俺も腹を括って開き直ると、キヤナの細い身体を両腕でぐっと抱き締めてやった。

途端に彼女はぴくんと身体を震わせ

「あんつ、こーちゃんたら……！ そんなに強く抱き締められたらあたし、本気になっちゃうよ？」

「おオ、構わないさ！ こつなりやとことん付き合っぜ！」
「言っただな？ あやまっても許したげないから！」

……俺とキヤナ、ヒートアップ。

濃厚なキスの応酬。

ほとんどやりかねない勢い。

「魔女と人間ごときが、ナメおって……！ 男女の睦みは地獄でやるがいい！」

激高したカロイド。

早口で何事か詠唱するなり、さっと両手をこちらに差し向けた。間髪を容れず、俺達を取り巻く大気が熱を帯びていく。

炎熱魔法。

さすがに、背筋がヒヤリとした。

キヤナと二人、このまま焼き殺されてしまうのだろうかと思ったが。

ドンッ！

いきなり俺達の周囲に白い半球が展開され、カロイドの放った魔

力を瞬時に弾き飛ばした。

ドームの外側で、赤く染まった魔力のカスが舞っている。

「こっ、これは……!？」

思わぬ事態にカロイドは驚きを隠さない。

ただし、ビビったのは俺も一緒である。

すつと唇を離しつつ

「キャナ!? 今のって、ナニ!? …… って、キャナ?」

「んっ……知らない。あいつがミスったんじゃないの? …… んん
っ」

おい。

興味ゼロですかっ。

命の瀬戸際だっていうのに、エロいコトしかアタマにないのかー
っ!

そうしている間にも、逆上したカロイドの魔法が俺達に向けて連
射されている。

が、そのどれも俺達には当たらない。

例の白い半球がことごとく遮断しているのだ。

これってもしかして…… シュウか?

彼が自然魔法で俺達をガードしてくれたんじゃないだろうか。

咄嗟に俺は思ったが、しかし周囲にそれらしい人物が現れた形跡
はない。

と、今度は一層激しい衝撃が!

ズドドドド、ドンッ

ようやく動揺から立ち直った魔界衆の連中、カロイドにならない俺

達目掛けて一斉猛射。

食らえば間違はなく消し飛んでいるだろうという悪意に満ちた巨大な炎のブレッシャーだったのだが……やはり俺達にはまったく影響しない。

どーいうコト……？

いい加減に撃ち疲れた魔界衆が魔法の発動を止めたその時だった。

「やれやれ。間に合わなかったかと思ってヒヤヒヤしたけど、まさか共振増幅とはねエ……」

すぐ傍から、聞き慣れた声がした。

ハッとして目を上げてみると

「……シュウ！？」

「二人とも、剛毅だねエ。処刑される対象が執行人の目の前で男女の絡み合いなんて、魔界始まって以来の珍事だよ」

呆れ返ったような表情のシュウが俺達を見下ろしている。

俺は慌ててキヤナを抱いたままぐいつと上体を起こした。

「シュウ、今の、何なんだよ？ 俺達ホント、もうダメかと思って

……」

「ダメかと思ってラブシーン、か？ そのラブシーンが、とんでもない増幅効果を生み出しちゃったんだよ。共振増幅ってヤツだ。こいつもまた、魔界始まって以来の珍事だがな……」

ぼりぼりと頭を掻いている。

ふと見ると、シュウに隠れるようにして一人の少女がじっとこっちを見ている。

「シュウさんにミナ！ 来てくれたのね？」

キャナが声をかけてやると、ミナは恥ずかしそうに顔を赤らめて

「お、お姉ちゃんってば、こんなトコで、な、何やってるのよ！
あ、あたし、びっくりしちゃった！」

キャナの格好が格好だから、余計に恥ずかしいものがあるらしい。
ミナ。

年の頃は人間に例えるなら中学生くらいだろうか。
茶色でボリリュームあるショートカットに、活き活きとした大きな
瞳をもった可愛い容貌。胸から下に白い布地を巻き、短パンみ
たいなものを穿いている。チラ見せな腹と露わな脚に清々しい色気
が漂っているが、それはどうでもよい。

彼女もまた、魔女であるという。

俺はキャナと一緒に立ち上がり

「ミナちゃん、こんにちは。風間孝四郎です」

挨拶をしたが、彼女はシュウの陰に隠れたままでいる。

警戒するようにじっと俺を注視していたが、やがて小さい声で

「……えっち」

くすくす笑っている。

一瞬嫌われたかと思ったが、そうでもなかった。
シュウが言った通り、明るくて元気なコらしい。

彼女はぴよこつと跳ねて俺の前に飛び出てくると

「お姉ちゃんから聞いてたよ。とっても強くて優しい人間のオトコ

の人なんだって。ってか、ついでにエッチな人みたいだけど、男の人はしょうがないよね。 あたし、ミナ。よろしくね?」

にっこり。

ああ、妹的な可愛さじゃねエか。

なんだって魔女にはこう、美女とか可愛いコが多いんだ。

男はみんなエッチか。

割り切りがよろしい。

そうだ。

人間世界でも魔界でも、古今東西男はすべてスケベと決まってる。

「どお、こーちゃん? カワイイでしょ? 仲良くしてあげてね。

あたし達と同じ魔女なの」

「うん、可愛いよ。シユウから聞いてたんだ。化身散開とかいうレアな魔法を使えるコだって」

「えへへ……」

褒められたミナちゃんは照れている。

「さて……と。さすがは魔界衆だ。魔界中から召集された猛者どもがゴロゴロいやがる。孝四郎君とキャナの成陣逆破効果でかなりの数が塵になったと思ったんだがな……」

周囲に居並ぶローブ姿を見回しながらばやいたシユウ。

魔界衆の連中は誰一人、魔法を放ってくる者がいない。

突然こっち側に新手が姿を現したせいか、かなり警戒しているらしい。

「誰かと思えば、貴様が、シユウ! なぜいつも魔族の味方をする

！？」

カロイドの声が届いてきた。

シュウは左手の指をそろえてメガネを押し上げつつ

「やっぱりアンタだったのか、カロイド。いつまでこつたらマネを続ける気だね？ アンタがそうだから、魔族はいつまでたつても反乱をやめないんじゃないのかい？ もういい加減、魔界人優等主義なんかヤメなさいよ。もう、この魔界中でアンタに従う連中はいいよ？」

応じた。

するとカロイドは、ハハハハと急に高笑いをしてから

「シュウとも思えぬ発言だな！ 魔界有史以来、常に動乱の中心となったのは誰でもない、魔族の連中だよ！ 魔族あるところに争いは起こり、魔族の行くところ殺し合いは起きてきた。無駄に大きな力を持った連中は危険なのだ！ 魔界人達は、そのことをよく知っている！ だからこそ、魔族は滅びねばならないのだ。そこをどけ、シュウよ！ 魔界に破滅をもたらす災いの元凶である魔族の女、そして殺戮の女神たるキヤナを今ここで殺す！ 横槍は止してもらおう。さもなくば貴様も同類として命をもらいうけるぞ、シュウ！」

「へっへっへ、随分と手前勝手なご意見をどうも。闇血のカロイド様……だったかな？」

今度はシュウが笑い出した。

「私は知ってるよ。アンタがあちこちの魔界人達を煽って魔族狩りをさせていたことも、味方のフリをして魔族に近づいては、闇に紛

れて何人も殺している事実も。だからアンタに『闇血』なんて不名誉な称号がついちまった。……違うのかい？」

「……」

「苦勞して魔界府筆頭術師の座についたようだけど、残念ながら即刻降りていただかにやらんようだぜ？ アンタ、気付かなかったのかい？」

シュウは空を指した。

釣られて見上げた途端、カロイドの顔色が変わっていた。迂闊にも、いつ現れたものやら俺も気付かなかった。

煙のようなふやふやしたどす黒いカタマリ。

でかいなんていうものじゃない。

魔界府広場を飲み込んでしまいそうな大きさ。

この見るからにおぞましい存在に、俺は見覚えがあった。

「シュウ！ これ、これって……」

「ああ、そうさ。そろそろ姿を見せてくれると思っていたんだよ。予定通り、つてトコか」

「魔神……！」

キャナが呟いた。

そう……魔神。

メイちゃんが用いた犠魂陣によって甦り、彼女の身体を乗っ取って人間世界までやってきたが、キャナによって魔界へと追い返された。

その後、魔神の存在に気付いた魔界府は捕えた魔族の少女をしてキャナとメシアに「魔神が猛威をふるって魔界が滅亡の危機にある」とウソの話を信じ込ませ、二人を魔界へとおびき寄せることに成功する。それが六月終わりの頃のことだが、実際には魔神は活動なんかしていなかった。

しかし、魔神の復活が自分達の責任だと感じたキヤナとメイアは魔界へ戻るのだが、二人を待ち受けていたのは魔神などではなく

カロイド指揮下の 魔界衆達だった。

犠魂陣を手に入れて魔力の強化をはかった魔界衆の強さは圧倒的で、キヤナとメイアは追い詰められる。

二人は逃亡の最中にシユウと出会い、事実を知ると同時に魔神の復活が単に自分達のせいだけではないと諭される。魔神が復活を遂げた背景には、もっと深い秘密が隠されていたからだ。

が、魔界に革命をもたらすシユウの研究が魔界衆によつて妨害されることを恐れたキヤナとメイアはシユウの元を去つて魔界府に戦いを挑むものの、メイアは瀕死の重傷を負い、彼女を庇ったキヤナは捕えられて処刑されそうになる。

確かに、魔神出現の引き金をひいたのはメイアだったかも知れないが、そもそも犠魂陣に手を出さざるを得ないまでに彼女達魔族を追い詰めたのは誰でもない、魔界人達だ。そして魔族殲滅主義を魔界中にはびこらせる大きな働き、というよりも陰で暗躍したをしたのはあのカロイドだという。

ちなみに、魔族と魔界人の対立はもう数千年の長きにわたつて続いてきた現実ではあるが、魔界府が同族の魔界人すらも利用し、犠牲にするようになったのはそれほど古い話じゃない。

いつだったか、魔界に戻る前にキヤナが話してくれたことがある。ずっと昔は魔界府が先頭に立つて魔族を迫害するようなことはなかったらしい。

優れた術者、魔界府八術師による魔界治世は長きにわたつて続き、古代に一度魔神が誕生して危機的な状況に陥ったことはあったものの、特に大きな争乱は起こらなかった。

が、局所的に魔界人による魔族迫害は発生し、その対立は次第に大きくなっていった。そうして魔界全体が衰退の一途をたどつていくにつれ（殺し合いばかり続けているからそうだったのだが）魔界人達は魔界府に対して大きな不信感を抱くようになった。焦りを感じ

じた魔界府では、その不満を逸らすために魔族殲滅を掲げるようになり、同時に魔界全土で魔族狩りが激しく行われるようになったという。ちょうど、キャナやメィアが生まれた頃のことだ。

……なんだかね。

そういう魔界の下劣なグダグダが、結果として魔神を生み出したように思えてならないのだが。

人間が殺戮手段の究極として地雷や毒ガス、そして核兵器をつくり出したように。

たった一つ、共通点がある。

どちらも 人の心、あるいは魂が生み出したもの。

他者を憎み恨み妬み、排除しようという一番腐った心の働きが、魔神や兵器を誕生させたのだ。

その、魔神。

未だ実体の不確かなヤツは、空中高く浮いたまま不気味にうごめいている。

その存在に気が付いた魔界衆に、一斉にどよめきが起こった。

「まっ、魔神だとオ!？」

「なぜ今、ここに……!？」

もはや、俺達を処刑するどころの騒ぎじゃない。

そんな動揺しまくりな魔界衆の連中に対し、カロイドは

「う、狼狽えるな! あんなものは、思念の集合体に過ぎん! すぐに縛封陣の用意を! 今なら容易く封印できるハズだ!」

どやしつけている。

それを聞いたシュウはカラカラと笑い出し

「バカも休み休みおっしゃい、カロイド君。相手は魔神だぜ? 縛

封陣ごときで大人しく引つ込んでくれるようなタマかい。それよか、さっさと逃げた方がいいぞ。もたもたしてたら、魂を食われちまわあ」

なだめるように声をかけたが、カロイドはじめ魔界衆達の耳には届いていないようだった。

皮肉なものだ、俺は思った。

ヤツらはキヤナとメイアをおびき寄せるために魔神が完全復活したとウソの話を持ち出した。
が。

そうしてキヤナを捕らえて処刑しようとしたところが、あろうことかその魔神が寄ってきてしまった。

なぜここに魔神が？

答えは、シュウが知っていた。

「孝四郎君。私は確か、キヤナを助けるだけでは済まない、言っただろう？」

「ああ、言っただけ」

上空でふやふや動いている黒い球体を見上げながら、頷いた俺。

「魔封陣が反動によって暴発する威力はダテじゃない。近くにいる魔界衆だの魔装兵、それに魔界人まで巻き添えになることは避けられないと思っていたんだ。そうになると、肉体を喪った大量の魂を狙って、魔神が姿を現すだろうと踏んでいたんだ。案外、魔神も素直なところがあるもんだね。まあ、犠牲になった魔界人達は哀れだが、俺達の力ではキヤナを救い出すのが精一杯さ。ここは一つ、彼等への追悼ってコトで、あの毛玉野郎を」

寄り添い合って立っている俺とキヤナへ視線を向けた。

「……抑えてくれ。今の今じゃ、消し去ることはできない。が、抑えることは可能だ」

「でも、どうやって？ 相手は魔神なのよ？ やれるものならそうしたいケド、今のあたし、魔力が十分じゃないわ……」

キヤナが不思議そうに首を傾げている。

俺も同感。

しかし、シュウは「ニツ」と不敵な笑みを見せて

「なに、ちゃんとは対抗手段は考えてある。それはねえ」

言い掛けた途端。

「なっ、なんだコレは……ぐっ、がっ、がはっ」

突然、魔界衆の一人が喉を押さえ、もんどりうって苦しみ始めた。が、ほとんど苦しんだという間もなく、そいつはばったりと倒れて動かなくなってしまった。

「お、おいっ！ お前……があっ！」

慌てて駆け寄った男もまた同じようにしてのたうち始める。

彼等だけじゃない。

二人、三人、四人……あちこちで魔界衆が次々と倒れていく。

「……！？」

「始まったぜ。奴さん、魂を食らい始めたよ。まア、食欲旺盛だこと。よっぽど、ハラ減ってたんだろうなア。……孝四郎君トコでメシ食わしてもらって良かったア」

オッサン、呑気なコメントしている場合か。

お前のハラの具合なんか知ったコトかよ。

魔神の野郎がいよいよ活動を始めたつてのに。

目を凝らしてよく見てみれば、倒れた魔界衆の身体から小さな光のようなものがすーっと魔神目掛けて飛んでいつている。それは黒い闇の中に吸い込まれていき、そのたびに球体全体が呼吸する肺のように膨らんでは元に戻ったりする。

シュウの言う通り、次々と魂を吸い上げては食らっているのだ。

「シュウさん、どうしましょう？ このままだと、あたし達も……」

心配そうに彼を見上げたミナ。

シュウはそんな彼女の頭をわしわしと撫でてやりながら

「申し訳ないが、こつから先は孝四郎君とキヤナに頼むよりない。私の手品やミナの魔力じゃ、魔神が退屈しちまうだろうからねエ」

相変わらず表情を動かさないオッサンだ。

が、今日の今日出会ったばかりとはいえ、シュウの凄さは何度も目の当たりにしている。だから、俺の胸中大した動揺はない。

魔神を抑えられるという以上、本当にできるのだろう。

信じていいと思う。

「おい、シュウ。もったいつけてねエで、さつさとその対抗手段とやらを教えやがれ。ぼやぼやしてたらあいつのエサにされちまうがな」

「だな。手短に伝えるから二人とも、よく聞いてくれ」

ヤツは両手を俺と、キヤナの肩に置いた。

その後、離れた位置ではカロイドが

「ぐううううあぁっ！　かつ、かつ、かぁぁ……」

断末魔の形相で七転八倒している。

しかし程なく、地面に倒れてそれっきりになった。

あっけない。

魔界人を扇動して魔族迫害の急先鋒となっていたカロイド。

ヤツもまた、その騒乱の果てに誕生した魔神の犠牲となって果ててしまった。

ある意味では自業自得とっていい。

魔神に食われた魂は、二度と復活することがない。

魔界を滅亡させる元凶といわれる所以。

魔界にいる魔界人や魔族の全員が魂を食われてしまえば、魔界自体復興する術は失われる。

だから、キヤナとメイアは魔神に立ち向かう決意をして俺の元から去ったワケなのだが　彼女達をハメた男は、その口実として利用した魔神によってやられてしまったということになる。

バカなヤツ。

とはいえ、もはやカロイドや魔界衆がどうとかいうレベルの騒ぎではなくなっている。

俺達の周囲では見るもおぞましい光景が展開されている。

魂を食われ、次々果てていく魔界衆達。

シウウが懷に隠している石に蓄積された自然のエネルギーが俺達をガードしてくれているようだが、それも長くは保たない。

彼はちらと頭上に一瞥をくると、恐ろしく早口になって

「私はさっき、キヤナの救出を孝四郎君に頼んでいる間、ミナにも手伝ってもらってこの付近に動障陣を無数に仕掛けておいた。……
ああ、動障陣が何かはキヤナが知っている」

「ん」

「それで次に、これを渡しておく」

「ごそごと懷をまさぐって例の氣流石、それにもう一つの石を取り出してキャナに手渡した。」

「これは……？」

「ようやくこれだけ完成したんだよ。氣流石と地恵石だ。二つしかないけど、低下したキャナの魔力の助けにやなるだろう。ただし、自然の力はでかい上に素直だからね。こっちが上手く波動の加減に合わせてやらないと、言うコトを聞いちゃいけないからな」

なるほど。

俺はちよつと納得した。

それだけのすごいアイテムがあれば何でもできるんじゃないかと思ったりしたが、実はそういう難点があったらしい。編み出したシユウ本人といえども、自然の力を自在に操れるかどうかは別の問題だったのだ。偉大な天然のエネルギーを集約することには成功したものの、イコール制御とはならないワケで。

科学と自然の關係に近いかも知れない。

「そして、これが奥の手なんだが……」

俺とキャナに代わる代わる視線を送ってきた。

妙に自信ありげな、嬉しそうな表情を浮かべている。

「孝四郎君とキャナ、二人の魂が触れ合い同じ波長が重なることで発動する『共振増幅』。これこそが魔界を救う究極の切り札になるのさ」

「共振増幅？」

「そう。詳しい話は後にするとして、具体的に言えばさっきのアレがそうだ。キヤナが孝四郎君を求め、孝四郎君がキヤナを求めたことで、二人の魂が共鳴してキヤナの魔力が飛躍的に増幅されたんだ。……だからって」

そこまで言うてからニヤリと笑ったシュウ。

「エツちなコトをすりゃいいってハナシじゃないぜ？」

「言われんでもわかってるっつーの。　　だけど、ホントに俺とキヤナの魂だけで魔神を抑えきれるだけの魔力なんて生み出せるのか？　　どうも、イマイチ自信がねエ」

「だから言っただろう？　　孝四郎君がキヤナに魂を分け与えたという行為、このことにすごく大きな価値があるんだって」

「うん、だいたいわかったよ、シュウさん」

俺が不可解な顔をしている傍で、キヤナは力強く頷いて見せた。

「今のあたし、魔神にも負ける気がしない。こーちゃんが一緒にいてくれることが、何よりも心強いコトなんだって、わかったから」

そうして、俺を見てにつこりと微笑んで見せた。

「あたしを信じて、こーちゃん。あたしはこーちゃんのコトを信じるから。さっさと魔神を黙らせて、帰ってさっきの続きしよ？」

そつと、俺の右手を握っている。

俺もまた、ぎゅっと握りかえしてやった。

ややエツちなニュアンスを含んではいるものの　　キヤナの言う通りだろう。

あの日の後悔を取り戻す戦いはまだ終わっちゃいない。

俺もまた、この女神を助けて魔神をぶちのめす使命があるんだ。

「OK。オッサン達、さっさと行きな。あとは俺とキャナで引き受ける」

「繰り返すが、オッサンじゃない。シュウと呼べ！」

「ぶ。ぶ……」

彼の傍らで、ミナが笑いを堪えている。

その31 VS魔神1

毒々しい紫色の空を走る黒い雲が速い。

見渡す限り地面は大きくえぐり取られ、あたかも荒野のような様相。下から現れた赤茶色の土に混ざって、粉碎された石畳の破片がところどころに突き刺さっている。

斜め上へと視線をやれば、前側が大きく崩壊した魔界府の建物がある。そこからさらに天空へと伸びる高い尖塔もまた魔力の暴発でダメージを受けていて、時々思い出したように石の破片が落ちてきた。あと一撃受けければ、間違いなく倒壊してしまうだろう。

すっかり荒れ果てた魔界府広場。

何よりも戦慄すべきは、魂を奪われて果てた、無数の魔界衆達の屍。その数、ゆうに百を超える。

テレビで観た戦場の光景を彷彿とさせる。

これだけ多くの死体を一度に見てしまうと、感覚がおかしくなりそうだ。

訳もわからないまま死んでいった者達。

彼等は何のために生まれ、そして生きたのだろうか？

心をもった生き物として生を受けながら、ひと握りの権力者達の都合のいいように利用され、挙げ句の果て死ななければならなかった。

そう考えると、命なんてあつけないものだ。

自ら奮い立たせ戦うことを選ばなければ、ゴミのように潰されて消えるだけ。

命の価値は地球より重たいけれど、戦わない命がぐーてんだらりとやっついていけるほど現実には甘くない。

誰かが言った。生きることが戦うこと。戦い続けることが生きること。

このことはきっと、人間世界でも魔界でも変わらない真実だと思

う。

俺は嫌だった。

誰かの言いなりなんて、まっぴらゴメンだった。

だから、戦ってきた。俺が俺であり続けるために。

キヤナとかメイアの壮絶な生き様レベルに比べればちっぽけかも知れないけど、それは決して比較対象するものじゃないと思う。

戦うヤツは、決して負けたりしない。

実力差が大きかったりすれば、結果として消えていかなくちやならないこともある。

でも、立ち向かった、っていうそいつの勇気の跡は絶対に消えたりしない。

勇気。

その命、もしくは魂を華々しく飾る、称号のようなもの。

魔界人達は、自分や大切なものを守るために勇気を出して戦うことをしなかった。つまり、臆病。臆病というのは、単に心が弱いとかいう問題じゃない。タチが悪いことに、弱い心＝臆病は自分を蝕み、臆病に蝕まれた自分はやがて他者を妬み、憎み、恨み始める。

魔界人達の臆病はやがて魔神というろくでもない象徴として具現化し、ついには逆に魔界人達を食いはじめてしまった。

俺とキヤナは、今からそのクソ野郎に戦いを挑もうとしている。

シュウとミナちゃんはいさつき退避済み。

今、生きてこの場に立っているのは俺とキヤナの二人しかない。

「ねえ、こーちゃん」

「あん？」

「怖い？」

妙な質問をしてきたキヤナ。

「怖いな」

一言だけで答えてやると、彼女はくすりと笑って

「やっぱり？」

「でも、あの化け物にビビってるワケじゃねエ。あいつを生み出した魔界人の心みたいにな、薄汚いものが俺にもあるのかと思うと怖い気がするってこった。そのせいで俺は」

見上げた。

さんざん魂を食らった魔神は、空中に浮いたまま沈黙している。もやもやが小さくなって輪郭がはっきりしてきたようだ。

「あの時、キヤナを悲しませちゃった。あれから俺、メシも食えないくらいすぐエ後悔した。なんで俺、あんな風に思ってたんだろうって。なんで俺、キヤナにあんなコト言っちゃったんだろうって。何度考えてみても自分で自分の心の動きがわからなかった。だから、怖いっていうのさ。……そんなのって普段は目に見えないけど、あやって」

魔神をあごでしゃくった。

「わかりやすい形で見せつけられたら、ちょっとビビる。俺、強がっていたけどホントは何にも強くない、ただの臆病な」
「そうじゃないよ？ こーちゃんは、間違ってるじゃないよ？」

キヤナはきっぱりと言い切った。

「あの時のコトは、あたしとメイアのせい。最初からちゃんとこーちゃんに相談していれば、こんな風にはならなかったと思うの。だから、もつくよくよ考えないで。……あの時は本当にごめんね？」

俺の右手を握りしめている彼女の手に、力がこもった。

「あたしもね、後悔した。捕まって魔封鎖で縛られて身動きできなくなっただけ。どうしてこーちゃんと離れるような真似、したんだろって。バカだったなあって、すごく悲しくなった。もしも今日の前にこーちゃんがいたら、絶対にごめんねって謝るのに、って」

「……………」
「それでもう殺されるって時になって、いきなりこーちゃんの姿が見えたからびつくりした。あたし、夢でも見てるのかと思った。で、こーちゃんってば鬼みたいな顔してこっちに駆け寄ってこようとしてたから、何だか、もう……………」

さっきのワンシーンを思い出したらしい。

またポロポロと涙をこぼしている。
が、すぐに笑って見せて

「あたし、思ったの。時間を戻すことは魔法を使ってもできないけど、二度と同じ失敗をしなければいいのよ。愛し合っているなら、どんなコトがあっても離れちゃいけないの。どんな時だって一緒にいて、一緒に立ち向かえば何とかできるのよ。　　違うかしら？」
「……………だな。俺もそう思う」

さっきは冷たかったキャナの手に、温もりが戻りつつある。

心の落ち着きが、肉体にも影響してきているのかも知れない。

彼女が言う通りだ。

過去には戻れない。

戻れないけど、失敗を反省して二度と繰り返さないことは、過去に戻るよりもずっと大事なコト。

そっぴろ自分って、過去の自分よりも成長した自分だから。

「さて、と。今はあいつを倒すことは難しいって、シュウが言ってたな。つーことは、しばらくの間動けないようにしとけてコトか？」

「そーそー。動障陣っていうのはね、魔力の膜を張り巡らせて動きを封じるための魔力固定陣なの。シュウさん、かなりしつこく仕掛けてくれたみたいだから、重ねて発動させれば多少の足止めにはなるでしょうね。ただ、長持ちはしれないと思う。内側から蓄積された魔力が」

ドンッ

いきなり、目の前で白い光が散った。

魔力と魔力の衝突。

「早速ちよっかい出してきやがったわね。……いいこと、こーちゃん？ 本当の魔法戦っていうのは、走って避けられやしないわ。全部、防壁で防ぐか転移でかわすしかない。だから、しっかりあたしにつかまっついて頂戴。いいわね？」

「了解。何も言わずに従うよ」

「それから……」

ちよつと含みのある笑みを浮かべて俺を見た。

「ヘンなトコに触られたらあたし、魔法に集中できなくなるからね？ そういうのは、あいつを沈めてからゆっくりね？ どうしても触りたいっていうなら、それも構わないケド」

「……気を付けるよ。命にかかわりそうだしな」

さっきのはまぐれだと思った方がいいだろう。

共振増幅だが高んだか知らないが、エッチな行為ごときで無敵になれるんなら、この世界は果てしなくナメている。

魔神の表面が、急に激しく波打ち出した。

あちこちから触手のような突起が突き出では引っ込んでいく、ということを繰り返している。

「どうやらその気になったみたいね。魔神、あたし達に狙いを定めたみたいよ」

キツと表情を引き締めたキャナ。

魔女モードの彼女、凜々しくてカッコいい。

「そんじゃ……」

俺達はどちらからともなく腕を伸ばし、お互いに抱きかかえ合うように密着した。

と、魔神全体が激しく発光した。

その時にはもう、俺達は転移して今いた場所から離れている。間髪を容れず、発破をかけたように飛び散る土や石畳の破片。

魔神の放った黒い弾丸が炸裂したのだ。

戦いの火蓋は切って落とされた。

「こーちゃん！ あたしね！」

義経八艘飛びな感じで、近域転移を連続で発動させていくキャナ。相手はあの魔神。

さんざんに魂を食らって膨張したヤツの魔力を食らっては、ひとたまりもない。

だから、小刻みな動きで翻弄してやるつもりらしい。

彼女は何を思ったか、いきなり叫んだ。

「なんだア！？　どーしたよ！？」

「あたし、こーちゃんの焼きうどんが食べたい！　あと、人間世界の海が見たいの！」

こんな時に何かと思えば。

化け物相手に必死になるのも癪だと思ったのかも知れない。
誇り高いキヤナは、キヤナりの余裕を見せたいのだろう。

俺もまた、魔法にかけては全面的に彼女を信頼しているから

「じゃあ、アレだ！　海に行つて、海を見ながら焼きうどんを
うおっ！？」

シウが用意してくれたフォローが幾つかあるから、と思つて多
少余裕に構えていたのだが　半分以上完全化した魔神の力、ハン
パない。

キヤナ、近域転移でかわしていくのが精一杯。

俺達が飛び退つたコンマ数秒後、その場所が瞬時にごっそりなく
なつていく。

持つて行かれてるんじゃないくて、巨大なエネルギーで地面が押し
潰されているのだ。

食らつたが最後、俺達は跡形もなくスプラッタに飛び散つてそれ
までだろう。

「くっ！　こんのオ……！」

歯を食いしばり、必死に転移魔術を展開していくキヤナ。
魔力の回復が十分じゃないから、かなりキツイようだ。

「気流石は！？　自然魔力、発動しねエのか！？」

「わかんないよオ！　少なくとも、ウンともすんともいつてないコトは確か！」

なんだとオ！？

シュウのオッサン、不良品を寄越していったんじゃないだろうな。が、今はあのオヤジに文句を言っけていても仕方がない。俺に、俺に何かできるコトはないのか！？

つつても俺、魔法なんか　使えねエ。

魔族でも魔界人でもない以上、魔法戦に手の出しようがない。ところが。

迷っているうちにずどーんとでかいのが一発きた。

巨大な黒弾が俺達の頭上へ見る見る迫り来る。

「ちよっ！　間に合わ……ない……かも……！」

悲痛な声を上げたキヤナ。

やばい！

脳裏にちらと「死」の文字が過ぎった。

冗談じゃねエ。

あんな満足に人の形もしてない化け物に殺されるなんて、俺のプライドが許さん。

その時だった。

「…………お？」

キヤナの胸元に、キラリと小さな光が。

地恵石。

シュウから受け取ったあと、巻き付けたシートと身体の間挟んであったのか。

胸の谷間のあたりってのはちと困ったものだけど。

咄嗟に

「キヤナっ！ それ、借りるぞ！」

「ああんっ！ こーちゃんってばっ！」

えらく色っぽい声を出したキヤナ。

どさくさで手をつ突っ込んだせいで、思いっきり胸に触ってしまったからだ。ってか、こんなトキになんちゅー声を出しやがるんだ。ケド、今はそれどころの騒ぎじゃない。

俺は手に取った地恵石を無我夢中で天にかざし

「頼むって！ 俺達を、護りやがれエ！」

ありつただけの気合いと念を込めて叫んでいた。

同時に、一緒に夕焼けを眺めたあの日のキヤナの横顔が脳裏をかすめた瞬間……奇跡はやってきた。

俺の手の平から美しいクリアグリーンの光が溢れ出し、さあっと面になって広がっていく。

初夏の草原のような、目に優しい緑色のフィールド。

俺達を押し潰そうと上から降ってきた黒い巨弾は、それに弾かれて大きく軌道を狂わせた。

そのままボールが跳ねるようにして近くに落っこち、地面に大穴を開けたが その時にはもう、俺達は転移してがっちり間合いをとっている。

「……ほえ？」

何が起こったのかわからないって顔をしているキヤナ。

「はあっ、はあっ……」

俺は片手を天に突き出したまま、肩で荒く息をしている。
死ぬかと思った。

誰だって、あさま山荘をぶっ壊したあの鉄球が目の前に迫ってきたらそう思うだろう。

正直、成算は少しもなかった。

よくまあ地恵石　すなわち、大地の力　は、俺の叫びに応えてくれたものだ。

「こーちゃん？　もしかして今、魔神の魔力を防いでくれた……の？」

「あ、あア。なんとか、な……」

声にならない声で返事をする、途端にキヤナは子供のように満面の笑みで

「きゃーっ！　こーちゃん、すごい！　えらい！　あたし、カンドー！　魔神の攻撃を防ぐなんて、ステキすぎるよお！　もぉー、愛しちゃう！」

「あっ！　こら！　キヤナ　」

無邪気に抱きついてきやがった。
慌てて止めたが、間に合わない。
なんでって。

はらり。

「あ……！」

俺のせいで、胸に巻いていたシートが緩んでいたのだが……がば

つと抱きついてきた途端に、それはお約束的に外れてしまった。

キヤナのフルヌード、解放。

普通ならここで「キヤーツ」なことになるだろう。

が、彼女は別に慌てる様子もなく

「あれ？ とれちった。……ま、いや。むふふ、こーちゃんにこほうび。特別大サービスね」

笑っている。

ハダカを晒しても気にしないってのは、女性のたしなみとしていかなものかと思うが……。

ただ、俺は気付いてしまった。

全体的に、肉がすっかり落ちている。

スレンダーといえは聞こえはいいが、元々彼女はスレンダー。

だから、今の状態は「やせこけている」という表現の方があっている。

「キヤナ、お前……」

絶句していると、

「やん、こーちゃんったら！ あたしのハダカ見てムラツときちやったんでしょ？ あとでいくらでも触っていいから、今は見るだけに」

「……バカ」

思わず、抱き締めてしまった。

説明されなくたってわかる。

この五ヶ月近くに及ぶ、彼女の壮絶な苦勞が。

さつきは感動の対面だったから気付かなかったけど、あらためて

目にしたら、かなり痛々しいじゃないかよ。

直視するに耐えない。

ムラツとくる前にほろつときた。

いきなり抱きつかれたキヤナはきょとんとしていたが、俺の涙に気がついたらしく

「……ありがと。こーちゃんに心配してもらえてあたし、すごく嬉しい。生きててよかった」

俺の背と頭に両腕を回してきた。

すごく力がこもっている。

姉ちゃんが弟をいたわるように、何度も「よしよし」ってやっているキヤナ。

もうこれ以上、彼女をやせさせるワケにはいかない。

心の中にそういう思いがふつふつと湧いてきた、その時。

ズドン……

魔神からの、強烈な一撃が降ってきた。

だけど俺達には影響しない。

今度は晴れ渡った空のような澄み切ったクリアブルーの半球が俺達を包み込み、凶弾をあつさり遮断してくれたのだ。

その力がどこから開放されたものなのかはすぐにわかった。

キヤナが片手に握り締めていた、気流石。

地恵石は大地だから緑。気流石は大気を源としているから青というワケだ。

ようやく、彼女の思いに応えるつもりになってくれたのだろうか。

「ちつくしょー。案外しつこいわ、アイツ。近域転移だけじゃかわしきれないや」

俺の頬に額をくっつけたままばやいている。

魔封陣の後遺症は思っていたよりも根が深く、予想以上に魔力を発揮できていないのだ。

だが。

「なに、慌てるこたアねエよ。シュウの研究成果は伊達じゃねエ。

……今の、見たか？」

「うん」

「気流石だよ。そいつに込められた大気の力が、俺達の何かが引き金になって発動されたんだ。自然魔力の力なら、魔神の魔力すら防げるコトがわかった。何とかかなりそうだぜ？」

あたしのハダカのせいかな？

キャナがぼそりと呟いたが、俺はそのコメントを拾えなかった。早くも飛んできた黒弾を懸命に防いでいたからだ。

幸いなことに今度も地恵石は機能してくれた。

が！

「……くっ！ あんにやる、しつこく押し込んできやがる！」

黒弾は弾かれることなく、緑の壁に吸い付いて離れない。

それがぐいぐいと、とんでもない力で押してくる。

俺は両手でもって支えようとしたが、機械仕掛けの壁を支えているようで明らかに力負けしている。

手首と肘の関節が悲鳴を上げている。

いかんせん、俺そのものに魔力はない。

だから、形ばかり自然魔力を駆使してみてもダメだということなのか。

するとキャナがくるっと俺の懷で反転して同じ方向を向いた。

すつと片手を差し出すなり

ドムッ

目も眩むような白と緑のフラッシュ。

ど真ん中を撃ち抜かれた巨大な黒弾は魔力を留めておけず四散して消滅した。

地恵石＋気流石が放つエネルギーはやはり超強力だった。

「なるほどねエ……」

キヤナは顔色も変えていない。

細い腕を引っ詰めつつ

「確かにすごいんだけど　それも何だが、つまんないのよねえ……」

「はあ！？　ナニ言ってるんだよ！？　つまるとかつまらねエとかほざいてる場合じゃねーだろ！　氣イ抜いたらぐっちゃぐちゃにされちまうんだぞ！」

「だって、あたしのチカラじゃないんだもん」

ただこねてる場合かよ。

「あのな。今やりあってるのは、あの魔神だぞ？　自分の力だろーが何だろーが、とにかく何でもいいから使えるものは使ってやらないと、こっちがやられてしま……」

言っている傍から、今度は四つの青い光の玉が出現し、俺達を取り囲むように点滅している。

面白くなさそうな顔をしていたキヤナだったが、それらを目にす

るなり急に慌てふためき

「……方囲内裂う！？ まあずつ！ あのケダマ、ホントム力つく
！」

キレイ気味に文句をたれつつ、がっとなの身体を抱き寄せた。
と、次の瞬間、俺の視界から魔神の姿が消えていた。

その32 VS魔神2

「……あえ？　ここ、どこ？」

俺が発するべき台詞を、何故かキヤナが口にした。

魔神の姿を見失ったと思ったら、俺達はまったく違う場所にいたのだ。

石畳の広い通り、両側に立ち並ぶ背の低い建物の群れ。

そして……大勢の人々。

彼等は一様に同じ方向を向いて何かを見ていたらしいが、突然現れた俺達を目にするなり

「わっ！　何だ！？」

驚いている若者がいるかと思えば

「術者様じゃ。このような下々のところへおいでになるとは……」

ぶつぶつ言っている老婆がいる。

彼等は皆、魔界衆でも魔装兵でもない。

フツーの魔界人達。

大人も子供も男も女もいる。

どうやら俺とキヤナ　魔界府広場からすっ飛び、魔都のどこかへ転移してしまったようだ。

よりによって街のど真ん中。

「キヤナ？　これ、どーいうコト？」

訊いてみると、彼女は首を傾げて「うーん」と考えてから

「……どうも、自然魔力がヘンな働き方をしたっぽい。あたし、近域転移しか使ってないもん。きつと自然魔力があたしの魔力と反発し合ってベクトルが狂って、想定外の地点に現出してしまったのよ」

自然魔力とキャナの魔力が反発しあつた？

そんなバカな。

と、言い掛けて、俺はシュウの言葉を思い出していた。

自然の力はでかい上に素直だからね。こっちが上手く波動の加減に合わせてやらないと、言うコトを聞いちゃいけないからな。

そっか。

さつきキャナは気流石の魔力によつて魔障防壁を使ったあと「つまらない」的なコトを口にしていた。

そういう気分が、気流石に込められた大気の波長とのずれを呼んだのかも知れない。

まあ、魔神が放った危険な魔法をかわすので手一杯だったから、これだけ派手に間合いを開けられたのは決してマイナスでもないよな気がするケド。

「それにしても」

俺は周囲の人々を観察しながら言った。

「どうやら広域催眠が解除されてるみたいだな。さつきはみんな、何かに取り付かれたみたいにくそつて魔界府広場に向かって歩いていったってのに」

「そうね。たぶん、術者のカロイドが死んだからでしょ？ 正気に返つてみたら魔界府の方の様子が変だから騒いでいるのよ。平凡な

魔界人だって僅かでも魔力がそなわっているから、魔神の異常な気配を感じ取ることが出来るもの。おっつけその魔神がここへくるだろうから、さっさと逃げればいいのに」

と、キヤナは冷めた目で人々を見ているようだ。

確かに、あの魔神なら俺達を追ってくるに違いない。相当しつこいヤツだったし。

そうなればここにいる無関係の魔界人だって巻き込まれかねない。万年空腹バカの魔神がやってくれば、たちまち魂を取り上げて食ってしまうだろう。

「じゃあ、逃げるように言ってやった方が」

俺は言いかけた。

特に、どういう深い考えがあったワケじゃない。ちょうど、その時だった。

俺達の近くにいた、一人の身なりの貧しい若者がキヤナを指して叫んだ。

「そつ、そこにいるの……ま、魔女だろっ！？ お前、魔族だな！？」

「そーだけど？」

キヤナがあっさり認めた途端、魔界人達がわさわさと集まってきた。

「魔族だとオ！？ あの女か！」

「どいつだ！？ 魔女なんて、魔界を滅亡に導く悪魔だろうっ！」

俺とキヤナの周りには、あっという間にものすごい人ばかり。

都心の繁華街で、お忍びで来ていた人気アイドルの正体がばれたような騒ぎだ。

皆、色めきたっている。

「殺せ殺せ！ 八つ裂きにしてしまえ！」

「いや、焼き殺せ！ 魔女なんか、苦しみながら死ねばいい！」

ぶっ殺すくらいの勢いで口々にキヤナを罵り始めたが、傍まで詰め寄ってくる者は誰一人としていない。

俺は一瞬焦ったものの、遠巻きに悪口雑言を投げつけてくるだけの魔界人達を見ていたら理解できた。

連中、内心では魔族をかなり恐れているようだ。素晴らしいヘタレっぷり。

俺は魔界という世界の片鱗を垣間見たような気がした。

で、群衆に取り囲まれている、その魔族の美しいおねーさまだが

「……キヤナ？ ……お、おい！ キヤナ！」

彼女に視線をやった俺は、思いつき慌てた。

キヤナのヤツ、身体に巻いていたシャツが外れて素っ裸のままだった。

群衆に冷たく一瞥をくれてやりつつ、隠す素振りも見せない。

全裸で大衆の前に堂々と立ちただかる美女。ある意味豪快すぎる。

俺は急いで隠してやろうと思ってからハッとなった。

シャツがない。

転移する前の場所に落としてきてしまったらしい。

「うわあああ……」

大あわてで上着を脱ぐと、肩からかけてやった。

下の大事なところが隠れそうもないが、マッパよりはマシだろう。つてか、逆にエロさ倍増かもしれないケド……。

が、俺の努力もむなしく、当のキヤナは袖を通すでもなく前を閉めようともしない。

身体を斜めに開いて立ち、魔界人達と対峙したまま動かずにいる。一触即発な空気が流れるその真ん中で、俺一人あたふたしていて売れないピン芸人状態。

そのうち、RPGによくある武器屋風な、恰幅のいいオッサンが前に進み出てきて

「……お前、処刑される筈だったキヤナ・ルーフェルだな!？」

鬼の首でも獲ったかのように勝ち誇って言った。

なぜ勝ち誇っていたのかはよくわからない。

対するキヤナ、冷然とした面つきで「フン」と鼻を鳴らしてから

「だったら何？ あたし、あんたらに名乗らなきゃいけない筋合いはないのよね」

傲然と言い放った。

すると武器屋（武器屋を営んでいるという証拠はどこにもないが）

「数千人もの我らが同族たる魔界人を殺しておきながら、よくも済ました顔なんかできるものだな！ お前のようなヤツがいるから、いつまで経っても魔界に平和がこないんだろうが！」

そうだそうだ！

何人かが尻馬に乗ってわめいている。

こういう場面、テレビで観たような記憶がある。

デモとかやっている世界の国のどこかだったような気が
ぼへっと考えていると、俺の近くにいたオバンが

「……その男は人間でしょ！？ 何で人間が魔界にいるのよ！」

おおっと。

今度は俺ですか。

オバンの声に、隣の若い女がすかさず

「何ですって？ あの下等な人間のこと！？ やだ、神聖な魔界が
けがれちゃうじゃない！ 早く出ていきなさいよ！」

激しく手を振るというややオーバーアクションを交えて叫んだ。
下等とはごあいさつだな。

「殺せ！ 魔界の敵、キヤナを殺せ！」

「人間は出て行け！ ケモノ以下の分際で、魔界に来るな！」

たちまち巻き起こった猛烈なシュプレヒコール。

魔界にもあったのか。

俺は腹も立てずに感心しながら、狂える群集を眺めている。

キヤナが何か言い返すかと思っただ、彼女はただ「ふうっ」と呆
れたように溜息をついただけだった。

代わりに、俺に真剣な眼差しを向けて

「……こーちゃん、よく見ておいて。これが魔界の連中よ。あたし
が魔神を討つために戻ってきたのはこいつらのためじゃない。こい
つらが滅びようとするうと知ったコトじゃないわ。魔神が魔界
を滅ぼしたあと、こーちゃんのいる人間世界を浸食していかないよ

うに、って思っただけ。わかってくれるよね？」

黙って頷いた俺。

マジで魔界人、ヘコい。

誰かに矛先を向けることで自分らに危害が及ばないように、って
いうクソツタレな根性がひしひしと伝わってくる。

人間の世界にも、かつてはこういうことがあった。

中世の魔女狩りとか、戦争中に反戦をとねえる人を弾圧したりと
か。

いつだってそうだ。

犠牲になるのは罪もない人ばかり。

そういうことを仕掛けるヤツは十分クソツタレだが、それに気付
いていながら同調する大衆もまたとんでもないクソツタレ。臆病風
に吹かれた大衆が百人集まれば、そこではどんな正義も通らない。
勇気を出して正義を叫んだ人が血祭りに上がるだけ。

クソツタレの原理は人間世界も魔界も変わらないようだ。

ただ、一つだけ人間が魔界人より優れている点がなくもない。

魔界人は言う。

人間は下等だ、と。

笑わせてくれる。

「……おい！ 聞けや、バカども」

大袈裟に腕を水平に振ってやると、途端に群集は罵声を引っ込め
た。

アニメや映画でよくある、演説をする独裁者アクション。

面白いほど効果があったが、それはどうでもいい。

「俺達人間の世界もずっと争いが絶えなかった。だけど、二千年経
って争いは終わって、未だかつてない繁栄の時代を築くことができ

た。俺もその時代に暮らしているから、繁栄がどういうものかは多少知っていると思っている」

「……」

俺が突然文明論的な演説を始めたものだから魔界人達、何事かといった顔で沈黙している。

ここぞとばかりに俺は声を張り上げ

「 だけどお前ら、魔界が誕生してウン千年も経つてのに、まだコレか？ こつたらボロくせエ家に住んで、そんなこきたない格好しやがって。人間を下等呼ばわりする前になア、てめーらの方がゴミだろーがよ！ 殺し合いしかしらねエようなクソ野郎どもが、いつちよまえに人間様を見下してンじゃねエよ！」

言っちまった。

ホントはこんなコト、言うつもりなかった。

だけどこいつら、あんまりにも ヘタレすぎ。

キヤナが言うように、とてもじゃないが救えねエ。

人間も十分バカだったが、魔界人と違って人間は同じ過ちを繰り返さないための工夫と努力をした。

だから、二千年（紀元前を含めりゃもうちょっと長いが）で、大発展を遂げることができた。

が、魔界はそうじゃない。

人間よりも長生きで人間よりも長い歴史があつて、しかも魔法なんていうぶつとびなスキルをもってるってのに、未だに人間以下の文化レベルと生活水準。

それもこれも、誰かを目の敵にして殺し合いすることしか考えてないから、いつまで経っても先に向かつて進むことができないのだ。シュウやキヤナの目に映った魔界の実態は本当だった。

二人はそんな魔界に変革を起こそうとしてカラダ張ってるが、こ

のままじゃどうもならんだろう。

この魔都に暮らす魔界人どもの腐れた目ん玉を覚まさせてやらないことには。

さつきから思っていたけど、どの魔界人も目がおかしい。

狂気に満ちている、といえば思想的なニュアンスが漂ってくるけど、そこまでの格調はない。

強いていえば「病んでいる」という表現の方が適っている。

イツてる、ではない。

病んでいる。

光がなくて濁っていて、死んだ魚みたいなの……いや、それは魚に失礼だ。

魚だって、自分達の身を守るために工夫するし、協力しあったりする。

その魚以下の魔界人達、数秒ばかり沈黙してから再び

「……この人間め！ 何を生意気な！」

「魔界人をバカにしゃがったな！ お前も魔女と一緒に殺してやる！」

さつきの調子でわめきはじめた。

ダメだこりゃ。

火に油、どころかダイナマイトを放り込んだようなものだ。そつとキヤナの方を見やると、仕方なさそうな笑みを返してきた。言ってわかる人たちじゃないのよ、そういうニュアンス。

と、人だかりの中から一人の若者が歩み寄ってきた。

そこら中の人々よりは多少いい身なりをしている。魔界衆が身につけていたあのローブが、上下に分かれてカスタム化されたようなデザイン。

心もちキツネ目でちよつとキザっぽい顔立ちの彼　キタキツネならぬキザキツネ　は、野卑な笑いを浮かべながら

「みんな、少しは落ち着いて。あとは魔界府術者衆次席見習いの僕が、責任をもってこいつらを魔界府に引渡しますから。低俗な魔女と下品な人間相手に感情的になっちゃ、大人げないってものですよ？ 君達も、魔界府に楯突こうなんて恐れ多いことはやめたまえ。さあ、ここは大人しく」

手を伸ばし、キヤナの腕をつかもうとした。

彼女はその手を避けるようにさっと後退りしかけたが、それよりほんの一瞬だけ早かった。

俺のキレル方が。

「低俗で下品なのは」

キザキツネはもう、すぐそこにいる。

ダンッ！ と一歩踏み出すだけでよかった。

「てめエだア！！」

「べ」

怒りの神速鉄拳。

声を上げる間も与えなかった。

右頬を突き破るくらい左頬を陥没させながら、ひよろいキザキツネの身体は人だかり目掛けて吹っ飛んでいった。

ヤツを受け止めきれなかった魔界人達が雪崩を打って倒れていく。

「……ふん」

俺はキヤナを庇うように立ち位置を変えた。

固めた拳をバキバキ言わせつつ、俺達を取り囲んでいる群集にガ

ンを飛ばしながら

「キヤナにきたねエ手を触れんじゃねエ、ボケ。ケンカやりたきゃ、最初から言やアいいじゃねエか。……拳のボコり合いにやア、魔界も人間も関係ねエんだからなア」

ヤバイ。

なんか俺……血が騒いでる！

加奈子ちゃんと出会って以来、神速鉄拳は固く封印してきたのだが、どうやら フラストレーションたまりまくりになっていたっぽい。

あ。

さっき魔装兵を何人かぶちのめしてたっけ。

「……」

ケンカ上等オーラ全開の俺に、魔界人達は呆気にとられている。乱闘を知らない進学校の新入生達が乱闘現場にかち合っちゃった、的に固まっている。

もしかしてこいつら、マジで拳の語り合いを知らないのか？
どいつもこいつも、片目のあたりにスダレを降ろしてドン引きしてやがる。

ただし、俺の背後ではキヤナが胸の前で両手を組んで

「こーちゃん……カッコいい……ステキ！」

熱っぽい視線を俺の背中にぐさぐさと突き刺していた。
少しの間、この場のフリーズは続いた。
やがて

「……い、言ってくれるじゃねえか！ 人間のクセに！」

武器屋が呻くように声をもらした。

そうしてそのふっといゲジ眉をVの字にしたかと思うと

「よ、よーし！ それなら、たたつ殺してやろうじゃねえか！ 魔界人をバカにした以上、生かしちやおかねえからな！」

叫んだ。

するとヤツに呼応して何人かの男達が

「お、おうっ！ 人間にナメられたとあっちゃ、魔界の恥だ。そうだろう！？」

「そうだ！ 魔界府に突き出すまでもない、この場で殺してやる！」

氣勢を上げている。

誰かが言い出さなきゃ何もできんのか。

ムサイ面つきのままの俺。

この程度のボコり合いなら日常ちゃめしゴト、いや茶飯事だ。

拳が疼いている俺は口元でニヤリと笑いながら

「上等じゃねえか、クソども。イーペーコーの神速鉄拳風間孝四郎、相手になってやるわ。老若男女は関係ねえ。まとめてかかってこいや」

啖呵を切ってやった。

相手が大勢だろうと、ビビってはいけない。

人数がまとまっている時ほど、誰かを頼んで腰が引けてしまうものなのだ。死ぬまで戦ってやるって気合を身体中にみなぎらせてやれば、例えば味方が自分一人だろうと相手は怖気づいてしまうのである。

る。

案の定、気を吞まれて動けないヘタレ市民。

口では威勢のいいコトばかり抜かしていたが、いざとなれば戦う度胸はないらしい。

ペースはもう、俺の方にある。

すると、流れに追い風を呼ぶように魔界の一匹オオカミ・キャナも俺の隣に並んで

「こーちゃん一人をやらせはしないわ。あんた達は魔界衆じゃないケド、こーちゃんに手を出すってんなら容赦はしないから。このあたしが一人残らずチリにしてやるから、覚悟なさい」

キリッ。

シリアスなキャナ、すごくカッコいい。

素っ裸でなけりやもつとシマってたに違いないが……。

「う……お、お前らア……！」

武器屋のオヤジ、たらりと額に汗。

「どうあっても、魔都と魔界人を滅亡に追い込もうって魂胆なんだな……？」

魔女の殺気を浴びているせいか、すっかりビビってしまつて声がかすれている。

キャナはかぶりをふると、静かな調子で

「誰も、皆殺しなんか望んじやないわ。あたしも魔族も。自分と、大事な人に手を出されるのを黙って見ていられないだけよ。……力ン違いしないで」

「う、うそつけ！ この魔女め！」

突然、叫んだヤツがいる。

さっきのオバンの傍にいた、小さな少年だった。

彼は小さいながらも、らんと目をいからせて

「ボクのとーちゃんを殺したくせに！ とーちゃんは、魔界府にお勤めできることになったって、喜んでたんだ！ それなのに、それなのに、魔族のヤツらが……！」

少年の声は泣いていた。

が、彼は気丈にも拳で涙を拭うなり、手にしていた棒切れを振りかざした。

「魔族なんか、みんな死んでしまえ！ とーちゃんのカタキだっ！」

俺達目掛けて駆けて来た。

「やめなさい！ ヴアルノ！」

オバンが叫んだが、もう遅い。

俺は一瞬、躊躇わずにいられなかった。

誰であろうとぶつ飛ばす的宣言をしたものの……あんな小さな少年に神速鉄拳は振るえない。

自分と、仲間を守るためだけに振るってきた拳。

見境がなくなってしまうたら、この拳は汚れてしまう。

だけど 今の俺は、キャナを守る使命がある。

とするならば、やはり相手が誰であろうと戦うことに間違いはないのだろうか。

そんな俺の逡巡を読んだかのように、キャナがずっと右手を上げ

た。

あのガキに、魔法を使うつもりらしい。
殺す気が……！？

「キヤ、キヤナ」

思わず呼びかけた、その時。
ヴアルノとかいうガキの動きが止まった。
間髪をおいて、彼は棒切れを手からコトリと落とすなり

「……つかああああっ！」

両手でノドを押さえ、苦しみ始めた。

「……！？」

一瞬、何が起ったのかわからず呆然とした俺。
すぐ傍では、やはりキヤナも顔色を変えていた。
彼女の魔法のせいじゃない。

もしかして！

思った途端、その予想は不幸にも的中し始めた。

「つぎやああああああっ！」

「くうううううあっ！」

あちこちで一人、また一人ともんどり打ち始めたのだ。
見る間に群集はバタバタと倒れていく。

恐怖に顔を引きつらせて逃げ出そうとする者も大勢いたが、数歩
もいかないうちに倒れ伏し

「……がつ！」

苦悶に顔を歪めたかと思うと、がっくりと力尽きて動かなくなってしまう。

毒ガスによる大量虐殺さながらの光景。

「キャナ！ 魔神の野郎、ここまできやがったのか！？」

「そうみたいね。みんな、もたもたしているから魂を食われてしまったじゃない」

口調こそ冷静だが、彼女の相貌には怒りが滲み出ている。

何だかんだと歯向かつてはいたものの、キャナはやっぱり……自分から魔界人を手につけたりはしなかった。

「魔神か！ あんにやるー、思ったよりも早いじゃねエか」

罵りつつ上を見上げてみた。

が、どこにもあの真っ黒い毛玉のカタマリのような姿はない。きよろきよろやっていると、

「こーちゃん、上じゃないわよ。……あれ。あれを見て」

キャナがあごをしゃくった。

その方向へ視線を走らせると 石畳を累々と埋め尽くした魔界人達の死骸の向こう、ゆっくりとこちらへ歩み寄ってくる人影がある。

距離があつたから最初はよく見えなかったものの、目を凝らしてみると、それは一人の女性だった。

ほっそりとした体つきに、しゅっと面長の顔。

どこかの鉄道アニメのヒロインよろしく、腰下まで伸びた長い髪

の毛が背後でゆったり揺れている。ついでに、ラインの細さに不釣合いな爆乳も上下に揺れたりしているが、それはどうでもいい。

すごい美女。

ただし、一糸まとわぬスッポンポン。

そんな女性が、行く手に横たわる死体には目もくれずに歩いてくるといふのは、異様以外のなんでもない。ごくまれにそういうホラー映画かSF映画があったかも知れないけど、タイトルが思い出せない。

「なんだあいつ？　もしかして、あれが」

「そうよ。とうとう、完全化しやがったわね」

キヤナが呻くように言った。

「……魔神。無数の魂を食らって人の形を得たのよ。こりゃ、厄介なコトになったかもね」

その33 VS 魔神3

「なア、キャナ。魔神って、実はオンナだったのか？」

「ぶーっ。オトコでもオンナでもないよ。最初の頃にかじったメイアの魂のせいでしょうね。彼女の魂の中に残されていたものが強く反映してオンナの形に落ち着いたのよ。それにしても、あいつ」

魔神を睨んでいるキャナの眼差しがキツと鋭くなった。

「あたしよりボインなんて、許せない！ 魔神の分際で」

憤慨している。

ちよつとポイントがズレているような気がせぬでもないが……。

メイちゃんの魂の情報を受け継いでいるんならそうもなるだろう。俺は思ったが、黙っていた。

どこ見てんのよ！ とか怒られそうだし。

まあ、どんなアニメでもアクション映画でも、悪役の女キャラはセクシーでボインと決まっている。

「まあ、ほつとけよ。結局のところ、女はチチでもケツでもねエ。

触らなくたって『こいつは女だ』って感じられるヤツに、男は惚れるんだよ。チチのでかさだけでいうなら、牛だっていいじゃねエか」

と、さりげなくキャナの気持ちをフォローした発言のつもりだったが、彼女はくそ面白くもない顔つきで俺を見て

「なアに、それ？ こーちゃん、あたしの胸にも尻にも女としての魅力がないっていうの？」

「だっ！ お前は何を聞いとったんだ！ 俺はな、その、キャナっ

ていう女性の全体が好きなのであって、胸だの尻だの身体の局所の特徴だけに関心を抱いたのではないというイミで」

つい、ムキになって反論してしまった。

すると、待っていましたとばかりに「にこーっ」と笑顔を見せたキヤナ。

「わーい、こーちゃん引つかかったあ！ 今、あたしのコト、好きだって、言ったよね！？ 言ったよね！？ すぐにでも結婚して子供二人作って幸せな家庭築きたいって言ったよね！？」

「……どこまで飛躍させとんじゃ、お前は」

この修羅場だというのに、何を考えているんだ。

そりゃまあ、俺も子供は嫌いじゃないし、肩車して「パパ！ あつちいこ！」とか言われたら、北極でも南極でも連れて行っちゃうだろうし。あと、家族四人で新幹線で温泉に旅行に行って、俺＋下の子VSキヤナ＋上の子で卓球勝負して、んで親子で仲良く温泉に浸かったりなんかしちゃったら、もう鼻血が出るほど幸せ。

なんて、妄想してる場合じゃねエ！

スッポンポン美女仕様魔神は、すぐ近くまでやってきている。死屍累々となった道のと真ん中で立ち止まったヤツは

「あなた達、目障りね。あなた達の魂だけ、どうしても奪えない。私を不愉快にさせるあなた達、消えてもらいましょう」

表情のない顔で淡々とそんなことを言った。

トーンの高い、女性の美しいボイス。

魔神っていうから、あの大魔王ばりにドスの利いた地獄のダミ声を想像していたのだが、違った。

それにしても、だ。

俺達の魂を奪えないっていうのはどういうコトなんだろう？

キャナに訊こうとすると、それよりも早く彼女は俺に飛びついてきて

「こーちゃん！ あぶないっ！」

途端に、視界から魔神の姿が消え、目の前が流線だらけになった。キャナの八艘飛び式近域転移。

「あんのバカ、いきなり方囲内裂とはタチ悪いわあ！ ちょっとはこつちの話も聞きなさいっての！」

すいすいと下がりながら、怒っているキャナ。

「方囲内裂ってなんだ？ さっきもかまされそうになったような……」

「詳しいハナシはあとね。一つだけ言っとくけど、食らえばあたしもこーちゃんも、血肉撒き散らして内臓だけでピクピク動くハメになるわよ！ あの性悪ボインバカ、どうあってもあたし達の魂を食らいたいみたいね……」

思わず背筋がぞくつときた。

よくわかってなかったが、さっきから魔神が俺達にかけようとしていた魔術って、実はとんでもなくタチの悪いヤツだったらしい。皮膚とか筋肉弾け飛ばして内臓オープン、魚の開きよりまだ酷い状態にされようとしてたってコトだ。

あまりのヤバさに言葉を失ってしまった。

げんに、俺達が飛び退ったそのギリギリを、例の青い光がかすめていく。

魔神が連続で放つ方囲内裂の結界を、ほとんど食らうか食らわな

いかというきわどさでかわしながら転移し続けている俺達。ちょっとでも気を抜けば、たちまちスプラッタにされてしまう。

が、そういう黒ヒゲ危機一髪な状態にも関わらず、キヤナ表情はいたって明るい。

「あら、何だかさつきより調子がいいわあ！ むふふ、きっと、こーちゃんがあたしを守ってくれたり好きだって言ってくれたからかしら？ 魔力、回復してきてる」

「そーかい。そいつはなによりだ」

頷いてやった矢先。

背後にイヤな感じがした。

それが具体的に何かはわからない。とにかく「イヤ」な感じだった。

咄嗟に俺はぐりんと身体ごと回転させるなり、手にしていた地恵石を突き出した。

「……………てええっ！！」

「にゃ？」

クリアな緑と青の混ざった光が一閃、二閃。

同時に、弾力のあるマットに押し戻されるような感覚。

何がなんだか、まったくわからない。

気がつけば、俺達は近域転移を止めて石畳の上に立っていた。

「こーちゃん、やるじゃない！ あたし、転移に夢中になっててぜんぜん気がつかなかった！ あのポインバカ、いつの間にか先回りしてあたし達の行く手に方囲内裂陣を展開させていたのね」

「いつ……………！？」

今度こそ、ちびりそうになった。

俺が地恵石をかざして防いでいなければ、今ごろは……！
がっちりと苦情を申し立てそうになったが、なぜかキヤナは頬を赤らめて上目で俺を見ている。

「こーちゃんつてば、あたし、言ったじゃないよ……。ヘンなトコ触ったら、魔法に集中できなくなるって……」

「……！？」

ハッとした。

無我夢中で彼女にしがみつくあまり、背中から回していた手がいつの間にやらしつかりと、彼女の胸をわしづかみにしている！
何もつけていない状態のナマ乳を。

どうりでいい感触が、じゃなくって！

「ごっ、ごめんごめんごめんごめん！ わっ、わざとじゃないからな！ つい、その、なんというか……だっ！」

何が「だっ！」なのだろう。

自分で何を口走っているのかよくわからなくなった。

キヤナは恥かしそうにうつむきながら

「あたしはまあ、別に、いいんだけど、その……痛くしたら、ヤだよ？ 優しくして欲しいなあ、なんて……」

おいおい。

エツチの前の睦み事ですか。

この「命の瀬戸際だよコノヤロー」な状況における発言としてはいかなものかと。

まあ、おねーさまを刺激してしまったのは俺のせいである。それ

は認めよう。

ついでに、女性の乳房の筋肉というのはささいなことでも切れやすくて、一度切れると元に戻らんらしい。ここは一つ、彼女が将来垂れ乳にならないように、気をつけて優しくしてあげなくてはならない。

いやいや！

妄想撤回！

ふと見れば俺達の頭上、巨大なボーリングの玉みたいな黒弾が雨あられと落ちてきてるし！

「逃がさないわよ。大人しく潰れておしまいなさい」

魔神の声がした。

はるか向こう側で宙を漂っている。

魔力が有り余ってるなら、服くらい着ろよな。

姿カタチだけはエロ全開なものの、やってることは手に負えない悪魔だ。

「……ふん。魔法は乱発すりゃいいってモンじゃないのよ！」

瞬時に「きて……顔」から魔女顔にチェンジしたキャナ。

俺を抱えるなり、

「てえいつ！」

渾身の気合いを込めた転移を発動。

俺の視界がぐっちゃんぐっちゃんに動き回り、気持ち悪くなりかけたところで停止した。

見渡せばそこは、俺とシュウが生身で突撃を敢行した、魔界府広場近くの大通り。

着地したキヤナは、握り締めていた気流石を顔の前にかざし

「さて、と。こっからが反撃よ。シユウさん、この辺りにありったけ動障陣をばら撒いていつてくれたものね。これを使ってあのボインバカ、がんじがらめにしてやるわ」

鼻息を荒くして呟いた。

そうだった。思い出した。

ボインバカならぬ魔神の攻撃をかわすのに手一杯で忘れかけていたが、シユウは魔神を押さえ込むためのワナを張り巡らしておいてくれたのだ。

動障陣。

魔力の膜を展開させて、陣の内側にある者の動きを封じ込んでしまふ効果があるという。

「シユウさんも知恵が働くわね。ざっと見だと、上手くやれば何重にもかかるように仕掛けてある。これだけ派手にかぶせてやればあの魔神といえども簡単には動けなくなるわ」

「網の上からさらに網をかぶせてやろうってのか？」

「そーそー。それにしても、ただ発動させたんじゃ、ボインバカの馬鹿力で破られちゃう。だから、自然魔力を使って陣を発動させるのよ。ただし……」

彼女は俺から地恵石を受け取り、手の平の上でまじまじと眺めていたが

「ちょーっと、使いすぎたかもね。気流石も地恵石も、あんまり魔力が残ってないっばい。一撃でキメてやらないと、あとあとツライかも」

そっか。

魔神が立て続けにぶっ放してくる魔法を防ごうとして、何度か使ってしまったものな。

俺でも使えるという優れモノである反面、そうそう長時間の使用には耐えられないってこった。

「済まねエな。俺が、やったらと使っちまったから……」

詫びると、キヤナはにこつと笑って

「そんなコトないない！ あたしの魔力が十分でなかったからよ。魔封陣の影響さえなければ、もうちょっと手早く、ちゃちゃっと……ねえ？ きやはは」

カノジヨ、どんなにヤバくても絶対に俺のせいにはしたりしない。元はといえば俺を抱えて転移するのだけで結構キツイハズなのに、こういうプライド、すごくカッコいい。

いつぞやのヒロシとか夏美のような、ヘコいそれとは比較にならない。

本当に実力のあるヤツは、どんな場面でも誰かのせいにはしたりなんてしないものだ。

「じゃあ、俺はどうしたらいいんだ？ これ以上地恵石のお世話にやなれないし」

うーんと考えているキヤナ。
が、すぐに作戦を思いついたらしく

「こーちゃんはコレ、はい！ 気流石と地恵石、二つ持ってて！」
「おう。で？」

「あたしは近域転移に集中する。それで、あのボインバカを動障陣の重発できる位置まで誘いこむの。いい感じになったら、こーちゃんにその石を地面に置いてもらうからね。……あとはいいでしょ？
どっかーん！ で、おしまい」

なるほど、と頷いた俺。

ここはキャナに任せておくに限る。

魔界府広場の付近は誰もいない。

さっき魔封陣が暴発した時に、みんな蜘蛛の子を散らして逃げしまったようだ。

それでよかった。

魔神がやってきたとて、魂を食われないで済む。

「さて……こーちゃん」

「あア。早くも追っかけてきやがったな」

大通りの魔界府広場寄りに、禍々しい気配。
ボインバカ、もとい魔神出現。

「行くよ、こーちゃん！」

「はいよ」

さっそくお見舞いされてきたボーリング玉の嵐をかわすようにして転移にかかったキャナと俺。

シュウいわく、魔界府周辺には強い魔力緩和帯が敷かれていたのだが、魔界衆が潰滅してしまった以上無効になっている。常時魔力を送り続ける者がいなければ、そういうトラップを発動させ続けることができないのだという。

だから、何の懸念もない。

キャナは一度思いつきり南寄り 魔界の言葉でいうナムス

へと跳躍した。

そこで現出して魔界府側の方を見やると、案の定魔神はこちら側へ寄ってきつつある。

ヤツを注視したまま、俺の顔のすぐ傍でキヤナがそつと言った。

「……じゃ、やるからね。あいつの近くに出た瞬間、石を地面に置いて頂戴。そうしたら、あたしが動障陣を発動させるから。陣の外円が大きいから、ちょっと離れていても大丈夫だと思う」

俺は片手に一つづつ石を持ち直し

「了解」

返事をした次の瞬間、キヤナの全身にくつと力がこもった。間髪を容れずして転移。

気がつけば、魔神の姿が驚くほど近くにあった。

「こーちゃん！」

「はいよっ！」

すかさず石畳の上に気流石と地恵石を置いた。

それを見たキヤナ、タンッ！ と片手を地面について

「……いつけえっ！！」

叫んだ。

同時に、気流石と地恵石がぴかりと一閃し、まばゆい緑と青の光が漏れた。

すると 光のような速さで石畳の上に巨大な二重の円が浮かび上がり、円と円の間にはたちまち魔術文字が刻まれていく。

ボインバカは、上手い具合に円陣の中心にいる。

ヤツがこちらを一瞥した時にはもう、動障陣は完全なものになっていた。

刹那、外円から真つ白い光が立ち上がり、触手を伸ばすようにして魔神の身体に絡み付いていく。

その数、無数。

マップ女性の姿をした魔神は瞬く間に光る糸に激しく絡めとられ、ミノムシ状態に陥った。

「……!？」

魔神の美しい顔に動揺の色がはしった。
が、これだけじゃない。

地面を伝ったキャナの魔力はあちこちに仕掛けてあつた動障陣を発動させ、そこから伸びた魔力のアームが、次々と魔神目掛けて襲い掛かっていく。

地面から幾本もの白い光の手が天へと舞い上がる様子は、まるで打ち上げ花火のようだ。

それらは天高く昇ることなく、空中で軌道を変えては宙を駆け、魔神にぶちあたる。

そして他の光の糸と一体化して、魔神の身体を縛り上げていく。
あまりにも数が多すぎるから、ヤツの姿はすぐに見えなくなってしまった。

魔神、巨大な白いボールの内側に包み込まれたような状態。

「よしよし、上手くいったみたいだな」

ちよつと興奮した俺。

思わず傍らのキャナに囁くと

「そうね。このまま、大人しく捕まってくれてればいいんだけど……」

彼女はやや心配なのか、魔神の方から視線を外そうとしない。そうしている間にも、魔神を飲み込んだ白い球体はどんどん肥大していつている。

これだけ重厚に包まれてしまえば、さすがの魔神といえども俺は思った。
ところが。

パァーン……

いきなり球体が破裂した。

破裂するなり、その衝撃がプレッシャーとなって俺達に襲いかかってきた。

「ぶわっ！」

「きゃんっ！」

俺達がいいたのは通りの真ん中だったから、つかまる何物もない。

たちまち吹き飛ばされたキャナと俺。

どれだけ遠くへやられたのか、よくわからない。

ただ、この悪意の暴風のために、寄り添っていた筈の俺達は離れてしまった。

俺は石畳の上をさんざんに転がされ、建物の壁にぶち当たってようやく止まった。

「痛ってエ……なんなんだよ……」

身体のあちこちを激しく打ったようで、立ち上がろうとしたがす

ぐには立ち上がれない。

壁に打ち付けられた左肩やら足が言うことを聞かず、口の中で地の味がする。

それでも、無意識のうちに魔神の状態が気になっていた俺。

ぐいつと首から上を動かしてそちらの方を見ようとした。

最初に目に入ってきたのは、うつ伏せに倒れているキヤナの姿。白い背中と尻が見えている。

上着をあげたものの、結局なんだかんだあって袖を通さずじまいだったから吹き散らされ、ハダカのままだった。あられもない。

（なんか、着せてやらなくちゃ……）

くらくらする頭で俺、咄嗟にそんなことを思っていた。

と、突然キヤナのぐったりとした身体がずっと宙に浮いた。

何だろう、と思う間もない。

彼女を取り囲むように青白い光の玉が四つ現れるなり、キヤナの白い身体が青く染まった。

そして、すぐに　赤い何かが全身から飛び散ったのを、俺は見逃さなかった。

「……つくぁあああああッ!」

絶叫し始めたキヤナ。

身体を激しく波打たせている。

「……!」

俺は一瞬、頭の中が真っ白になった。

呆然としている俺の目の前で、青い光がフラッシュするたびに彼女の白い肌がスパッと口を開け、そこから鮮血が噴き出していく。

「キャナ……?」

青い光が照らし出すその下、見る見る赤く染まっていくなみ。

「あああああッ!」

キャナが苦しんでいる。

彼女の咽喉奥から、止め処なく悲痛な声がほとばしり出ていく。

……何だよ、あれ?

どうしたっていうんだよ?

何でキャナが　生きたまま切り刻まれていかなきゃならないんだよ!?

魔神……?

魔神のせいなのか!?　あいつの凶悪な魔法に、キャナがかかってしまったのか!?

「キャナ……!」

自分でもよくわからない。

痛みを忘れるとは、こういうことなのだろう。

キャナの悲鳴が耳から奥へと入って脳みそ一杯に響き渡った瞬間、身体が勝手に動いて地面を蹴っていた。

「キャナアーツ!!」

その33 VS魔神3（後書き）

11/15}21 一挙連続更新予定です

その34 VS魔神4

キヤナまではほんの数歩。

何も考えちゃいない俺。

とにかく、彼女の傍へ駆け寄ろうとしていた。

駆け寄って、その柔肌を容赦なく傷つけていく悪魔の刃から、彼女を解き放ってやりたかった。

「キヤナーツ！」

俺の叫びに、のたうっていたキヤナがぐいっと頭をもたげ

「……こーちゃん！ こつち来たら、来たらダメーツ！ あたしに近づいたら、こーちゃんも」

警告を発した途端だった。

俺は不意に、ぐつと身体を持ち上げられるような感覚に襲われた。

「……！？」

視線の先にいるキヤナの両眼が大きく見開かれたのを、俺は見た。見た、と思った刹那、

「っがあああつ！」

全身を貫く激痛。

思わず叫んでしまった。

が、次に叫ぶ暇も与えてくれないほどに、痛みは連続して俺の身体を前後左右から突き抜けていく。

「こーちゃん！ こーちゃん！」

キヤナの悲痛な声が轟いた。
気が狂いそうな激痛で、それに答えてやることもできない。

「うあああああつ！」

二回目を叫んだとき、視界を横切る赤いものが。
血。

これって……俺の……血？
思考はそこで止まっていた。

両腕、両脚、そして胴体を縦横に突き刺すような苦痛がやってきたからだ。

瞬時に意識がとびかけた。

同時に、身体中を痛めつけている激痛がすうっと遠のいていき
ふわっと無重力状態になったような感覚がある。
浮いているというでもない。

どちらかといえば、重力を感じることなく、ただただ静かに深い
深い闇の奥へと落ちていくみたいなの。
。

俺、このまま死ぬのか？

魔界にやってきたばかりに……。

「こーちゃん！ こーちゃん！ ダメエーっ！」

遠くで、キヤナの声聞いたような気がした。

どれくらい経ったのだろう。

俺は真つ暗な空間を流れ、漂っている。

ふと、正面に四角く白いスペースが浮かび上がった。

その中に、色んな思いが古い映写機で映したように一瞬の粗い映像になって現れては、真つ黒い闇の中へとフェードアウトしていく。その映像は、ことごとく俺の知っている人たちばかりが映っていた。

最初に出てきたのは、おじさんとおばさん。

両親のいない俺を、自分達の子供のように育ててくれた。

こんな魔界なんかで死んだりしたら、おじさんにもおばさんにもわからないんだろうな。心配かけたまんまじゃねエか。世話になりっぱなしで、何一つ恩返しできないなんて、な。

バイト先にも迷惑かかるな。

店長の直弼、怒るだろうなあ。

いやいや、それよりも加奈子ちゃん。

突然失踪した俺を心配して、探そうとするんじゃないだろうか。彼女は頑張り屋さん。冬を迎えて寒くなった街のあちこちを歩き回るに決まっている。

ごめんね、加奈子ちゃん。どうか、これから彼女が、ステキな彼女と出会えますように。

ご両親と中学生の弟さんにも、申し訳ないな。

あと、カネ婆に肉屋のおばちゃん。

奈々子ちゃんに男子便所、ナウマン象と英世、それからバン格拉デシュ。なんだかんだあったケド、みんな、いい人たち。エクスカリバーにエロスケベにデラックスにミスターもな。……まあ、クラスの連中、みんないいヤツだったじゃねエか。

あの日、俺がブチ切れて帰ったのに、次に登校したらみんなが謝りにきてくれたつけ。悪イ、みんな！ 仮装ソフトボール、参加してやればよかったよ。実は俺、女装したら似合うんじゃないかと内心では思っている。カン違いしてヘンな気を起こすヤツがいたら大変だったし、まあ勘弁してくれ。

ああつと。タチシヨンの山田もいたよ。

済まねエな。俺がいなくなったあとのイーペー、よろしく頼むわ。
ってなカンジに、知っている一人ひとりの顔がフラッシュバ
ックしていく。

これが走馬灯ってヤツ？

死ぬときにいろいろと思い出すって、ホントなんだな。

ってか、俺の知り合いってすくなっ！ まだ十七年しか生きてな
いからしゃーないのか？

十七年か。

ああ、そういや今日って、俺の誕生日だったんだっけ。

せつかく加奈子ちゃんがマフラーをくれたのに。魔界で死んだら
棺桶にも入れてもらえないって。ちくしょー。

……あれ？

なんか、足りなくね？

一番大事な、何かが抜けているような気がするけど。

こんな時に何だっつてんだ。

思い出せ、俺！

死ぬ前に思い出さないと後悔するぞ！

……後悔？

後悔って、そういえば俺、何かえらく後悔したんだよな。

あれは確か、夏の初め頃だったような。

どうして後悔したんだっけ？

他校生ぶん殴って停学になったから……か？

違うな。

そのことはまったく後悔してねエよ。

奈々子ちゃんにマジ泣きされた時はビビったけどな。あんなによ
く泣く先生だったんだ。

いやいや。

奈々子ちゃんは今もいい。

後悔っていうと、なんか雨の記憶がなくもない。

雨降ってずぶ濡れになつて帰つて、それで どうしたわけ？
その部分だけがすっぽりと抜け落ちてしまつているような、でも
とても大事なことであるような気がしてならない。

耳の入り口に一本だけ生えた太い毛を抜こうとしても抜けないで
いる、そんなもどかしさ。

歯の奥に挟まったもやしを取りたくて舌で懸命にいじつていて、
もうちよつとで取れそうな感じ。

イヤだな。

思い出せないまま死ぬなんて。

そのほんのちよつとの後悔が、すごく納得できない。
待て待て。

焦るなよ、俺。

もう少し前に巻き戻してみよう。

ん？

夜も遅い、俺の部屋。

テーブルの上に、晩メシが並べられている。

手前には、俺のご飯と味噌汁。その向こう側には……もう一人分
の、ご飯と味噌汁。

二人分？

つてことは俺、誰かと一緒に晩メシ食つてるんだな。すごい遅い
時間なのに。

誰だ誰だ誰だ誰だ！？ そこにいる人！ 俺の前に座つて、一緒
にメシ食つてる人！

顔のところだけが墨塗りしたように真っ黒で、顔がわからない。

デビルマ……ええい、違うわ！ 邪魔すんな！

思い出したい。

すごく、思い出したい。

その人は俺にとつて、とっても大事な人のハズ。

なんでだよ！

なんでその人のことだけ、思い出せないんだよ！？

頼むって、俺！

誓ったじゃねエか、もう二度と、絶対に後悔だけはしないって。
大事な人を失ったあの日に、死ぬほどイヤな思いをして、それで、
それで、それで。

「ねえ、こうちゃん。知ってる？」

「ん？ なにー？ 佐奈ねーちゃん」

ザーツ

ザザーツ……

黄昏時の海岸に響く、心地よい潮騒の音。

真っ黒な空間がいつの間にか海の風景に変化している。

寄せては返していく波打ち際をてくてくとはだしで歩いている。

足の裏に水がひんやりと気持ちよい。

呼びかける声に振り向けば、そこには真っ白いワンピースを身に

つけた佐奈姉ちゃんの姿が。

彼女は砂浜の上にしゃがんで、何かを耳に当てている。

「なに、してんの？」

近寄って行くと、佐奈姉ちゃんはおっとりとした相好にふんわり
と柔らかな笑みを浮かべて

「巻貝よ。これを耳に当てるとね、海の音が聞こえるの」

「へえ。ホント？」

「ホントよ」

彼女は巻貝の殻を耳に当ててくれた。

が、殻は殻。

「……何も、聞こえないよ？」

抗議すると、

「それはね、まだこうちゃんのところに海の音が届いてないからよ」「届いてないの？」

「そう。届くようになれば、自然と聞こえるわよ？」

ふふつ、と笑った佐奈姉ちゃん。

「じゃあじゃあ、どうすれば、届くの？」

重ねて質問したその時。

さあつと海岸を風が吹き抜けていった。

被っていた麦わら帽子を片手で押さえながら、佐奈姉ちゃんは立ち上がった。

そうして、ゆっくりとこちらを見下ろし

「……大切な人と、一緒に聴くの。そうすれば、きっと聞こえてくるから」

答えを教えてくれた。

何がなんだかわからぬまま見上げれば、そこには佐奈姉ちゃんの小さくて美しい笑顔があった。

「大切な人と……？」

「そう、大切な人と。こうちゃんの、大切な人……」

彼女は今一度ゆったりと微笑み、そして前を向いた。

佐奈姉ちゃんの横顔。

斜陽を浴びて、うつすらとオレンジ色に染まっている。幼い心にも、それはこの世で一番美しいものに思えた。美しいだけに儚くて、すうつと消え入ってしまいそう。

「……佐奈姉ちゃん！」

思わず、大声で呼びかけていた。

消えて欲しくなかったから。

ずっと、傍にいて欲しかったから。
が。

その声が届いているのか届いていないのか、佐奈姉ちゃんは反応しない。まるで、彼女のいるところだけ時間が止まってしまったかのように。

「ダメだよ！ いなくなったら、ダメ！ そんなの、イヤだ！ 絶対にイヤなんだ！」

無性に悲しくなってきた。

気がつけば、ボロボロと涙をこぼしていた。

カッコ悪いと思ったけど、そんなことはどうでもいい。

強く強く叫ぼうと思った。

大切な人が、自分の目の前から消えていってしまわないように。

「……ダメだ！ 行っちゃダメだよ！ どうしても行くっていうんなら 一緒に行くよ！」

ありったけの思いを込めて叫んだ。

どうしてだろう。急に、何かに「ぼーんっ！」って、強く心を押された。

押された瞬間、わかったような気がした。
そうだな。

大切な人が消えてゆくのを指をくわえて見ているのがいけないんだ。

行ってしまうなら、一緒に行けばいい。

一緒に行けば、離れてしまうことなんかないじゃないか。簡単なコトだ。

その時だった。

佐奈姉ちゃんが、ゆっくりとこちらを見た。

が、その顔は 佐奈姉ちゃんではなかった。
ただどすごくよく似ている。

物優しげで穏やかで気品があつて、ふんわりとした雰囲気漂わせていて……。
その女性は、にっこりと、力強い笑顔になって言った。

「絶対に、一緒に海を見に行こうね、こーちゃん！ 約束だよ？」

……！

そうか！

わかった！

俺、確かに約束したんだ！

夕焼けに染まる大きな川の傍で、大切な人 キヤナと。

いつか、絶対に、一緒に海を見に行くんだって。

誓ったじゃねエかよ。

何、忘れてんの？ 俺。

バカか。

まあ、バカでもいいや。

元から頭なんかよくねーし。

ただ。

バカでも秀才でもどっちでもいいけど、決して忘れちゃならない、破っちゃいけないコトがたった一つだけ、ある。

大切な人は、てめエの手で守りきれ！

それができないなら、誰かを好きになったりする権利はねエ。そうだった。

だから俺、このままくたばったらヤバいだろう。

何がヤバいつて……後悔しちゃうじゃねエかよ！！

後悔するなら死んだ方がいいと思ったこともあるけど今は違う。死ねば後悔する。

だったら 死ぬワケにいかない！

「 こーちゃん！ こーちゃん！ しっかりしてよオ！ こーち
やんつてば！」

「……！？」

何度も何度も俺を呼ぶ悲痛な声が、落ちかけていた脳みそと胸の奥底にわんわんとこだましていく。

目を開ければ、そこは青い世界。

……違うな。

魔神の放った魔法の光。

俺とキヤナを殺そうとする、邪悪に染まった青い光。

魔法の呪縛にがちり押さえ込まれているせいか、身体が自由が利かなかった。

目だけを動かしてみると、すぐ近くでキヤナが泣きながら俺を呼んでいた。

すっかり血に染まった彼女の白い肌。

切り裂かれて死にそうなくらい痛い筈なのに。

それでも俺を呼んでくれている。

魔神の魔法は俺にも作用していて、絶えず苦痛が俺を苛んでくる。切られた傷口を重ねて切られるから、痛みはなおさらしんどい。

だけど……オチてる場合じゃねエな。

こんなところでくたばったら、キャナに合わせる力かねエ。

あんなに俺のことを思ってくれてるっていうのに、さ。

男だったら、やるコトやらなきや一生の恥だぜ。

俺は大きく一つ息を吸い込むと、渾身の力を振り絞って呪縛への抵抗を始めた。

得体の知れない魔法の力はやたらと強く、力で張り合っても勝てそうにない。

が、勝てる勝てないは自分が決めることじゃない。

「……キャナーツ!!」

腹の底から叫んだ俺。

すると、力尽きかけていたキャナがぐいつと顔を起こし

「こーちゃん! 大丈夫なの!? こーちゃん!」

応えてくれた。

さすがにその表情に力がなかったが、弱々しくも精一杯声を出し、俺に応え続けようとしている。

「キャナーツ! くたばってる場合じゃねエ! 行くぞっ!」

息が続かん。

俺はもう一度、腹いっぱい息を吸い込むと

「人間世界の海を見に!!」

その途端、半分閉じかけていたキャナの瞳が大きく見開かれた。
何か大切なことを思いだしたかのように、その表情にみるみる生
気がみなぎっていく。

彼女はぶんと大きく頷いて

「……行く！ あたし、絶対行くよ！ こーちゃんと、海を見に行
くの！」

叫んだ。

キャナの全身全霊の叫び。

それは間違いなく、確かに、俺の中にある何かに触れて大きく揺
り動かした。

ゴォン……

突然、大地が唸り、大気が震えた。

魔界中すべてそうなってしまったかと思われるほどに、すさまじ
い衝撃。

激しく咆える大気の波動は魔神の呪縛を一発で吹き消した。

ぼてつと地面に落っこちるようにして、俺とキャナは解放された。

「キャナーッ！」

「こーちゃん！ こーちゃん！」

お互いに駆け寄り、がっちりと抱きとめ合った俺達。

裸のキャナは全身切り刻まれたように朱に染まっていて、直視で
きなかった。

が、それは俺も同じだったらしく

「こーちゃん、大丈夫？ 痛いよね？ すぐに手当てしてあげるからね？」

自分の傷を忘れたようにして、ぐずぐずと泣いているキャナ。そんな彼女の姿に、俺は思わず

「キズだらけはお互い様だっつーの。 それよりも、これ……」

激震は続いている。

石畳は割れ、建物は崩れ落ち、魔都は原型をなさないまでに崩壊していこうとしている。ほとんど大地震が大噴火の様相。

ただ不思議なことに、俺とキャナがいる空間だけは何ともない。彼女は辺りをしげしげと見回してから

「……共振増幅。あたしとこーちゃんの魂、重なり合って共鳴している。魔術書にもほんのちょっとしか記述がないから、よくわからなかったけど まさか、本当にありえるなんて……」

不思議そうなキャナの横顔を見ていたら、思わず笑いが込み上げてきた。

「さっきもあつたじゃねエかよ。軽い『共振増幅』が」
「へ……？」

思い当たらないらしい。

「ほら、魔界衆に囲まれてやられそうになったトキだよ。あれもどつやら、共振増幅みたいだぜ？ シュウが言ってたよ」

仕方なく教えてやると、キャナもくすくす笑い出し

「なーんだ！　じゃあ、最初からいちゃいちゃやってれば良かったんじゃない！　そうしたら、こんなにケガしないで済んだかも」

どうだかね。

魔神が俺達に嫉妬して、もっと酷いことになっていたかも知れないけど。

その35 VS魔神5

激震と共に崩壊していく魔都中心部。

俺とキヤナ、二人の魂の「共振増幅」が発動したせい。

その効果たるや、俺の想像をはるかに超えていた。

あふれる魔力の波長は広い範囲に強く作用して大地や大気を揺るがし、思い出したように地面や建物の残骸を宙に跳ね飛ばしている。見渡す限りの視界を霧がかかったように白く染めているのは、半実体化した魔力が放つ輝き。

こんなにも絶大な破壊力があるというのに、数千年にわたる魔界の歴史において、これを行使した術者はいなかった。いや、できなかったのだ。

自分の魂を他者に分け与えようとした者がいなかったがために。古代魔術に象徴されるように、自己犠牲の魔法は確かに存在したが、それは自分や同朋が窮地に陥った際に最後の手段として行使しただけのことであって、魂の分与はそれとは異なる。

ピンチでも何でもない時に行わなくては意味がないからだ。

例えば、魔族のカップルが魔界衆に襲われているときにエッチなんかできるだろうか。

できやしない。

そして魂の分与が可能な条件として、分与される側の魂が限りなくゼロ、つまり瀕死でないとならない。ちよつと考えればわかるが、まだ魂が十分なのに他者の魂をもらったら一個体の中に二つの魂が宿ることになる。これはありえない。

もつといえ、共振増幅を発動させるものは単なる自己犠牲の精神じゃない。

一つの魂を分け合った者同士が共に生きようと望むこと、つまりお互いに「共存」の心をもたなければ、決して発動することはないのだ。

とまあ、共振増幅はいろいろ小難しい面があるようだけど、ともかくも俺とキヤナはその発動に成功したワケで。

「こーちゃん……」

「あア」

吹っ飛んでいく街のど真ん中に寄り添って立っている、全身血まみれキズだらけの俺達。

二人のほかは誰もいない。

まるで、核戦争を描いた映画とかアニメの主人公になったような気分だ。

いや、忘れちゃいけない。

まだヤツもいる。

魔神。

宙に浮いたまま、じつとこちらを見つめている。

ただ、さっきまでとは明らかに様子が違う。

今までモロ冷酷かつ無表情だったヤツの顔が醜く歪んでいる。

ずばり、恐れ。恐怖。

突然キヤナの魔力が何倍にも膨張したことが理解できないでいるらしい。

「あなた達、何をしたの……？ この魔力の高ぶり、大地の響き、大気の唸り、尋常じゃない。この波長は、私の存在を脅かすもの。早く、消し去らなければ……」

眩くなり、俺達の頭上に例の巨大な黒弾が出現した。その数無数。

しかし、キヤナは腕に蚊がとまったほども気にしていない。

「黙りなさい。あんたの負けよ」

静かに宣告した、その刹那。

黒弾が一斉に俺達目掛けて降り注いできた。

が、避ける必要も防ぐ必要もなかった。

重力に引かれるようにして落下しかけた黒弾は全て、すぐに風船が割れるようにして破裂し、あっさり消滅してしまっただからだ。

強大になったキャナの魔力の影響下にあるから、魔神の魔法は発動していないにも等しい。

「……！？」

大きく口を開け、顔全体で驚きと戦慄を表現している魔神。その様子、ムンクの叫びに似てなくもない。

「……黙れつつってんのよ。このイカレボインが」

キャナが唸った。

間髪を容れず

ズンッ

空間全体が瞬間的にビリビリと震えた。

思わず首をすくめつつふと魔神を見やると……右腕が、肩の付け根からなくなっている。

「……！？」

何が起こったのか、という顔の魔神。

異変を悟って恐る恐る右を向いたヤツは、そのままフリーズしている。

痛がるでもなく、ひたすら硬直。

「あなた、あたしのこーちゃんを殺そうとしておきながら、タダで済むと思ってるの……？」

ゴオオン！

俺達の周囲の地面が激しく吹き飛んだ。

キヤナの凄まじい怒りで魔力がさらに増幅したのだ。

もう、誰も彼女を止めることはできない。

魔界を滅ぼす存在として恐れられたあの魔神すら怯えさせる程だ。だが、ヤツはあくまでもキヤナのことを殺したかったらしく、憎しみに満ちたおぞましい形相を見せた。美しい女性のそれは見る影もない。

「おのれ……！ 魔女ごと」

咆えかけたが、台詞は途中で途切れた。

開いた魔神の口から喉へと細長い光の刃が貫き、先端が背中から飛び出ている。

串刺し。

「がつ、ごがごごごが……」

声にならない声が漏れた。

ぴくりと身体を痙攣させた魔神。

さらに、次の瞬間。

「ごがつー！」

衝撃で、魔神の全身が大きくのけぞった。

少なくとも俺の目には停まっていけない。

いつそうなったのか、魔神の首、胸、腹、両足、そして腕と、幾本もの光刃が……。

あまりに多くの数が刺さりすぎていて、あたかも大きな光の花が咲いたかのよう。

言うまでもなく、キャナが放ったものだ。

「……あんた、魔神なものね？　これくらい、痛くもなんともないでしょ？」

事も無げな彼女。

俺は思っていた。

いつだったか、刺客として現れた魔界衆の男をじわじわとなぶり殺した、冷酷な魔女の横顔を。

確かに、今も行爲そのものは残酷非道かも知れない。

ただ、相手は血も涙もない思念の集合体、魔神。

ヤツは多くの魔界人達の魂を食らって殺し、かつ俺達をもその手にかけてようとした。

少なくともキャナは面白がってやっているワケじゃない。

光刃の一本一本が、彼女の強烈な怒りの現れ。

だからこれは冷酷非道な惨殺なんかじゃない。

魂を弄ぶ極悪な存在への裁き。そして魔神に殺されて死んでいった者達へのレクイエム。

「ひとつだけ、言わせてもらっわ。……あんたにやられて痛かったのは、あたしのカラダよりも」

魔神に向け、ずっと右手を差し向けた。

と、左手が俺の右手に触れてきて、そのまましっかりと握られた。

「……？」

俺の意識がその左手にいった瞬間のことだった。

ドッ

世界が白一色に染められていた。

どこもかしこも眩い光に満たされていて、何一つ見えやしない。かといって、眼球に痛いということはなかった。

むしろ柔らかくて温かくて、懐かしい感じがする。

何だろう、これは……？

キヤナのヤツ、どんな魔法を放ったんだ？

ああ。

そっぴや今彼女が使った魔力は、俺の魂から放出されてるんだっけ。

思うともなしに思っていると、光のぬくもりのせいか、次第に心地よくなってきた。

それは傷ついて疲労した肉体に温泉のようにじんわりと染み込んでくる。

で、こんな場面でなんだが、俺は　いつしか、意識が遠のいていた。

ただ、完全に意識を失う瞬間まで確かに感じていたのは、俺の手を握りしめているキヤナの感触、そして魔神につきつけられた彼女の勝利宣言　。

「　あたしの大切な人を傷つけられたことよ。地獄の底で詫びてもらおうよ？」

「う……」

目を覚ますと、最初に視界に飛び込んできたのは見知らぬ天井だった。

太い丸太が格子状に組まれていて、ワラのように乾燥させた植物をその上にかぶせて固定してある。

ずいぶん原始的な工法。

一瞬、今自分がどこにいるのかわからなかった。

「……は……？」

無意識に呟くと

「……あら、目が覚めた？ おはよう、風間くん！」

隣から、聞き慣れた声が。

起き上がろうとしたが、身体中が鉛をくくりつけられたように重く、思うように動かなかった。

首だけをゆつくりと回してそちらの方を見ると

「メイちゃん？ メイちゃんなのか？」

「覚えていてくれたのね？ っていつても、お別れしてからまだ五ヶ月だもんね。忘れる方がヘンだよね」

そこには、ほんわかと笑っているメイちゃんがいた。

木の粗末な寝台の上に上体を起こし、分厚い革表紙の本を手にしている。

あの日と何も変わっていない、愛らしい彼女。

「ここは……？」

「シュウさんの住処よ。魔都からは遠く離れているの。安心していいからね？」

ここがヤツの研究所、もとい家なのか。

石壁が剥き出しの部屋の中は何となく殺風景だったが、彼女のいるところには花が咲いているかのよう。

ただ、身体や腕のいたるところに巻き付けられた包帯のような白布が痛々しい。彼女は魔界府に戦いを挑んだ末、強力になった魔界衆によって瀕死の重傷を負わされた。シュウは回癒魔術を施したとは言っていたものの、その傷がまだ癒えていないようだ。

そういう俺もまた寝台の上に寝かされていて、身体中に手当されたあとがある。

アタマがぼんやりしていて記憶が吹っ飛んでいたが、よく考えれば魔神の放った魔法によって身体中をズスタにされたんだった。で、キャナと共振増幅を発動させて魔神を追い詰めたまでは覚えているものの、肝心なところで意識を失ってしまったような気がする。とすればキャナ、一人で魔神を討ったんだな。俺、ちよつと面目ない。

ん？

キャナ？

「そっぴゃ……キャナ！ キャナはどうしたんだ？ 彼女も身体中に傷を負ってたんだ！ キャナは あっつ！ ってエ……」

「無茶したらダメよ、風間クン」

寝台の上で騒ぎ出した俺をなだめるように、メイちゃんがこつと笑って言った。

「彼女に何かあったんだったら、私がこつやつのんびり本なんて

「読んでいると思う?」

「……」

それもそうか。

慌てるなんて、俺らしくもない。

メイちゃんは肩から羽織っている大きな布をかけ直しながら

「魂の疲弊といい肉体の怪我といい、実は風間クンの方が重傷だったのよ? シュウさんとミナちゃんに担ぎ込まれてから、もう七日間も眠りっぱなしだったんだもの」

「いつ!? な、七日間!?!」

やっぱり焦った俺。

一週間も学校もバイトも休んじまった!

それも、ノー連絡。

ぎゃーっ!

クビだ……間違いなく……。

あんなにいいバイト先、探したってそうそう見つかるもんじゃない。

ついでに、学校からも無断欠席をがちり怒られるだろう。

横たわったままがつくりしていると

「こーおちゃん! 目え覚めたあ?」

いきなり重そうな木のドアが開き、キャナが入ってきた。
ぜんぜん元気そう。

あれだけ全身を切り裂かれたのに、すっかり傷は癒えているようだった。裸エプロンに見えなくてもないセクシーな衣装を身につけている彼女は肌のあちこちが露出しているから、一目瞭然。俺やメイちゃんみたいに手当のあとはほとんどなかった。唯一、片方の腕に

白布を巻いているだけ。

元気なのは良かったが……どういうこと？
何で彼女だけ傷の回復が早いのだろう？

「キヤナ、お前……」

俺の目覚めを知ったキヤナは駆け寄ってきて

「やーん！ こーちゃん、おつはよー！ 魔神はねえ、とりあえずぶつ潰しておいたよー！ そのうちまた復活してくるかもしれないケド、あたしとこーちゃんでは何とかなるっしょ。心配ないない！ きやはは」

ありえないほどのハイテンションできやたきやた笑っている。

「キヤナ、ケガは……？」

「ほとんど治ったよん。魔神ぶつ飛ばしたあとシウさんに回癒魔術かけてもらったんだけど、すごいのお！ 共振増幅の影響で、キズがあつという間に塞がっちゃって。でも、こーちゃんは魂がくたびれきってだし、回癒魔術を使っても共振増幅の効果がなかったの」

「そっか。生きてるだけいいさ。ってか、魔神と戦ってる最中だったつてのに、最後まで立つてられなくてゴメン……」

「謝ることないない！ こーちゃんはねえ、けっこー大怪我してたんだもの。あたしこそ、ごめんね？ こーちゃんに痛い思いさせちゃって……」

ちよつと悲しそうに瞳を伏せた。

喜怒哀楽がはつきりしているキヤナ。

一緒に暮らしていたあの頃の彼女を見ているよう。

……良かった。

何度もきわどいシーンに直面したけど、結果として彼女を助けることができた。あと、おまけっちゃんおまけだが、混乱に乗じて復活した魔神の撃退にも成功した。共振増幅に魔力の発動はすさまじく、魔都の中心部をほとんど潰滅させてしまった。俺とキャナ、同じ魂を分かち合う存在に、あんな力があつたなんて。

「俺が自分から首突っ込んだコトだぜ？ 別に、どーってコトはねエよ。もうちょい大人しくしていれば、何とかなるんじゃないかな」「そつか。こーちゃん、とっても強いもんね」

キャナはふわっと微笑んでから顔を近づけてきて

「だいぶ元気になったみたいだから、じゃ、遠慮なく。……おはよ
うのキッスね！」

ちゅーっ

起き掛けから、刺激度「強」ならぬ「超」のディープなキス。
すると、隣のメイちゃんが仕方なさそうな表情で

「二人とも。くっつきあうのはいいケド、時と場所は選んで頂戴ね？
私はまだいいとしても、この家には……ほら」

苦情をもらってしまった。

「……ん？」

「あえ？」

唇を離し、部屋の入り口の方を見やった俺とキャナ。

ドアが少しだけ開いていて、隙間からミナちゃんがのぞいている。恥かしそうに顔を赤くしている彼女、慌てて視線を逸らしながらしどろもどろに

「あつ、あのっ、そのっ……メイアさんとおにいちゃんの食事が……その……できたの……」

その36 嵐のあと

魔封陣を破つたり共振増幅を発動させたりと、八面六臂の活躍をした俺の魂。自分ではよくわからなかったけど、その反面、かなり疲れてしまっているらしい。

肉体的な回復が思いのほか遅いのは、どうもそのせいであるとメイちゃんもキヤナも言った。

五体満足で生まれてきた俺は身体が人並み以上に頑丈で、多少の病気とか怪我なら一晩か二晩寝ればあっさり元気になっていたものだった。日々、市内の他校生をことごとく敵に回してケンカしまくっていられるのも、こういう肉体のおかげであることは言うまでもない。

ところが、今回はそうもいかなかった。

倒れてから一週間も経つというのに傷口がふさがりきらないし、身体中に力が入らない。

寝たきり介護老人になっちまったみたいだ。

魂というのがここまで肉体に影響を与えるものだったなんて。

「焦っちゃダメよ？ 心の動揺が、魂にはよくないんだからね？ 気持ちを落ち着けて、じっと待つ。そうすれば、回復も早くなるから」

「そーそー、そーだよ、おにいちゃん。せつかく美人の魔女が三人もいるんだから、ゆっくり眺めてなよ。人間世界にこんな美人、いないでしょお？」

メイちゃんとミナちゃんがそう励ましてくれた。

そりゃまあ確かにその通り（「美女が三人もいるという事実」だし、回復が遅いことそのものは大して気にしじゃない。魂の疲労が影響しているというのが、なんとなく理解できるからだ。

それよか俺の胸中が落ち着けないでいるのは 置き去りにしてきた、あっちの世界のことが気になって仕方がないから。

バイトはもう諦めるとしても、学校を休みまくってしまえば進級に響きかねない。

それに、加奈子ちゃんのこと。

もうキャナに会うこともないと思っていたから、ここ数ヶ月間で加奈子ちゃんと仲良くなったワケなのだが、思いがけない超サプライズなアクシデントを経て、再会を果たしてしまった。

処刑される寸前、俺が捨て身で無我夢中になって助けにやってきたという超ドラマティックな一事をして、キャナの心の中には生涯消し去ることのできない感動と愛が生まれた。ついでに、俺達は魔界始まって以来、たった一組の「魂の共有者」。キャナは俺、俺はキャナ、二人で一つ。

彼女と再会できたこと、これは別にいい。二人についていえば元の鞘に納まっただけのハナシだし、もっと視野を広げれば、シュウが思っているように俺達は魔界の騒乱にピリオドを打つための最終兵器。魔界人達は救えないアホぞろいだが、魔界から凄惨な殺し合いをなくせるのなら、利用されてやっていいと思う。魔界が平和になれば、シュウやミナちゃん、メイちゃんも普通に暮らせるんだし。たまに小説とかアニメであるけど「俺を利用するのか」みたいな葛藤は全くない。

どっちでもいいと思う。利用されようがされまいが、俺の知ったコトではない。

ただ。

キャナとのこと、加奈子ちゃんに何て説明しよう？

このままいけばキャナはいずれまた人間世界へやってくる。で、一緒に暮らすことになる。

当然、加奈子ちゃんと今の関係は維持できない。

まだお互いに気持ちを確認しあっていないし、友達の範疇だっていう見方はできるかもしれない。

だけど、彼女はひたむきで一生懸命なコ。

まさか「前に別れた人と元に戻ったんで」なんて（言わなきゃならないんだろうが）言えない。

虫がいい希望だというのは十分に承知している。

それでも俺は 加奈子ちゃんの悲しそうにする顔を見たくなかった。俺のせい以外の何物でもないんだけど。

かといって、キャナとかメイちゃんに相談するのもスジが通らないと思った俺、一人胸の内にしまいこんであれこれ悩んでいるしかない。

一週間ぶりに目を覚ました俺は、ほんのわずかに食事を摂るとものすごい眠気に襲われてまた眠ってしまった。

で、次のメシ時に起こされてはまた眠る、ということを繰り返した。

よほど魂の疲労が大きいのだろうと、魔女の三人は気をつかつてできるだけ俺を起こさないようにしてくれていたようなのだが。

「 風間クン？ 風間クン？」

「……！？」

メイちゃんに揺り起こされて目が覚めた。

部屋の中が暗い。

隣を見やると、メイちゃんが寝台の上に起き上がって心配そうにこちらを見ている。

「あ……俺、何か言ったか？ 起こしちゃった？」

「ううん、大丈夫よ。ただ、ずっと苦しそうにしていたから、思わず声をかけちゃったの。眠っていたのに、ごめんね？」

ほんのりと薄く紫色のかかった闇の中で、彼女の白い顔が申し訳

なさそうにしていた。

彼女はもう、ほとんど傷が癒えたらしい。

身体中に巻いていた白布の類は取り去っていて、代わりに胸を隠すように大きな布を巻いていた。パジャマなんてないから、そういう姿で就寝しているのだろう。

「今って……夜？」

「うん。風間クン、昨日の朝に目を覚ましたんだけど、あれからほとんど眠ったままだったのよ。キャナとミナちゃんが食事を持ってきてくれたけど、一口二口食べたただけなもの。お腹、空いてない？」

訊かれてみて気がついたが、空腹というものを感じなかった。

一週間もの間、ほとんど飲まず食わずだったというのに。
かぶりを振ると

「そう……。回癒魔術は肉体を少しずつ回復させてくれるから、効いている間はお腹が空かないかもしれない。だけど、そろそろ切れるだろうから、明日の朝からちゃんと食事を口にした方がいいわね。私、よく食べるから、こうやって回復も早かったの」

微笑したメイちゃん。

確かに、一日見ない間にめきめき治ったような気がしなくもない。
見てない、で思い出した。

目覚めてからというもの、肝心なヤツの姿を見ていなかった。

「そういえば、シュウは？ キャナを助けて以来、ずっと姿を見てない」

「シュウさん、魔都の状況とか魔界府の動向を探りに行ってるの。もう間もなく、戻ってくるんじゃないかしら？ ……研究とか調査

の時は飲まず食わずでやるらしいんだけど、一週間きっかりになると戻ってくるんですって。お腹が空いて帰りたくなるみたい。ミナちゃんが言ってたわ」

可笑しそうにしている。

俺もつられて笑ってしまった。

単純に腹が減ったから帰るといのは、すごくシュウらしい。

「そうそう、シュウさんから言われてたんだった。気流石と地恵石の魔力が溜まったら人間世界に転移させてやるから、一週間ばかり待ってなさいって。だから、今度シュウさんが戻ってきたら風間クン、帰れるかも知れないわね？ でも、そんな身体じゃ転移魔術に耐えられないし、早く良くなるのが先みたいね？」

「違いねエ。努力するわ。あつちの世界でやらなきゃならないこともいろいろあるし」

やっぱり人間、何より食うのが大事だな。

食べば何とかなるし、食わなきゃ何にもできない。

キヤナを心配させても良くないし、朝からはちゃんとメシを食うようにするか。

そう決めたら、何となく空腹感を覚えぬでもない。

「ところで、風間クン。一つ、訊きたいんだけど」

メイちゃんが目線がまっすぐ俺に向けられている。

「……加奈子ちゃんって、誰？」

その37 話を聞け

「へ……？ メイちゃん、どこで加奈子ちゃんの名前を……？」

加奈子ちゃんのことはシユウをはじめ魔界の誰にも話していなかったハズ。

訝しんでいるとメイちゃんは

「どうしてって？ 風間クンが自分で口にしたんじゃない。……眠りながら、けどね」

くすつと笑った。

そういうコトか。

俺、寢言（うわごと？）で加奈子ちゃんの名前を呼んでしまったようだ。

彼女の夢なんか見てないのに。

「で？ そのコ、誰？」

メイちゃんがかぶせて訊いてきた。その相好から笑みが消えている。

もしかして俺、浮気的な何かを疑われているのか？

普段は穏和なメイちゃんだが、今は取り調べの刑事みたいな追及オーラ全開。

返答の次第によっちゃ殺されてしまいかも知れない。

「あ、あのさ、それなんだけど……」

俺はキヤナとメイちゃんが魔界へ戻ってから俺の身の上にあった

一部始終を話して聞かせた。

暗闇に響く俺の静かな声を、メイちゃんは身じろぎもせず耳を傾けている。

「　　そういうワケさ。俺、まさかキャナに再会できるなんて夢にも思わなかったし。それに、また会えるチャンスがあるってわかっていれば、黙ってその時を待っていたよ」

話の結びにそう付け加えておいた。

ウソじゃない。

加奈子ちゃんと仲良くなったのは、もうキャナとは会えないものだと思っていたから。

人間は弱いもので、会えない存在を一生引き摺って生きていけるほど強くない。

俺の言葉にメイちゃんはうなずいて見せて

「わかった。それはいいわ。私だって、こうやってまた風間クンに会えるなんて思ってたから」

とりあえず、ここまでは理解してくれたいらしい。
が。

「でも、こうやってキャナに会うことができて、彼女は風間クンのことを変わらずに愛している。じゃあ、その加奈子ちゃんとかいう人間のコトのお付き合いはやめるのよね？　人間世界に戻ったらすぐ、さよならするのよね？」

鋭利な日本刀でためらいなく斬りつけられているような気分。

メイちゃんの追及は容赦なかった。

たたみかけるような連撃コンボに、思わず沈黙してしまった俺。

すると

「決心がつかない？ なんなら、私がそのコを殺せば済むのかしら？」

「……ちよつ、待てよ！」

焦った。

いきなりなんちゅー発言をするんだ、このほんわかボイン娘は。

「なんでそう飛躍する！？ 加奈子ちゃんは無実だろ！ それに俺は、キャナと別れて人間世界に戻るなんて言っていないからな！ 勝手に先走るなよ」

「……私はね、風間クン」

メイちゃんの声がひどく優しくなっている。

「キャナのコトを殺そうとした上に魔界から追い出したっていうのに、彼女は魔神に支配されかけたところを助けてくれた。それだけじゃなくって、魔界に戻ってきてからもそうよ。聞いていると思うけど、死ぬ覚悟で魔界府に乗り込んで魔封陣につかまりそうになっただけど、キャナは身代わりになっってくれたのよ。瀕死のケガした私を外に放りだして。彼女、そのせいでひどい辱めを受けて処刑されるところだった。私、助けてもらってばかりなんだもの……」

感情が高ぶったのか涙声。

ずずつと鼻をすすする音がした。

「私、キャナには幸せになって欲しい。具体的にいえば、風間クンと結ばれて、一生二人で仲良く生きていつて欲しいの。だから、彼女のためにできることはするつもり。そうするしかこの借りを返

す方法がないもの。もし、風間クンが他の女性を好きになるなら、私はその女性を殺す。キャナの幸せのために」

「だから、待てっての。俺はまだ結論を言っていないだろ」

メイちゃん、意外とせつかちなところもあるんだな。初めて知った。

けどまあ、彼女の気持ちの出所が、キャナへの友情からだってわかって、ちよつと安心した。

どちらかといえばメイちゃん、そういう心のアツさをあんまり見せないコだったから。

ただ、そのために加奈子ちゃんが殺されてはかなわない。

ここはいい加減にお茶を濁せる場面じゃない。

「……あの日、俺はキャナにひどいことを言って追い出してしまった、そのあとすぐ後悔した。だから、せめて罪滅ぼしと思って助けにきたつもりだったけど、彼女を一目見た瞬間気付けちゃった。やっぱり俺、キャナのが大好きだった。お互いに魂半分しかないからあと何年生きられるか知らんけど、死ぬまで彼女と一緒にいたい。これはウソじゃない」

「うん。……で？」

「だから、俺が考えていたのは、どうやって加奈子ちゃんとさよならするかってこった。ぶっちゃけ、彼女は心が直ぐでいいコだから、キズつけたくなくて、でも」

正直なところを口にした俺。

頭を悩ませていたのはその一点だ。俺の都合でキズつけてしまったら、余りにも申し訳なさすぎる。

しかし、そんな俺の優柔不断ぶりをばっさりぶった切るかのよう
に、メイちゃんはすかさず言ったのだった。

「それは風間クンのエゴでしょ。そんなに都合良く終わらせようなんて、虫が良すぎる。ホントにキヤナのことを愛しているんだったら、ひっぱたかれようと刺されようと、それくらいさっさとケリつけないさいよね。男でしょ！ 風間クンがもたもたしているようならそのコ、殺すからね？」

叩き付けるような調子で言いたいだけのことを言つと、横になつてしまったメイちゃん。

どうやら、俺に背中を向けているらしい。

……なんなんだ、いきなり。

どうしてメイちゃんにキレられねばならんだ？

俺、何か悪いコトをしたのか？

まだ何もしとらんじゃないか。

言い逃れをするつもりはないけど、これは彼女の一方的なお節介に過ぎない。キヤナへの友情が篤いのはいいとしても、だからって「加奈子ちゃんを殺す」ってのはおかしかねエ？

メイちゃんにそっぽむかれた俺、仕方なくまた眠るつもりで仰向けになった。

軽く不愉快。

女はいつもこうだ。

ワケのわからん女同士の友情とやらで、男になんだかんだと文句をつけたがる。責任を友情の外に押し出すことで成立するのが女の友情なのかどうか、それはわからないけれども。

そっぴや、似たような感じでデラックスもクラスの女子ともめていたんだっけ。

あれ、解決できたんだろうか。

とりとめもないコトを考えているうちに、俺は眠りに落ちた。

結局、少しづつ意識も身体もすつきりしてきたのは夜になってからだった。

メイちゃんとおあだこうだ議論した翌朝から活動しようとしたが、やっぱり身体が言うことを聞かなかったのだ。朝メシをちよっと口にしたきり、俺は一日中昏昏と眠り続けていた。

「……あれ？ 夜か？」

「あ、こーちゃん！ 目、覚めた？」

ようやく眠りから覚めると、部屋の中は暗い。

寝台の傍にキヤナがいた。

彼女の心配そうな顔が、ろうそくの光に照らされて闇の中で頼りなく浮かび上がっている。

「キヤナか……。俺、ずっと眠っていたのか？」

「うん。あんまり起きないから、一度起こそうと思ったの。そしてらメイアが、無理に起こしちゃダメって。こーちゃんはそんなにヤワじゃないから、元気になるまで眠らせてあげなさいって……」

そうか。

メイちゃんがそんなコトを。

隣の寝台にはもう彼女の姿はない。

面と向かって俺に色々厳しい言葉をぶつけて寄越したものの、心の奥では信じていたくれたらしい。

そう思ったら、なんかホッとした。

態度とか言葉に表さなくても信じてくれている人がいるってわかった瞬間、心の中がすごく満たされたような気になるものだ。言葉で伝えることは大切だけど、それが全てじゃない。だから思いは大切。

胸の中がやわらいだ途端、急に空腹を感じた。

今日もほとんど飲まず食わずだった。
すると、俺の思考を読んだかのようにキヤナが

「お腹、空いてない？ ミナが食事を作っておいてくれたんだけど……」

食べてくれるかなあ、そんな不安混じりの質問。
俺はよっころしょと寝台の上に上体を起こし

「食べる。ここ数日ほとんど食ってないから、さすがにヤバい。カツ井とか重たい系は勘弁だけど……」

あるワケねエ。

ここは魔界だ。

冗談にもならない冗談に、キヤナはちよつと笑って

「あら、それは困ったカモ。今晚の食事、こーちゃんの世界でいうカツ井なの」

「何！？ マジでか！？」

正直に驚くと、

「きやはは、引っかかった！ そんなワケないでしょ。ミナがね、病み上がりなこーちゃんのためにちゃんと用意してくれてるのよ。セウとファム……って、人間世界でいうパンとスープね」

「焦ったあ。次元を超えてカツ井が存在するなら、この世は果てしなくナメてるぜ」

「ま、実はあるんだけどさ。食事、今持ってくるね！」
「……」

毒気に当てられたように固まっている俺。

あるんかい、カツ丼！

ともかくも、寝台の上で遅い食事。

あらためて気付いたが、ミナちゃんの手料理は素晴らしく美味かった。

俺の栄養を考えてくれたようで、セウなるスープは具だくさん。ファミも焼き加減がちょうどいい。バリバリに固くないから食べやすかった。

夢中で食う俺をじっと見つめているキヤナ。

ほとんど食い終わったところで、つと口を開いた。

「……あたしね、聞いちゃったの。昨日の夜中」

「何を？」

「こーちゃんとメイアが話しているの」

この家は4LDKとかそういう大きなものではないし、夜になれば物音一つしないほどに静か。

俺とメイちゃんのやりとりは、闇と静寂の間をぬってキヤナの耳に届いたらしい。

よく考えてみたら、まだ加奈子ちゃんのことを話してないんだっ
た。

彼女は視線を落とし、犯人が供述するみたいなテンションの低さ
で先を続けた。

「その、なんていうか……ごめんね。こーちゃんに会えて嬉しくて
舞い上がっちゃったケド、よく考えたらこーちゃんにはこーちゃ
んの生活があっただよな。フツーにあの時に戻れるみたいに思っ
ちゃってたのよね、あたし。だから、その……浅はかだったなあ、
って……」

えらく気にしてやがる。

ってか、身を引こうとしているようにも受け取れる。

そりゃまあ、あのやりとりだけ耳にすればそう思われても仕方がないだらうけど。

しかし、ちよつと待つて欲しい。

俺は一言も「人間世界に戻ったら加奈子ちゃんと付き合う」的な発言は一切していない。

なのにメイちゃんは俺の話を最後まで聞かずに勝手に怒ってそっぽ向いてしまった。最終的には信じてくれていたようだが、かといって俺の主張の肝心な部分は聞いてくれてはいない。

キヤナもまた、どうやら 思い込みベースで喋っているらしい。

「あ、あのさ」

伝わっている情報の訂正を申し入れようとしたが、キヤナは自分の思いを一気に喋ってしまおうとしているようで、聞いていない。

ぐいっと上げたその顔は、ほとんど思い詰めているような、名状し難い寂しさをたたえていた。

「メイアがこーちゃんに色々と厳しいコト言っただけで、気にしちゃダメだよ？ こーちゃんの人生は、こーちゃんが選ぶコト。もしも、もしも、こーちゃんが」

「あのさ、だから待てって！」

まだ何か言おうとしているのを遮ると、俺は

「キヤナもメイちゃんも、俺の話を聞かないんだもんよ。俺が悩んでいるのは、俺がハラを括らにやらんからだ。男は誰だって、どんなにカッコつけてみてもストリートにハラ括れるワケじゃねエ。悩んで困って悶えて、そうやってハラって括っていくもんだ。そし

てそれはキヤナと一緒に生きていくためにすること。……だから、二人で勝手に妄想拡げてああだこうだ言っな。黙って見てろい。そんなに俺のコトが信用できんのか」

一気に喋ってしまった。

一瞬、きよんとしたキヤナ。

が、すぐに俺の言う意味がわかったらしく

「……そっか。そうだよな。あたしやメイアが横からへんなコト言ったらこーちゃん、気分良くないよね。メイアにも言っとくよ。こーちゃんは自分でちゃんとするから、って」

俺の口調がキレ気味だったせいか、ちょっとしゅんとした。が、すぐに嬉しそうに表情を緩めた。

「あたしは黙ってこーちゃんを信じていればいいのよね？ 変な心配とかしないで、さ」

「俺は最初からそう言いたかったんだぜ？ なのにメイちゃんにはキレられるし、キヤナはキヤナで突然謝りだすし。今までずっと、俺は自分で自分のコトにやケリつけてきたんだ。今回もちやんとそうするから、余計な妄想とか不安とか、そのあたりに穴でも掘って埋めておけ。土地は魔界に腐るほどあるんだろ？」

俺の表現が可笑しかったのか、声を立てて笑っているキヤナ。

そうやって笑えるのは心にゆとりができた証拠。

「うん、そうする！ もしかしたら、違うモノを掘り当てちゃうかも知れないけど」

「やなモノだったら、また埋めりゃいい。いいモノだったら、洗ってそのへんに飾るときゃいい。それだけのコトさ。……あ、金目の

モノなら持って帰ろう。食費に充てようぜ」

「そうね。二人で美味しいモノ食べちゃおう。みんなにはナイショで」

とりあえず、わかってくれたらしい。

これでよし。

あとは、人間世界に戻ってケリつけるだけ。シュウが帰ってきたら急いで人間世界へ転移させてもらおう。

キヤナは食い終わった食器を片付けると、また部屋に戻ってきて

「あたし、今日はここで寝る。いいでしょ？」

甘えるように訊いてきた。

俺の傷も大分癒えたようだし、別に問題はない。

「うん」

俺の返事を待たずキヤナは裸エプロンみたいな衣服を脱ぎ捨てて裸になり、隣に潜り込んできた。

添い寝的にぴったりと横にくっつく

「まだこーちゃんの魂もカラダも完全じゃないから、今晚は大人しくしてあげるね？ だから、早く良くなって！ ね？」

「はいはい。頑張って早く良くなるでございますよ」

そう素直に返事してやったのだが、キヤナはいたずらっぽく笑いながら

「あ！ こーちゃんったら、そんなにあたしに触りたいんだ。むふふ、今からだっていいのに。ほらほら」

「こんなにべったりくっついてるのに、あらためて触るもくそもあるか」

そんなやりとりをして間もない。

急に黙ったかと思ったら、キヤナは速攻で眠っていた。

親に抱かれて眠る子供のように、安らかな寝顔。

触れている身体のぬくもりが温かくて、柔らかい。

五ヶ月間の苦勞でやせこけていたのが、いくらか元に戻ったみたいだ。

空っぽな隣の寝台に目をやってみて、ふと気が付いた。

メイちゃん、こんなところまで妙なお節介したりして。俺達を二人きりにするのに、今日は違う部屋で眠るつもりらしい。ま、いつか。世話になってやれ。

「こーちゃん……ふにゃ……」

キヤナのヤツ、なんか寝言いってるし。

愛くるしい寝顔。

もう二度と、離すものか。

決めたんだもん。

だったらメイちゃんに言われた通り、男らしくハラ括るしかない。

俺は 潔く加奈子ちゃんに謝ろう。

そつとキヤナの頭を抱くようにして、俺も眠りについた。

そうして、次の朝。

シュウが戻ってきた。

その38 それが男というもので

「だから、ごめん！ 本当にごめん！ 俺が悪かった。謝る！」

そう叫ぶように言っただけで頭を下げた俺。

ここは人間世界、夜の小公園。

気流石の力で再び戻ってきた俺は、すぐに加奈子ちゃんに連絡をとって会ってもらったのだ。

たまたま魔界に乗り込んで処刑される寸前の魔女を助け出して、なんて言っても通じないだろうから「もう会えなくなるハズだった彼女が奇跡的に戻ってきた」とか何とか多少ぼかしつつ説明をしたあと、有無を言わず謝った。

それしかない。

俺の決意を聞いたシュウやミナちゃんがあれこれアイデアをくれたが、丁重にお断りした。

こればかりは、俺のせい。

キヤナが自分で自分の不始末にケリをつけようとしたように、俺も俺のしでかしたコトは自分でケリをつけるべきだと思った。

といって、どういう方法もあったわけじゃない。

ただ、全力で謝るだけ。

無策の策？ いや、策を弄したつもりは毛頭ない。

とつても人のいい加奈子ちゃん相手に策なんか用いたくはなかったから。

暗い夜の公園には、ほかに人の姿はない。ひんやりとした冷気が肌に痛い。

俺と加奈子ちゃんの間に流れていく沈黙の空気。

彼女は少しの間目を丸くして俺のことを見ていた。
が、やがて

「え？ 何、言ってるの、孝四郎くん！ やっだ、カン違いしてたのお？」

いきなりきやたきやたと笑い出した。

「…………へ？」

「確かにさ、お父さんはああやって言っただけ、それは夜遅くに私を家まで送ってくれてることよ。お互いに告白も何もしてないのに、お付き合いできないとか言われても…………ねえ？」

よほど可笑しかったのか、人差し指で目を拭っている加奈子ちゃん。

あれ？ 爆笑されておしまい？

ちよつと、拍子抜け。

なんだ。

俺の思い込みだったか。

ダサダサ。

カッコ悪い真似しちまった。なんとなく、恥かしい。

…………と、思ったのだが。

よくみれば、加奈子ちゃんの目には 涙がいっぱい溜まっていた。

可笑しくて笑ったからじゃない。

本当は、やっぱり…………か。

「もう、そんな…………思い込みとか、しない方が…………いいよ？ 女の子だって、あんまり…………いい気がしないし…………ね」

泣き出しそうになるのを、必死に堪えているみたい。

ちよつとつづけば崩れてしまいそうな笑顔をつくるので精一杯。
どうする！？

ヘンなコトを口走ったが最後、加奈子ちゃんは泣いてしまつに違いない。

前にもこれと似たシーンがあつたような気がする。

そうだった。

キヤナが出て行く時だ。

女の子を泣かせてしまいそうになったら、男はどういう行動をとるべきだろう。

あの日は俺、むっつりと沈黙していたからキヤナは余計に悲しかったハズ。

加奈子ちゃんとさよならするのは俺のせい。なのに、彼女を泣かせてしまったら俺はクス以下のクス。笑つたままでさよならできるように、なんとかしなければならぬ。

ちらと周囲に目線を走らせてみて、俺はあることに気がついた。

ただ謝るだけじゃなくて、誠意を見せるためにはちょうどいいのだが……これはちとツライものがある。

が、どうのこうの言ってる場合じゃない。

こうなったら、捨て身の行動に出るまでだ。

加奈子ちゃんを泣かせたままで終わらないために！

「……加奈子ちゃん。俺を、殴ってくれ」

突然月9のドラマばりな台詞を言ったものだから彼女、びっくりしたような顔をした。

「な……殴るなんて！ 孝四郎くん、何言ってるの？ そんなコト、できるワケないでしょ！」

「じゃあ、殴った真似でもいいよ。遠慮なく、さあ！」

何を言い出すんだとばかりに、不可解そうな加奈子ちゃん。

「やってくれ！ 意味はすぐにわかるから！」

重ねて強く、頼んだ。

すると彼女は仕方なさそうに、おずおずと拳を突き出して

「……じゃ、殴るふり、だからね？」

俺の頬に軽く当てた。

キタ！

とくちと見てくれ。

これが俺の、加奈子ちゃんへの……全身全霊の罪滅ぼしだ！

「どわっ！」

アニメ的に大袈裟に吹っ飛んだ真似をして、体を仰け反らせた俺。そのまま、背中からストレートに倒れこんでやった。俺の背後には でっかい池がある。

「ちよっ！ こ、孝四郎クン！？」

加奈子ちゃんが仰天して叫んだが、もう遅い。

どばっしゃーん

暗がりには飛び散る、派手な水しぶき。

池底の感触が気持ち悪い上に冷たいっとならない。

俺は水から上がりかけの半魚人のようにざばつと立ち上がり、そして叫んだ。

「これが俺の、加奈子ちゃんへの、心からのお詫びだ！ 足りない

つていうんなら、もう二、三回飛び込んでやってもいい！……ごめん！　こんなバカな男を許してやってくれ！」

しばらく、呆然としていた加奈子ちゃんが、突然くつくつと笑い出すなり、俺に背を向けて駆け出した。そうして十歩ばかり離れてからくるんとこっちへ向き直って

「……孝四郎クンのばーか！　そんなコトやってると、女の子にモテないぞ！」

明るい声で叫びつつ、遠ざかっていった。

全身びしょ濡れで池の中に立ち尽くし、闇の中へと消えていく加奈子ちゃんの背中を見送っている俺。

これで……よかったんだよな。

十二月の寒い夜、自ら池の中へダイブ。

いささかキツかったが、それでも彼女が笑いながら去っていったくれたんだから、まあ悪い気はしない。

ただ、そうはいつでも、このあと泣かないという保証はどこにもないんだけど……。

本当にごめんね、加奈子ちゃん。

恨まれても仕方がないし、最低だと罵られても仕方がない。

バカな俺には、これしかできなかった。

君に申し訳のないことをしてしまったからには　キャナのこと、

一生涯大切にするよ。

俺が自分の魂をくれてやった女性だから。

「……いつつきしつー！」

こりゃあ、アレだ。

明日は朝一で病院だな。

全身ずぶ濡れのまま、暗い夜道をとぼとぼと歩いて行く俺。すれ違つ人たちの十人が十人、俺を奇異な目で見やがる。

まあ、仕方がない。

冬だというのに、水滴らせて歩いてりやな。入水自殺に失敗して引き上げてきた人みたいだし。

と、行く手に立つ街灯の下、人影が一つ見える。

でかくて四角い、アンバランスな影。

そいつは俺に気付くと、ゆっくりと歩み寄ってきた。

「……そいつは、何の余興だ？ 将来はお笑い芸人にでもなるつもりか？」

可笑しみを含んだ声で、俺に話しかけてきた。
シュウ。

街灯の光を受けたメガネがキラリと光っている。

「バカ言え。女の子と手っ取り早く別れるには、これが一番さ。身体張ってバカやるに限る」

答えつつ見上げた先で、ヤツは仕方がなさそうな笑みを浮かべていた。

ゆっくりと自分の外套を外し

「……親も親なら、子供も子供、か」

呟くように言って、俺の肩からかけてくれた。

「サンキュー、親父」

オッサン、でもオヤジ、でもない。
親父。

「……なあ、孝四郎」
「あ？」

シュウは何かを言いかけてから、一度黙った。
が、すぐに目じりを下げて

「……立派になったもんだ。私は、大声で自慢して歩きたいくらいだよ」

「じゃあ、そうしやがれ。今すぐ」

冗談交じりに言って歩き出すと、シュウも横に並んだ。
そして、いきなり

「ご町内の皆様！ 風間孝四郎は、私の自慢の息子でございます！」
本当に叫びやがった。

「……バカ親父」
「バカ付きで結構。まさか、夢にも思ってたよ」

笑っている。
ニヤリ、とかじゃなく、じんわりと染み入るような、嬉しそうな
笑顔。

「お前に、本当に親父呼ばわりしてもらえるなんて、さ」

シュウ。

本名、風間秀一。

俺の実の親父。

話は今朝に戻る。

調査から一週間ぶりに戻ってきたシュウを交え、俺達は五人で朝メシを摂った。

初めて五人で囲む食卓。

人間世界で例えるなら、コンチネンタル風な洋食、というカテゴリーになるのだろうか。

ファムという粉を練って焼いたパンのようなものに、コーヒー的な風味の飲み物、オーリ。それにサラダのような植物系生ものと、カダラなる鳥の卵を焼いた料理。

これらはミナちゃん作。ってか、いつも食事の用意は彼女がしてくれる。

キヤナもメイちゃんも料理は苦手だが、ミナちゃんはとても上手。何をつくっても美味しい。

「ああ、美味い！ 飲まず食わずで歩き回っていたからホント、腹が減ったよ。途中で何度も倒れそうになったさ」

「だから携帯食を持っていけばって言ったのに。シュウさんってば、いつもそうなんだから」

よほど空きつ腹だったのか、美味そうに朝食にがついているシュウを横目で眺めていた俺。
意を決して

「シュウ、頼みがある」

声をかけた。

すると彼はもしかやもしやと咀嚼しながら

「ん？ 頼み？ あつちの世界に帰ることか？」

先回りして言ってきやがった。

「そりや、何とかならんコトもないが。それよか、もう少しゆつくりしていったらどうだ？ 魂、まだ十分じゃないんだろっ？」

「急いでケリつけなきゃいけないコトがあるんだよ。それが終われば、また戻ってきてもいい」

「そんなに急ぎの用事なの？ おにいちゃん」

ファムを小さく千切って口に放り込みながら尋ねてきたミナちゃん。
ん。

俺はオーリ（コーヒーみたいな飲み物）をずっとすすりつつ

「あア。実は、さ」

加奈子ちゃんのことを話して聞かせた。

事の次第と俺の決意をあらかじめ知っているキャナとメイちゃんは黙って食い続けているが、シュウとミナちゃんは食事の手が止まっている。

「ってワケさ。俺はキャナに心配かけたくない。だから、一刻も早く加奈子ちゃんに謝って、コトをすっきりさせたいんだ。これは俺が招いた事態。俺が自分でケリつけなきゃならん」

「でもでも……！ おにいちゃん、本当はお姉ちゃんにはもう二度

と会えないと思っていたんでしょ？　だったら、そんなに責任を感じなくても……そうだ！」

何か思いついたようで、ポンと手を叩いたミナちゃん。

「その人にメイアさんの催眠魔術をかけちゃえばいいのよ！　おにいちちゃんとは何の関係もなかったことにしちゃえばいい！　そうすれば、その人もキズつかないよ」

ミナちゃんの目線が「どう？」って感じで俺に向けられている。なるほど。

確かにそうかも知れない。

だけど　それをやってしまえば、俺は男じゃない。

そのことを遠回しに言う

「えーっ！　そしたらおにいちちゃん一人悪者になっちゃうよ！」

ミナちゃんは不満気な声を上げたが、メイちゃんは黙ってにっこりと笑ってくれた。

わかってくれたみたいだな。

魔法で穏便にケリをつけようだなんて、そんな卑怯な真似は最初から考えちゃいない。俺にとって加奈子ちゃんは大事な人。彼女がいたから、俺はここまで持ち直せたと思っている。嫌われようと殴られようと、真っ向から詫びるだけだ。

昨晚寝床で俺の決意を聞いていたキヤナは何も言わない。

ただ、表情がちょっと切なそう。

と、シュウがおもむろに身体全体で俺の方を向いた。

ふうつと大きく一つ息をつき

「……私が、一緒に行こう。そのコには、私がすべて説明して、謝

ろっ」

「……!？」

いきなり、何を言い出すんだ。

俺は慌てて

「ちょ、いいよ、来なくても！ 加奈子ちゃんはシュウのことを知らないんだし、突然こんなオッサンがやってきて謝られたって、何かなんだかわからんだろーがよ」

笑いながら言ったのだが、シュウは笑わなかった。

「いいや、わかるさ。」

父親が頭下げて謝るんだ。却って、わか

りやすいだろう?。」

……父親?

ちよつと考えてみて、何となく合点がいった。

ああ、父親のフリをして一緒にいてくるっていう作戦か。

「気持ちは嬉しいけど、別に父親に成り済まさなくたっていいよ。

彼女、俺に父親がいないことは知ってるし。なのに、ある日突然『実はいたんです』なんて、どつきりじゃあるまいし」

「いるさ。ここに、その本物が」

「……!？」

俺、一時停止。

だけじゃない。

キャナにメイちゃん、ミナちゃんまで一斉にフリーズ。

「信じる信じないはまかせるよ。……私の名前は風間秀一。魔界に

きたとき、本名を縮めてシュウと名乗った。ちなみに妻は風間美麗。私と彼女の間に生まれた子が孝四郎だ」

ちよつと待て。

これは一体……どういうコトだ？

何故シュウが俺の親父と母さんの名前を知っている？

ああいやいや、じゃなくって。

ついこの前知り合ったオッサンに突然「実は私は君の親父だから」って言われても「ああそうですか」って信じられるヤツがいるだろうか。いるワケがない。

一瞬、冗談を言っているのかと思った。

とはいえ、ヤツが先回りして俺の両親の名前を知ることが不可能。数ヶ月一緒に暮らしていたキャナだって、俺の両親の名前なんぞは知らない。

本当にこのオッサン　俺の親父、だっていうのか！？

「な、何ソレ？　言ってるイミが全くわからねエ。なんでオッサンが俺の親父なんだよ？　シュウ、魔界の民じゃなかったのか？」

「逆さ。美麗が魔女なんだ。キャナと同じように人間世界にやってきて、私と結婚した。だから、孝四郎は人間と魔女の間に生まれた子供ということになる。人間なのは私の方だ」

「……！」

母さんが……魔女！？

俺には魔女の血が流れていたっていうのか！？

なんじゃそりゃー！！

シュウが俺の親父だったという告白だけでも衝撃なのに。

さらに母さんが魔女だったと知らされては、開いた口がふさがらない。

目を丸くしているキャナ。

ファムをかじりかけて停止しているメイちゃん。

ミナちゃんは……傾けたカップからオーリがだばだばとこぼれている。

数秒後、

「えええーっ!？」

驚愕する三人の叫び声が家中にハモってこだました。

その38 それが男というもので（後書き）

明日、明後日も更新いたします。

その39 父と母

「ちょっと待て！ いきなりんなコト言われたって、納得できねーよ！」

思わず拳でドンと卓を叩いた俺。

「だいたい、シュウが俺の親父で母さんが魔女だなんて、そんなあつらえたような設定があるかよ！？」 俺の親父は飲んだくれて母さんと俺を置き去りにしたまま行方がわからなくなっただって聞いたぜ？」

いささか感情的にまくし立てている俺の剣幕に、ミナちゃんは怯えている。

メイちゃんは表情を消して沈黙し、キャナは何とも言えない目をして俺を見つめている。

朝メシ時にこういうのもなんだが、俺としては黙ってられない。かなり前、っていつても俺が小学生になっただが……おじさんとおばさんからは、確かにそう聞いた。残された母さんが俺を育てるために必死に昼も夜も働いて身体を壊し、早死にしてしまったと。

その話を耳にして以来、俺の親父という人間は似ても焼いても食えないクソツタレの冷血野郎だと信じ、そして個人的に憎んでいた。母さんが死ななければならなかったのは、親父という人間のせいだと思っていた。親父が母さんと俺を捨てたからだ、と。

母さんが死んだのは俺が二歳の時だったから、母さんが親父をどう思っていたのか、聞いたことはなかった。おじさんもおばさんも、その点について教えてくれたことはなかった。

ただ、母さんという人が俺のことを何よりも可愛がってくれてい

たつていうから、もつと一緒にいたかったと思ったことは数知れない。そのたびに寂しく思った。会えるものなら、もう一度母さんという人に会いたかった。

俺から母さんを奪い、人並みな家庭の温もりを奪ったのは親父という人間のせい。

だから、実の親父だと名乗られて真っ先にムカついた。

ムカついたけど、何がなんだかよくわからない。なぜそこに魔界だの魔女の存在が横たわっている？

そういういろんな事柄がごちゃごちゃになって混乱している俺。石仏のように固まって俺の怒りと困惑を正面から受けていたシュウだったが

「……二人を捨てて出て行ったことにしたのは、その方が気持ちの上で割り切りがつくと思ったからさ。本当の事情はそれとは別だが、かといって今さら許してもらおうなんて虫のいいことを言うつもりはない。だから言っただろう？ 殴られてもメガネをがち割られても仕方がないって」

静かに言った。

背丈がでかいから、俺を見下ろすようにしている。

レンズ越しのヤツの目は、どこか悲しそう。

「……」

まるで覚悟を決めたかのような態度を見せられれば、こっちも怒り続けるワケにいかない。俺は罵倒の言葉をぐつと呑み込んで黙った。

シュウはカップを手にしてオーリを一口飲み

「とりあえず、聞いてくれるなら話しておきたい。私とミレイと、

魔界のことを。

その方がわかりやすいだろう?」

風間秀一は資産家の家庭に生まれ、何一つ不自由なく育った。

両親　俺にとつてじいちゃんばあちゃんにあたる　は人として最低限の常識やモラルだけはやかましく言ったが、その他のことについては大らかそのものだったという。

そうやって育った秀一は他者に対してめったに怒りを表さない寛容な性格となった。

一方で豊かな暮らしをしていたから、幼い頃からたくさんの本を読むことができる環境にあった。

俺のじいちゃんにあたる人は無一文から商売をおこしてひと身上築き上げただけに、精力的な読書家だったのだ。ゆえに書斎に行けば何万冊もの蔵書があり、あるいはそこにはない本なら頼めば買ってくれるような両親であったという。あまり身体が丈夫でなかった親父は高校生くらいまでは、本の山に埋もれるようにして過ごした。そのせいか、専門的なレベルには至らないものの、自然から科学、文学、数理、物理、歴史、民俗等々、一介の高校生としては考えられないような広い分野にわたる知識を得ることができた。

高校を卒業した親父は中堅の大学へと進学し、一人の教授と出会う。

親父に輪をかけたような博識の老教授だったが、彼は既存の学問への興味を絶って奇妙な研究に没頭していた。

人間の精神から派生するエネルギーというものが、果たして存在するの否か。

一般市民の皆さまが耳にすれば「アタマおかしくねえ?」と眉をひそめられてしまいそうな内容だが、あらゆる分野の学問に手を出した彼が最後に辿り着いた未開のフロンティアはそれだった。

現代科学に傾倒しすぎるでもなく、どちらかといえば多少文学青

年的な肌のあつた親父は老教授の研究に強い関心をもった。父親や母親があらゆる困難を乗り越えて悠々自適の境涯を得たことも、親父にとつては興味深い事実だった。要は、人間に秘められた強さというものが何であるのか、突き詰めて知りたくなつたのだ。

頼み込んで研究室に所属させてもらつと、さつそく全国をあちこち歩き回り始めた。神社仏閣に歴史的建造物に史跡、霊場からパワースポットに心霊スポットの類まで、片っ端から。それというのは、教授の研究について宗教、思想、哲学といった方向から検証することを考えたのだ。老いてしまつて精力的な行動が難しくなつていた教授が積極的に賛成してくれたことも、親父の背中を強く後押しした。

以来、リュック一つを背に日本中、あるいは海外にも出かけては調査に没頭した親父。

身体がめきめきと頑丈さを増し、今のように図体がでかくなつたのはこのためらしい。遅れてきた成長期、みたいなものかも知れない。

大学四年間をほぼ実地踏査に費やしたものの、納得のいくような成果を得ることはできなかった。精神は人間の肉体に作用する何らかのエネルギーを宿しているであろうところまでは何となくわかつたものの、そこから一步先に踏み込むことができない。

そろそろ現代科学の力も借りて調べてみた方がいいかも知れない。そう考えた親父は大学卒業後も研究を続けようとしたが、ここで大きな運命の転換点を迎える。

まず、両親が相次いで死去。父親が病気で亡くなり、そのあと母親も後を追うように亡くなつたのだ。

ほどなく、すっかり同志のようになっていた老教授も高齢のためこの世を去る。彼の研究を引き継ぐべく大学に残りたかつたが、親父のような一学生の立場では研究室を与えてもらえる訳でもなく、どうしようもなかった。結局、大学側の了承を得て教授の研究資料を引き取らせてもらい、そのまま大学を後にした。大学側にとって、

奇特定の教授の研究など惜しいものではなかったようだ。

さてそれからどうするべきか途方に暮れた親父だったが、幸いなことに両親の遺してくれた財産がある。

納得がいくまでは研究を続けていくことに決めると、両親が住んでいた家や家財を処分して、自分は小さなアパートの一室を借りて暮らし始めた。

それから一年経ったある日のこと。

再びどこか遠い場所へ研究に出かけようと考えていた親父は、家の近くで倒れている一人の女性を発見する。

まだ相当に若く美しいその女性は奇異な衣装を身につけ、身体中のあちこちに傷を負っていた。

慌てて救急車を呼ばうとすると、彼女は親父に懇願した。

「どうか、人を呼ばないでください。私の存在が知れたならば、どのようなことになるか……」

言っている意味がよくわからなかったが、放っておく訳にはいかない。

仕方がないので自宅へと女性を連れて帰り、手当てをしてやった。どうもこのあたりの状況、俺とキャナのそれにそっくりかも知れない。

親父が懸命に看護したために女性は少しずつ元気になった。やがて彼女は親父の人柄を信頼して自分の素性について語って聞かせた。

「私の名前はミレイ・アルフェノ・クラッソといいます。元は魔界に住む魔族です」

親父はさすがに驚いたらしい。

魔界や魔族などという、海外の民俗伝承に登場する架空に過ぎない存在が実在していたからだ。

ミレイいわく、魔界では数千年にわたって魔界人による魔族への迫害がひどく、しかしながらその背景には統治者である魔界府の権力抗争と、魔界人の不安定な生活事情があった。不満のはけ口は魔族という少数派へ向けられ、あちこちで罪もない魔族が残虐な暴行を加えられて殺されており、時に魔界人達は同族の者をも殺すようになっていた。

が、ミレイは

「私とて、魔界人への憤りを感じない訳ではありません。しかし、彼等は明日をも知れない貧しい生活をもう何十年何百年と続いている。これでは心が荒んでしまっても決しておかしくはないのです。せめて、大地を潤し海洋に恵を与えるだけの豊富な魔力が安定して得られるならば、全ての人々の暮らしは落ち着きを取り戻し、悲惨な殺し合いも根絶できると思うのです……」

魔界人の仕打ちを恨み復讐にいきり立つ魔族達から距離をおきつつ、安定した魔力の獲得について日夜研究を進めていたミレイ。彼女はどこまでも魔界の平和を望み、無益な殺し合いには絶対に関わらなかった。そんなミレイを白眼視する魔族もいたが、彼女は頑なに暴力を否定し続けた。

ところが、魔界人と魔族の大きな抗争が彼女の近くで勃発し、ミレイも巻き込まれてしまう。

殺し合いをやめるよう必死に説得して回る彼女の訴えに耳を傾ける者はなかった。

それどころか、逆に命を奪われかけたミレイ。

追い詰められた彼女は、ふと古い書物の中にあつた記述を思い出す。

人間。

魔界とは次元を異にした空間に実在する、魂をもった存在。その容姿や生活ぶりは魔界人と何ら変わるところなく、唯一の違いは魔

力を持たないこと。ただ、非常に強い向上心を持ち、その進化の速度はとても魔界の比ではない。その昔、人間世界に転移したという魔族が書き残した書物を、かつてミレイは読んだことがあった。古代魔術の一つ、時空転移を駆使すれば人間世界へたどり着くことは不可能ではない。

ただし、時空転移は禁忌。膨大な魔力を消費するため、術者は魂のほとんどを消耗してしまうという。

ミレイは考えた。

人間は早くに殺し合いの愚を悟り、社会や暮らしを向上させることに余念がないという。

もしも人間という存在に会えたとして、彼等の助けを借りることができたなら……。

一縷の望みを託し、ミレイは時空転移の魔術を発動させる。

彼女はささやかな研究成果として「魔含石」なる鉱物に多少の魔力を蓄積させることに成功していた。キャナは魔力の代償に魂を丸ごと持っていかれたが、ミレイはその魔含石を併用することによって多少の魂を残存させることができた。

一部始終を聞いた親父は魔界や魔力のこと、そしてミレイの研究に関心をもった。

次元が異なるとはいえ、今同じこの時間に人間世界の裏側でまったく同じようにして存在する世界があるということになる。そしてその住人は目の前にいる。自分が続けてきた「精神から派生するエネルギー」という存在の定義に、魔力というものも該当するのではないかと考えた。

ミレイもまた、親父がそうした類の研究を続けてきていたことを知って驚き、同時に喜んだ。

その日から二人は互いの知識を交換し合い、一緒に研究を進めていった。

ただ、親父は魔界の平和を望むミレイの思想に強く共感していき、研究の方向性はやがて「安定した魔力の獲得とその手法」に絞られ

ていった。ミレイはミレイで人間世界の驚異的な進歩に目を見張り、人間という存在が決して魔界人に劣るものでないことを知った。魔界人の中には人間の存在を知識として知る者はいたが、自分達よりも下等であると見なしていた。

そうして一年余りが経ち。

一つ屋根の下で意気投合した男女が暮らせば、起こるコトは起こるもので。

彼等の間に子供が生まれた。

孝四郎。俺だ。

ミレイ　その頃はもう、日本人的に美麗と名乗っていた　つまり母さんは何よりも喜んだが、同時に悟らねばならなかった。

自分の魂がもう、あとわずかであることを。

そこで親父に頼んだ。

「私の余命は幾許もありません。ですが、このままでは魔界を救うこともできないし、かといって魔界に戻ればこの子を危険に晒してしまう。秀一さん、どうか、私の代わりに研究成果を持って魔界へ行っていただく訳にはいかないでしょうか。私は母親として、命ある限りこの子を自分の手で育ててあげたいのです……」

悩んだ末、親父は母さんのたつての願いを容れた。

母さんが魔界から持ってきたありったけの魔含石はこの世界の自然の力によって多量の魔力を生成し、親父一人くらいならば何とか時空転移できそうだった。

親父は親族であるおじさんとおばさんに財産を預け、母さんと俺のことをくどいほどに頼むと　一人、魔界へ飛んだ。母さんの願いであった、魔界から殺し合いをなくし、平和をもたらすために。

そこから先は、俺が知っている通りだ。

俺が二歳になった時、母さんの命は尽き、遣された俺はおじさんとおばさんに引き取られた。

おじさんは俺に親父がない理由を「飲んだくれて行方不明になった」と説明した。

が、それは親父が自ら望んだことだった。

いつか俺が大きくなって父親がない理由を知りたがった時に、わざと悪者にしてくれ、と。

母さん　美麗　を愛していた親父は、俺の心の中にいつまでも母さんの存在があつて欲しいと願い、俺にとって母さんが善良なる存在となるよう、自分が悪であろうとした。

「一つだけ補足させてもらおう。色々長話を聞かせてしまったが、言い訳にするつもりはない。だから、殴るなり殺すなり、そこは孝四郎君の好きにすればいい」

シュウは長い話をそう締めくくった。

メイちゃん、ミナちゃんは身じろぎもしない。

一人、ぼろぼろと涙をこぼしているキャナ。何とか母親でありたいと願ったミレイの気持ち伝わってきて切なくなったのだろう。

真実は、知ってみれば何のこともない。

知らないからこそ、劇的になる。劇的なものとして想像してしまう。

少なくとも、今の俺にはそうだった。

「じゃあシュウ、さつき、父親として加奈子ちゃんに謝りに行くつて言つたのは……」

「まあね。私には、それくらいのことしかしてやれない。そもそもキャナを助けるためとはいえ孝四郎君を再び戦いに巻き込んだのは私だ。知らない人に頭を下げるくらいじゃ、罪滅ぼしにもならないね」

不器用なヤツ。

てめエ一人で全ての責任をかぶって悪者になった挙げ句、会ったこともない女の子にすら頭を下げようとしてやがった。

ふん、と鼻を鳴らし、すっかり冷めてしまったオーリを飲んだ俺。コトリとカップを置くと

「……そういうコトはさつさと教えるよな。ちゃんと言やめ、どうってコトねエだろうがよ」

と言って、付け加えてやった。

「バカ親父」

夏から続く、一連のドタバタ。

俺は大事なモノを失いかけたが、思いがけなくも大事なモノが二つも戻ってきた。

キヤナ、そして親父。

もういいやって適当に諦めてキヤナを見捨てていたらこうはならなかっただろうし、魔界衆とか魔神にやられそうになった瞬間に勇気を奮い起こさなかったら、命もなかった。

人は誰でも、諦めなくなる。

勇気をなくしそうになる。

でも、諦めないで、ほんのちよこつと勇気を出せば、がらっと変えていけるコトがある。

親父もそう。

魔界を救うためにコケの一念で研究を続けていたら、魔界の動乱がやってきて思わぬ成り行きで俺と再会することになった。

で、勇気をもって自分が父親だって名乗ってちゃんと説明したから、俺は親父と呼んでやった。

なんか、夢でも見ているみたいだ。

夢でも何でも無い証拠に　　すげえ寒い。
ぶるぶる震えながら歩いていると

「寒いのか？　なんなら、懷で抱いてやろうか？　孝四郎が赤ん坊の頃、私が抱っこしてやるとすぐ喜んだんだぞ？」

「よせやい。大の男が道端で抱き合ってたら警察呼ばれるっての」

「そうか？　父さんは別に構わんぞ？」

「俺が構うんだよ」

人肌で暖めてもらうのは御免蒙りつつ、俺は一つだけ尋ねてみた。
これって偶然なのか？と。

そもそも、魔界から逃れてきて公園に倒れているキャナを発見したのはほとんど偶然に近い。

魔界から人間世界に転移するっていつても、この地球は果てしなくでかい。もしかすると、キャナがロシアとかアルゼンチンに転移していたかも知れないのだ。

そういう意味の質問をしてみると、

「いや、偶然でもあるまい」

親父はあっさりと答えた。

「私と美麗こそ偶然だったかも知れない。だけど、キャナと孝四郎は必然だよ。魔女の血には魔力の波長がある。キャナが転移を発動させた時、孝四郎の中にかすかに残されていた魔力の波長が彼女を呼んだんだ。だから、近くに転移してきただけじゃなく、通りかかったところではったり出会った。世界広しといえども、魔女の血を引く人間は孝四郎ただ一人だからね」

そうか。

本当かどうか知らんが、何となく納得できなくもない。

「……親父」

「ん？」

「近いうちに、母さんの墓参りに行こう。俺、毎月ちゃんと母さんの墓に花を供えてるんだ」

言い忘れていたけど、小学生くらいの頃からずっとそうしている。昔は金なんかなかったから近所の家の花畑から盗んでこっぴどく怒られたりしたけど、中学生になって少しづつ金の自由ができてからは花屋で花束を買っている。

「小さい頃に死に別れたから顔とか全然覚えてないけど、俺は母さんのことが好きだ。だから、今でも感謝しているよ」

別に、深い意味があったわけじゃない。ただ、事実を伝えたただけのつもり。

急に親父が黙り込んでからふと見上げると……親父、バカみたいに涙を流していた。

俺の視線に気付くと、メガネを外して手の平でこしこしと顔をこすり

「孝四郎」

「あ？」

「……ありがとう。ありがとう。美麗、絶対に喜んでるよ」
「そうかな」

俺はさらっと返事をしたが、何となくわかったような気がした。親父、本当に母さんのことを愛していた。

本音を言えば、母さんと俺と三人で暮らしていたかったのかも知れない。

だけど、母さんの願いに応えてやりたくもあり、もう少し言えばこれは俺の推測だけど 命が残り少ない母さんと一緒にいることに耐えられなかったのかも知れない。あえて母さんの頼みを聞いて魔界に向かったのは、母さんと死別する場面にいたくなかったからじゃないだろうか。

まあ、今となっては、だ。

俺にとって大切な人だった母さんを今でも愛している親父を粗末に扱うのは忍びない。

親父のこと、ストレートに許して正解だったような気がした。

母さんもきつと、そう望んでいただろう。

そんなこんなで俺達はボロアパートに戻ってきた。

窓から灯りが漏れている。

「ただいま……」

靴を脱いで中へあがると、狭い部屋に一人、キヤナが座っていた。こたつにも入らないで、畳の上にぺたりと座って神妙にしている。寒いのに、俺が帰ってくるまでは温もらないでいるつもりだったらしい。

「おかえりなさ……い!？」

俺を一目見た彼女は、驚いた顔をした。

そりゃそうだろう。

ずぶ濡れなもの。

「どーしたのオ!？ 転んで川に落ちた？ 女の子に水かけられた？」

立ち上がっておろしている。

俺はへへ、とバカみたいな顔で笑いながら

「ぶーっ、どっちもハズレ。ケリをつけたのさ。これが男としての謝罪の印だよ　いつきしっ！」

「バカね、こーちゃんったら……」

目に涙を浮かべているキャナ。

俺の言う意味が理解できたらしい。

いきなり抱きついてきた。

「ありがと。こーちゃん、何度もあたしのことを助けてくれてるんだよね。何度も辛い思いして……」

身体の骨が砕けそうな抱擁を受けながら、俺はふと思い出していた。

顔も見ず、声すらかけてやらないままキャナを追い出してしまったあの日のことを。

あれから死にたくなるほど後悔したけど……今こうして、彼女は戻ってきてくれた。

いいんだよな、これで。

突き詰めれば、俺が本当に望んでいたのは、結局これだった。

キャナと一緒にいること。

「……俺が好きでやってるコトさ。好きにやらせておけばいいさ。気にしてんなよ」

やがて、ゆつくりと俺から離れた彼女は

「こんなに冷たくなっちゃって。じゃあ今日は、あたしがゆーっくりとあつたためてあげるからね!」

「それはありがたいけど……その前に、風呂に入らせてくれ　いきしっ!」

そんな俺達のやりとりを、シュウは戸口に立ってじっと見つめていたが

「じゃ、私は行くよ。あとは二人でのんびり過ごしてくれ」
「行ってくて、親父……魔界に帰るのか?」

尋ねると、親父はニヤツと笑って

「……魔力が足らんから帰れない。しばらく、カネ婆さんの家に厄介になるよ。メイアとミナと三人で」

またカネ婆に魔法かけんのか。
ほどほどにしとけよ。

結章 あの日約束

人間世界に戻ってきてから数日後。

五人で母さんの墓参りをしたあと、親父がぜひ、というのでおじさんとお婆さんの家に寄った。

親父の姿を一目見るなり、おじさんが相好を崩し

「久しぶりだね、秀一。すっかり痩せたんじゃないか？」

「いろいろと済まなかった、兄さん。だいぶ長い時間がかかってしまったが、とりあえずひと段落さ」

え？

今、なんと？

「兄さん、と呼んだけど？ それがどうかしたか？」

「はえ！？ おじさんが、親父の……兄さん！？」

仰天して固まっている俺。

「言わなかったか？ 風間俊郎は私の実の兄だよ」

「聞いてねエよ。昨日の説明の中には、一言も出てこなかったぞ」

「ははは、そうかそうか、孝四郎は俺と秀一が兄弟だったこと、知らなかったんだなあ」

いや、そこ。

ははは、じゃねエから。

すると、何か？

もしかして、母さんが魔女で、親父が魔界へ行ったという話も

「もちろん、知っていたさ。秀一から打ち明けられた時も、相当びっくりしたなあ。だけど、魔女だろうと雪女だろうと、秀一が好きになった人だから別に気にしてなかったよ。それにしても最近、孝四郎から連絡が途絶えがちだと思ったら、まさかこんなコトになっっていたなんてねエ……」

意味わかんねえ。

風間一族、どんだけ寛容っつーかアバウトなんだよ!?

「ふっざけんなー! 親父も親父なら、おじさんもおじさんだ! 揃ってタチ悪いじゃねエかよ! この……隠し事一族め!」

俺はちやぶ台をひっくり返しそうな勢いで憤慨したが、

「落ち着いてよ、こーちゃん」

キヤナがにこにこしながら俺の手を取った。

「みんな、いい人達じゃない。たまたまあたしと出会って、シユウさんとも会ったから色々わかつちやったケド、そうじゃなかったらこーちゃんは何も知らない方がかえって普通に暮らせていたのよ? そう怒っちゃダメよ?」

「う……」

おばさんもうなずき

「そんな美人でいいお嫁さんと出会えたから、良かったじゃないの。早くお金貯めて、ちゃんと婚約指輪を贈ってあげるのよ?」

「はいはい。わかってますよ」

氣流石か地恵石をはめこんだ魔女仕様の婚約指輪でもプレゼントしようかね。

その方がよほど実用的だ。魔神がやってきても戦えるし。そんなことを考えていると、親父がニヤニヤしながら

「孝四郎、まさか自然石の指輪にしようとか、思ってるんじゃないだろうな？ キヤナが魔女だからっていつても、それはないぞ？ ちゃんとシルバーリングにしとけよ」

「え……？ 何でわかったの？」

おじさん、おばさん、親父にメイちゃん、ミナちゃん、みんな笑っている。

キヤナだけはほんわかとしながら

「あたし、別に何でもいいの。こーちゃんと一緒にいられるなら、ほかに何も要らないわ。 あ！ でも」

そつと寄ってきて、俺にぴったりとくっつくように座り直し

「早く子供欲しいな！ あたし達の魂がなくなる前に、ちゃんと一人前に育ててあげなくちゃ」

生々しいキヤナの望みに、みんなはたちまち固まった。

俺一人、苦笑い。

母さんもそうだったみたいだけど、魔女ってのは幸福な家庭に憧れるものなのだろうか。

よくわからないけど、まあいいや。

その後。

俺とキヤナがさんざんぶっ壊してしまった魔界のことが気になったが、親父はたった一言

「……どうもならん」

以上。

詳しく聞いてみると、魔界を統治していた魔界府が崩壊し、魔界人達は著しく混乱しているという。

俺達が暴れたせいじゃないかと思つて罪悪感がなくもなかったが、実際はもう少し複雑らしく

「要は魔神さ。伝承にすぎなかった筈の殺戮の化け物が実際に姿を現したものだから、いずれ自分達も殺されるんじゃないかって怯えているんだ。で、魔界府っていう権力府がなくなったものだから、貧しい暮らしを余儀なくされていた連中が略奪なんか始めやがった。一方で、多少物分りのいい魔界人達はこれ幸いと魔族の引き込みにかかっている形跡がある。誰だって命は惜しいしね。それに、魔界人の全てが魔族を敵視していたワケでもないし。ガチガチだった魔界の構図も、これで少しシャッフルされてくれればありがたいんだが」

親父が調べてきたところだと、そんな感じらしい。

結局、俺とキヤナは甦りかけた魔神を一時撤退させただけで、完全に潰せたかどうか確証はない。いずれまた復活しないと限らないし、その時はまた戦わねばならないだろう。魔界には魔族を除いて魔神とやりあえるような凄腕の術者なんかほとんどいないから、どうせ俺とキヤナでやるしかないに決まっているけど。

ただ。

母さんが死ぬまで願っていた「魔界の平和」。まだ何にも前進し

ていない。

いつかは、実現させられたらいいと思う。

かなりでっかい理想ではあるけれども、その見込みがないワケじゃない。

親父の自然魔法の研究がもうちょつと進めば、安定した魔力を得て魔界全体に安穩をもたらすことができるハズ。だから今は、親父に頑張ってもらうしかない。

ま、親父は「何とかなるだろ」と気楽に構えてるのだが……こう見えても俺の親父。やるときややるから、信じておいてやることにしよう。

俺はというと、普通に学校生活を送っている。

バイトはクビ、じゃなくて辞めた。

すっぱかしておくのも気分悪いのでせめて謝りに、と思って直弼のところへ行ってみたらば

「ろくに連絡も寄越さないで！ 君というヤツは！」

案の定、最初はやっぱり荒れ狂った。

安政の大獄。

しかし、

「クビはわかってます。ただ、申し訳ないので謝りにきたんです。申し訳ありませんでした」

ストレートに詫びて頭を下げると

「む……！ そうきたか。いや、体よく謝っておいて、また働かせてくれとか言うんだろうと思ったんだが……」

予想が外れたらしい。

急に静かになった直弼。

桜田門外の変。

彼はあごをなでながらじつと俺の顔を見つめていたが、やがて

「……いや、無断欠勤は怪しからんとしても、正直で潔いのは感心だ。どうだ、これからまた真面目にやるというのなら、今回の件はなかったことにしてもいいんだけどな」

そう言ってくれた。

が、俺は篤く礼を述べつつ辞退した。

ここにはまだ、加奈子ちゃんが働いている。ぬけぬけと顔を出すワケにはいかない。

それに、理由はもう一つある。

親父の野郎、多額の貯金を隠してやがったのだ。

魔界へ発つ時に、母さんに残した金。

しかし、母さんはその金には一銭たりとも手をつけなかった。

「このお金はあの人のものです。いずれあの人が魔界から戻ってくる時、孝四郎も大きくなっているでしょう。それよりも、私はこの子を自分の手で育てたいのです」

とっておじさんとおばさんに預け、わざわざ自分で生活費を稼ごうとした。

身体を壊してまで働く必要があったのか、と思ってしまうところだけど、母さんは自分の余命が長くないことを知っていた。だから、親父の金はそのまま残したのだ。

おじさんは言った。

「孝四郎が大学行ってくつていうなら、その時がこのお金を使うときだと思ってたんだよ。本当はもっといい思いをさせてあげられたんだ

ろうけど、秀一も美麗さんも贅沢を嫌ったからねえ。だから、孝四郎にも余分なお金は持たせなかったんだ」

それはまあ、どっちでもいい。

ってか、おじさんが律儀にその貯金をずっと守っていたことに俺は舌を巻いた。

使っちゃうだろう？ フツー。

が、そういう意味のことを少し言つと、おじさんは事も無げに

「秀一は必ず魔界から戻ってくると思つていたんだ。孝四郎の成長を見届けるためにね。それに、親父とおふくろは俺と秀一に公平に財産を残してくれたんだ。だから、別に秀一の貯金をネコババしたりしないよ」

聞けばおじさん、早くに独立して実家を出て自分で商売を営んでいた。

で、両親が遺した家とか家財については、弟である親父に譲ったのだった。親父は親父で研究に勤しんでいたから、それらは売り払ってしまったのだけれども。

それはともかく、親父の金があるから無理にバイトする必要がなくなつたワケで。

これがあればなんとか大学にも行けそうだ。

と、思つて安心していると

「孝四郎くん！ このままじゃ、ちょーっとキビしいわよ？ せめて英語をもう少し頑張つて欲しいところね。聖乃君にコーチしてもらつといいんじゃない？ 彼は常に学年一番だし」

奈々子ちゃんからきついご指摘が……。

そついやあれからエクスカリバーも気持ちを切り替えて勉強に励

み、幾つかの教科で学年一番になったりしている。

結構なコトだ。

って、他人のコトをどうの言ってる場合じゃない。

金銭的な問題は解決したけど、肝心の俺の成績が「あぼーん」じやどうにもならない。

よし、これからは英語をやればいいんだな？

受験まであと一年あるし、毎日コツコツやってりやなんとかできるだろう。

エクスカリバーにリスニングを鍛えるMDをもらい、登下校の間に聴いていると

「おい、待てや！ 風間ア！」

ナマコーの田坂&川島、その他御一行様登場。

今日は七名様か。ちよつと多いようだな。

「なんだ？ 何か用か？ 俺ア、忙しいんだよ。帰ってメシ作って勉強しなきゃなんねエんだ」

「何イ、勉強だとオ！？ ナメたコト抜かしてんじゃねエぞ、コラア！」

田坂、激怒。

こいつを怒らせるには一言「勉強」といえばいいらしい。

川島以下雑兵どもがさつと身構えた。

が、俺はバカみたいに突っ立ったまま。

「あー、田坂。以降、俺にケンカを売らない方がいいぞ。そうやっていちいち突つかかってくると」

「あア！？ ンだコラ！？」

「……身が保たんぜ？」

そう忠告してやった、次の瞬間。

「だびへびびびびびびびびっ」

「どばらばばばばばばばっ」

「ぶへっ!!」

「うばあっ!!」

ある者は強烈な電撃にシビレてぶっ倒れ、またある者は爆発で吹っ飛ばされて二十メートル先に転がった。哀れなナマコ連中、瞬時に全滅。

「あーあ。言わんこっちゃない……」

耳からイヤホンを外しつつ、同情混じりに呟いた俺の背後。
ふわふわと宙に浮いてる三人の美女達が。

「きゃははは！ こーちゃんをいぢめようたってそーはいかないわよ、このうすらクスども！」

「そうね。魔女の血を引く大事なプリンスだもの。全力で守ってあげなくちゃね」

「ってかお姉ちゃん達、やりすぎなんじゃ……」

タカビーに勝ち誇っているキャナとメイちゃんの後ろで、青くなっているミナちゃん。

「あのさ、三人とも」

「ん？ なぁに、こーちゃん？」

「それ、さっさと返してこいよ……」

三人が乗っかっているのは、カネ婆宅の雨戸。
親父にメイちゃん、ミナちゃんは今もカネ婆の家に転がり込んで
いる。

「ご近所の話では、どうも離婚して戻ってきた息子とその娘二人と
いう設定になっているらしい。」

「どんだけ利用されてんだよ、カネ婆。」

「と、多少周囲は賑やかになったようだが、キャナと俺は以前のよ
うに二人暮らし。」

「変わったことといえば、彼女が朝ちゃんと起きるようになったこ
と。」

「それに俺の弁当を作ろうと料理を覚え始めたことだろうか。」

「いいよ、別に。それくらい、自分でできるし」

「しかしキャナはかぶりを振り」

「うっん！ 今からちゃんと身につけなくちゃ！ あたし達のコが
ガッコーとかに通うようになったら、作ってあげなきゃ可哀相でし
よ。親の愛情の分だけ、子供は育つの！」

「最終目的はそこかい。」

「ってか、あと何年後の話をしてるんだよ。」

「が、どうも思ったように上手くはできないようで」

「あーん！ 真っ黒になっちゃったよお！ こーちゃん！」

「何か臭いと思ったら、卵焼きが炭化しとるし。」

ま、火事にならん程度に頑張れ。

「そついやキャナ、学校に來たいとか言ってなかったっけ？」

ふと思い出して訊いてみた。

あれからしばらくして、またメイちゃんが学校に通い始めたのだ。広域催眠がかかっているとはいえ、やっぱり彼女は大人気。

しかし前のようにメイちゃんの暴走は止まらず、毎日男子生徒数人がこんがり焼かれて保健室に運ばれ、その都度学校中が停電を起こしていた。

キャナは不器用な手つきでタマゴを割りながら

「うん、行ってみたいとは思っケド……。でもあたし、ひとつま、ってヤツでしょ？ だからあ、ガッコーに行ったらおかしいかなあって……。わあ！ 塩のフタがとれちゃった！」

人妻などという微妙にエロい単語、どこで覚えてきたものやら。ってかキャナのヤツ、いつの間に人妻になったのだ？

俺はまだ法的に結婚できる年齢になっただけだ……。

内心でツツコミをいれつつテーブルに向かってカリカリ勉強していると、卵焼きチャレンジ三回目失敗したキャナが瞳をうるうるさせながらやってきて

「ねーねーこーちゃん、タマゴ焼き教えてよお！ キャナ、上手く作れないの」

「はいはい。あとで教えてやるから、もうちょっと待て」

「はい。じゃ、待つ」

傍で行儀よく正座してテレビを観はじめた。

『では、海外のニュースです。オーストラリアでは近年、紫外線による皮膚ガンの発生が危惧されていることから日光浴を親しむ市民が激減し』

ビーチで日光浴をしている水着姿の女性の映像が映し出されている。

昔はこうだった、的なイメージ映像。

「ねーねーこーちゃん」

キャナが俺の袖をくいくいと引っ張った。

「海」

「……」

俺はテキストから顔を上げ、テレビの画面を見やった。
上空から撮影された美しいコバルトブルーの海の映像。

そっぴい、まだ行つてなかった。

魔神に殺されかけた絶体絶命のピンチの中、俺とキャナの魂を共振させて起死回生の逆転劇を巻き起こしたきつかけ。

二人で一緒に海を見に行こう、っていう約束。

今思い出してみれば、あの時死んだ佐奈姉ちゃんがこっそり助けにきてくれたんじゃないかと思う。

消えていこうとしている俺の魂を揺さぶり起こしてくれたのは、ずっと昔、佐奈姉ちゃんと海辺で遊んだ時の記憶だった。

彼女が死ぬちょっと前の記憶。

あのおかげで俺、忘れかけていた大切なことを思い出した。

キャナと、必ず人間世界の海を見に行こうって約束していたんだ。
った。

離れ離れになってしまつてからすっかり忘れかけていたけど

再会できたからには、絶対に果たしておきたい衝動がある。
よし、行こう。

今度こそあの日川ベリで交わした約束、果たしに行こう。
ただし

「もう少ししたら、な。今はあんまりよろしくないんだ」

「えー？　なんでなんでー？　行こーよー！　キャナ、海がみたいもん！」

幼い子供のようにダダをこねている。

彼女、海といえば白い雲を背景に青くゆったりとさざめくシーンを想像しているらしい。

それはまあ、そういう時もあるだろう。

だが、今日の今は十二月。

もうすぐクリスマスとお正月がやってくる。

そんな季節に海なんて行こうものなら……。

「あんな、キャナ。今、海に行くと、こういう風景を見ることになるんだぞ？」

言い聞かせつつ、携帯を開いて画面を示してやった。

ケータイサイトで検索して見つけた、冬の日本海、的な画像。

荒れ狂う鈍色の海原、押し寄せる大波、白く飛び散る泡。鉛色にくすんだ空を流される力モメ。

「日本じゃなあ、冬になると海はこんななっちまうんだぞ。青いどころか魔界みたいに素晴らしいグレーの世界だろ？　しかも、寒い。こんな海なんか見に行った日には、恐らく凍え死に」

「すごいすこーい！　燃える男のロマン、って感じだね、こーちゃん！　魔神とか魔界衆に立ち向かっていった時のこーちゃんみたい

だよ！ 力強くてステキじゃない！ カッコいい！」

……あれ？

喜んでる？

燃える口マンって、キャナ……そういう演歌的なイメージを解するココロがあったの？

俺はてつきり「じゃあしょうがないね」って、すんなり引き下がるものだと思っていたのだが。

「ねーねーこーちゃん、今ならその海、見えるんだよね？」

「そうだと言ったつもりだが　キャナ？　何、してんの？」

テーブルの上のテキストやらノートを全部払い落とし、窓を全開にしているキャナ。

彼女はテーブルを持ち上げて窓から半分ばかり外に出し

「行こ行こ！　こーちゃんみたいに逞しくて強い海、見てみたいもん！」

「ちよ、ちよつと待てよ、キャナ！　今行ったら凍え死ぬって！」

第一お前、そんな裸セーターみたいなカツコで外出たら　」

「心配ないない！　寒かったら炎熱魔法であつたまればいいのよ！　それっ！」

ぐつと俺の手首を握って引っ張りながら、キャナは素早くテーブルに魔法をかけた。

制止しようとするも虚しく、空飛ぶ乗り物と化したテーブルは十二月の寒空の下へと勢いよく飛び出した。

「どわあああっ！！　ちよつと待てええ！！」

突き刺すような冷気にビンタされまくりの俺、必死に叫んでいる
しかない。

が、キヤナは嬉しそうに

「飛ばすよお、こーちゃん！　しっかりつかまってね！　……あ、
でも、ヘンなトコにつかまったらダメよ？　集中力が切れて墜落し
ちゃうから。そういうのは、帰ってからね！」

「じゃあ、今すぐ大人しく引返せ！　今すぐだ！」

「きやはは、ヤだよ！　こーちゃんと海見るんだもん。　それ行
けえ！」

と、ほとんど無茶苦茶かつ強引な展開で、俺とキヤナとのあ
の日の約束は無事果たされることになったのだった。
ただ。

落ちれば鉛色の荒波に吞まれてそれまで、というんでもないシ
チュエーションの中、キヤナは

「うーん。やっぱり、これだけじゃちょっとつまんないかも」

呟いている。

軽く高所恐怖症の俺は彼女に背後からしっかりつかまりながら

「だろ？　だから、こんな冬じゃなくてあつたかくなってからつて

」

「じゃないのよ。青い海はもちろん見たいけど、海だけじゃなくつ
て、この人間世界の色んな所を見たいの。こーちゃんと一緒に！
せっかくまた二人で暮らせるようになったんだし、いつも部屋の中
でゴロゴロしてたらもったいないじゃない」

「……」

そーいうコトか。

そりゃまあ、ごもつともだな。

魔界はどんよりして薄暗くて気分悪い世界だったけど、あっちから比べればこの人間世界、もとい地球は遥かに美しい。俺達の魂の量じゃそんなに長生きできそうもないし、どうせなら元気なうちに飛びまわれるだけ飛び回っておいた方がトクってこった。

遠い場所は電車とか飛行機じゃないと無理だけど、近いところならこうやってキャナの魔法ですぐにやってこれる。そう考えてみると、魔法も割と便利なものだ。

「……よっしゃ！ キャナ、もうじき日も暮れるし、綺麗なイルミネーションを見に行こう！ それもまた、魔界にやないものだぜ？」

提案してやると、キャナは目を輝かせて

「いるみねーしょん？ うん！ 行く行く！ こーちゃん、案内して！ どこでも飛んでいくよ！」

「とまあ、その前に」

いっきし！ と、俺は思いつきりくしゃみを一発かましてから

「いったんアパートに戻って上着着てこよう。寒くてどうもならん」
「はいな！ じゃ、一度こーちゃんの家に戻るね！」

やれやれ。

受験勉強もあるし、親父たちもいるし、これからなかなかハードなことになりそうな気配がするぞ。

でも、それでいい。

二人で楽しい時間を積み重ねた分だけ、そのあと苦しいコトがやってきても乗り越える力になる。

死ぬまで、とことん付き合ってやろうじゃねエ？

この魔女のおねーさまに、な。

すると、そんな俺の気持ちが生かされたのか、キヤナはひょいと振り向きなり

「ねえ、こーちゃん！ やっぱり、あたしもガッコーに行く！ — 日中こーちゃんと一緒にいたいもん！」

はいはい。

わかりましたよ。

それじゃ、これからの予定を変更。

カネ婆宅に寄ってメイちゃんにキヤナの制服を再生転換してもらって、ついでに広域催眠をかけなおしてもらおうかね。

明日からのイーペー、今までよりもさらに騒がしくなるだろう。

……ま、いつか。

< 魔女が Re : 了 >

結章 あの日約束（後書き）

「魔女がRe:」これにて完結いたします。といっても第一部ですけれども。

まずはここまでお目通しくださった方、わざわざお気に入り登録してくださった方、誠にありがとうございました。また、最高の評価までくださった方、御礼の申しようありません。また、コメディのつもりがあらぬ方向へ曲がってしまったことをお詫びいたします。書き手が揺らぐとそういうことになりますので、賢明な皆様はお気をつけください。

一度どん底に落ちながらも、再生してより大きな困難に立ち向かっていくウルフルズの的にがむしゃらな若者の姿を描きたかったのです。いや、描きたくなつたのです。本当はもっと日常とか学校でのドタバタや魔女三人のお色気を描きたいんですけど全体的に間延びしてきたので、キリよくシめることにしました。

なお、続編再開までには時間を頂戴します。あるいは「もういらねえコノヤロー」と罵倒されれば、書かないという選択肢もありえます。いや、フェードアウトの公算大かも・・・。

この作品、いろいろと実験やら試行錯誤の含みをもって書きました。結果やら考察はいずれ筆者ブログでご報告します。一つだけ・・・平日onlyとはいえ毎日連載はかなりキツイです。キツイですが、書き手が読み手に示せる信義誠実というのはこれに限ると思っています。もちろん、毎日書けばいいってものではありませんが。

ともかくも、貴重なお時間を割いて拙作にお目通しくださり、本当にありがとうございました！

2010・11・21 筆者 北野鉄露

追伸：快くレーヴァを登場させてくださった神宮寺様、スペシャル

サ
ン
ク
ス
！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9014n/>

魔女がRe：

2010年11月21日19時50分発行